THE CENTRAL REVIEW

反省會

中央公論

五月號

大正十一年五月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十七年 第五號 第四百八號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は

腦病良藥

健腦丸

を要求す

醫科博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効

腦充血　神經痛　頭痛　眩暈
腦膜炎　腦貧血　耳鳴　健忘
逆上症　卒中　中風　便秘

特長

逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

改正價楽

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓九拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舗　大阪市順慶町　東京市锴屋町　丹平商會藥房

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

日刊英字新聞

英文大阪毎日

（毎號四頁）

四月十二日初號發行

定價一部四錢

一箇月八十錢

郵税共（內地支那九十錢 外國一圓六十錢）

新館落成と三大記念事業

大阪毎日新聞社の大躍進

日本唯一の二大輪轉機

面白い日曜新聞

サンデー毎日

（毎號廿八頁）

四月二日初號發行ロトグラヴユア畫報付

定價（一部十錢 一箇月三十錢）

（郵税共前金三十四錢 六箇月前金二圓）

盲人界の一大福音

點字新聞

盲人の身を以て倫敦に二箇年留學した中村京太郎氏によつて近日編輯發行さるべく勿論日本に於いて最初の試みである

發行所　大阪毎日新聞社　振替大阪四五〇

發賣所　東京日日新聞社　振替東京二八〇〇

純品質主義

鷹(タカ)印帽子のフリーリノベーチング

（無料洗濯手入）



無料洗濯規定

一、鷹印帽子の無料洗濯は鷹印マークある本年度製品に限ります。

二、鷹印帽子の無料洗濯は當分麥稈帽子に限り五月一日より八月卅一日迄と致します。

三、右洗濯は「鷹印帽子リノベーチング承所」の看板ある各地一流洋品店にて取扱ひます。直接弊所へ御送附相成とも差支ありませぬ。

四、洗濯の序に御希望に依り装飾品の取換に應じます但し取扱の實費を頂戴致します。

五、洗濯御依頼品は弊所到着の翌々日御返送致します到着豫定日より一週間を經過して尚御受取にならぬ時は御照會を願ひます。

大阪

株式會社 高橋製帽所

中央公論第卅七年五月號目次

▼公論

現代社會思想の根本的分岐點……………卷頭言……二
白人以外の人類の自助を望む……………杉森孝次郎……四
老年と精神活動の問題……文學博士 松本亦太郎……二三
近代文化の黎明期に於ける宗教運動の社會的意義……………林癸未夫……三六
國民は不景氣の慘狀に堪へ得るか……法學博士 堀江歸一……五二
政友會の新陣容と其將來……文學博士 三宅雪嶺……六三
平和博の所謂「文化村」に就て
◎すべての新しいものに寛大でありたい……………林癸未夫……六八
◎窓から見た文化村……………生方敏郎……七五
◎文化村を觀る人の爲に……工學博士 佐藤功一……七七

▼說苑

無産階級に生れて（中篇）生の危機に臨んで……高須梅溪 一
將門論……中島孤島 五〇
泊翁先生を中心として……法學博士 吉野作造 八一
腰越雜感……工學博士 佐藤功一 九六

▼想華

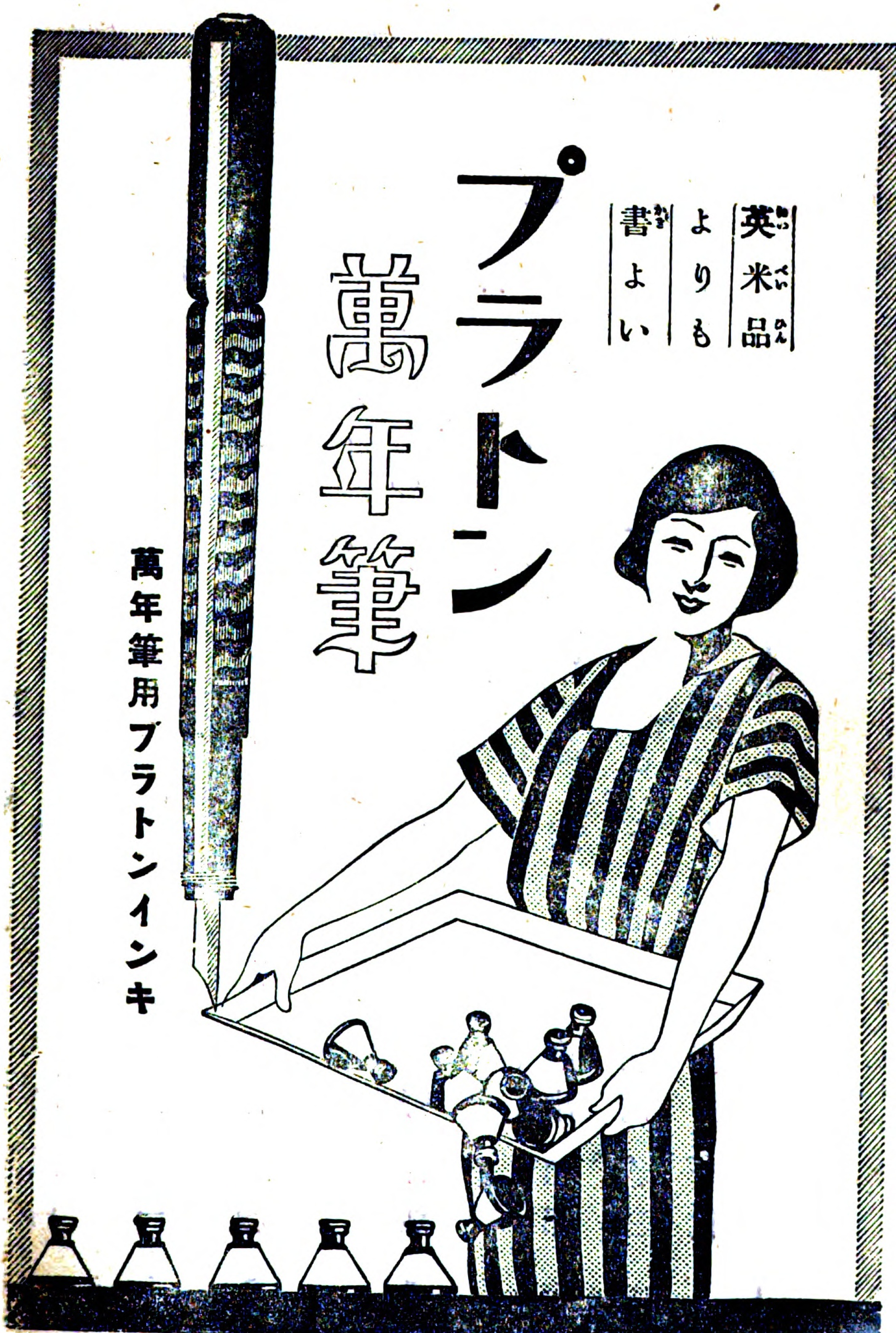
一つの思考實驗……理學博士 吉村冬彦 一一七

▼時論

青年將校の觀たる西伯利出征軍の實狀
政治家の勞働問題觀
政界革新論
無政府主義者の告白錄……法學博士 吉野作造 一五五

（創作）

ひとりの部屋……廣津和郎 一
或る一族のこと……相馬泰三 五二
墓を發く……藤村千代 七一


英米品よりも書よい
プラトン萬年筆
萬年筆用プラトンインキ

社會藝術の前驅者

講談には永久の生命がある。文藝物は一度廢つたら、其復活は容易でないけれど講談は何度でも繰返し〱讀者の感興を惹く。講談には講談でなければ味はれぬ人生の一面が説明されて居る。平民の眼に映つた世態人情、多數の人が永い眼で見た歴史の秘密、其の邊の歴史にも、隨筆にも、小説にも其の他一切の文獻に求めて得られぬ別個の眞實がある。文藝物で喰足らず、探偵小説で滿足出來ぬ人は必ず一讀して是までの講談を低級扱ひにした事を悔ゆるに違ひない。

民衆藝術の一新體

社會講談叢書　白柳秀湖新作

（第一篇）

國定忠次

―〈三版出來〉―

細長形美裝函入　紙數五百頁　定價一圓五十錢　送費金八錢

講談は決して賤しいものではない。講談には歴史にも他のあらゆる文献にも見當らぬ近世社會生活の『眞實』が録されてゐる。この書は徳川末期の社會相と、江戸の御金藏を破つた二人の浮浪漢を描いたもであつて、その描法、その取材、ともに文學者の間に非常な歎稱を與へたものである。近頃の翻譯小説にも自傳小説にもない別樣の新味と問題とが横溢してゐる

社會講談叢書　宮島資夫新作

（第二篇）

藤十郎と富藏

―〈再版出來〉―

細長型美裝函入　紙數四百頁　定價一圓二十錢　送費金八錢

貧家の子と生れて、馬方稼業から遊び人の群に身を立てた國定忠次が、安政の飢饉に際し、時の强權と時の財閥とに心魂に徹する憎惡と叛逆の血を湧き立たせた渾身正義の闘爭史である。文字なく智識なきこの壯漢の胸にも忽然として映ずる正義人道の念を見よ。

第三篇　近刊

英傑サウル

沖野岩三郎新作

發行所　東京日本橋區檜物町九番地　**東雲堂書店**　電話本局一八七一番　振替東京五六一四一番

「中央公論」口繪について

本誌は從來洋畫一葉を口繪として挿入し來りしが、次號よりは

現代日本畫の第一流大家數氏の揮毫に成る文人趣味の墨畫

の複製を口繪とすることゝなせり。本號は諸般の設備整はざる爲め口繪を附せず。此旨讀者に謹告す。

大正十一年

中央公論

五月一日發行

五月號

第卅七年第五號

第四百八號

現代社會思想の根本的分岐點

政治家は云ふ。愚民に權力を握らせたら何をやるか分らぬ。殷鑑遠からず露西亞を見よと。また資本家はいふ。勞働者に多少の讓歩をすること其れ自身は深く苦痛とせぬ。唯かくして彼等の飽く事を知らざる專恣横暴を制し得ざるに至るを如何せんと。

昨今の所謂民衆運動に常規を逸するもの多きは之を否まぬ。勞働者の團體的對抗運動に至つては、往々兇暴の姿を呈するに至る事、之れ亦不幸にして之を認めない譯には行かない。併し、どんなに努力しても自家當然の要求は結局壓迫せらるゝ運命に在るのだと分つたら、多少自暴自棄の狂態に迷ひ入るも已むを得まいではないか。之を推して彼等の他日多數者としての樞要の地位を占めた場合の横暴を豫定するのは、餘りに早計であらう。多數を擁して我儘を振舞ふといふが如きは、昨今の政友會の外、從來あまり我國に其例がないのである。

膠州灣に於ける帝國官憲は、從來犯し來れる幾多の失政の暴露するを怖れて、山東善後處分の自家以外の手に依て取扱はれるのを極力妨害して居るとやら。但し之は一片の噂だから、直に之を本當の話と思つて貰つては困る。兎に角、自分に後暗い事の有る者は、大びらに自分の繩張りうちを他人に公開したがらぬものだ。夫と之とは若干意味の違ふ所はあるが、今日の政治家なり資本家なりが、公平なる理非の論には目を蔽ひ、たゞ只管に現在の制度に由つて保障さるゝ自家便益の地位に執着するといふばかりなら、何とはなしに普通選擧にも好意を特ち得ず、勞働者の當然の要求にも反對したくなるのは當然だらう。

意識的であれ將た又無意識的であれ、政治家や資本家やは、現制度の與ふる特權的地位に戀々として居る限り、到底新文化の敵たる運命を免れないものだ。

そんなら現制度の與ふる恩惠より離れて全然裸になつて來れば問題は解決するかと云ふに、必ずしもさうではない。も一つ思想上の障礙がある。此の障礙たるや、純然たる思想上の事柄であるが故に、之にこだわつて居る以上、假令政治家たらず將た資本家たらずと雖も、亦新文化發展の敵たるを得る。そは何かと云ふに、貴族主義的人生觀是れである。平つたく云へば、自分だけが俐巧で他人を愚と觀、他人をば自分と同じ樣に意思し感激し決斷するも

のと信じ得ず、容易に腹心を開き得ないと云ふ氣分を謂ふのである。詰り廣く「人」を信任することが出來ぬ。故に力を與へれば何をするか分らぬと疑ひ、權利を與へればどう之を惡用して自分達を窘めるか分からぬと危ぶむ。斯ういふ根本的い氣分が變つて來ぬ以上、社會上並に政治上に於ける諸種の改革は、到底徹底的に爲し遂げらるゝものではない。之等諸般の改革の裏に潜む所謂近代思想は、實に「人」を信ずる所に基礎をおく。「人」を信じ、其の發達の當然を信ずるが故に、自由を貴しとする。自由を貴しとするが故に、改造を熱求する。此根本的信念を缺く以上、如何に時流に動されて不徹底な改造贊成論を唱へたとても、其の眞意の結局警察的指導、機械的（官僚的）助長の政策以上に出で得ないことは言ふまでもない。

昨今の思想界が混亂を極めて安定を見ないのは、畢竟するに這の根本の人生觀がきまらないからである。紛亂せる社會思想を整正して一道の歸趨を示さんとならば、どうしても遡つて議論をこゝまで持つて來なければならない。尤も今日の社會諸思想の分岐點となる根本なものに、も一つ注意すべきものがある。制度改革の意義に對する値ち付け則是である。勞働問題に於ける協調論、普選問題に於ける漸進論の様な、急激な改造を容れざる議論は、現代改造問題の理論的研究の上に既にはや落伍して居るから、玆には度外していゝ。之と同じく、絶對的心的改造論も今日の世界に全く緣はない。殘る所は、（一）凡ての改造の基本は新文化創造の精神力に歸すべしとの立場を取りつゝ、其精神力の無碍の發展を自由ならしむべく、制度の改革を實踐的最先要務とすべしとの論と、之に反して（二）制度の改革そのものに始終絶對の價値をおく所の論との對立である。之が實際問題に現れると、改造諸運動の實　方法に直接行動を許すべきや理想主義の煩しい制限に甘んずべきやの難問を生ずるのだが、之がなかなか大きい問題だ。而して此點に關する腹の据へ方がきまつてゐないといふことも、亦慥に現代社會思想の紛亂を來たせる一因だと思ふ。

第二の點と一第の點とは、表面何の關係もない獨立の問題の如くにして、實は大に深い密接の交渉がある。此の事までを玆に論ずるの遑はないが、要するに、第二の點は第二次的の問題に過ぎぬ。第一の人生觀のきめ方に依て自ら解決がつくものと思ふ。何れにしても、現代社會問題の討究は、何時までも政治經濟の上づつた問題にのみ拘泥せず、もつと深く人生内奥の意義にまで進まなくては嘘だと思ふのである。

中央公論



第卅七年　第五號
五月號
第四百八號

白人以外の人類の自助を望む

杉森孝次郎

社會主義と民族運動とをくらべて、社會主義の方が文化的であり、民族運動の方は原始的であるやうに觀えるならば、それは全然觀者のめがねのゆゑではない。社會主義は制度のある部分の改造を目的とする。經濟及びそれを主要條件とする諸般制度の改、新造、これが社會主義運動の直接目的だ。社會主義は、社會の內的組織の變革を目的とする努力であるのだ。これに反して民族運動は、質の問題でなく、量の問題だ。社會主義の實現は、それだけの質の新生だ。ロシヤが共產制を布けば、たとひそれはロシヤ一國の、暫時の現象であつたとしても、なほかつ人類社會に於けるそれだけ

の質の新生であつたのだ。資本主義と共産主義、またこれと直接必須の關係をば持たないが君主制と共和制、これらは制度の質の變革に屬する事柄だ。しかるに、民族運動は、自治を欲し、獨立を求め、國際公民たる位置を要請する民族が、資本主義の信者であるか、共産主義の信者であるかをば問はない。民族運動は、人類社會に於ける制度の新設、改造を意味せず、既成の制度、現存の制度の信奉者、實現者がいくらか増殖するだけの變化を意味する。もしも民族運動が同時に制度原則の上に於ける創造的努力である場合があるとすれば、それは、實は單なる民族運動ではない、民族運動及び社會運動であるのだ。たとへば支那が、人類社會に於ける制度の本質的新實驗を主目的として、隨つてその理想の制度の國際宣傳を內的一必要條件として先づ民族的國際自治を意思する日がくると假定せよ。その場合に、支那の民族的國際自治の意思運動は、民族的國際自治といふ形式に目的を有する意思運動ではない。未實現の、理想の或る制度が目的であるのだ。しかしながら、普通にいはゆる民族運動は、概ね民族的國際自治そのことに目的を有する。人類社會の量的進歩ではありえても、またその民族自身の質的進歩ではありえても、人類社會全體からいへば、質的進歩ではないのだ。

そも〳〵民族運動は、一民族が、他民族からの壓迫、拘束、虐使、隷役から自己を解放しようとする努力だ。多くの場合に於いては、それゆゑに、民族運動に於ける當の運動民族は、現にかれが支配されつゝある强大民族の階級と身分に、自身早く成り上がることを不言不識ながらに目的とする。チエコスロヴキヤ、ポーランド、それから愛蘭、埃及、印度、支那、メキシコ、朝鮮、その獨立の當否と成不成をば別問題とし、その諸民族が多少獨立を意思してゐると假定する。勿論、それらのうちの或るものは或る程度の獨立をすでに所有してゐる。しかし、かれらの意思が完全に實現された場合を想像しても、きのふまではこき使はれた徒弟が、けふは世間晴れた一人前のをとこになつて、きのふまでの

主人と對等の人、同格者になつただけの圖ではないか。民族運動は、この意味に於いては、本質的新運動ではないのだ。それは、いはば新嚢に故酒を盛る努力だ。新嚢は未獨立、半獨立、不獨立の民族だ。故酒は既成現存の獨立國の原則だ。社會主義は社會の原則の改造であり、民族運動は獨立國の社會の原則を、いひかへれば社會に於ける獨立國としての部分の原則を、殘餘の多少の部分にも適用し、延長する運動であるのだ。獨立國自身はその適用の意思者でないから、延長する運動といふよりもむしろ招き來たす運動だ。現に最近の實例を見ても、たとへばポーランドの再獨立は帝國主義の一新興を意味したに過ぎなかつたが、ロシヤの社會主義は資本主義諸國の內的脅威を意味した。社會主義は新社會原則を歸納する努力だ。民族運動はすでに多少久しく歸納された社會原則を演繹するだけの努力だ。民族運動に於ける新鮮味の缺乏は、また民族運動に於ける進步的精神の低調は、客觀的妥當性ある判斷だ。

社會主義が新らしく觀え、聰明に觀え、民族運動が時としては反動的にさへも、またあたまがわるいとさへも觀えるわけは、上述だけに盡きない。社會主義は、資本主義を否定する努力だ。資本主義は、しかるに、一制度だ。人爲現象に屬する現存の一人爲現象に對する未存の一理想的人爲現象によりての否定が社會主義の發足だ。これに反して、民族運動は、一人爲現象としての制度が帶着する階級の整理、打破、純化ではなく、一自然現象としての膚色が帶着する階級の整理、打破、純化だ。社會主義者が現存の一人爲的事實に代ふるに、理想的未存のある別の人爲的事實をもつてせんと意思する際に、民族運動者は、現存の一膚色に對抗すべく、あるひは現存の一膚色を逆に壓迫すべく、現存のある別の一膚色を主張する努力のやうに觀ぜられる一面を持つ。社會主義者が、異なる制度の間に好憎を決しつゝある時代に、民族運動者は異なる自然の間に取捨選擇を明表すべく熱心鋭意するとすれば、民族運動者が、社會主義者よりも一時代も、それ以上にも、おくれてゐるやうに想はれるに相當の客觀的理由があると先づ認容される。要するに、社會主

義は、理想主義と理想主義との對抗を背景とするのに、民族運動は自然主義と自然主義との對抗を背景とすると觀られるのだ。なぜかといふに、資本主義も共產主義も理想主義の一形だ。資本主義と共產主義とは理想主義の一形と他形だ。しかるに、白人主義も、黃人主義も、黑人主義も、あるひはアングロサクソン主義も、チウトン主義も、ラテン主義も、スラヴ主義も、自然主義の一形と他形にほかならない。

以上は社會主義と民族運動の特徵の殊差だ。しかし、社會主義と民族運動は、相懸隔せる一面を有すると同時に、相併行する地面を有する。民族運動が自然主義と觀えるのは、民族運動の全內容に於いてさう觀える必然性を有するからではない。民族運動が自然主義と觀える必然性は、民族運動のある條件のゆゑだ。自然主義は、民族運動に於けるある條件ではあるが、內容ではないのだ。すくなくとも主內容ではあるべきでない。たまたまある種類の膚色を帶ぶるある人類が、本質的道德要求、文化要求に機會を發見し、創造せんと努力するかたちが、正しき民族運動であるべきだ。

社會主義と民族運動がいかに共通側面を有するかは、人類社會に於けるある强大國の個々及び多少のむれは、殘餘のある民族の個々及び多少のむれに對して、本質的には、地主が小作人に對する關係と同じ原則の關係にも立ち、資本家やブルジヲが無產勞働者に對する關係と似た原則の關係にも立つてゐるといふ事實に於いて示される。

もしも現代に於ける社會主義の中心內容としての勞働運動の意義が、資本家及びブルジヲの人人が勞働者の人格的人間的必要と可能と實在とをみとめない缺陷を充たすにあるとするならば、現代に於ける民族運動の意義も、被征服民族の當代、子孫、廣く劣弱民族が、なほかつ確實に所有し、自覺されるかれらの人格的人間的必要と可能と實在が、征服民族または廣く優强民族によつてみとめられない缺陷を充たすにある。各國的社會に於けるプロリテリアンスの位置と國際的社會に於けるバックワード、ピープルスの位置との間には、たしかに類同がある。

各國的社會に於ける勞働者は、その社會に於ける殘餘の部分としての資本家やブルジワにとつて、有用乃至實に必要不可缺の奉仕、貢献、作業をなす。しかるに、國際的社會に於ける低位民族は、かならずしもその社會に於ける高位民族のためになつてなつてゐないといふ事實はないかと、一應考査して見る餘地はあるかも知れん。けれども、現代の事實としては、その考査の結果は、地上に現存するすべての低位民族は、多少の程度に於いて同時代の高位民族のためになつてゐるといふにある。もしも一社會内のある人人が、殘餘の人人になんらの奉仕、貢献をもしないならば、そのある人人は、人格價をば有しえても、社會價をば有しないと結論される可能がある。現代勞働運動のつよみは、勞働者が人格的實在だといふ事實の確認にのみは存しない。勞働者の社會價にも大いに存するのだ。勞働者が總同盟罷業を一ケ年の短期間にわたつて敢行してさへ、資本家とブルジワとは、營利、贅澤、生存の根源を絶たれるといふ一大確實的可能が、勞働者の自信を奬勵し、資本家及びブルジワの省慮を刺激しつゝある。もしも現代民族運動のつよみが、低位民族、たとへば黄、黒人も人だといふ一事實に對する自覺、及びその事實に對する高位民族の確認を要請する權利といふに限られてゐるならば、現代民族運動のつよみは、現代勞働運動のつよみにくらべて甚だしく劣るといはねばならん。もしも現代民族運動の主能者自身が、すなはち低位民族が、單なる消費者であつて、なんらの社會的價値ある生産者でもないならば、消費者にして同時に生産者たる高位民族が、低位民族の存在に對して不親切であり、不敬虔であり、冷淡であり、薄情であり、殘酷でさへあつても、高位民族自身のあまりに甚だしい無責任とも、無自覺とも、無反省とも容易にはいへない。人間の本性は、人道主義者の純粋理想がしば〳〵假定しまたは要求するほどには利己と私欲を超脱しえないからだ。しかし、事實上、現代の低位民族は、決して單なる寄生蟲ではない。大體に於いて、現代の低位民族は現代の高位民族のある器具だ。

エクスプロイテーションといふ語は、現代の勞働者に對する資本家の態度、方法にのみ妥當な語であらうか。それは同時に、現代の劣弱民族に對する優强民族の態度、方法にも多少適切な語ではなからうか。エクスプロイテーションで言ひ當たる心理と實行と現象は、エクスプロイトされる人が、エクスプロイトする人にとつて、多少有用であり、必要でさへあるかも知れぬことを含意する。現代に於ける低位民族の社會價が精確にどれほどであるかはわからぬとしても、それが決して絶無でないことは明らかだ。たとへば多少の貿易、輸出入を高位民族相手に營みつゝある低位民族は、すくなくともその限りに於いて高位民族に有用であるのだ。高位民族から賃銀なり、報償なりを拂はれて勞働し、作業し、勤務しつゝある低位民族もすくなくともその限りに於いて高位民族に有用であるのだ。勿論、現代低位民族の最弱點は、無創造にある。日本は模倣國として漸く國際的に不拔の烙印を押され始めた。支那や印度は、模倣をだにえせぬといふ定評を形成された觀がある。科學に於いて、技術に於いて、立法に於いて、行政及び執政に於いて、藝術に於いて、思想に於いて、品性と人格と道德と宗教に於いて、現代のいはゆる低位民族は、內容的に低位を自身實證してゐる。ノースクリッフ氏が、日本は模倣以上の能力者でないといつてその可能的成功のたかを括つたさうだが、他からの評言を聽くまでもなく、日本人の深い不安は、過去及び殊に現在に於けるかれ自身の無獨創に存せねばならん。支那人、印度人の深い不安も、すくなくとも現在に於けるかれら自身の無獨創に存せねばならんのだ。

およそ人の存在は、生產に於いて高調される。その生產が、生產者自身の消費的必要を滿たして殘らない程度のものであるならば、その人の存在は、その人以外の人から必要とされる條件がすくない。一人または一民族の生產が、その生產者自身の消費的必要のある部分を滿たすに過ぎずして、殘りの部分をば他人または他民族の生產に依賴して滿たすほかない程度のものであるならば、その一人または一民族は、その他人または他民族から邪魔もの扱ひにされる可能的

條件を持つ。もしも一人または一民族の生産が、他人または他民族の消費的必要を高く滿たす程度のものであるならば、その一人または一民族の存在は、その他人または他民族から隨つて高く必要とされる多少の可能性と多少の必然性がある。適者生存の新原則は、斯くして、外力的征服主義でなく、本質的生産主義だ。

現今に於ける黄、黒人の生産は、現今に於ける白人の生産にくらべて、比較にならぬ程度に低い。生産中の生産ともいふべき位置を占むるものゝ一は科學だ。黄、黒人は、その科學に於いてどれほどの成績をあげたか。ほとんど絶無だ。科學が生産中の生産ともいふべき樞要位置に屬するわけは、學說の發明は、最も自由にその發明者以外の人人によつて理解され、利用され、すなはち消費される性質を有するからだ。偏狹にして固陋なる、且つ頑冥なる愛國心がなほ猛威を揮ひつゝある現代に於いてさへ、學說には輸出禁止令もなく、關稅政策も、文字通りには適用されてゐない。いはゆる危險思想の外來を拒む多少の努力はあるが、その思想の創作者たり、または信奉者たる、すなはち所有者たる國民が、その思想の輸出を拒む事實はない。科學の生産者は、世に最も愛他心ある、奉公心ある人の列に立つのだ。科學の可能が、國際鬪爭の方途にあまりにいちじるしく實現されて、世界がむしろ科學の破壊力を危虞したあひだは、科學的生産者の眞位置も明らかにされなかつたが、協力が國際精神、人類精神に根柢を張つてくるにつれて、科學的生産力ある人と民の存在權は、いよ〳〵公認されるにきまつてゐる。その反面の可能現象及び必然現象として、科學的生産力なき人殊に民族團體の存在權は、しば〳〵無視される危機に立ち、または近かよる。

科學的基礎なき藝術、科學的基礎なき道徳、科學的基礎なき宗教、科學的基礎なき思想哲學、科學的基礎なき政治、これらはいづれもありがたくない。利他、奉公の力も薄いが、利己の力も薄い。科學的基礎なき藝術、道徳、宗教、思想哲學、政治等なら、たとへば東洋人もすでに多少それらを所有した。現にも所有する。しかし、それらの、もしも一種

の文明または文化となほかついひうべきならば、東洋式文明または文化は、隣人にとつての助けともならないが、自己にとつての救ひともならない。佛教、儒教、神道、印度教、マホメツト教、それ〴〵に多少の價値と功績をば有するが二十世紀の理想的文化としては、なさけないほどに低能ではないか。絶望的に無資格ではないか。あゝ、かれらには揃ひも揃うて科學的基礎が缺乏してゐる。

科學は實在の形式だ。科學を知ることは實在を知ることだ。科學を用ゐることは實在を用ゐることだ。科學を信ずることは實在を信ずることだ。科學を所有することは實在を所有することだ。科學を生産し、創造することは、實に、實在を生産し、創造することを直接に意味するのだ。科學は實在の形式だといふことは、科學の內容は實在だといふことだ。科學的基礎なき藝術、道德、宗教、思想哲學、政治等は實在的基礎なきそれらを意味する。實在的基礎なしではいかに主觀と言辭ではえらがつても、生存界の適者の原則とも、方法ともなれないに不思議はない。黄、黑人の文化は非實在の文化だ。文化の名を値ひしない。

黄、黑人にして生存欲あらば、しかも人らしく生存する欲望あらば、先づ科學的生産者となる必要がある。日本人はある程度まで科學的消費者を自身實現した。けれども、日本人も、科學的生産者をば、自己に發見しない。科學は、利他等公の一原則であると同時に內容的數學だ。實質ある數理だ。數よりもたしかなものはない。內容的數學の稱呼に値ひする科學に於いて單なる消費者であるあひだは、あるひは十分なる消費者ですらありえないあひだは、自己の存在に、それの可能に數學的確實性はないと觀念せねばならん。

支那人四億、印度人三億、黑人また二億以上と稱せられる。人口の現在總數は十六億だといふ。亞細亞人のみで九億に達するといふ。白人以外の人類の大部分者にとつては、立法、行政等の實行と事業に於いて生産力を明示することは

今日の實情としては、境遇上困難かも知れん。しかしながら、科學の純粹研究に於いて、またそれの結果としての新學説の創造の發表に於いて、今日の白人以外の人類の大部分者に、强制的困難が設けられてあるとは考へられない。大學の門戸も頗る開放されて來たが、すくなくとも讀書の便宜は完全だ。讀書は大學以上の教育、教授の設備だ。しかるに人類の過半數を占むる黄、黒人のなかから、科學的研究の發表されたものが、そして價値高きものが、ほとんど絶無なのはなにを意味する現象であらうか。本質的低能か。境遇的習性か。單なる歴史的事實か。將來に續く可能か。

人類の起源は單系らしいといふ。人種と民族とは移住、それにつながる氣候の變化、地理の集中、言語、風俗、習慣、歴史の特殊的發達によつて説明される現象らしい。人種と民族は、人類が、安全、頻繁、快速なる交通手段を陸、水、空の地面全域をほぼあまねくおよぶ程度に發達させなかつた長い期間の自然的製作だ。變成だ。一團の、同種類の種子が、多少各地に蒔き散らされて、それ〴〵に風土化されて、特徴ある發育と成長を實現したかたちだ。現存の人種と民族の消極的説明は、交通手段未發達だ。

交通手段の發達は、過去およそ半世紀間の現象だ。一世紀と見れば過當なほどに最近代の現象だ。ナポレオン戰前の人類歴史の全期間に、交通機關の進歩は本質的にはほとんど皆無であつた。十九世紀以前と、十九世紀以後との間に於ける交通手段の發達の比較はむしろ絶大の差を示すが、それは實に無と有との差に近い差を示すが、十九世紀以前のいかなる一時代と、そのいかなる他の一時代とを比較しても、交通手段の發達に於いては特にいふに足るほどの差が見えない。十九世紀の創造の一は、たしかに交通手段に存する。二十世紀の創造の一は、交通手段の認識評價の創造に存すべきだ。十九世紀は交通手段を創造した。しかし、それは科學、工藝の自然的功績であつた。人の理想の功績ではなかつた。二十世紀は、十九世紀の一遺産としての交通手段の意義を研究すべき位置にある。交通手段未發達の投影とも、

映象とも見るべき民族別と人種別は、交通手段發達の顯著な今日に及んでは、自然に、また當然にも、消滅すべき運命と必要を有する。人の世界に於いては、すべての運命は、實は選擇だ。二十世紀の人類は、民族問題、人種問題についても、後悔すくなき、かしこい選擇をしなくてはいかん。

今日は地上のどの一部位に產まれ落ちても、地上のどの他の部位へも移住する便宜も旅行する便宜も、往昔に比しては完全に具備するといつていいほどだ。氣候の專制と、地理の檻禁とはその可能條件を失うた。もしも氣候と地理が人間に及ぼす感化勢力を今日及び今後になほ保存するとしても、それは全人類に對して偏頗なき感化勢力だ。かならずしも旅行したり、移住したりしなくても、現代人は、あるひは一層適當には二十世紀人は、ゐながらにして全人類の文化を消費しうる。讀書がその方法だ。なまなかに旅行し、移住し、乃至實に土着定住するよりさへも、たとひ遙隔の地域に生まれ、住み續けても、讀書研究にみづから十分の機會を與へれば、かへつて當の民族自身よりも、よその人の方がその當の民族の文化生活を切實に、明確に體驗し、實現する可能さへある。交通機關の發達、印刷刊行の發達、讀書力の發達、そしてこの讀書力の發達のうちには、外國語の知識も含まるのだが、この三通りの發達は、この三方法の發達は、實に地球表面の空間の意義を支配する。隨つて、氣候と地理の支配を調節する。進んでは氣候と地理の支配を文化的感化勢力の支配下に置きかへる。人をして、氣候と地理に、人としては當然の位置を與へしめる。

氣候が久しいあひだに染めだした血の色を、文化が染め拔くべき時代が來たのだ。獨りでに成長した交通機關の意義を、現代人はいまだ領解しない。いにしへのローマ帝國の眼界にはアメリカはなかつた。ナポレオンの覇業も、埃及、印度にまでは擴がつたり、擴がらうとしたりしたが、支那、日本は問題ともならなかつた。濠洲はなほさら公認存在線から遠ざかつてゐた。支那が中華獨り天下を自任したのも、古い物がたりではない。地上一村の光景は、すでに現前し

たのだ。人類一家の精神が未擡頭なだけだ。衣服は新裁されたが身體が去年の垢に包まれ、衣服と身體とは更製され、更生されたが、心魂がむかしの恋からさめずにゐるかたちだ。

人類の本質的一元を信ずるならば、交通手段が外形的に人類一社會を可能にした今日に於いては、民族と人種に固箔せる優劣別を、現代人は、その優をしていよ〳〵優ならしめると同時に、その劣をしても十分に優ならしめる努力を拂ふことによつて無くする方向に進むべきだ。二十世紀の今後の四分の三期間を通じての最大問題の一は、恐らくは民族問題、人種問題だらうと推想されるが、そしてそれは實に至難の一問題らしくも考へられるが、その至難問題を解決すべき唯一の方途は　全人類の優化主義のほかにはないと思ふ。思ふといふやうな多少不確實なことばを使ふ餘地もない。單にそのほかにはないと明言される。それは豫言としてではない。交通手段の全地球面的發達と、人格的個性の意識の發達との二事からして、當然的且つ必然的に要求結論されるのだ。

國際的自治力もなき民族には、國際的責任能力もなく、國際的自治力も、國際的責任能力もなき民族には、國際的創造はえて望まれない。白人以外の人類の大部分者が、數に於いて全人口の過半を占むるにかゝはらず、そしてすくなくとも讀書研究の自由を奪はれてゐないにかゝはらず、純粹科學の方面に於いてさへ、なんらの國際的創造とはるに足る寄與貢獻をも示さないといふ現在の事實は、多少この邊い消費をもかたらないか。

ユダ族の場合は別として、他の民族や人種の場合に於ては、その民族自身、人種自身の國際的自治力と、その國際的責任能力と、最後に國際的創造との間に、因果關係と條件關係とが併はせ存する形迹がある。現在の黃、黑人及びその子孫が、國際創造を自身證示しうるためには、かれらは、先づ國際責任、國際自治を躰現すべきではないか。また、現在の黃、黑人及びその子孫が、國際責任を體現しうるための一先要條件が、かれらの國際自治に存することは、特に言

うに及ばぬほど明白だ。

黃、黑人が、現在のやうに國際無創造者でなく、國際有創造者になることは黃、黑人自身のためにも、白人のためにも希望される。黃、黑人が、現在のやうに國際無責任者、國際無自治者でなく、國際有責任者、國際有自治者になることも、全人類の本質的目的の達成の一部だ。人類は、文字通りに人類であるやうに進化すべきだ。人類の特徵は、自治にある。責任にある。最も多く創造にある。個人のかたちに於いての如く、團體のかたちに於いてもだ。個人として無自治、無責任、無創造なら、その個人は人類の一員たる資格が乏しい。團體は個人の延長だ。團體として無自治、無責任、無創造であることは、個人として無自治、無責任、無創造であることを間接ながら多少意味する。文化學的意義に於いての人類でなく、生物學的意義に於いての人類に過ぎないなら、人類の範圍、分布圖は、白、黃、黑の三特徵を帶びる。人類の意義を、文化學的意義に於いての人類に限るならば、人類とは白人の別名だ。文化學的意義に於いての人類とは、自治あり、責任あり、創造ある生物をさす。

黃、黑人の自覺は、人類の本質的目的中の本質的目的たる創造を達成し、實現するための必要條件としての意識に於いて早く國際的自治あり、國際的責任ある身の上となるにある。國際的とは、最も十分なる意義に於いての社會的だ。全人類的社會の今日に於ける便宜名が國際的社會だ。國際的無自治、無責任、無創造は、社會的無自治、無責任、無創造だ。人と社會とは、ほとんど同一實在だ。社會的無自治、無責任、無創造の人は、あらゆる意味に於いて無自治、無責任、無創造の人といふに近い。人にして人にあらずといふに近い。わづかに生物學的特徵によつて人と呼ばれる人なのだ。單なる生物人であつて、文化人ではないのだ。

歐洲戰を機會として、民族運動が勃發した。いはゆる民族自決の國際提唱、すでに企てられたる多少の獨立運動、そ

れはチェコスロヴァキアを比較的に早い頃の一例とし、埃及を比較的に新らしい一例とする最近の、いはば一聯進行の世界的運動だが、この運動の現實價または現象價は甚だ大ではないとしても、それの理想價と原則價は、二十世紀を特標する鮮明内容たるに足る程度のものであらうと考へられる。第四階級といふ語がちかごろ新實在の投影をやゝ投ずる。新民族、新人種が、文字通りの意味に於いてでなく、現存民族、現存人種の新自覺といふ意味に於いて、今世紀の生命躍進の一大可能として早くすでに人類の前途、一見行き詰まつたと觀望される文化の前途を、再び多望に導きはじめたではないか。二十世紀は、自然科學に人類的協力を集中して、自然資源の總開發に從事すべきだが、同じ世紀は、人間科學に新たなる人類的協力を準備して、人間資源の新開發に、奇蹟とも觀ぜられるほどの創造的結果を與ふべきだ。

從來の經濟上の保護主義にいくらかの合理主義、進歩主義があつた。それは、子供を保護し、養、教育する母の原則に比すべき性質のものだ。嬰兒や、幼少年者を、そのまゝ廣い世界の、いはゆる自由競爭が意味する自然競爭の渦中に突きはなてば、成長が不可能にされたり、困難にされたりするにきまつてゐる。國際創造の素質ある民族も、それが幼弱であるあひだは、ある程度の保護を要する。その保護が、結果としてのみでなく、意思としても保護であることが、幼弱なる民族にとつて貴價だ。けれども、意思としての保護は、その幼弱なる民族自身から來る場合に最も純眞だ。保護とはいふものゝ、その場合の保護は自己保護だ。自助だ。意思としてでない、單なる結果としての保護は、機會を見てねがへりをうつ。征服民族としてのいはゆる帝國政府から、被征服民族としてのいはゆる屬領民に與へられる保護は意思に於いては利己であり、利用であり、結果に於いてのみの保護である度合と場合があまりに大だ。奴隸を保護する主人の原則に近い。牧畜、培養の原則に近いのだ。食ひものにするための保護だ。このかたちの保護のもとには、幼弱民族の全的成長開發は望まれない。幼弱民族が具備する性能のうちで、支配民族の利己に都合よき部分のみが伸暢させ

られる。その適切なる一例は、北米合衆國に拉し去られたるアフリカの黒人が、從順、勤勉、健體といふやうな方向に於いては、人爲淘汰による顯著なる發達を示したにある。人として最も大切な部分が、結果的保護主義の網にはもれる。結果的保護主義の鎌によつては、害惡な、邪魔な雜草として刈除される。人として最も大切な部分とは、人格的自覺だ。それに伴ふ自尊心だ。自決の原則だ。自治だ。責任と創造の條件としての自治だ。

幼弱民族や被征服民族は、特殊の强大民族や征服民族の直接保護の可能に、最善にして純眞なる保護を期待しがたいとすれば、しかもみづから立つ、みづから保護するの力が不足だとすれば、その保護をば、いかなる一强國の私事ともせずに、すべての强國、すべての國々の公的責任、公務として制定することは、たしかに賢明なる一方法だ。國際聯盟に於ける民族自決の位置はこゝにその道德的援助を持つ。個人間の關係に於いても、なまなかに私的保護を受けるよりは、公的保護を受けた方が、自由を縛られない場合がしばしばある。

現存の國際聯盟に於ける民族自決は、しかしながら、その動機に於いて、不純であつた。現存の國際聯盟に於ける民族自決に於いては、戰勝國が、戰敗國をしてその屬領民を吐きいださしめんとする意思の發動と見るべき部分があまりに大きく、戰勝國がみづからの屬領民を吐きいださんとする意思の發動と見るべき部分があまりに小さい。ただ、屬領民自身は、概ね、從來の支配民が戰敗國として力を失へると、戰勝國となつて力を増せるとにかゝはらず、獨立を眞實に欲望しはじめた。一征服民族が中央に號令して、被征服民族は單に服從の義務を負ふかたちの「帝國」と「帝國主義」とは、倒壞の危機に瀕して來た。日本の如き小帝國にもその徵候がないではないが、英の如き大帝國に於いてその徵候が顯著だ。

民族運動は到來した事實だが、人種運動は、わづかに漠然たる多少の問題のかたちに於いて到來したにすぎない。こ

のさき發展するかも知れんが、發展しないかも知れん。それが今後に發展するとしないとは、現存の支配人種が、人種閥を保つか、棄てるか、またはどう持ちなほすかによつて主として決せられる。曾つて近代の國民主義は、他の國民閥の壓迫下に激發された。人種運動が必然來たると假定するならば、それは人種閥の壓迫の持續または發展を先在條件としての結論だ。

人種閥が、現在以上に進まなくても、すなはち惡化しなくても、被壓迫人種における生命の開發が進歩するならば人種運動は成立する。現在の事實としては、黑人種と黃人種との間に聯絡が熟したなどとは輕卒にも判斷されない。いつかはそれが熟する時期が來ようとすらも決して確實には豫期されない。アジア住民内の團結さへも、明確なる可能ではない。ただ、例へば反英意識において、トルコから印度へかけて、最近、以前に見ることのできなかつた、進んだ程度と規模に於いて、いはば一種の人種運動らしき一側面をかけた運動の擡頭は見られる。けれども、印度人と支那人との間にもまた支那人と日本人との間にもいふに足る團結などはできてゐない。人種運動は、もしもそれが一とたび勃興すべき正當理由を有するとするならば、それはアジア人やアフリカ人の今後の努力を待つ。人種運動は、もしもそれが破壞を値ひするものであるとしても、破壞の目的物とされるほどの存在を、すくなくともまだなしてゐない。人種運動の問題は、一方に於いては白人種の、他方においては白人以外の人種の、純粹に自由意思を條件とする問題だ。

そもそも人類が、民族別や人種別に根據して相爭ふことは、激しい愚だ。人類の價値原則は、地理、歷史、風俗習慣、言語、血液等を遠く超越した文化に存すべきだ。本質的文化に存すべきだ。普遍妥當がその本質的文化の一條件だ。一特徵だ。數學に於いて、及び諸般の科學と藝術に於いて、殊に道德と宗敎に於いて、本質的文化の多少完全な例示がある。普遍には、數學と科學においてのみ普遍妥當價が可能なやうに思はれるが、これは徹底した判斷ではない。

單なる知性の普遍價はむしろ淺薄だ。その奥に情性や意性の普遍價の可能があるのだ。人情の大海原、義理の天則、譬へてはさうもいひうべき、より大いなる全體に、民族や人種は部分として屬生する。されば、黄、黒人の人種的自己主張が期待さるべきだと假定しても、それは、黄、黒人が、特殊の膚色に象徴されるある特殊の文化價値、精神生活を主張すべきだといふ意味では決してない。西洋人は西洋文化と西洋精神の支持者であり、創造者であり、東洋人は東洋文化と東洋精神の支持者であり、創造者であるべきだといふやうな適用をゆるす原則をば根本的に否定する立ち場を、その假定者は一貫して失はない。かりに最大限の讓歩を敢てして、價値の生産者としての各人種には、それぞれの獨自質があるとしても、價値の消費者としての各人種には、それぞれの獨自質はないと考察される。西洋人でなくては生産しえない音樂價、建築價があると假定しても、それは東洋人にも消費しえられる音樂價、建築價であると確信される。西洋人にはサビの生産は困難だと假定しても、西洋人にはサビはわからないといふ假定は、さほど容易には成り立たない。けれども生産と消費は、根源に於いて相つながる。兩者の差は眞に程度の差だ。

人種の差は、あらゆる意味に於いて、程度別に還元しえられると見るが要領をえた一方法だ。例へば科學精神や技術能力に於いては、現在の事實としては、比較的に西洋人が東洋人よりも餘計の所有者であるのだ。正直のところ、東洋人がすくなく有する積極的價値にして、西洋人によつて多く有されてゐるものはかぞへ切れないほど澤山にあるが、東洋人の方が餘計に有する積極的人間的價値は、さがしてもほとんど徒勞におはる實狀だ。西洋人は東洋人や東洋文化をよく知らないゆゑに、しば〳〵東洋人や東洋文化を買ひかぶる。無内容に創造する。空想する。東洋人自身も、西洋人や西洋文化をよく知らないゆゑに、しば〳〵うぬぼれる。先方にありあまる積極的人間的價値を、當方だけが特權的に所有するやうに考へちがへる。黒人のことはしばらくさし措いて東、西洋人を比較するに、要するに、劣能者と優能者との對

照だ。東洋人の生存の原則と方法が、今後の理想としてなんであるべきかは、だから明瞭だ。能力の增進、能力の創造、俗に謂くかも知らんが、正しい意味に解釋されるこれらの熟語によつて、その原則と方法とは完全に記述される。能力には、科學的、道德的、藝術的その他の特徴が伴ふ。人間深に自覺して、西洋人によつて生產され、すくなくとも消費される可能あるすべての積極的價値を、できるだけ十分に、完全に、高度にわれみづから生產する興味と意思が、東洋人が持つべき興味と意思だ。西洋人の代はりに白人といつてもいゝ。東洋人の代はりに、廣く白人以外の人類といつてもいゝ。

東洋人にして東洋精神を信ずるあひだは、西洋人の方に人種閥が形成され、維持され、發達する可能がある。同樣に西洋人にして西洋精神を信ずるあひだは、東洋人の方に人種運動が創造される餘地がある。迷信の禍害はこの場合にもいちじるしい。人類的普遍安當價値の信者であつて、はじめて人類的解放、自治を要請する資格があるのだ。人種運動は目的であつてはならん。便宜だけの位置を與へらるべきだ。同人種內には、協力の便宜が、異人種間に於けるよりも多いといふ事情が實存するかぎりに於いて、その便宜に機會を供給するかたちが、善き人種運動のすべてであるべきだ。義務としての立國は、義務としての民族運動だ。人種運動も、それが是認される場合があるとすれば、それは、人類主義の目的を達する一手段としての場合でなくてはならん。人種運動は、一種の義務行爲とし、開始され、進行するときに、合理的だ。手段は白人種に存しても、目的は自他全人種に存するでないならば、成功の自然價も疑はれるが、成功の當然價は確實に否定される。

支那の自治は、支那の武裝を一必要條件としてはじめて可能にされると考へる人人がある。一大眞理を包藏する見解だ。現存のある國々は武裝してよいが、他のある國々は武裝してはいかんといふ道理は成り立たない。國々の代はりに

民族や人種こいふてもいゝ。今世紀が進むにつれて、人種運動が、またそれに伴ふ人種闘爭が發生するか。その闘爭は直接行動いかたちを主として帶びる方向に惡化して發展するか。これらは閉ぢたる卷である。早く人類主義、人格的個性主義、本質的文化主義の眞價に各人種ともに開眼し、注意して、人種運動をば、張り合ひぬけのしたもの、氣のうせた酒同然にする用意、努力がいまに於いて切れに要求される。人種運動は、それが保持され、創造されるとしても、一事務であり、一規則であるべく、理想であり、原則であるべきではない。くりかへしていふが、人種運動と人種闘とは、反應と發動だ。人種運動を笑ふところは、人種闘を笑ふところだ。人種運動を想ふところは、人種闘を憤るところだ。人種運動に興味をいだく人のこゝろが、みづから人種闘の快夢を豫想するにあるならば、その人の理想は一事務大であり、その人の原則は一規則大だ。その人は小さい人だ。

民族運動、勞働運動、婦人運動、小兒運動、人種運動これらは原則において一だ。壓迫が生む抵抗だ。綜合的社會理想の確立によつてのみ、この壓迫が除かれ、隨つてこの抵抗が廢用にされる。綜合的社會理想の確立は、綜合的人格理想の確立の中心極だ。われら自身を知る意味が、それは實に個々としてのわれら自身を意味したのだが、恐らくは近き將來の一大問題たるべき人種問題の解決策としてもいゝ。

老年と精神的活動の問題

文學博士　松本亦太郎

一、老人の心理的考察

精神活動には生長、成熟、衰頽の三時期がある、成熟期に於ては、知識經驗を增大する點に於ては年功は認められるが、精神活動が年齢の進むと共に向上するとは謂はれない、年齢の差が精神活動に對し重大なる影響を及ぼすのは生長期と衰頽期とに對してゞある。最近の心理學では成熟期の個々人の精神活動を取扱ふに、通例は年齢を度外に措て、精神活動の優劣の差を檢査し、之を七、八段階に別ち人々を品評する事にしてゐる、夫れから生長期に於ては、各個人は年齢に從ひ同一步調を以て進むもので無い事を發見し、暦年齢と精神年齢とを區別するを必要とするに至つた、例へば或る標準を立てゝ檢査すると、暦年齢十才なるに精神年齢は既に十四才に達してゐるものがある、又其反對に暦年齢十才なるに精神年齢は八才なるものがある、斯る譯で同一なる年齢の者でも精神發達の狀況は個々人相異してゐて、之を少くとも四段階或は六段階に區別する事が出來る、夫故に若し生長期に於ける教育の効果の大ならん事を欲すれば、少くとも優秀兒と上の中等兒と下の中等兒と劣等兒との四段階を區別し、之に從ひ教育法を按排する工夫をせねばならない。

衰頽期に於ける精神的機能が暦年齢に從ひ變化する狀態は從來餘り研究されてゐない、私は十數年前に老人研究なる學科の起る必要を說いた事があつたが、多數の老人を實驗的研究の對象とする事が困難なるが爲め、捗々敷研究を進むる事が出來ないで經過した、然かし心理學の實驗法や精神檢査法を適用し得る範圍に於ては、老人の精神的機能が暦年齢の重なるに從ひ如何に變化するかと量的に表示する事は出來る、例へば知覺の鋭鈍、簡單なる事物に對する辯別の鋭鈍、表象結合の遲速、記

憶の强弱、判斷、推理の當否度、問題解決の優劣等が曆年齡に應し如何に消長するかと云ふ樣な事は、老人が研究の對象となる事を承諾しさへすれば之を明確にする事は容易である、又精神的動作の方面に於て、動作の遲速、力量等を測定する事は極めて容易であつて然る方面に於ては我々は既に多少の材料を有してゐる、現に角斯の如き方法により多くの老人を研究し資料を得た曉には衰頽期に於ける精神機能を餘程明にする事が出來る。然かし生長期と異りて成熟期を通過した精神的機能は頗る複雜なる狀況を以て働くのであるから、さう云ふ複雜なる方面は間接なる考察法をを用ひ之を窺はねばならない、例へば心理學の品等法を用ひ老人の業績を品評し、其精神的機能の消長の度を定むる如きは其一法である。或は業績上より精神的活動の停止せる時期を探る如きも其一法であり、或は一世に名聲を揚げた卓拔人の行年を通覽する如き事も間接には夫等人々の精神的活動を窺ふ資料になる、斯る類の間接考察を概括すれば老年時代に於ける複雜なる精神活動と曆年齡との關係は畧之を明にするを得る見込がある、精神の發達を研究する事は最近に於て始まつたのであるから、老人の心理を研究する暇がまだ無かつたのであらうが、衰頽期の精神活動の狀を研究せずしては發達の行程は十分に明になるとは認められない、今日に於ては老人の心理に關して我々の有する學術的材料は甚だ貧弱であるが、現に角玆に多少の叙述を試むる事にする。

二、意志的動作の消長

掌握の動作は一つの意志的動作であつて、種々なる意志動作を成立せしむる單元になる、五十歲以上の若干の日本人に就き掌握力を測つて見た時、左表の如き結果を示した。

年齡	右手	左手	右左平均	
50才	24.5kg	22.3kg	23.4kg	21.3
51	25.7	28.1	26.9	
52	13.9	16.5	15.2	
53	19.2	22.6	20.9	
54	20.5	2[illegible].7	20.6	
55	—	—	—	
56	26.0	24.5	25.2	
57	14.6	15.5	15.0	
58	24.2	25.1	24.6	
59	—	—	—	
60	23.0	20.7	21.8	16.2
61	18.0	19.2	17.6	
62	12.5	13.2	12.8	
63	12.3	10.0	11.1	
64	19.1	20.8	19.9	
65	12.3	12.0	12.1	
66	19.0	18.0	18.5	
67	—	—	—	
68	16.5	12.5	14.5	
69	17.2	18.7	17.9	
70	—	—	—	17.5
71	—	—	—	
72	19.7	17.5	18.6	
73	16.1	20.8	18.4	
74	13.5	17.5	15.5	
……	……	……	……	
83	16.5	20.5	78.5	

各年齡に於ける被驗者の數は餘り多くは無いから此結果は確定的のものでは無いが大體の傾向は示してゐる、五十代に於ては左右を平均して一手の握力は二十一、三キログラムであるが、六十代の平均は十六、二キログラムで其差が五キログラムにな

る、七十代は平均十七、五キログラムであるが、七十二才乃至七十四才の間丈けを測つたのであるから之を以て七十代の代表とするは恐く當を得まい、八十三才に十八五キログラムの握力を有する者がある、これは六十一才の時の握力に匹敵する、特別に握力の强い人と見ねばならない、是等の結果を概括すれば五十才以後暦年の重なるに從ひ握力は減少の傾を示すが、其經路は一上一下動搖して減少の程度は遲々たるものである。

手指運動の速度を測る爲の珠算盤の珠を二十秒間彈かせると男子の場合に於て五十代は平均右指六十四顆、左指五十八顆を彈ちき、六十代は平均右指五十三、六顆、左指四十九顆を彈く、手指の反復運動は日本人は女子の方が迅速である、今女子をして三十秒間箸を用ひ豆を拾はすと四十六才乃至七十才の二十五年間の平均は右二九、六箇、左一六、〇箇であるが七十一才乃至九十才の二十ケ年間の平均は右二五、二箇、左一五、〇箇である。即ち極めて簡單なる運動の速度は年齢の進むと共に稍著しく減ずるが、複雜なる動作に於ては年齢に從ひ速度は減少するが減少の程度は寧ろ遲々たるものである。

三、精神的活動の停止年齢

老年の精神的活動を其業績上より統計的に考察したるものにて先づ擧ぐ可きはニューマン、ドールランドの調査である、此人はコロンブスの時代から最近に至るまで歐米に出でたる拔群人四百名の活動停止の年及び死去の年齢を統計した、此四百人中から重に學者の部類に屬する人々の統計を擧げると左表の如くである。

學者種類	事業停止年齢	錯差	行年	餘生	員數
星學者 數學者	72	8	74	2	13
神學者	65	1.	63	1	15
論文家	66	2	70	4	28
歷史家	69	5	72	3	23
法律家	66	2	68	2	2
博物學者	70	6	71	1	19
哲學者	64	0	65	1	23
諷刺文學者	65	1	66	1	6
政治家	64	0	69	5	53
美術家	64	0	67	3	33
物理學者 化學者	61	3	64	3	9
發明家	71	7	79	8	4
醫學者	70	3	71	1	8
平均	66.7	2.7	69.3	27	

此表に據ると學者、美術家、政治家等は平均六十六七才で事業を停止する事になつてゐる、尤ドールランドの所謂事業停止と云ふのは重な事業を停止したと云ふ意か、或は全然事業を停止したと云ふ意か明瞭で無い、恐く前者を以て其意義とするら

しい、諸學者の中で物理學者、化學者の事業停止は格外に早い、これは如何なる故か委細の記錄が擧がつてゐないから譯らない、是等二百三十六人の拔群人の行年の平均は六十九、三才になる、夫故事業停止後の餘生とも稱す可きは二・七年になる、即ち是等の人口は死する二年或は三年前まで活動してゐるのである、事業停止の平均年齡は六十六、七才であるが之れに屬する平均錯差は二、七年であるから、或る人は六十九才餘に至るまで活動し、或る人は六十四才で活動を止める事になる、其點に於て個人差はある。

多數を統計して得たる平均價は抽象的の水準を示すが、實際の個人に其水準を適用すれば過不及あるのが常である、例へばビユフオンが「博物學」を著したるは八十一歲の時であり、ホムボルトが「宇宙」なる書を著したのは八十九歲の時である、又サビニイーが「羅馬法の近世系統」を著したのは七十歲の時である、數學の如き智的の研究は隨分高年まで其活動を縱橫する事が出來る、星學者、數學者の平均事業停止年齡は七十二才であるが、ヘルシエルは八十歲、ビオーは八十三歲、ニユートンは八十四歲に至つて始めて其活動を停止した、博物學者のラマルクも最後の著述をしたのは八十歲の時であつた、詩人、音樂者は感情に導かるゝ事が多いので比較的早く事業を停止するが、ゴエーテは八十歲、ヤングとテニソンは共に八十二歲、ランドールは八十八歲を越えて始めて作詩を停止した、音樂者中でヘンデルは七十四歲、リスフト及ヴエルデイは共に八十五歲まで仕事をしてゐる。

ドールランドの擧げた學者、美術家、政治家等が活動を開始した平均年齡は二十五、一歲であつて、最も早きは美術家の二十二歲で、最も遲きは諷刺文學者の三十二歲である、數學者哲學者などは二十六歲を以て著しき活動を開始してゐる、而して是等の人々は爾後平均四十一年間其目覺しき活動を繼續する、此活動繼續年限の最も長いのは發明家の四十九年間、星學者及數學者の四十七年間であつて、醫學者の四十六年間は之に次ぐ、最も短いのは諷刺文學者の三十三年間である、若し個人的に見れば活動繼續期間の甚だ長きに亘つてゐるものが尠くない、ラプラースは五十九年間に亘つて活動した、ドールランドの擧げた諸種偉人中活動期の六十年以上に亘つてゐる者が二十一人ある　六十年以上に亘り斷えず世を動かす如き精神的活動を營むのを見ると人間の精力も驚嘆に値する、活動の長きにて絕群と稱す可きはティチアノーである、彼れは二十五歲の時に優秀なる畫家として世に認められ、以來七十三年の長きに亙りて間斷なく若々しい然かも意義の深い作を出たし、人の心を

動かして止まなかつた、後世の美術史家は「彼れが遲したる異常の高年も彼れの材能を毫も薄弱ならしむるを得なかつた」と言つて居る、ティチアノーが若し傳染病の犯す所とならなかつたならば、其齡は百歳以上に出てたであらう。

四、我國の學者の壽命

我國の偉人に就き精神活動の開始期及停止期に就て統計的に研究したものは私はまだ見ない、偉人の行年を擧げたものはある、夫れは石川誠太郎氏の編纂した「古今書畫名家年表」である、此書は我國の各年代に於ける學者、藝術家、を主とし、又これに關係を有する政治家、僧侶等を網羅して擧げ其行年を附記した、ドールランドの取扱つた偉人と同種類の我國の偉人を取扱つてゐると認める事が出來る、尤此書に擧げてある名家の中にはドールランドのに比すると名聲は兩かく大ならざるものが含まれてある。然かし夫れ丈、之れが統計の結果は實際の妥當性が大いと謂ふを得る、如何なる名家が擧げられてあるかは二三の例を示せば畧ぼ譯る例へば大正二年には、

川端玉章(七十二)　本居豐頴(七十九)　兒玉　果亭(七十三)
熊谷直彥(八十六)　竹川友廣(七十九)　奧原晴湖女　(七十六)
中林梧竹(八十七)　福原周峰(八七)　有栖川宮威仁親王(五十二)

が列擧してある括弧内の數字は行年を示す、又寶永二年を見ると、

伊藤仁齋(七十九)　北村季吟(八十二)　僧　千呆(七　十)
住吉具慶(七十五)　德川光貞(八　十)　織田　貞置(八十九)

とある。なほ名家の中に自然の死を遂げなかつたものも若干は擧げてある、例へば元和元年には、

豐臣秀賴(二十三)　淀　君(三十九)　木村　重成(二十三)
片桐且元(六十三)　眞田幸村(四十六)　古田織部正(七十三)
海北友松(八十三)

が擧げてある。兎に角日本の歴史に於て有意義の名家が網羅されてある事は以上の例により明かである、名家中には自殺したり、暗殺されたりしたものもあるが、其數は比較的僅かであるから、私は之を除かずに統計をして見た、而して右の書中慶長元年より大正二年に亘る三百十八年間に死去した名家を數へると千七百三十一人ある、之を行年に從ひ概括すると、

四十九歳以下	二二四人
五十歳乃至五十九歳	二六二人
六十歳乃至六十九歳	三九五人
七十歳乃至七十九歳	四一三人
八十歳乃至八十九歳	一八四人

九十歳乃至九十九歳	二七人
百歳乃至百十七歳	四人
行年未詳	二一二人
合計	一七三一人

となる、行年未詳者を除けば千五百九人になるが、其中五十九歳以下は四百八十六人であつて總名家の三分の一に達しない、其三分の二以上即ち千二十三人は六十歳以上である、而して六十歳乃至八十九歳の者が實に九百九十二人の多きに達してゐる、是に由て觀ると我國の學者、美術家、及び他の文化事業の方面に從事する名家は壽命は隨分長い、名家になる如き人は素質的精力が強い爲め壽命も長くなつたか、將た壽命が長かつた爲め仕事の成績が擧がり名聲が高くなつたのであるか、孰れとも斷言し難い恐らくは双方相互に影響したかも譯らない、玆に擧げられた名家は重に文化の開拓に從事した種類の人物である、試みに五十九歳と六十歳の間に界線を設け、此界線を越えた者を老朽と名け之を棄てる事にすれば、名家全數の三分の二を失つて仕舞ふ譯である。

五、壽命の分配

更に六十代、七十代、八十代、に於ける行年の分配狀態を見ると名家の精力の消長を或る度までは窺ふ事が出來る、

行年	人數	
60才	:7人	179人
61	40	
62	25	
63	43	
64	34	
65	40	216人
66	46	
67	36	
68	52	
69	42	
合計	395	

六十代に於ては各行年に對する人數割がまだ一定の傾向を示してゐない、何れの行年が特別の重みを有すると云ふ事は無い、若し六十代の前半百七十九人に後半の二百十六人を對すれば、六十五歳以後まで生きた人が三十七人多い事になるから六十代に於ては年齡が進んで、精力が夫れに應じ衰へるとは見られない、例へば六十三歳で死する名家もあるし、六十九歳で死する名家もあるが、晩年の精力は行年六十九歳の人の方が行年六十三歳の人より劣つてゐるとは認められない、大抵相匹敵する精力を保つてゐるだらう。

七十代になつて七十歳乃至七十四歳の行年の名家は二百九人にして七十五歳乃至七十九歳の行年の名家は二百四人であるから、此一間に於ても亦年齡の高くなる程名家の數が減ずるとは認められない、六十代と七十代とを比して行年に對する人數割の分配は左の如く

である。

行年	人數	
70才	39人	209人
71	18	
72	51	
73	53	
74	48	
75	64	204人
76	29	
77	37	
78	40	
79	34	
合計	413	

行年七十代の名家の合計は四百十三人で、行年六十代の名家の三百九十五人よりも十八人多い、心理學者のサンフォード博士は六十五歲より七十五歲の間を老期と呼び、身體及び精神の働を誤用せずに正當なる生活をなしたる人は此期間從來と同樣なる方針に向つて進むなら、相當の活動を繼續し得るのみならず、科學　或は事務的方面　於ては見るに足る活動を營むを得ると言つてゐる。

六、八十歲以上の名家

慶長元年より大正二年迄の間に名家にして行年八十歲乃至百十七歲に達したものが二百十五人ある、即ち行年五十歲以上を得たる名家總數の一割六分六厘が八十歲以上の齡を得たことになる、通例人の場合に比すれば學者美術家等の名家中には八十歲以上に達する者の割合が多い、又私は曾て承和二年に入寂した弘法大師より、明治四十一年に歿したる橋本雅邦に至るまで最著名なる畫家に就て調べたが、畫家全數の二割七厘は八十歲以上の齡に達した、歐洲畫家の場合に於ける一割八分一厘に比すれば、日本畫家の方が餘計に長壽を得てゐる、今八十代の名家の行年に對する分配を檢すれば左の如くである。

行年	人數	
80才	21人	112人
81	26	
82	24	
83	24	
84	17	
85	25	72人
86	13	
87	10	
88	9	
89	15	
合計	184	

八十代に至て後半に生き殘る人が、前半に生きてゐた人より三割五分七厘少くなつた、又行年の七十代なる者は四百十三人なるに對し八十代のものは百八十四人であるから八十歲以上に於ては名家の精力は著しく減少した事を示してゐる、八十六歲以上の高齡になると名家の數は著しく少くなる。

西洋美術家ではティチアノーに次ぐのはミケル、アンヂェローの八十九歲であるが、我國の土佐光信　九十二歲であつて土佐三筆の一人であり、畫聖を以て稱せられた、光信は足利時代の妙手であるが、江戸時代に於て葛飾北齋及岸駒は九十歲、渡邊秀岳及菊池容齋は九十一歲、英一珪は九十二歲、田能村直入

は九十四歲、渡邊秀朴は九十五歲である、今大和三年以後明治四十三年に至るまでの間行年の九十歲以上の名家を擧ぐれば左の如くである。

姓名	死亡年號	行年
因果居士	元和三	九三
古澗慈稽	寬永一〇	九〇
小幡景憲	寬文三	九二
石川丈山	同一二	九〇
近藤貞用	元祿九	九一
元瑤尼宮	同一二	九四
加藤遠澤	享保一四	九十餘
渡邊秀岳	同一九	九一
僧鶴洲	延享元	九二
岡崎國久	寶曆元	九四
佐野隱山	同元	九七
渡邊秀朴	同六	九五
加藤枝直	天明五	九四
村井中漸	寬政九	九〇
川上不白	文化四	九一
岸駒	天保九	九〇
加茂季鷹	同一三	九一
英一珪	弘化元	九二
葛飾北齋	嘉永二	九〇
谷口月窓	慶應元	九二
菊池容齋	明治一一	九一
高畑式部女	同十四	九七
庄司謙齋	同一九	九〇餘
近藤忠顯	同三一	九一
伊藤圭介	同三四	九九
田能村直入	同四〇	九四
小野湖山	同四三	九七
長田德本	寬永七	一一七
樂常慶	同一二	一〇〇
僧天海	同二〇	一〇八
江村專齋	寬文四	一〇〇

九十歲以上に於ては九十五歲を越える者は甚だ少くなる、而かも九十七、九十九、百歲以上に達する者が若干はある、ドールランドの擧げた偉人中百歲以上の齡に達したるは色彩の研究に於て有名なるシュブリュールである、此人は百三歲にて死する時まで鋭利なる活動を續けて居た、同種類の偉人を相互比ぶる時

は日本は西洋に比し寧ろ長壽の者が多いやうである。

以上は日本の學者、美術家等を行年に從ひ通覽したのであるが、是等名家は死に先ち何年位前から其活動を停止したか、之を調査する暇が今は無い、八十歳以上に達した者は活動休止の年限が比較的長いと見ても可いだらうが、夫れでも名家と稱せらるゝ類の人は病氣に罹らざる以上は八十歳以上でも隨分よく活動するのを數目擊する、美術家などになると死に瀕するまで製作を停止しない、七十代、六十代の行年を以て終つた人の場合では恐く活動休止の年限は短いのが通例であらう、此點に於て假りに歐洲の名家と日本の名家との間に餘り差異が無いとすれば、休止年限は二年半乃至三年間に過ぎない、即ち前に擧げたる行年より約三年を控除すれば活動停止の年齡が略譯る、さう云ふ様にして活動停止の年齡の分配狀態を觀察すれば、學者、美術家などは六十代七十代に於ては壯んに活動する者が多いのである、國の文化を豐富ならしめ、且之を進展せしむる上から考へると、さう云ふ學者、美術家は國家なり、社會なり、が何等かの方法により之を擁護して其活動を繼續せしむる途を設けるのが良い、文化進展には新進氣鋭の活動は勿論必要であるが、夫れと共に老成圓熟の活動が亦必要である。

七、一般老年者の死の分配

世に名家と呼ばるゝ程の人々の老年に於ける精神的活動は一般の人々の同時期に於ける精神活動より旺盛である、名家の中に長壽者の甚だ多いのを見ると、或は名家の壽命は一般の人々の壽命より長いのでは無いかとも考へられる、然かし夫れを比較する材料を整理する暇を得ざるが故、玆に一般の老年者の死について英國のカール、ピーヤソンの觀察を指摘するに止める、ピーヤソンは同じ年に生れた千人の男の子があるとし、其千人を死したる年齡に應じ員數的に分配し、行年を横軸とし、員數を縱軸とし曲線を畫いた、斯の如くして得たる死の曲線は一種の山の如き形狀になつてゐる、山の高さは死亡者の員數を示す、嬰兒時代は高い山の頂上に當り、夫れから急勾配を以て直下して谷の低い所に達する、夫れが十三四歳の所に當る、夫れから山は漸次に緩勾配を以て上り、七十二歳の所に第二の頂點がある、夫より稍強い勾配を以て低くなる、千人中で九十一歳に達する者は僅か二人であり、百歳に達する者は一萬人中一人ありや、なしやと云ふ情況である、ピーヤソンは死の全曲線を五箇の成分曲線に分解し、全曲線は嬰兒期の曲線、幼稚期の曲線、青年期の曲線、壯年期の曲線及び老年期の曲線が合成した

ものと見た、恰かも人生に五の標的があつて、死の神が此標的を狙つて人を殺さうとしてゐる樣な趣がある、其中で壯年の標的は四十二歲の所にあり、死の神が此所を狙つて射撃する、壯年期に於ては四十二歲の時に最も餘計に人は倒れる、千人の內百七十三人は四十二歲の時倒れるが、彈丸は標的を逸し其前に落ち又後に落ちるから流彈の飛ぶ區域が廣い、即ち四十二歲を中心にして前後十二、八年の範圍に落ちる、即ち二十九歲から五十四、五歲迄の人を倒す事になる、夫れから老年期に於て死の神が狙ふ標的は七十二歲の所にある、彈丸の最も多く適中するのは七十二歲であるが其前後に於て流彈に中るものがある其中つた者の年齡を平均すれば六十七歲になる、即ち六十七歲を中心にして前に十三年五ケ月、後に十三年五ケ月に擴がり流彈が中たる、即ち此死神は凡そ五十四歲から八十歲迄の間の者を狙撃する。而して同年に生れた千人の內で四百八十四人が此二十六年十ケ月間に倒れる、そこでピーヤソンは經驗上の事實から推論して人間は凡て何歲迄活きるを得るかとの問を提出し、英國の例では百六歲·五が、男子の壽命の限界であるとした、ピーヤソンが死の神と假稱してゐるのは夫々の期間に働く特殊なる病源を指すのである、老年期の病源は自然衰弱が重なものであるが、此自然衰弱に對し抵抗力を有する事の强い者が長命を保つ譯で、前來見たる如く名家、偉人中長壽者の甚だ多いのを見ると是等の人々は自然衰弱に對し、强い抵抗力を有してゐると認められる、精力の包藏が大なりし爲め、偉人となり名家となつたのであるが、同じ大なる精力が亦其人をして長壽ならしめたと解釋するを得る、若し發達期に於ける如く曆年齡と精神年齡とを別にして見れば、偉人名家は老衰期に於ては概して曆の年齡より餘程若い精神年齡に相當する活動をなしてゐると謂ふ事が出來るだらう、發達期に於ては天才は曆年齡より餘程高い精神年齡に相當する活動を營むのと丁度相對應してゐるのである。

八、若き女の定めたる老人期

老年時代の身體の生理作用は姑く措いて、單に外貌から觀察した丈けでも、同じ曆年齡の人が同じ年恰好には見えない、或人は餘程若く見え、或人は餘程老いて見える、外貌でさへ然りであるから精神活動の方から觀察すれば個人差は一層大である、そこで外部から觀察した所で何歲位からを老人と稱して可いかと云ふ問を出して見ると、觀察者により判斷が、種々異る、外貌丈けに注意して判斷をする觀察者は比較的早く人を老人視する、然るに若し精神的活動に注意して判斷をする觀察者は人を老人視するのが遲い、私は嘗て年齡十三四歲より三十七

八歳に亘れる女子二千四十餘人に就き何歳以上を老人と認むるやとの問題を與へ其答を求めた事がある、尤も此二千餘人の中堅になつたのは十八九歳より二十二三歳の女子で學生生活中にある者であつた、年少の女子や精神的方面の教養の乏しい女子は五十歳以上は老人であるなどと答へる者もあるが、精神的方面の教養ある女子は人の入老期を高齢の所に置かんとする傾向が著しい、私が得た答案の中で最も興味のあるのは目白の日本女子大學校の女生より得た所のものである、解答者二百五十八人の中で六十歳以上の者を以て老人と認むと判斷した者が約百人あり、六十五歳乃至七十歳以上を以て老人と認むと判斷した者が百二十人ある、夫れから七十五歳乃至八十歳を以て老人と認むとした者が二十四人ある、即ち六十歳を老人期と認むる者百人に對し六十五歳以上を老人期とする者が百二十四人ある事になる、二十歳前後の女生の判斷が斯る狀勢を示してゐるとすれば、若し同樣の教養ある二十五六歳の女子に判斷せしめたなら、老人期の到來を遲延せしむる者の數が尙ほ多くなるであらうと云ふ事が豫期せらるゝ、七八年前に私の調査した所によると、子美術學校や女子職業學校の如きは外貌的觀察を主とするものと見え、最も人を早老視する、其次は高等女學校の女生である、中學校の男生は高女生に比すれば人を老人視する事が遲い、師範學校の男女生は中學生よりも、人を老人視する事が又遲くなり、更に女子高等師範の女生は老人年齢を向上せしめる傾が多くなり、最も人を老人視するのに遲いのが日本女子大學生である、要するに精神的教養の淺深が女生の老人觀に大なる影響を有し、人生に對し深い興味を有し、觀察を內面的に向ける女子程、人を若く視やうとする傾が大きくなるの事實を認める。

日本女子大學生の老人年齢を定むるに就て理由として擧げてゐる所は種々あつて興味がある、其中の或る例を少し玆に擧げて見る、文學科三年滿二十三歳女生の言に「古は四十を初老、七十を古稀など稱したるも、現代にては東西共に社會各方面の重鎭として活動せる人々を見るに皆五十歳以上より六十歳以上の者多し、一家に就て見るも五十、六十のものは往々家長として一家の權を握り、一家を經營せる者あり、是等の人々は其身體稍壯者に劣れりと雖も、其思想に至りては決して老たりと云ふ可らず、こゝを以て自分は七十歳以上を以て初めて老人と稱す可きものと思ふ」とある。女生の中には少くとも七十歳位まではどうしても老人となす事能はずとの意を述べた者が尠くない、又自己の觀察より老人年齢を定めんとする者（家政三年生二十一歳）の言に「七十歳以上に非れば老人と稱するを不可と

す、如何となれば自分は故郷に祖父母共に二人宛あり、祖父の一人は本年六十九歳、一人は八十歳なり、然るに孰れも健康にして若者も及ばざるやうに、凡ての處置をなす、二人とも戸主にして一人の八十歳の方の如きは人より御老人と呼ばれる事を厭ひ、若し斯く呼ばるゝ時は決して返事をなさず何事も、自分の手にて爲さゝれば不滿足の有樣にして、今尚中學校の教師となり、又人々の依賴により書を扁額または掛物に書き與ふる如き有樣なり」とあり、又人間に心身の兩方面ある事を指摘し約七十歳を以て老人期と判定した者もある、其言に（文學科一年生二十二歳）「人は年齡により老若を定む可きものに非ず、たゞ其精神にあるのみ、二十歳にして老あり、七十歳にして若あり、故にこれは其人により百歳にして猶壯年と云ひ、又二三十歳にして老人とも云ふ、然れども人は心身を以て全きものとなるものなれば、肉體なるものを度外視す可きにあらず、肉體は自然の法を免るゝを得ず、乃ち心身衰へざるの見地よりして老壯を區別せんとす、由て思ふに六十七八歳より七十歳以上を以て老人と云はん」とあり、玆には暦年齡と精神年齡との區別がよく意識せられてある。

或る女生は自己の熟知せざる人に對しては之を早老視する傾向ある事を指摘してゐる、例へば（家政科二年、二十歳）「自分が今老人と思ひ、老人と呼んで居る人、よく其人を知つて居つて、そして老人と呼んで居る人は七十五歳以上かマア七十歳以下には無いやうである、男女ともに、併し自分は全く知らない人であつたならば、道で逢ふ人や何かならば、或は夫よりも若い人でも老人と認むる事があるかもしれない、……これは確に精神上の問題だと思ふ、自分に「我は老いたり」と言ひもし、思ひもする事は我々でも出來る、眞にさう感ずるならば、其時は自分は老人であると云ふ事が出來るのである、七十以上でも澁澤男爵の如く自ら青年と信じて居らるればこれ亦眞に青年なのである、夫故よく接して居る人を老人と思ふや否やと、全く知らざる人を老人と思ふや否やとは少し違ふやうである、後の認め方とす ば多分六十六歳位からの人を自分は老人と見受けるやうに思ふ」と言つてゐる、或は都鄙の區別を設け立言した女生もある、（文學科三年生二十歳）「普通田舍の人になりますと早く老人になると思ひます、都會の人は老いて益々壯なるが如き心地がします、故に田舍では男は六十五歳、都會では男は七十歳以上で老人になり、女は田舍では五十七歳、都會では六十乃至六十五歳以上で老人になると認めます」と言つてゐるのは其一例である、又（家政科二年十九歳）「大抵男子よりも女子の方が年が若くても早く老衰する樣に思ひます、併し老衰した

とあれば女子の方が或は强くて長命な樣に思ひます、夫れで男子は七十五六歲、女子は七十歲位で老衰する樣です」と言ひ男女の老年期に區別を立てゝゐる者もある、二十歲前後の女子は男子と異り自己の生家に於ても、他の家に嫁しても老人と交渉する機會が多く、利害上より見るも關係が多い、從て老人の觀察者としては頗る適當なる地位に立つもので其言ふ所も概して妥當と認めらるゝ。

九、結語

以上述べたる諸方面よりの老人觀察は今後に於て之を一層精密にする必要がある、殊に一々の高齡者の精神的活動に就ては其傳記を精査せされば之を明確にする事は出來ない、然かし上來擧げた所丈けから見るも老年期に於ける活動が如何なるものであるかに就ての大體の見當は譯つたと思ふ、尚ほ民族の發達、文化の發達の上から老人を如何に觀たかと云ふ問題を研究するのは興味がある、民族發達の低い段階に於ては自然界との競爭があり、又民族相互の競爭が激しく、而して夫等の競爭は多く體力の競爭であるから、體力の强くない兒童や老人は自然に其競爭生活からは厄介視される傾がある、文化が相當に進んだ社會に於ても社會の下層或は貧乏なる部分に於ては兒童を殘酷に取扱ひ老人を邪魔にする風習は行はれた、然るに文化の發展が進み人間存在の精神的方面を尊重する事厚くなるに從ひ、兒童を愛護すると共に老人を尊重するに至つた、現代に於て兒童愛育の方面は長足の進展を遂げ其事跡は顯著であるが、老人に對する觀念なり、施設なりが如何に變化したか委細は明でない。東西の社會狀態を此點より比較的に考察するは單に興味ある事であるのみならず、實際生活とに於ても必要であるが、其考察は未だ餘りなされてゐない樣である、個人主義・家族主義、孰れが重をなすか、機械觀精神觀の孰れが主になるか、或は歷史國であるか新開國であるか、社會が切迫してゐるか、餘裕があるか、人道的情操が發達してゐるか、ゐないか等の種々なる狀況に影響され老人に對する價値觀が相異するのである。

近代文化の黎明期に於ける宗教運動の社會的意義

林癸未夫

一　ルネサンスを育成したる希臘思想と基督教思想との交錯

あらゆる思想が唯基督教の支配の下にあつた闇黒時代の西歐諸國に對して、初めて希臘の哲學や科學を紹介したのは東歐の回教徒であつた。これは當時以前の基督教會が故意に希臘の學問を排斥してゐたからではなくて、寧ろ其存在を遺却してゐたがために外ならなかつた。何となれば回教徒の帝國は古代羅馬の文化が保存されてゐた東歐地方に建設されたゝめに、異教の學問は彼等によつて繼承されたけれども、西歐の基督教徒の社會は北方の蠻人によつて全然古代文化の破壞された跡に建設されたがために、異教の學問は一旦悉く湮滅に歸してしまつたからであつた。

アリストートルが初めて巴里の大學で讀まれたのは十三世紀の初め頃であつたと思はれる。併しそれは希臘語から飜譯された原文ではなくて、亞剌比亞語でものされた解説書の譯書であつた。此ヘレニックの大學者がサラセン族の衣裳を纏ひ、回教徒學者の通辯を伴れて、初めて基督教徒の學壇に現はれたことは寔に不可思議な光景であつた。

巴里大學に於けるアリストートルの研究は最初教會から多少反對されたが、それは極めて僅かの期間であつた。間もなくサラセン化しない眞物のアリストートルが輸入せられて、十三世紀の中頃には、其著作の全部が公然同大學に於て教科書として用ゐられてゐた。乃ちアリストートルの研究は決して宗教的偏見によつて阻止されなかつたことが分明である。

かく十三世紀の中葉から西歐の基督教徒の間にアリストート

ルの研究が復活されたことは、彼等の科學的智識を開發するために非常な刺激となつたのみならず、又彼等をして異教の文學に對する理解、美術に對する趣味を育成せしめる動機ともなつた。而してそれがやがてルネサンスといふ文明史上未曾有の大運動に導く直接の原因となつたのであつた。

ルネサンス運動は最初伊太利に起つて、次で佛蘭西、獨逸、英吉利其他の諸國に擴まつた。此運動を目して基督教思想に對する希臘思想の叛逆とするのは妥當の見解でない。此運動の先驅者は決してそれが非基督教的であるとは思ひも染めなかつた。唯併しながら此運動の驚歎すべき成功が、基督教の革新運動として一時西歐諸國を風靡する程の勢のあつたフランシス派の教義に對する反動によつて促進されたことは爭はれない事實と認められる。

適當なる遠近法の下にルネサンスを觀察するがためには、先づ第十三世紀に於けるフランシス派運動の意義及影響を理解することが必要である。彼等の中世史に於ける地位は、當時の道徳的及經濟的論議の中心的題目を提供したといふ點に於て、社會主義の近世史に於ける地位に酷似してゐる。フランシス派も十九世紀の社會主義者と同樣に主として貧富の問題に沒頭した。唯フランシス教義の社會主義と相異する點は、彼は主として經濟的見地から、これは主として道徳的見地から出發した所に在つた。此相異はフランシス派が基督教徒として基督教徒に說教するといふ立場に在つたゝめでもあるが、同時に又彼等の時代に於ける貧富の懸隔が、今日の如く社會組織に固有の現象であると見るよりも、寧ろ或地方に於ける或狀態に伴つて偶發した特殊の現象であると見られてゐたゝめでもあつた。今日の社會に在つては貧富の懸隔は個人道徳の如何ともすべからざる社會組織の根本的缺陷に原因するものと認められてゐるが、資本主義の萌芽期たる聖フランシスの時代に於ては、それは寧ろ或社會に於ける道徳的頽廢に基くものと考へられてゐた。

教會は闇黑時代に於ける社會生活の中心であつた。王侯又は僧侶は人民に勸進して先づ新しい寺院を建立する。それを取圍んで一つの新しい社會が造られる。而して僧侶は其社會に於ける學問宗教の事ばかりでなく、司法行政の事務にも關與してゐた。土木事業も、農業も、商業も多くは僧侶の指導によつて行はれてゐた。然るに十一世紀から十三世紀に亘つた十字軍はそれ以前に於ける寺院中心の都市の外に、商業本位の多數の都市を伊太利や南部佛蘭西に出現せしめる原因となつた。而して其處に貨殖の途に長けたる有能活潑の企業者と、此企業者に使役される賤民の群とが次第に大きな集團となつて、其處に教會の

支配から獨立した別の社會生活を形造るやうになつた。而して上には豪奢を縱にする少數の富者と、下には卑陋な生活を營む多數の貧者との自然の階級を生じたと同時に、賭博、酒亂、姦淫其他あらゆる惡德が公行せられるやうになつた。

フランシス派が戰ひを宣したのは實にかゝる社會狀態に對してゞあつた。彼等はかゝる社會狀態を導き出した原因を人間の物質慾に求めた。富ある者の神の國に入るは難い。財寶と惡德とは必然の伴侶である。唯貧しき者の間にのみ愛があり、信仰があるとするのが彼等の信條であつた。

フランシス派は獨り富を否定したのみならず又知識をも否定した。天國の扉は智者、賢者には開かれずして唯赤子の如き心を有つ者にのみ許されることは、聖書の訓へる所である。學問は人を善に導くよりも惡に導き易い。商業の發達、貧富の懸隔風教の頽廢は學問の普及によつて一層助長されつゝある。此故に學問を排斥してひたすら神を念ずることによつてのみ人心は救はるべきものと彼等は確信した。

かくの如くにして彼等は心物兩面に於ける貧乏の福音を宣傳した。而して彼等の熱烈にして進攻的なる傳道方法は終に當時の基督敎國全部に亘つての一大運動を形成するに至つたが、中にも鄉國伊太利に於て其勢最も盛であつた。彼等のために大寺院が全國諸都市に建立せられ、無數の市民が貧民の福音に浴するために其處に群集した。

フランシス派の運動は一時非常の成功を示したけれども、それに伴れて其眞精神は却て閑却せられるやうになつた。聖フランシスは單に貧乏であることを敎へたのではなくして、又貧者のために奉仕することの必要をも敎へたに拘らず、彼の末流の間にはやゝもすれば貧乏であることのみを信仰生活の眞義と誤解する者が多くなつた。そのために、いつしか無一物の極貧者でなければ眞の信仰に入り難いといふ、人間の本能を無視した、峻嚴な禁慾主義が高唱さるゝに及んで、其處に避くべからざる反動を生ずるに至つた。そこでフランシス派の長老の間に、右の如き禁慾主義の敎理を緩和するの必要を唱へる者と、之に反對する者との二派を生じて互に論爭し、終に法王に訴へて其裁可を請ふことになつた。法王は大僧正や神學者等に命じて此問題を審議せしめた結果、緩和派に有利なる判決を與へたが、此判決に不服であつた極端派は法王がフランシス派の內部に干渉するの不當なることを抗辯し、其餘勢を以て富裕なる僧侶を攻撃し、財産制度其者をも非難し、延ゐて財産の倫理的及經濟的意義に關する論爭を誘發するに至つた。而して此論爭に光を與へたものはアリストートルであつたが、聖アントニノの

「貧乏は善きものにあらず、貧乏其者の中に惡あり。唯時として善きものに導くことあるに過ぎず。」といふのが結局此論爭の斷案となつて、フランシス派の運動は其極端なる理想主義に對する反動のために、十四世紀の初頭から漸次其勢力を失墜するに至つた。

しかのみならずフランシス派の學問排斥は羅馬教會の歴史にも適應しないものであつた。何となれば教會の長老たちは既に第一世紀に於て希臘羅馬の古典研究を是認してゐたからであつた。第四世紀に於て聖アウガスチンは其神學の基調をプラトーの哲學に置いた。ヴアージルの如きは何處の教會の圖書室にも必ず之を見出すことができた。基督教界から是等の古典が影を潜めたのは、第五世紀に於ける西羅馬帝國の滅亡以來であつた。併しながら東羅馬帝國は尙幾分之を保存してゐた。而して東羅馬帝國の跡を襲うたオツトマン帝國が之を承け繼いで、サラセン學者が第十三世紀の初めにアリストートルを西歐に紹介するまで、約七百年間の闇黑時代に、基督教界は全く古典に關する智識を湮滅してしまつたのであつた。從つて古典の研究は決して教會の傳統に違背するものでなく、寧ろ其復活とも見られた。眞先に知られたアリストートルが格別の故障なく受け容れられたのもそのためであつた。殊にルネサンスのプラトー學者の如きは全く宗教的動機からプラトーに歸依したものであつたことは、聖サヴオナロラが其研究を鼓吹したことによつても明白である。かくの如き事情も亦フランシス派の凋落を促す一つの原因であつた。

民衆の間に勢力のあつたフランシス派の運動が衰退すると共に、之に代つて當時の智識階級、支配階級の間に勢力を伸張したのが、ドミニコ派と人道主義者との運動であつた。

聖ドミニコによつて創められた運動も時弊の救濟に志した點に於てはフランシス派と同一であつたが、彼等の取つた方向は正反對であつた。ドミニコ派はフランシス派のやうに決して物質的文明を否定しなかつたのみならず、科學も、藝術も等しく眞の信仰に入るべき一つの方便として必ずしも卻くべきでないとした。唯併し憂ふべきは、智識は善の友たり得るやうに亦惡の友たり得るものである。若し智識の活動を指導すべき中心の思想が純眞でなかつた場合には、智識は却て人間の利慾のためにのみ働いて、社會の公益を傷けるやうなことになり易い。此故に學問や富の害毒を防遏する方法としては、是等のものから逃げ隱れることではなくして、進んで是等の物を捕捉し、支配し、善導して、社會のために惡をなさしめず、善をなさしめるやうに努力することでなくてはならない。かう信じて彼等は學問を

奬勵し、富を認容し、巴里に、ボローニヤに、オクスフォードに大學を建てゝ、僧侶自ら熱心に哲學科學を學修した。ドミニコ派から出た二碩學たるアルベルタス・マグナスと聖トーマス・アクヰナスの著述は、アリストートルに關する從來の誤解を釋いて、科學と宗教との限界を明瞭にしたのみならず、聖書の解釋上に論理的辯證法を適用するに至つたことによつて、神學の構成に一大革新を施した。かくの如くにして彼等は大學をして教會に歸依せしめると同時に、科學を教會の庇護の下に満くことが出來た。爾來科學は中世に於ける何處の大學に於ても學部(フロカルチー)の一に擧げられ、歴代の法王も亦其研究を奬勵し、僧侶は最も熱心なる科學部の學生であつた。彼等は獨り政治學や倫理學ばかりでなく、數學、生理、物理、心理等に就ても其研鑽を怠らなかつた。

ドミニコ派が宗教界に於て行ひつゝあつた所を、人道主義者(ヒユーマニスト)は廣く社會的に行つた。人道主義者とはルネサンスに道を拓いた先覺者中の文學的方面を代表する人々に與へられる名である。而して其第一人者は實にフランチエスコ・ペトラルカであつた。彼は闇黑時代の黎明期に生れた最大の學者であり又詩人であつたが、殊に彼が世界の文明に與へた偉大なる功績は、希臘及羅馬時代に於ける古典文學の發見及蒐集であつた。ホーマー、ソクラテス、プラトー、ヴアージル、セネカ等は皆彼によつて初めて再生の光に浴した。而して是等の古典は彼及彼の學徒をして、古代人の卓越したる思想と美とに對する限りなき尊崇の念を喚び起させたと同時に、異教文化に對する世人の智識を啓發して、基督教の世界以外にも驚歎すべき理智と感情の世界の存在することを悟らしめたのであつた。近代文化の曙光は人道主義者の掲げたとばりを通して初めて人類の上に輝いたと言つて可い。

併しながらドミニコ派や人道主義者の運動は決して基督教に對する懷疑から出發したものではなかつた。寧ろ彼等は異教文學の研究によつて、基督教に對する理解と信仰とに理性の基礎を與へ得べきことを期してゐたのであつた。人智の發達、德性の純化に資すべき貴重なる資料を古典の中に見出すことができると彼等は信じてゐた。彼等がフランシス派の古典排斥、智識否認に正面から反對したのは畢竟このためであつた。

かくの如く初期の古典研究家はフランシス派の學問排斥にこそ反對したれ、基督教其者に叛く意志は毛頭有たなかつたのである。併しながら幸か不幸か彼等の研究が次第に其深奧に進むに伴れ、彼等は次第に基督教と希臘思想とが、人生の歸趨に對する窮極の理解に於て、根本的に相容れ得るものであるかどうか

を疑ふやうになつた。彼等は異教の示す現實耽美の世界と基督教の訓へる禁慾忍苦の世界とを比較して、いづれが人間本然の要求に合致すべきものであるかを究明しなければならないと考へるやうになつた。かくの如き考へは惡魔の聲として初期の人道主義者を自責せしむるに十分であつたが、今や彼等は自己の理性に省て當然解かなければならぬ謎として、何等憚る所なく此問題に面する様になつた。かくの如くにして理智と信仰、基督教思想と希臘思想とは次第に其協調を保つことができないやうになつた。

宗教に對して起つたことが美術に對しても同じやうに起つた。初期のルネサンスに於ける思想上の協調的傾向は、同じ時代の美術の上にも反映せられた。

第十五世紀（クワトロチエント）に於ける諸美術、殊に建築は、其精神に於てはゴシツクであつたが、其手法に於てはロマネスクを踏襲して、其處にいみじき偕調の美を表現し得たものが多い。而してそれが與へる感じは豪壯よりも優美、崇高よりも典雅であつた。例へばブルネリスキ畢生の大作たるフローレンスのドーモの如きもかの大穹窿と大鐘樓とを以てして、尚且吾等に與へる感じは、壯嚴（マグニフイセント）ではなくして精妙（エキスキジツト）である。超人的な威力を以て凡俗を壓する專制的な作品ではなくて、平和悅樂の間に民衆を教化する民主的な構成である。而して同時にこれはドナテルロやロービヤの彫刻、ボチチエリやリツピ父子の繪畫の如き、ルネサンスの最高潮を代表する作品に對しても、あてはまる批評である。彼等は舊約の豫言書の如く神の啓示によつて記されたる非人間的な作品ではなくして、現世に執着する人間の煩惱を通して表現せられたる地上の產物と見られる。惟ふにルネサンス美術の眞髓は其人間的（ヒユーマン）な所にあつた。此人間味こそは固定したる宗教的概念に、ひからびた傳統の衣を着せた舊美術を一排して、肉溢く血動く新美術を出現せしめた中心の力であつた。しかも此人間味は多年基督教の信條の下に禁壓せられ、萎縮されてゐた人間の本能が、はしなくも異教の思想と藝術とに觸れて復活の歡びを感じたのに外ならなかつた。

併しながら此復活の歡びは決して舊信仰に對する謀叛を意味するものではなかつた。彼等はマドンナとヴイーナスとに並び奉仕して相悖らなかつた。天上の榮光を讃美しつゝも地上の歡樂を追ひ求めた。かくて彼等は靈肉一致の飛躍によつて、人生に新しい意義と理想とを賦與する渾然たる一新世界を創造することができた。ルネサンス美術の基調は實にそこにあつた。而して其様式は優雅明暢なる調和の美によつて統制されてゐた。

このルネサンス美術の基調に對し先づ最初の懷疑の陰翳を投

げたのはミケランゼロであつた。彼の天才は優雅明暢に甘んずるには餘りに偉大であり且奔放であつた。此故に彼は優雅を轉じて雄渾に移すと同時に、明暢を破つて晦澁に化した。彼とラフワエルとは共にルネサンスの爛熟期に生れて、好個の對照をなすものである。何となればラフワエルはルネサンス完成の最後の名匠であり、ミケランゼロはルネサンス轉化の最初の巨人であつたと言へるからである。優雅明暢はラフワエルに於て其極致に達し、最早加ふべき何者をも餘さゞるに至つて、それは生氣を欠いたマンネリズムに堕するの危機に行詰つた。其後ミケランゼロが出現して局面を打開し、雄渾晦澁なる藝術的表現を通じて彼の懐疑思想を訴へた。彼の作品は偉大なる魂の悶である。舊き信仰に安んじ得ない者が新しき理想を見出し得ない苦悶の叫びである。弱小なる者の苦悶は解放を求むる聲となり、强大なる者の苦悶は壓制を欲する力となる。ミケランゼロはまさしく佛蘭西革命以前二世紀間に於ける歐洲の社會思想を豫示する象徴であつた。

二　獨逸に於ける宗教改革と階級鬪爭

ルーテルの宗教改革運動の成功は、彼の神學上の主張が民衆の信仰を一新したゝめといふよりも、寧ろ羅馬教政の腐敗に對する彼の忌憚なき彈劾が一般の人心に共鳴せられたゝめであつた。外面の善行よりも内心の信仰に重きを措くといふ彼の教義は、神學上の理論としては別段特異な創見ではなつかた。彼は唯之を旗印として法王の亂用されたる教權を打破しやうと企てたに過ぎない。彼は火の如き感情と鐵の如き意志との持主ではあつたが、要するに主義の一貫を期する思想の人ではなくして、結果に重きを措く實行の人であつた。此故に彼の運動は形の上に於て遺憾なき成功ではあつたが、それがために獨逸國民の信仰を高めることも、善行を進めることも、できなかつたのみならず、却て一般民衆をして教會に絶望せしめる原因を造つた。

獨逸の宗教改革が信仰上の覺醒からでなくして、法王の教權に對する反感からであつたとするならば、何故にそれは英國に起つたやうに、單純に羅馬教會からの分離といふ形を取らずに、僧侶を教會所屬の俗人が選擧するといふやうな制度を採用するに至つたであらうか。惟ふにそれは後に說くやうに、英國の宗教改革は國王の力によりて行はれたが、獨逸のそれは有產階級と智識階級の力によつて行はれたからである。當時英國は統一されたる國家であつたけれども、獨逸は實質に於て小邦分立の不統一なる國土であつた。從つて英國王は國家の首長と

じて法王に對し國民を代表するの地位に在り得たけれども、獨逸に於ては法王の教權は直接人民の上に行はれてゐた。此故にルーテルの改革の叫びは國家の政治機關には格別援助されることも妨害されることもなしに、直に人民の前に宣傳せられ、人民の間に完成された。其當然の結果として教會の實權は舊僧侶の手から人民の手に移つた。それは形の上では民主的精神の勝利とも見られるが、實質に於ては有產階級が教會を支配して無產階級抑制の便宜を增したゞけで、一般民衆の信仰生活も經濟生活も之によつて一向改善されなかつた。何となれば有產階級は舊僧侶の富と特權とを剝奪することに於ては頗る熱心であつたけれども、剝奪したる富と特權とを自家に獨占することに於ては決して僧侶の貪婪に讓らなかつたからである。

しかのみならず當時の獨逸に於ける經濟狀態も亦宗教改革の社會的福利を妨げた有力な一因であつた。當時歐洲商業の中心は既に伊太利から獨逸に移つて未曾有の繁昌を告げつゝあつた。端を第十三世紀の中葉に發した所謂ハンサ同盟は、第十四世紀の全盛時代には北獨八十有餘の諸市を包擁し、ベルゲン、倫敦、ブルージユ、ノヴゴロツドの如き當時の大貿易市場には植民地の如き支部を設け、海陸交通保護のために自ら海陸軍を編成し、殆ど一獨立國の如き勢力を以て、全歐洲の商權を獨占してゐたのであるが、それにも拘らず彼等が資本主義的精神に支配されずに、比較的高い道德的信念を保持してゐたことは、後代の企業心理からは寧ろ不思議な事態であつた。例へば倫敦に於けるハンサ同盟支部のスチールヤードの如きは、鞏固な墻壁を廻らして寧ろ城砦の如き外觀を呈し、其中に禮拜堂、工場、倉庫、旅館等を設け、內部に居住する者は悉く獨身生活を營み、宗教的の儀禮は嚴正に行はれ、簡易にして勤勉なる團體的生活を營んでゐた。惟ふに彼等の時代に於ては商業は營利のためよりも寧ろ一つの社會奉仕と考へられてゐたゝめに、彼等はまだ信仰と職業とを全く別物として取扱ふ後世の習慣を有つてゐなかつたのであつた。

併しながらハンサ同盟當時の奉仕的企業は次第に營利的企業に道を讓つて、資本主義的精神は宗教的信仰を商賣上から驅逐した。其結果商業其者は却てます〳〵繁榮に赴いたけれども、商人等は既往の道德的羈絆を脫して、思ひ〳〵に利己的活動に熱中するやうになつた。物價を人爲的に釣上げたり、食料品や被服の品質をごまかしたり、小企業者を壓迫したり、職人の賃金を不當に引下げたりするやうな普通の暴利獲得手段は彼等仲間の常習となつた。殊に農民から穀物買上のために取つた彼等の手段は最も惡辣であつたので、第十五世紀を通じて商人對農

民の紛擾は到る處に絶え間なく行はれたが、第十六世紀に入つてからは農民の反抗は獨り商人に對してのみでなく又大地主たる貴族や僧侶に對しても行はれるやうになつた。それは是等の大地主が商人に與して共に農民誅求を事とするに至つたからであつた。商業の繁榮は常に奢侈を增長する傾向を伴ふ。而して其弊風に最も染み易いのは安逸なる富豪貴族の社會である。其結果財政の窮乏を感じて弱者の搾取を敢てするやうになる。地位高き僧侶も亦奢侈に熱中して金銀珠玉の類を愛藏することに於て富豪貴族に譲らなかつた。しかも生活資料の大部分が土地から得られ、從つて人類の大部分が農民であつた當時に在つては、商人も、貴族も、僧侶も皆農民の勤勞の收穫を搾取することが、其貨殖と奢侈との唯一の源泉であつたことは言ふまでもない。彼等は農民の收穫を搾取したのみならず、土地其者をも多くは抵當流れの形に於て容赦なく沒收した。從つて農民中の土地所有者は次第に減少して、貧困な小作人が夥しく增加し、貴族、僧侶、富豪は驚くべき廣汎なる土地を兼併し、貧富の懸隔はます／＼甚しくなり、農民怨嗟の聲は年を逐うて喧しくなつた。

獨逸に於ける宗敎改革と農民叛亂とは、殆ど同時に起つてしかも共に自由解放を要求する精神から出てゐたに拘らず、此兩運動が相援けずして、却て相妨げた理由は、宗敎改革は大體に於て有產階級によつて支持された運動であつたに拘らず、農民叛亂は主として無產階級自身の運動であつたゝめに外ならない。併しながら農民叛亂の勃發は一五二五年で、ルーテルがヰツテンベルグに法王の勅書を燒いたのは一五二〇年、ウルムスの會議は其翌年であつたから、農民等の蹶起が宗敎問題によつて沸騰した一般の反抗的氣分によつて激成されたことは疑はれない。彼等の要求は主として沒收された土地の恢復、地代の低下、强制賦役の輕減、水、森及牧場の自由使用等所謂「十二箇條」に在つたのであるが、地主は固より之を容れなかつたゝめに先づ獨逸の西南部に於て農民一揆が蜂起し、地主たる、貴族富豪、寺院等を襲撃し、瞬く間に全國一齊に響應して、南はアルプスより北はバルチック沿岸に至るまで、到る處に農民の叛亂を見ざるはなきに至つた。唯バワリヤだけは例外であつたが、それは同國政府が宗敎改革運動に嚴しき壓迫を加へつゝあつたゝめと思はれる。

かくの如く農民一揆が迅速に全國的の大騷動に化したのは、最初から各地方の農民間に連絡があつて、互に通謀してゐた結果ではなくて、多年同一の不平を抱いてゐた者が、他地方の狀況を傳聞して俄に蹶起し、期せずして全國に蔓延したゝめであ

る。而してこれは畢竟地主の壓制誅求に對する彼等の怨恨が其遠因であつたには相違ないが、同時に又宗教改革運動が人民を解放して、自由平等の基督教徒の理想社會を待望せしめるやうな感情を一般に流布してゐなかつたならば、恐らくかくの如き燎原の勢をなすことはできなかつたであらうと思はれる。確に農民等の間には、此叛亂を以て一種の宗教的義戰と心得た者も尠くなかつた。又貴族富豪等の間にも、此叛亂の背後には宗教改革派の僧侶があつて、暗に農民を煽動しつゝあるといふ誤解が行はれた。

然るに農民叛亂から宗教的色彩を剝脱したのはルーテル彼自身であつた。彼は叛亂の初期に意見書を發表して、農民等の要求を是認し、其鎭壓に武力を用ゆべからずと述べたが、叛亂が次第に熾烈を加ふるに至るや、更に第二の意見書を公にし、其討伐に全力を擧ぐべきことを勸め、それがためには無慈悲なる殺戮を斷行するの必要までも力說した。併しルーテルの勸奬なくも貴族富豪等は叛民の生命に容赦はしなかつた。而して約二箇年に亘る史上稀有の大虐殺の後農民の叛亂は全く鎭壓されたのであつた。

ルーテルが農民叛亂に當つて貴族富豪の味方となつて、農民の壓服に助力したことは、宗教改革の社會的意義及其影響を理解するために極めて重要である。何となれば宗教改革は結局基督教會を羅馬法王の支配から貴族富豪の支配に移したもので、無產階級は之によつて何等の恩惠に浴せなかつたのみならず、彼等の待望した自由平等の社會は到底基督教に求めることの不可能であることを自然に悟らしめる原因となつたからである。其結果民衆の心は次第に宗教から離れ、終に佛蘭西革命に至つて懼るべき教會僧侶の迫害となり、更に第十九世紀に入つてからは、無政府主義も社會主義も基督教を呪詛し、總ての民衆運動は全然宗教と絕緣するやうになつた。固よりこれはルーテルの豫期したことでも希望したことでもなかつたに相違ないけれども、彼が餘りに思想よりも實行を尊び、又餘りに宗教改革の成功に焦慮し過ぎたゝめに、彼は農民叛逆と宗教改革とを結付けやうとする傾向に對して極度に警戒しなければならなかつた。何となれば宗教改革を成功せしめるためには貴族富豪の反感を避けることが、當時彼に取つて最も肝要であつたからである。これ彼が農民に對する初めの同情を裏切つて、慘酷なる討伐を是認するに至つた所以であつた。併しながら彼がかくの如き精神上の犧牲を拂つて宗教改革の味方としたる貴族富豪等は元來ルーテルの教養に歸依したものではなくして、僧侶の富裕を嫉視し、其貪婪を憎惡し、其非行に反感を有つてゐたがため

に、彼等を憎惡することを快しとしたに過ぎなかつた。從つて彼等がルーテルに左袒した眞の理由は、教會の財産を奪略し、僧侶の特權を剝脫することによつて、自己の財産を增加し、自己の特權を擴大しやうとする利己心に外ならなかつた。此意味に於てプロテスタント教會の僧侶選擧制度は彼等に甚だ有利であつた。何となれば爾來僧侶は權門の鼻息を伺はなければ其地位が保てなくなり、教會は事實上貴族富豪の支配する所となつたからである。

之を要するに獨逸の宗教改革は其結果から見て、教會對民衆の階級鬪爭に代ふるに、貴族富豪對民衆の階級鬪爭を以てしたに過ぎない。いづれにしてもそれは政治的には專制主義を確立し、經濟的には資本主義を發達せしめる原因となつた。

三　英國を改宗せしめたる資本主義的精神

英國に於ける宗教改革は獨逸に於けるよりも一層非宗教的であつた。從つて其社會的効果は道德的の改善でもなく、政治的の解放でもなく、經濟的の向上でもなくて、王權の伸張と、貴族の橫暴と、資本主義的精神の振興とであつた。

英國に於て教會廓淸の第一聲を放つたのは第十四世紀に於けるジョン・ワイクリッフであつた。彼は教會の腐敗僧侶の墮落を攻擊し、福音は僧侶の手を通じないで直接聖書から之を聽くべきことを唱道して生前あらゆる迫害を蒙つた。幸に彼は天壽を全くすることはできたが、死後三十年を經たる一四一五年に、コンスタンスの宗教裁判に於て背教者の宣告を與へられ、死屍は發掘して焚かれ、其灰は河中に投げ棄てられた。一史家は「ワイクリッフの骨灰は彼の信仰の象徵である。河流は之を海に運び、大洋に入つて終に全世界に之を廣めた。」と讚歎したが、併し當時の羅馬教會は彼の期待した程英國民に對して信を失つてはゐなかつたのである。從つて彼の遺鉢を傳へた門弟等は世間から異端者と認められ、饒舌家と仇名されて餘り尊敬を拂はれなかつた。而して一四〇一年に議會は異端者焚殺條例を制定し、いやしくも羅馬教會に對して異圖を懷く者には、假借なく極刑を科したのでワイクリッフの宗教改革運動は格別の勢力とならずに立消えとなり、爾後約一世紀は事なく經過した。

英國に於ける宗教改革──といふよりは寧ろ教會破壞の張本人たるヘンリー八世が即位したのは一五〇九年、即ち獨逸に宗教改革運動の初まる數年前であつた。彼は絕倫の精力と、堅剛なる意志と冷酷なる感情と、放縱なる慾望とを併せ有する十八歲の青年であつた。而して彼が信任した宰相は狡智に富み、才略に長じ、功名心燃ゆるが如きヨーク大僧正のトーマス・ウル

ゼイであつた。此君臣は自家の威福を張るがためには、殆ど爲さゞる所はなかつたが、それでもルーテル奮闘の當時に於ては未だプロテスタントに對して何等の同情をも有たなかつたのみならず、ヘンリー王の如きは自らカソリック辯護の一書を著して法王から「信仰の防衛者」といふ稱號を贈られた程であつた。國民も亦一般に羅馬教會に對する忠順の念を動かさなかつた。

かくの如きヘンリー王が後に至つて猛烈なる法王の敵となつた動機は全く彼の個人的理由からであつたと思はれる。歴史によつて明かな如く彼の一世は結婚と離婚との連續であつた。彼は亡兄の寡婦カザリンを娶つたが、後之を離別して、アンナ・ボーレンと稱する才色絶倫の王妃の侍女と結婚しやうと企てた。彼は離婚の允許を法王に懇請して空しく數箇年待ちあぐんだが、法王クレメント七世は容易に之を聽さなかつたのみならず、却て事情疏明のために王と王妃と相伴れて羅馬に出頭すべきことを命じた。此命令は剛腹なるヘンリー王の堪忍袋を破裂せしめるに十分であつた。彼は先づ寵臣ウルゼイが努力の足らなかつたことを咎めて彼を罷免し、次いで法王に抗敵して國内の羅馬教會を破壞するの事業を開始した。彼が此事業を遂行せしめるために登用した一人物はトーマス・クロムウェルと稱する暴戾無慚の一小吏であつた。クロムウェルは先づ王に勸めてアンナとの結婚を斷行せしめたが、これは恰も法王に對する宣戰であつた。何となれば國王にして法王の允許を俟たずして結婚すれば、教會から破門するといふ法王の上諭が發せられてゐたからである。次に王は議會に強要して、英國人の法王廳に出訴することを禁ずる旨の法律に協賛せしめた。これは言ふまでもなく前王妃カザリンの出訴を妨げるためであつた。而して王は奸侫なるトーマス・クランマーをカンターベリーの大僧正に任命し、宗教法廷を設けて王とカザリンとの離婚を是認すべき判決を下さしめた。其翌年(一五三四)に至つて王は更に決定的の手段を取つた。彼は自ら「英國教會の地上に於ける唯一最高の首長」たる稱號を冒して英國の法王たる地位に就き、一切羅馬教會との關係を斷絶して、從來法王に致したる貢納は自今悉く國王に致さしめ、若し王の教權に服さない者には擬するに叛逆罪を以てするの法律を制定した。『ユートピヤ』の著者トーマス・モーアの如き、ロチエスターの僧正ジョン・フィシャーの如き名士はいづれも此新法の犧牲となつて倫敦塔內に首を失つた。便侫なる朝臣、臆病なる議員等は禍の己が身に及ばんことを懼れて敢て王の意に逆はなかつたが、僧侶等の間には表面恭順を裝ひながら內心之に服さない者の多かつたことは固より當

然であつた。茲に於て王は僧侶等の反抗を俟たずして進んで禍根を絶つの必要を感じ、更に暴戻なる教會征伐の計畫に着手した。

當時英國の諸寺院は夥しき財寶を所藏し、其所領する土地は全國の五分の一に達し、僧侶は一般に頗る豪奢な生活を營んで居つたので、王は多年之を嫉視し且彼等の富に垂涎してゐた。そこで彼は獨逸の侯伯等が宗教改革の紛擾に乘じて取つた手段に倣うて教會の所領を沒收し、其財寶を悉皆横奪しやうと企てた。彼は先づ自分の國教主たる地位を利用し教會征伐の口實を造るために全國諸寺院の内情を探索し僧侶の惡德を調査して之を摘發し、其罪狀を擧げて一五三六年に小寺院三百七十六の財產を王室に沒收すべき旨の法律を議會に提出した。流石無氣力なる下院議員も其法案の協贊には躊躇する色があつたので、王は反對議員を威嚇するに叛逆罪を以てし、竟に之を通過せしめた。更に一五三九年には殘餘の大寺院の財寶をも悉く王室に歸屬せしめる法律を造り、且容赦なく之を實行して、前後六百四十五の教會は掠奪或は破壞され此處に反抗した僧侶は總て嚴刑を免れなかつた。「クロムウエルの指揮する無賴漢は僧房に闖入し、祭壇にちりばめたる金銀を剝取り、僧尼の簞笥、手箱の類を掠め、寶石を以て飾つた書籍の表紙をもぎ取つた。是等の書籍は總て肉筆で、其一册を寫すにも又それを寫取るにも半生を要する程のものであつた。年代に年代を重ね、莫大な費用をかけた圖書館も、惡鬼の如き無賴漢のために貴重な裝飾を施した表紙を奪はれた時大抵は四分五裂してしまつた。」とは『英國宗教改革史』の著者ウヰリアム・コベットの記す所である。以て其暴狀の一班を察することが出來る、かくの如き方法で劫掠された揚句、建築物は大抵火藥を以て破壞され、幾多壯麗なゴシク風寺院は惜氣もなく廢墟にされた。而してクロムウエルが此破壞事業を完成した時、王から授けられた恩賞は死であつた。王妃アンナも亦將來のエリザベス女王を生んだ後に斷頭臺に送られた。而して王と王を取卷く阿諛便佞の徒のみはます／＼威福を擅にした。沒收した舊寺院領の小部分は人民の不平をなだめるために公共的に使用されたけれども、大部分は貴族寵臣の間に分配されたり拂下げられたりした。而して彼等は營利のために之を分割して轉賣し、轉買者は更に之を轉賣したので、數年の間に數百千人の新地主が之を分有する結果となつた。

かく教會征伐の結果として舊僧侶に代つて多數の新地主が一時に輩出したことは、農民等のために此上もない災厄であつた。何となれば新地主は僧侶よりも一層冷酷な誅求者であつたからである。彼等は容赦なく地代を値上したり、勝手に耕作地

を牧場に變へたりして、農民の苦痛には毫も注意を拂はなかつた。之に比べれば僧侶は遙に寛大な地主であつた。時としては餘りに形式的な慈善に流れて、却て賤民を殖す弊害すらあつた。畢竟ヘンリー八世の教會征伐は僧侶の施與に生きてゐた乞食の跡を絶つたと同時に、眞面目に働いても食へない多數の貧民を造つたのである。生活の途を失つた是等の舊乞食と新貧民とは已むを得ないで泥棒になつた。そして捕へられて死刑に處せられた者はヘンリー八世の治世中だけでも七萬二千人に達したと傳へられる。

教會征伐の社會的悪影響は獨りこれのみではなかつた。中世に於ける寺院は庶民の社會生活の中心であつた。道路橋梁の如き地方の公共事業も多くは僧侶の指導の下に行はれてゐた。少年の教育も僧侶の任務であつた。印刷術の發達の如きも主として僧侶の力に俟つた。建築、繪畫、彫刻、煉金、鑄造等の技術の進歩も亦僧侶に負ふ所が多かつた。無論其半面には種々なる害毒が寺院から流れ出てゐたことも爭はれない所ではあるけれども、とにかく社會的に重要なる役目を果しつゝあつた多數の寺院が破壞されて、庶民が團體生活の中心を失つたことは顯著なる社會的變動であつた。

次にヘンリー八世の教會征伐が英國に於ける資本主義的精神の普及に與つて力あつたことを注意しなければならぬ。否寧ろ英國をして新教に改宗せしめた眞の勢力は全く此資本主義的精神であつたと言つてよい。元來英國に限らず資本主義が擡頭したのは宗教改革以前からではあつたが、それが漸次社會進化の中心的勢力にまで成長して來たのは全く宗教改革以後に屬する。宗教改革以前に於ては、資本主義はまだ十分其作用を發揮することができなかつた。何となれば一方には教會があり、他方には國王や諸侯があつて、それ／＼社會生活の一面を支配し、地主や商人の勢力は之を包被し得る程に未だ有力でなかつたからである。

然るに宗教改革は先づ經濟的勢力としての教會に對して恢復すべからざる打撃を加へると同時に、貴族富豪の經濟的勢力をそれだけ増長せしめる原因となつた。かくて民衆の立場は一向改善されなかつたのみならず、却て教會が社會的支配力を失つたことによつて、一層露骨に貴族富豪から誅求されることになつたのである。

ヘンリー八世は羅馬教會の撲滅に全力を擧げたとは言へ、彼自身は決してプロテスタントへの改宗を肯ぜなかつた。併しながら彼の死(一五四七年)は既に獨逸に於て抗拒すべからざる勢を成したる新教の、英國への渡來を妨げてゐた原因を一切取

いてしまつた。彼の唯一の王子エドワード六世が踐祚するや否や、故王の專制政治に對する反動は直に初まつた。幼弱なるエドワード王の保護者として政治の實權を握つたのはサマーセット公であつた。彼は中庸公正を以て政治の要道とした。新王によつて召集された最初の議會に於て、故王の制定したる宗教的叛逆罪に關する諸法律は悉く廢止された。そのため信仰の自由は一時に開放されて、復活したるカソリックと新に輸入されたるプロテスタントとは忽ち衝突して一大論爭を惹き起した。殊に倫敦の街頭に於ける兩派の舌戰は異常なる兩派の光景を呈した。民なる語氣は多く新教に集つた。說教者が舊教を攻擊するに劇烈業の人を用ゐれば用ゆる程、それを傾聽しやうとする群衆はます〳〵殖へて行つた。惟ふに此論爭に於て舊教徒は素から不利なる地位に在つた。何となれば新教徒は舊教徒の缺點を隨所に指摘し得る程に舊教理に精通してゐたけれども、舊教徒は新教の弱點を容易に論破し得る程に新教理を辯へてゐなかつたからである。

しかのみならず一層彼等に不利であつたことは、かゝる論爭にはいつも保守派の肩を持つべき筈の特權階級が、此場合には彼等を援けることを敢てしなかつたことであつた。それは特權階級がルーテルやカルヴインの信條に歸依したからではなくて、もつと利己的な理由からであつた。何となれば舊教が再び英國に復活することは、教會と法王との舊關係が復活することを意味する。若しさうなれば教會の舊財產は必ず僧侶に返還されて、特權階級は折角ヘンリー八世から下賜されたり、或は二束三文で拂下げられたりした新所領を悉く失はなければならぬ結果となる。かういふ懸念が特權階級をして舊教を見捨てさせた重な動機であつた。

併しながらサマーセットの企てた改革は獨り宗教方面ばかりでなかつた。彼は教會破壞以來一層甚しくなつた農民の困窮を救濟するために、新地主の橫暴を制するの必要を感じた。元來英國に於ける農民問題紛糾の原因は、中世以來の共有地（コンモンス）が所謂「圍繞（エンクローシュア）」の作用によつて漸次富裕なる者の私有に移つて行つたことと、第十五世紀以來急に發達し來つた羊毛工業の影響からであつた。ヘンリー八世の治世中毛織物の製造はますます盛んになり、殆ど歐洲全土に輸出されるやうになつてゐた。そのため初期には農家の副業として營まれてゐたものが、後には專門の職業となり、其利益も亦遙に農業以上であつたので、地主は續々耕作地を廢して牧場とした。其結果農民は業を失ひ、穀物の價は騰貴したが、穀物の騰貴に對しては屢々其最高價格を制限する法律が發布されて、幾分か緩和の策が講ぜられたけれ

ども、農民失業者を保護すべき適當な方法は一向設けられかなつたために、耕作地を奪はれた農民どもは零落して田舍を漂浪し、或は森林や荒蕪地を開墾して辛うじて命を繋ぐものが多くなつた。それでもヘンリー八世の教會征伐以前にあつては、大地主たる寺院はまだ幾分か農民に對する情誼の上から無闇に耕作地を奪ふことをしなかつたが、寺院の所領が悉く貴族の手に歸し、貴族はまた之を商人や地方の富豪に轉賣した後には、地主は全く農民の苦痛には無頓着に、唯利益の多寡のみを標準として随意に耕作地を處分した。そのため農民の生活難は一層甚しくなつて、トーマス・モーアが『ユートピヤ』の中で諷刺した通り、「羊が人を食ふ」といふ結果となつた。若し之を放任すれば盗人や乞食を際限なく増加させる外はなかつた。

サマーセットは元來身を一騎士に起して頗る華美を好み、又故王の寵臣として舊寺院領の横領によつて大地主となつた一人ではあつたが、不思議にも彼は時弊の救濟に任ずべき經世家としての素質を備へてゐた。乃ち彼は財產上の權利は同時に共財產を善用すべき義務を伴ふものであるとし、濫に耕作地を牧場に變更する事を禁止し牧羊の飼養及毛織物の製造に課稅し、故意に穀物の騰貴を企てた者を處罰するの法律を設けて、農民保護の社會政策を實行しやうと試みた。

サマーセットの此計劃を阻止するために地主等の取つた手段は甚だ露骨であり又辛辣であつた。其結果是等の地主に反抗するため、一五四九年の春に農民の一揆が各地に蜂起して暴動を演ずるに至つた。併し多くは烏合の衆で有能な指揮者を缺いだゝめに、獨逸の農民叛亂程の勢力にはなり得なかつたが、それでも政府は之を鎭壓するために多數の軍隊を使用せなければならなかつた。此事件によつてサマーセットは貴族、地主、舊教徒等の包圍攻撃を受けて終に失脚し、農民討伐の任に當つたノーザムバーランド公が代つて政權を掌握した。

憚るべき反動時代は直に出現した。議會は憤怒の氣に滿たされ、無產階級の反抗に對する有產階級の復讐は思ふ存分に遂げられた。地主や商人の營利的活動を阻害してゐた過去の一切の法律は廢止せられ、農民等は地代や穀價を議するために集會したゞけでも重罪を科せられるやうな峻嚴な壓制的法律が制定された。

かくの如き反動政策は農民を切齒せしめたのみならず舊教徒をも困惑せしめた。舊教徒等がサマーセットの排斥に力を添へたのは、農民に同情を持たなかつたからではなくて單にプロテスタントを排斥せんがためであつた。然るにノーザムバーランド及彼を支持する議會は農民を壓迫することにのみ熱中して、

新教は寧ろ之を歡迎するに傾いた。何となれば彼等に取つては利欲は信仰よりも重要な問題であつたからである。而して又新教は彼等の資本主義的精神を擁蔽するに便利なる保護色であつたからである。

夭折したエドワード六世に代つたメリー女王は狂暴なる舊教復活政策を取つたけれども、一旦貴族富豪の手に掌握された寺院の舊財産を取戻すことは所詮不可能であつた。而して次のエリザベス女王は自身何等宗教上の愛着を有たなかつたに拘らず、政治上の必要に迫られて新教國としての英國の地位を確立せしめた。それと同時に資本主義國としての英國の地位も亦確立した。英國を改宗せしめたものは宗教上の信仰ではなくして、實に經濟的な利己心であつた。其後に於る英國の社會狀態として發展したものゝと言つてよい。而して歷代の政治家は時には全く此事實を基礎は餘りに特權階級の擁護に過ぎて庶民階級の怨を買ひ、時には餘りに庶民階級の福利を顧慮するに過ぎて特權階級の不平を招き、反動に酬ゆるに反動を以てしたとは云ふものゝ、其間に一貫して少こしも變らなかつたものは資本主義の隆昌であつた。而して終に産業革命時代に至つて其傳統的使命は完成されたのである。

國民は不景氣の慘狀に堪へ得るか

法學博士 堀江歸一

不景氣に對する慰藉

大正九年三月我國の經濟社會は突如恐慌に襲はれ、工業と云はず、農業と云はず一切の生産業は容易ならざる打擊を蒙つた。隨つて運輸交通、仲介、販賣諸業の如きも、生産品に關する取引の盛に行はれなくなつた結果、矢張り事業に衰微を極めるの已むを得ざる狀態と爲り、世を擧げて不景氣に沈淪せしめることゝ爲つたのである。不景氣が國民の所得を乏しくし、又

國民の生活を苦める弊害の甚だしきに就ては、何人も之を認めるに躊躇しない、一日も早く不景氣の狀態を去つて、好景氣を迎へたいと云ふことは、何人も希望して已まない所である。唯當時我國に襲ひ來つた不景氣に對しては、國民自ら慰藉する二つの道があつた。其一つは此不景氣は既往三四年間に亘つた好景氣時代の反動として起つたものであつて、隨つて不景氣時代に如何なる損害が經濟社會に起るとしても、好景氣時代に收獲された利益に依つて、償はれて優に餘りありとすることであり、他の一つは不景氣は獨り我國を襲つたのではなく、世界を擧げて盡く其勢を及ぼしたのであるから、國際的見地から考へて、特に悲觀するに値しないと云ふことであつた。原内閣が恐慌や、不景氣の善後策に就て、何等の施設を講じなかつたことの如き、固より閣僚の無能を以つて、重なる原因とするのは勿論であるが、同時に彼等が不景氣に對して、懷いて居つた考の然らしめた事實を認めなければならないであらう。

好景氣時代の利益と不景氣時代の損害

然らば上記の如き不景氣觀は果して當を得たものであつたかと云へば、私は其根本的に誤謬の存することを指摘するに苦しまない。思ふに好景氣が極まつて、投機熱が勃興し、其勃發によつて、事業界に波瀾が惹起されることを機會として、恐慌の襲來を見ると云ふ經過は如何なる國に於ても、經濟社會の變轉に際會して現はれる事相であつて、經濟學上に經濟的循環期の學說が眞理である以上は、經濟社會の推移する狀況も亦此學說に支配されるのである。隨つて不景氣の後には必ず好景氣があり、好景氣が絕頂に達すれば恐慌に襲はれ、恐慌の後に不景氣を招くと云ふように、經濟的現象の循環して、渝らないことは一片の眞理と認めて、差支ない。此點から考へれば、大正九年我國に恐慌が起り、次いで不景氣の狀態を出現したことの如き正に起る可き所のものゝ起つた次第であつて、何等異とする跡を見出さない次第であるが、恐慌前に行はれた好景氣時代の利益は果して恐慌後に於ける不景氣時代の損失を償ふに足りるかと云へば、私は其然ることを考ふるを得ない。第一好景氣時代の利益は一部分其利得者に依つて、空費された、殊に我國に於ては國民生活に於ける多年の陋習として、此種の消耗は金額に於て、少なしとするを得ない、第二好景氣時代に於て、種々の方面に投下された資本殊に固定資本は不景氣時代の今日に於ては、全然資本たるの用を爲さず、徒に固定するに過ぎない、第三好景氣時代と不景氣時代と孰れが時期に於て、長短の差があるか、國に依り、又時に依つて、自ら相違する所あるであらう

が、我國現在の事實から考へると、不景氣の勢は餘程根強く、二年以上も續いた今日に於て、容易に其趣を更める模様はなく却つて經濟社會の全局面に向つて、餘程深刻に影響を及ぼさうとする傾きすらある以上は、我國に於ては結局好景氣の國民を潤した時代よりも、不景氣の彼等を苦しめる現在の時代の方が却つて永いことに爲り、其結果好景氣時代に國民の嚢裡を豐にした富は盡く不景氣時代に奪ひ去られて尙ほ不足を告げるに至るやも、測り知るを得ないのである。好景氣の後に起つた不景氣であるから、國民に於て、之に堪へる力があるとするのは、少なくとも我國の場合には、之を適用することが困難である。況や不景氣時代に苦しむ者は必ずしも好景氣時代に富んだ者と同一人であることを期するを得ない、現に我國俸給衣食者を始めとして中流階級に屬する者の多數に就て見るが如く、好景氣の際には物價騰貴の爲めに生活上に大なる壓迫を受け、不景氣の時には、失業に依つて、生活上に甚だしき脅威を蒙るとしたならば、社會の或る階級に及ぼす不公正なる影響も亦甚だ大なりとす可きである。斯る場合に好景氣の後を承けて、起つた不景氣であるから、世間に於て、之に堪へ得べしとするが如きは錯誤の最も著しきものである。

不景氣は世界的事相なるか

我國の經濟社會が不景氣に沈淪し出したと時を同じうして、諸外國の經濟社會も亦不振の狀態に陷つた。斯くて我政府の當局者や、政府に阿付する門犬走狗の輩は今日の不景氣は世界的現象であつて、我國一個に止まつた事相ではない、世界の經濟の動き方に依つて、我國の經濟も自然の支配を受けて居るのであるから我國獨り如何に焦慮しても、世界の大勢の一變しない限り、何等の效果を奏するを得ないとして、以つて國民に一種の諦めを付けさせようとするのである。然しながら私は此議論に對しては、全然觀察を逸した、又觀察を誤まつた點があることを指摘しよう。歐洲諸國が不景氣に苦しめられる、當初好景氣を極めた合衆國も昨今に至つて、反動的趨勢に襲はれるように爲つたのは、彼の如き數年間に亙る大戰爭に從ひ、國富を消耗し資本を固定させた結果に外ならない。北米合衆國の如き、戰爭中歐洲諸國に貸付けた百億弗を超ゆる資金の大部分が殆ど固定した狀態に居つては、經濟社會の發展に大なる妨害の加へられることは當然の數である。之に加ふるに戰時破壞された生產上の能力は戰後の今日に於て、尙ほ恢復しない、戰時閉塞された世界の富源にして、今日に至るまで、依然解放されない爲

めに、經濟の復興に困難を及ぼして、已まないと云ふ事情を考へたならば、歐洲諸國の經濟社會が容易に其面目を一新する機時に達しないのも、當然と見られる。曩に華聖頓會議に於て、海軍縮小の協定が成立し、續いて今回のゼノア會議に於て、勞農露國に對して、或る條件の下に歐洲諸國が通商を開始し、斯くて年來閉鎖された露西亞の富源を列國の用に供せしめようと云ふ條件を議するに至つたのも、事の成否は兎に角として、背後に經濟復興の要求の熱烈なるものゝあることを知らなければならぬ。

然し斯く諸外國の不景氣であると云ふことは、我國の同時に不景氣でなければならぬ道理を導き來るものではない。如何にも合衆國が不景氣であれば、我國輸出貿易の大宗である生絲の輸出高は減少し、其價格も思ふように高貴と爲らない爲めに、內國の經濟社會を賑はすに至らないと云ふが如く、國際間に於ける經濟上の關係の密接であることは、疑を容る可からざる所であるが、我國今日の經濟社會を襲ひつゝある不景氣の如きは決して斯る外國關係から來つた局部的のものでなく、總ての方面に及んで、殆ど餘す所を見ない。歐洲戰爭に伴つて、國力を空費したとか、國富を消耗したとか云ふような損傷なく、却つて輸出貿易の增進、新事業の擴張に依つて、戰爭を通じて少なからざる富を獲得した我國が戰爭に依つて、大なる傷痍を蒙つた他の諸國と共に、同じく不景氣の慘狀に苦しめられると云ふのは、何としても辻褄の合はぬ話であるとしなければならぬ。而して斯く原因が違つて、同一の結果の生まれるに至つたのは、何故であるかと云へば、全く我國に於て經濟政策の根本方針を誤まり、歐洲戰爭の影響を受けて、我國の產業が好景氣の順境に向ひ、日に月に商工業の方面に於て、當業者の活躍する勢が旺盛と爲つて來た際に、政府は種々の方面から之に刺戟を與へて、投機熱を煽揚する手段を敢てした。我國に恐慌が襲來し、其後を承けて、今日まで續きつゝある不景氣が餘程執拗であつて、容易に其趣きを更めないのは、要するに人工的に釀成された投機熱の反動として、起つたものであると云ふ一事を以つて、其重なる原因としなければならぬ。私が我國今日の不景氣を以つて、世界的に、又國際的に釀成されたものと認めず我國の政府自ら誘致した禍であると考へて、憚らざる所以である。

外國の景氣は恢復するか

然らば歐洲諸國の經濟社會は何時に爲つたら、果して景氣を恢復するであらうか、又少なくとも恢復の曙光を仰ぐを得るであらうか。之に對しては何人も正確なる斷案を下すに難色を覺

へざるを得ない。假令ゼノア會議が無事に進行し、歐洲の經濟復興を目的とする株式會社が諸國の協力に依つて、成立したとした所で、又對露通商開始の條件が決定したとした所で、今日の如く諸國の間に協同互讓の精神が缺けて居つては、幾何の效果が期待されるであらうか、疑なきを得ない。合衆國は全然歐洲の復興に對して、無關心であり、英國は歐洲の債務國に對して利子の支拂を强要して已まない、而して獨逸の賠償金を輕減するとか、賠償金支拂方法を緩和するとか云ふ問題に對しては、佛蘭西が反對の急先鋒と爲る有樣であつては、ゼノア會議と云はず、又他の會議と云はず、幾ら歐洲諸國の全權が一堂の下に相會合した所で、又其內にはロイド、ヂョーヂ級の歐洲第一流の有力者があるとした所で、一場の小田原評議に止まるの感なきを得ないのである。然しながら歐洲諸國の經濟社會は今日の不景氣時代に處して、順調に歩みつゝある事實の著しきものがある。別言すれば不景氣時代に當然現はる可き事實が現はれて居り、而して其れ等の動きに依つて、徐々に不景氣の狀態を脫出しようとして居る一事は私の特に擧げたいと思ふ所である。不景氣時代に起る經濟上の特徵と云ふのは、何であるか、其第一は物價の下落であり、其第二は金利の低落であり、其第三は賃銀の引下げである。物價が低落すればこそ、國民の生活は安易に爲り、幾分の貯蓄が行はれて、生產資本を增殖する一方に、物價の下落が其ドン底とする所に達し、今後或る機會に於て、再び騰貴するに至る見込みが定まつて、商工業者は始めて事業に資金を注入したり、又は新に事業を計畫したりするのである。而して又此場合に彼等の企業心を刺戟するには、金利步合の低廉なることを必要とする。若しも金利步合が高かつたならば、事業家の如き、特に或る危險を冒して、事業に投資するよりも寧ろ金利の高い爲めに市價の低落して居る有價證券を買入れて、高率の利廻りを收めることを得策とする道理であるから、事業家の企業心を沮喪せしめることを免かれないのである。私が一國をして不景氣の狀態を脫し、好景氣の時代に進ましめるには、其先決條件として、物價の下落と、金利の低落とを必要とすると稱して、憚らざる所以である。

歐洲諸國の經濟社會に如何なる程度まで、斯る景氣恢復の徵候の現はれつゝあるかと云ふことは、私の斷言するに苦む所であるが、事の大小は姑く措き、斯る徵候の掩ふ能はざるものあることは、明瞭の事實である。物價に就て云へば、英國の如き千九百十三年中の物價指數を百として、爾後の變動を見ると、九百二十年四月三百十三に騰貴したのを最高の記錄とし、次第に低落の步調を辿つて、千九百二十二年には百五十五、九と云

ふ指數を現はすに至つた。物價の低落斯の如き有樣であるから、金利歩合も次第に低落し英蘭銀行の割引歩合は昨年から本年に掛けて既に三回の引下を受け、最近には四分の低きに至つたと報ぜられる。而して此事たる獨り英吉利ばかりに止まらず合衆國に於ては物價下落の速度は英國よりも、一層急であつて而して金利歩合も聯邦準備金銀行に於ては、餘程以前から四分五厘に爲つて居るのである。

日本の事情と比較す

斯る外國の經濟事情を念頭に置いて、一方に日本今日の經濟社會に出現し來る幾多の事實に接すると、私は比較對照の間に興味の豐なるを覺へざるを得ない。諸外國殊に英米兩國の物價の下落しつゝある間に於て、我國の物價は少しも下落しない。千九百十三年中の物價指數を百として、其後の變動を覗うと、千九百二十年三月三百二十一、五に達したのが騰貴の絶頂であつて、爾後千九百二十一年四月百八十九、九に至るまで、徐々下落し來つた。然るに是れが下落の絶頂であつて、其後に幾分か騰貴の勢を示して已まず、隨つて日英米の三國を通じて、日本は物價下落の率に於て、最も劣つて居る結果に爲るのである、左に之を表示する。（一九一三年の平均物價を百とする）

	物價騰貴の絶頂期	當時の物價	最近時の物價
英	一九二〇年四月	三一三、一	一五五、九
米	同	二二五、一	一二三、五
日	同　三月	三二一、五	二〇九、五

即ち英國は物價騰貴の絶頂期に於ては、千九百十三年に比較して、三倍一三一、合衆國は二倍二五一の騰貴を來したに對し日本は三倍二一五と云ふ兩國を凌駕する騰貴率を現はして居る一方に、騰貴の絶頂期に對照して、英國は五割强、合衆國は四割五分の下落を示して居るのに反し、日本は三割四分の下落に過ぎない。騰貴の勢の鋭きは脫兎の如く、下落の勢の鈍きは處女の如しとでも云つたならば、以つて我國に於ける物價變動の大勢を形容するを得るであらう。而して斯る物價の變動は明に經濟社會の趨勢を左右し、不景氣の狀態から好景氣の狀態に進むに就て、大なる妨害を及ぼし、世人一般の渴望して已まざる景氣の恢復に抵抗を試みつゝあるのである。

金利と景氣との關係

私は曩に歐米諸國に於て、經濟社會恢復の前提として、金利歩合の低落しつゝあることを説明したが、此點に於て日本は如何であるかと云へば、金利歩合の高きこと驚く可きばかりであ

る。即ち日本銀行の商業手形最低割引日歩は二錢二厘であるから之を年利に換算すれば、約八分に相當する。市中諸銀行の金利歩合も亦之に准ずる高さであることは勿論であり、而して金融は今後如何なる方嚮に向つて、動きつゝあるかと云へば、政府が財政を處理する爲めに、多額の公債を發行しなければならぬ事情から考へても、諸會社が高利の社債を發行しつゝある事實に徴しても、將た又市中諸銀行が最近預金利子を引上げて、金融引締めの先驅を爲したことに照しても、金融市場が不景氣時代の特色である金利低落、金融緩漫の狀態を離れて、金融緊縮の方嚮に就きつゝあることを爭うを得ない。今日歐洲諸國の都會を通じて中央銀行なり、又は主要の銀行たりが八分内外の金利歩合を以つて、營業を行つて居る所があるかと云へば、ヘルシングフオルスの九分、リスボン、維納、ワルソーの七分が即ち其れであつて、他の諸都市の公定利子は遙に是等よりも低く、四分乃至五分の間に居り今少しの低落を示したならば、直に新事業の勃興を刺戟す可き狀態に居るのである。然らば斯く我國に於て不景氣であつて、尙ほ金利歩合が高い、目先益々高率に赴かうとする變態を生じて已まないのは、何が故であるかと云へば、不景氣時代であつて、物價の依然として、高いと云ふ根本的病弊の然らしめる所に外ならない。歐米諸國に於ては、賃銀切下げ(Wages-Cutting)と云ふことが一つの標語を以つて、目される位に一般の工業界を通じて、賃銀の減率が行はれる。時に勞働者が賃銀引下の處置に承服しない爲めに、勞働爭議の惹起されることなきを得ないが、大體に於て賃銀引下が圓滑に行はれ勞働者亦之を已むを得ないことゝ認めて居るのは、何故であるかと云へば、賃銀引下げと略ぼ同じ割合に於て、時には賃銀引下げよりも強い割合に於て、一般物價が低落し、勞働者の生活を安易にするからである。既に賃銀が引下げられ、金利歩合も低落するとあつては、生産費全體の節約されるのは當然であつて、如何なる產業も戰爭時代に行はれた浮華輕佻の風を脫し眞面目に堅實なる計算の下に、新なる生產費を基礎として、新方面の事業計畫に着手し、事業界の面目を一新するを得る譯である。然るに我國の經濟事情は之と正反對の道程を走つて居るのであつて、金利は物價と共に高く、何時に爲つて其常調に復するか、測り知るを得ず、事業は少しも振興される見込はなく、失業者は世間到る所に散在しながら、從來の業に就いて居る者は物價の高く、生活費の高なことに制されて、飽くまでも從來通りの高い報酬を獲得しようとし、外國に行はれる賃銀切下げ運動の如き、到底之を見るを得ないのである。

物價騰貴有利論の愚

斯の如く物價も高い、賃銀も高い、金利も高い、總ての水準點が高いと云ふことに對して、政府や政友會あたりでは、斯う云ふ辯護論を試みて居つた。曰く物價の騰貴に依つて、生活費が多分に要るとしても、賃銀や、給料が高く爲れば、差引き何等の苦痛はないではないか、製造工業者は高い價を出して原料品を仕入れたり、高い賃銀を拂つて、勞働者を雇入れるとしても、仕上げた物資をより高い代價で賣却し、商業家も亦高い仕入値段に對して、高い卸賣なり、小賣なりの相場を以つて賣却したならば、其間に何等の損失を蒙らないではないかと。斯る高價有利論は高橋是清氏一派の似非經濟家に依つて、臆面もなく喋々されたが、此議論には二つの缺陷があり、而して此二缺陷は今日實際に暴露するに至つたのである。其一つは物價が騰貴しつゝ、然も一方に今日の如く不景氣であつては、高い賃銀や、報酬の下に、職業に就くを得る者は求職者の一部分であつて、他に多數の失業者があり、而して是等の失業者は物價の高いのに對して、全然所得を喪失した地位に居ることを閑却してはならぬ。近頃は多くの會社や商店に於て、人員整理に一段落を告げたかも知れないが、一時は堂々たる大會社、大商店が一樣に大規模の馘首を敢てして、俸給衣食者の地位を不安ならしめたこと少なしとしない。而して是等の失業者は其後其れぐ適當の職に就いたかと云へば、不景氣の今日、新なる就職の困難であることは勿論であつて、社會に遊民の多いのは論を俟たない。失業者を閑却し、在職者が物價に相當する報酬を得て居るから、物價の騰貴は國民生活を壓迫しないと云ふのは、甚だしく觀察を逸した議論である。

假に內國に於て物價が騰貴して居るだけ、諸般の關係が總て之に調節を保つとしたならば、物價騰貴の國民經濟に及ぼす影響を以つて、皆無であるとするを得るか。私は考へる、其皆無であると云ふのは、單に內國だけの關係に於て然るに過ぎない。今日は如何なる國と雖も、國際間にかける一員として、廣く他の諸國と經濟上の關係を結んで居るのであつて、交通の密接であればあるだけ、國際經濟上の關係は互に聯絡を通ぜざれば、已まざる次第である。時に國家は制度の力に依つて、斯る脈絡を或る點に止めようとすることもあるが、大體の動き方は國際間の經濟は一國孤立に傾かずして、世界共通を旨とする勢の明瞭なるものがある。吾人は此原則を念頭に置く、而して一方に前文に論じた通り、諸外國の物價は次第に低落して、戰前の狀況に復することも、亦遠しとしないに反し、日本に於ては物價

の騰貴が倘ほ餘程強い程度に居るとしたならば、彼我經濟上の關係に於て如何なる變動を生じるであらうか。日本の物資は海外に其販路を擴張し、又維持することの困難である一方に、諸外國の物資は盛に日本に輸入されるに至ることを以つて必然の勢としなければならぬ。加奈陀や合衆國から日本に向つて、木材や組立家屋や、其他の建築材料が輸入されると云ふことは、餘程以前から耳にしたし、又其れ等の材料で建築された家屋をも實見したが、近頃では楊子が合衆國から幾萬噸と云ふ數量に於て輸入され、支那から傘が輸入される、更に此調子で進んで行つたならば、日本で下駄の材料とする木材が割木の儘で輸入されると云ふことも、敢て一場の茶話に止まるまいと思はれる一方に、日本が歐洲戰時交戰諸國の産業狀態の攪亂を極めつゝあつた際に乘じて、折角海外に開拓し、又は擴張した新市場は盡く競爭國の爲めに、奪還されるに至つた。果して然らば近年我國の貿易上に輸入超過の勢を生ずることの次第に甚だしきに至るのも、亦敢て異とするに足らない。政府が輸入資金の決濟に手加減を加へる、輸入品の性質を、甄別し、奢侈品の輸入に對しては、決濟の便を與へないと云ふような姑息の手段を取るとした所で、抑も輸出不振、輸入增進を促す根本の原因の刈除されざる限り、今日既に現はれつゝある大勢は之を如何ともするを得ないであらう。

今日の儘で經濟社會が其行く可き所まで、行つたとして、其間に如何なる狀勢を生ずるかと考へれば、私は恐怖の念を催ほさゞるを得ない。貿易關係以外に於ける我國の國際貸借は海運業の不振、海上保險料の減收、來遊外國人の減少等種々の事情が重なつて、戰時に於けるが如く、我國に有利なるものでなく、輸入超過が增進すればするだけ、其決濟に要する金額だけ、在外正貨の減少を促さゞるを得ない、而して內外國に於ける物價高低の開きから考へれば、當分我國は輸入超過の地位に立つて、正貨を取付けられることゝ爲るであらう。然も正貨の內には、外國に負ふ債務の決濟に缺く可からざるものもあり、又近く到來する外債の償還に備へなければならぬものもあり、遂に其減少を許さない、或る程度に於て之を維持することを必要とする情事があるとすれば、結局我國の經濟社會は遠からず、餘程苦しい破目に陷ることを免かれないのであつて、其時は刻々吾人の脚下に近づきつゝあるのである。

外國の政策と我國の對策

歐米諸國は歐洲戰爭の慘憺たる結末に教訓を得て、海軍縮小を斷行した、佛蘭西の如きは、歐洲に於て强國たる地位を保

持する必要と、獨逸の國力挽回に對抗する配慮とに驅られて、未だ陸軍縮小の快舉を斷ずるを得ないが、英米兩國に就て云へば、軍事費の節約に大なる關係を持つものは、海軍縮小であつて、華盛頓會議の決議が今後着々實行されたならば、兩國共に多額の資金と、多數の人員とを軍事上の束縛から解放して、自由に生産上の用に移すに至ることは、論を俟たない。軍備縮小と經濟復興との關係が最も明瞭に表面に現はれ、戰後國力に甚だしき疲弊を來し、其恢復を必要とする際に、特に軍備の縮小される理由も自ら了解されるに至るのである。英米兩國が如何なる方面に向つて、軍事上の束縛から解放された資本や勞力を利用するであらうか、詳細の計畫は事將來に屬して、之を忖度するを得ないが、思ふに外國に富源を開發して、內國に於ける原料品の供給を豐富にするとか、內國に於ける經濟的組織を統一して、外に向ふ力を鞏固にするとか云ふようなことは、兩國の必ず力を致す可き所であつて、偶々兩國共に經濟社會の平靜に歸しつゝある時に、物質上に餘裕を得ると云ふことは、經濟的發展に好機運を開くものと考へられる。

我國に於て若しも今後軍備の縮小卽ち軍艦の廢棄、新艦の中止、人員の淘汰と云ふやうなことが華盛頓會議に於て、議決された通り、條約批准後極めて短かい期間內に實行されたならば、不景氣の上塗りをするものであると云ふ說があり、此說の恐怖から、海軍縮小に依つて節約された金額は其儘海軍管下に於ける他の方面に例へば武器の改良とか、補助艦の新造とか、又は既定計畫の繰上げとか云ふが如き方面に使用して、以つて失業者の輩出を避けなければならぬと云ふ說が唱へられる。然しながら經濟上の現象を細察するに當つて、一時の利害と永久の利害とは、決して混同す可からざるものであり、又一時の利害にしろ、永久の利害にしろ、之に對抗する道の存することは吾人の注意しなければならぬ點である。軍備の縮小は兵器製造を始め、軍事上の經費の減縮を招き從來斯る經費の支辨に依つて、利益を收めて居つた階級に損失を及ぼすことは、事實であるが、一方に軍事上から解放された勞力や資本が生産上に供用されて、一國生産業の振興に資するに幾何の力を致すであらうか。國家としては此轉換を容易ならしめ、又確實たらしめるの工風を凝さなければならないのである。隨つて昨今軍部に於て、海軍縮小に依つて、生じた歲計上の餘裕は其儘海軍で使はせ、陸軍整理に依つて、浮び出た節約高も亦同樣陸軍で使はせると云ふ說の如き誠に途方もない議論である。陸軍と云ひ海軍と云ひ、國家に屬する一の事業であつて、如何なる範圍に於て、國防の業務を遂行し、又之を遂行するに就て、幾何の經費を要

するかに、一に國家全體の考慮に待つて、決定されなければならぬ。國民にして從來の經費を以つて、軍部に國防の職務を請負はせたものでない限り、軍事費の節約高を擧げて、軍部の處理に一任させようとするが如き、國家職務の統一を破るの甚だしきものである。私は諸外國が次第に不景氣の狀態を脫しつゝあることを考へ、又軍備縮小を機會として、經濟上の競は、何爭の國際間に劇烈と爲ることを思ひ、之に對抗する手段としてとしても軍備の縮小を斷行し、斯くて歲計上に生ずる餘裕を擧げて經濟振興の用に供することの急務なるを認めるものである。歲計上の餘裕を以つて經濟の振興を謀ると云つても、敢て民間事業に保護金を交付するとか、奬勵金を給與するとか云ふような狹い意味の處置には限らない。租税を輕減する、官業の料金を減少する、斯くて國民の負擔を輕くすることは即ち國民資本を豐富ならしめる所以であり、而して斯く豐富に爲つた國民資本が生產業に投ぜられたならば、國民經濟の振興は期して之を求めるに難しとしない。私は之を以つて我國に於ける景氣挽回の第一步に充てたいと考へるのである。

　固より經濟政策の本筋から考へて、景氣挽回の爲めには、堅實なる經濟政策の下に、物價を低落させる、金利の低落を促す、斯くて賃銀の低減を容易ならしめて、生產費を縮小することは、絕對に必要とする所であつて、是等の處置を怠つては、景氣の挽回は百年河清を待つに等しく、寧ろ外國の競爭に依つて我國の經濟社會は如何なる窮境に推詰められるか、之を考へるだに、私の憂へざるを得ざる所である。斯の如く議論を進めて來ると、私は原內閣、之に次ぐ高橋內閣が空景氣を煽揚して、恐慌を誘致し、恐慌後も尙ほ物價政策を誤まつて、不景氣の患害を甚だしくし、財政に適當の緊縮を施さない爲めに、景氣挽回の機運を逸し去らせると云ふ幾多の失政を眼前に彷彿たらしめるものである。世人は何故に不景氣の害を嘆じながら、此不景氣を誘致し、又之を永續させる政策の實行者である高橋內閣を倒潰することに、力を致さないのであるか、世間に不可解の事少なくないが、斯る國民の煮へ切らぬ態度の如きも、亦不可解の一つとして、私の指摘するに憚らざる所である。

政友會の新陣容と其將來

文學博士　三宅雪嶺

明治三十三年、伊藤公が政友會を創立してから二十二年、所謂一絲亂れざるの形にて續き來りながら、何の組織を適當とするかが今尚ほ明白を缺き、今後いよ〳〵疑問とならう。伊藤が創立した當初、自ら矛盾に陷つて居る。一面に己れ一人の發企なるを明かにし、總裁專制の實を擧げようとし、一面に黨を會と改稱し、同志者を黨の束縛から離さうとする。之れ自らの性格にも由り、時の境遇にも由る。伊藤は明治天皇の信任を以て國家に盡くさうとし、思ふ存分に働くを欲し、敢て黨派を恃まず、閥族にも官僚にも依頼しようとしなかつた。其力を藉りながら之を意識せぬ程であり、我が力を以てすれば、人が從はずに居れぬとも考ふ。初め思ひ立つた時、意氣軒昂、天晴れの腕前と感嘆せずに居れず、只由來久からずして龍頭蛇尾の嫌ひを免かれぬ。

新政黨の組織を思ひ立つた時、天皇に申上げ、友人とも談し合ひ、必ず從來の政黨を革新するの意氣込みを示した。遂に伊藤と云ふ所を明かにしようとし、單獨に宣言し、幾年耳馴れた黨を會とした。自身の周圍には黨と云ふを嫌ふ者多く、黨人と云ふ名が惡く聞えて居り、黨と云ふだけ顏を顰めるやうになつて居り、名前から變へようと考へ、パアチイをアツソシエーションとし、萬事面目を改めようと企てた。伊藤だけの事あり、其後桂公が新政黨を作る場合にも會名を使用し、主なる政黨が會と稱して居る。黨では情實を以て結托し、如何はしい事の行はれ易く、あつさり會名の下に集るべきものとした所、考へ方が間違つて居らぬ。

然し實際が何うであるか。會名の下に集合するのならば、主義政綱に一致するだけで、他は各自の意見通りにすべきであるのに、事毎に黨議を以て結束するのは、何と云ふ事か。伊藤が總裁風を吹かせて、自由黨の歷史を踏み付けにする事、從來の自由黨員の忍ふべからざる所であつて、それを忍ぶのは舊自由黨員たる所とも云へる。是は何でも伊藤の云ふ通りに從ひさう

に見える。伊藤が政黨の弊を罵り、誠に仕方が無いでないかと云へば、畏まつて聽いて居り、程好く相鎚打つに止まる。人が之を問へば、答へて曰ふ、伊藤を引張り出しさへすればそれで宜く、後は何うにでも成つて行くと。而して肝要な事は巧みに伊藤を說いて承知させて居る。各地に支部を置くが如きもさうである。

伊藤が總裁職を西園寺侯に讓つた時、自ら政黨で成功したと考へたか、隨分厄介な物と知つたか、前の熱心で永く續くべくもなく、其内日露戰役が起り、日韓合同も問題になり、旅行先で變死し、恐らく政友會に就いて不可解のうちに過ぎた所があらう。西園寺の如く程好くあしらつて居れば、可も無く不可も無く、自づと實際に力を伸す者が現はれて來る。

何にしても總裁を推戴けば、內閣を手に入れ得ると知れ、兎も角もそれで人が畏つて居る。松田が鷹揚で人望があり、原が切り盛りを巧みにし、互に相俟つて西園寺を助け、松田が歿し原が總裁專制の衣鉢を傳うるに及んだ。原が伊藤西園寺の下に力を養ひ來つた所は、本來才能に富んでの事であり、前に之を輕んじた者も、其のめき〳〵鰭を付けたのに一目を置かずに居れなんだ。他に人があつても之れ程當時の政友會に適したのが無く、實に適所に於ける適材たるを證明した。

政友會は如何なる組織か、總裁あつての政友會で、會員は唯之に從はねばならぬか。問ひ詰めれば、それからそれへと疑問になるが、起るべき疑問を起させぬのが原の技倆であり、會員は何と云ふ事なしに現狀維持で續いて行く。人は如何なる事で不平を起すか、何處で何うせば柔らぐか、原は此邊の呼吸を吞込むの天才を具へて居り、會員は之に一種の催眠術を掛けられた調子である。さう云ふ政黨と云ふものがあるか何うか。其故に政黨と呼ばず政友會と呼ぶのであるとも解せられる。何が何だか解つたやうで解らず、解らぬやうで解つて、日を過ぎて行く。

所で原が變死し、高橋子が後繼者として、首相となり、總裁となる。一人の更迭は重きを置くに足らぬにしても、人の注意は必ずしも大事にて促されず、些細な事で促されたりする。原と高橋と何れが才能あるか。一得一失、何れと判斷し難いとし、政友會代議士二百八十名を總めるの呼吸に於いて、高橋は確かに劣つて居る。其の劣る事は、高橋の爲めに損となるか、政友會の爲めに損となるか、原を標準として損とすべく、標準を變へれば損と限らぬ。總裁專制を以て多くの會員に臨む事、從來何や彼や、之れで過ぎ來るとも、常に之を望み得べくもない。高橋は一種呼吸を攫まへる所あれど、原と趣きを異にし、原に馴れた者は聊か不安を感ぜずに居れぬ。總裁專制で何か仕

出來かすか知れぬとの懸念がある。大した事も出來まいと多寡を括りつゝ、事に依つて面倒になりはせぬかと心配する。高橋は意外にも首相となり、總裁となつても、それ相應に働きたくも思ひ、原に及ばずと云はれたくない。けれども何と云つても、政友會を操縦する事、原の手際に及ばず、操縦係りは、内閣で野田氏、閣外で岡崎氏、之に次いで横田氏と云ふ所である。似たり寄つたりの人物あるも、呼吸を吞み込むと知られた所、先づ此邊を推す。

原は此等の手を藉らなくとも、自分で押へて行くが、高橋は此等の手を藉らねば木偶の坊たるに過ぎぬ。高橋の爲す所は、總裁專制の名に於いて、他人の入れ知惠と思はれ、中にも岡崎を睨むのがある。總裁專制と云ふても當てにならず、案外他人が細工するのでないかと、漸く考へられ初めた。總裁が決めたとて、入れ智惠する者があるとて、實際に變りないやうでも、久しく疑はれなんだ所のものが、疑はれるだけの事がある。第一次總裁が宣言し、其儘になつて居つた所のものが、意識してか意識せずしてか、疑を容れられる事になつた。總裁專制と云ふ事が、動かすべからざる事か、隨裁あつての政友會か、政友會あつての總裁か、考へて見れば隨分考へる餘地がある。自覺と云ふ程のものが無くても、幾らか之に似た事がある。眞に總裁の采配か、岡崎の采配か、誰の采配か、納得行かぬ事があり、其の儘にして居つては、思はぬ馬鹿を見るかも知れず、政黨と云ふものは、も少し意義あるものでないかとて、公選運動に贊成する者が漸く多きを加へた。何うも公選する方が宜さうであると考へるに傾く。從來の狀態で續かうとする者は、せゝら笑ひ、小僧つ子が何を爲るかと云ふたりするが、聞いて見れば道理が無いでもなく、總裁專制と云ふのが怪しく思はれる。さりとて悉く公選にしては、何う云ふ事になるかも知れぬ。其邊の呼吸に通ずるのが横田である。君等の云ふ事も一應分つて居るが、それで大政黨を維持して行けると思ふか、大抵にして置くが宜からう、いけなければいけないで方法もあると云ふので折衷案になり、各團體から相談役を選んで、其中から總裁が總務及び其他を定める事になつた。折衷案として目出度納まつたものとせねばならぬ。誰にも障りの無い結果である。野田岡崎それから横田、前にも人の知つた所をば、件柄で明かにする事になつた。中心系統がそれと定まつた。政友會の事は高橋總裁よりも他で定まると知れ渡つた。横田が法制局長官を辭し、幹事長になつた所が、小さい事ながら、一身上の行爲として面白い。實は已むを得ぬ所あり、若し長官を辭せねば、政友會に於ける根を刈られる恐れもあつたが、さそくの早業を褒めてよ

い。

而して新に總務となつた連中は、前に總裁定めで定まつた所よりもよい。只各團體から相談役を選出するとあつては、政友會が聯邦組織たるを免かれぬ。或る團體に比較的多く働き手があり、或團體に比較的それが無い。團體の調和を慮るのが先きになつては、當初伊藤總裁が、黨名を排し會となした所の趣意のの何に在るかゞ分らなくなる。今は總裁專制でもなく、團體の協調で事を決定すべき順序である。高橋總裁は此邊に何の意見あるか。それで宜いとするか、改めたいけれど、好い方法を見出さぬとするか。折衷案は獨裁政治を寡頭政治に改めたやうな所がある。黨を會としたのは、單に名稱變改に過ぎぬとすれば、何うでも宜いやうなものの、斯くて舊政黨其儘となつては、伊藤總裁の趣意が何處に在るかを知るに困るむ。初めから矛盾に陷つて居り、何とか之を解決するを要する。

今は主義政綱と云ふものあるか何うか、それさへ覺束なくなつて居るけれど、主義政綱は大會を以て決定し、之に撞着する事は敢てするを禁じ、之に撞着せぬ限り個人の自由に任すべきである。黨としてもさうであり、會としていよ〳〵さうである。例せば普選問題の如き、從來の歷史に徵し、何等主義政綱に撞着する事がない。尙早とか尙早でないとかは、主義政綱と云ふべきでない。從來さう云ふ主義政綱を發表した事があるか何うか。主義政綱に普選尙早と云ふを揭げたならば、如何にも異樣に聞えるでないか。斯かる事を黨議で決定し、一人も殘さず同意せしめやうと言ふのは、人を壓迫するも甚だしく、政黨の本義に背くのみならず、憲政の本義に背く。自由問題として、多數が贊成すれば可、强ひて贊成せしめやうとするのは、人の良心を奪はうとするのである。

從來政友會は何の組織を適當とするか。未だ十分に考へた者なく、今後深く此邊に考ふる所なくてならぬ。一年二年は尙ほ此儘で續かうが、政黨の命脈は個人より永いものと承知すべきである。遠き將來の事を考へるに及ばぬけれど、野田氏七十歲岡崎氏六十九歲、略ぼ變遷を察し得ぬでない。政友會の全盛は何時まで續くと考へるか、先きの先きまで考ふるも益ないとし、少くとも今後一二回の總選擧を考へずに居れまい。且、伊藤總裁の宣言は新政黨創立よりも政黨革新を意味する。公の爲した所は何程過つて居つても、其趣意だけは忘れてならぬ。民衆の要求なしに普選を施行するの必要ないと云ふが、之れ內閣及び政黨あるを知つて、國家あるを知らぬ云ひ分である。日本は歐米に遲れた所種々、民衆の要求を待たずに、民衆をして要求せしめるに努むべき事あるを考へよ。憲法發布も、議會開設も、

民衆の要求を以て出來たのでない。政黨は政界で利益を貪る者でなく、政界に貢献するに努むべきものである。政友會は今の儘で尙ほ何年間か續き得るとも、今の儘ならば、後から見て何の意義ないものとなる。伊藤總裁が事を誤つたにしても、政友會創立の趣意に一分の捨つべからざるものがある。今日かの宣言を取出し反復熟讀するが宜い。それで諒解せぬならば、幾年間か徒らに私權を貪つたと云ふに過ぎなくなる。原總裁の統卒振りは伊藤に優り、天晴れの手際であるけれど、畢竟何の賞すべき事あるか。爵を辭退した事の外、云ふを値するのは、何處に在るか。統卒振りに於いて伊藤は原に劣り、寧ろ大いに劣るにしても、矢張伊藤は伊藤だけの事があるとし、賞讚すべきを覺える。政友會員たるものは、伊藤の宣言を熟讀し、成るべく善意に之を解せば得る所尠くなからう。



平和博の所謂『文化村』に就て

あらゆる新しいものに寛大でありたい

林　癸未夫

K君

好い時候になりましたと御挨拶を申上げたいが、實は私は春が嫌ひです。櫻の蕾が芽ぐむ頃になると、いつも私は陰氣を覺えて、何となく平素の活氣を失ひます。そして妙に世間が埃臭く感ぜられて、あらゆる事物を確實に掴んで見やうといふやうな興味を、何物に對しても持ち得なくなります。そして又譯もなく過去を顧みて、今迄自分が生きて來たのが不思議に思はれたり、とりとめもなく將來を空想して、何一つ期待すべきものも無くなつてしまつたやうな、淡い哀愁に誘はれたりいたします。數年前までは私はかうした氣分をきらつて、自分から強ゐて氣を引立てゝ、世間の人々と同じやうに春の歡びを出來るだけ味つて見たいと努めるのが例でしたが、近年はそんな努力をすることすらおつくうになつて、結局自分は自分の性分を守つてゐるよりほかは仕方がないのだといふ氣になつて、寧ろ此哀愁をなつかしみつゝ、早く花の散るのを待つて居るといふやうな心地でゐます。尤も私のかうした氣分は決して俗衆の花見景氣を冷嘲するといつたやうなシニツクな態度から來るのではありませぬ。又私のカルチユアによつて自然に養はれた筈の趣味に基くものでもありませぬ。寧ろ私のテンペラメントが然らしめるのではないかと自分では思つてゐます。こんな調子ですから私は何うもこの四月といふ月がいやです。早く五月になつて、青葉若葉の靜かな夕暮が樂めるやうな季候になればいゝにと、日毎にそれが待たれます。私の記憶する限りに於て、唯一度だけ私が眞底から四月を祝福したいといふやうな感激を覺えたのは、一昨年の四月の中旬に僅か半日を過した布哇のホノルヽでした。何といふ新鮮な、潑溂な、創造の氣が天地に溢れたやう

な自然の光景であつたでしやう。それは實に――いや今はそんお話なをしてゐる場合ではありませんでしたね。

○

K君

私は元來が右申すやうなテムペラメントの持主であるのに、殊に今年の春は私に取つて一層心地良く感ぜられない事情があります。それは私の疲勞です。私は昨年の秋以來すこしく駑鈍に鞭ち過ぎたのです。性來貧弱な頭腦を餘り酷使し過ぎましたゝめに、人一倍の休養をしなければならぬ場合でもあり又自分でも頻りにそれを望んでゐたに拘らず、數ケ月前から私の氣に染まぬ、併し私の避ることのできない或俗務のために、平素よも一層忙しい時間を費さなければならなかつたので、私は到頭へこたれてしまひました。併し別段醫藥に親むといふのではありませぬ。只毎年花の頃感ずる心身の違和が、今年は一層甚しかつたといふに止まるのです。いつそ病人になつてしまへば却て氣樂であつたかも知れませんが、病氣でもなく、さりとて健全でもないといふ感じは、生ぬるい茶をのむやうで變なものです。

K君、私がこんなくだらない一身上の物語を申上げたのは、つまり私が平和博覽會をまだ一度も覗いてゐないといふ辯解のためなのです。從つて又私が博覽會の呼び物の一つとなつてゐるらしい、文化村とやらを見てゐないことも言ふまでもありませぬ。私はまだ一度も博覽會を覗かなかつたのみならず、殆ど毎日大きな標題で新聞の三面を賑やかしてゐる博覽會に關する記事をもまるで讀んで居りませぬ。いや正確に言へば唯一度だけ何うかした拍子で讀んだことがあります。それは何でも、博覽會の開會式に當つて、招待された紳士連中が土産物の紀念品の分配を爭ふて、大混亂を演じたとかいふ記事でありました。其記事を讀んだ時は「はゝあ又やつたな」といふやうな感じが漠然起りましたが、併し何もそのために別段博覽會を呪詛するやうな氣分が生じた譯ではありませぬ。只それ以來博覽會に關する記事を一行たりとも讀む氣がなくなつたことだけは明かな事實です。

○

K君

かう申したからと言つて、私をそこいらの俗物嫌ひ　いらつしやる諸先生方と同じやうに博覽會と聞いたゞけでも、孔子が小人を蔑むやうな威厳ある嫌惡の情を示さうと企てゝゐるものと御速斷になつては困ります。私は決して博覽會其者を頭から否定してかゝるほど超俗的な「書齋の中の經世家」ではありませ

ぬ。實は一日を割愛して、戰後の日本の商工業の現況を大觀し、併せて面白さうな餘興を二つ三つ覗いた後に、見晴しの良い茶店を見つけて、赤毛布の上で櫻餅でも頬張つて見たいといふ位の娑婆氣は十分備へてゐるのです。只併しそれが櫻　風、塵埃、雜踏、喧騷などといふものと結付けられてゐる限り、私は殘念ながら博覽會を見物しやうといふ勇氣を皷舞し得ないのです。併し花は既に散りました。五月になると田舍からの觀覽客も餘程少くなるだらうといふことですから、成るべく人出の少なさうな日を選んで是非一覽に及びたいと考へてゐます。元來博覽會を見世物のやうに遊戲として見れば面白くないに極つてゐます。殊に私共のやうに商工業に對する專門的の智識のない者は、陳列されてゐる物品共者の實用上の經濟的價値は大抵判斷ができませぬから、そんなものよりは寧ろ博覽會の全體としての經營とか管理とか行政とかいふ方面にとかく多くの注意を拂ふことになります。例へば切符發賣の方法が適當でないとか、觀覽の順序を示す注意書が足りないとか、物品の陳列の方法が面白くないとか、事務員が不親切であるとか、女看守が居睡をしてゐたとか、賣店の品物に埃がたかつてゐたとか言つたやうな方面に何等かの缺點を見つけて不愉快な印象を與へられます。さうして「本日人の社會道德はいつまでかう幼稚なのだらう困つたものだ。」とか「博覽會を通じて見たる日本の文化の低級さ加減はどうだらう。」とか言つたやうな悲觀的な感想を懷きながら歸つて行きます。そして翌日友人にあつた時「昨日博覽會をちよつと覗いて見たが、いや實につまらんね。」と言ふのが大抵こんな場合の常例であります。それは仕方がありません丁度自分の生んだ兒の鼻が自分に似て低くても仕方ないのと同樣だと思ひます。併し自分の兒の鼻の高低を明かにして置くことが親として必要であるやうに、吾々の同胞によつて計畫された博覽會の出來ばえを明かにして置くことが日本國民として必要でないとはどうして言へませう。いやしくも日本の文化に、世界の文化に何等かの意味に於ての關渉を有する人である限りは、とにかく日本現代の社會に最も平均（アベレージ）である所の市民たちの道德的、經濟的能力を最も端的に反映してゐる此博覽會なるものを、全く注意の外に置いてはならぬ筈と私は信じて居ります。

○

K君

今度の博覽會の呼び物の一つは所謂文化村といふ新式住宅の實物大の模型だといふ君のお話は確に事實でありませう。そして其出來ばえが一般の知識階級に取つて甚だ不評判であるといふことも亦事實でありませう。まだ實物を見ない私が、人か

ら聽いた所によつて想像して見ても、成程舊來の生活樣式に慣れた日本人が、卽座にあんな住宅に棲むとなると、種々な點に於て不便不都合を感ずるに相違なからうと思はれます。從つて私は今茲で博覽會の出品物としての文化村を敢て辯護しなければならない必要も責任も感じてゐるわけではありませぬ。唯併しながら、K君、私はかういふことを言ひたい。あらゆる新しいものに寛大でありたいと。考へても御覽なさい。現代の日本は何と言つてもまだ〳〵模倣文明の時代です。吾々が維新以來の進歩發達として窃に誇りとしてゐるあらゆる事物の中に、何一つ西洋文明の模倣でないものがありますか。吾々は眞先に服裝を模倣し、公設建造物の樣式を模倣し、政治組織を模倣し、產業經營法を模倣し、敎育制度を模倣し、文藝を模倣し、思想を模倣して、日一日と泰西の一切の事物に近接することを、國家としても、個人としても必死に努力し來つたではありませんか。勿論是等の模倣が形態に止るか、眞髓に觸れてゐるかは問題であるとしても、ともかく一時の浮氣な流行ではなくて、泰西の文化の優越を正當に認識し、それに追隨するがためには、日本古來の文化を惜氣もなく棄て去ることが已むを得ない必要として一般に承認されたればこそ、茲に到つたものと見なければなりますまい。

併しながら人間は元來保守的なものであります。卒爾に考へると新奇を衒つて輕佻な進取主義を喜ぶ人が世間には非常に多いやうに感ぜられますが、それは流行の俗論か髮の結ひ方のやうに新しいものと自分との關係が極めて簡單明瞭であつて、すこしも其處に未知數の因子（ファクター）の潛んでゐない場合、言ひかへれば其物に對して些の不安もなく全責任を負ひ得るやうな場合に限られてゐることでありまして、若しそれがさう簡單明瞭でない場合、卽ち一旦新に就くと最早舊に復ることの容易にできないやうな場合、若しくは新奇なるものの自分に對する眞の價値が豫め判斷のできない場合、又その結果に對する自分の責任が重大である場合、引くるめて言へば未經驗なる新しき事物の文化價値が、既に慣熟した舊き事物の文化價値よりもヨリ以上であるといふことの確信のまだ得られないやうな場合に於ては、十人中の九人までは必ず進取の冒險よりも保守の安全を選ばうとするのが通例であると私は信じてゐるのであります。

其證據には古往今來の新しい文化の開拓者は大抵悲劇の主人公でありました。其悲劇は思想上の先驅者と追隨者との間に餘りに距離があり過ぎるために、多數の凡俗が一人の天才を理解し得ないがために起るのです。理解し得なければ進んで理解すべく努力するか、さもなければ全く不問に附して置けば良

さゝうなものですが、人間は案外狹量で、偏屈で、おまけにもつと悪いことには復讐心が強いものです。それだから先覺者が己れの認めた眞理を衆愚が理解してくれないもどかしさの餘りに、うつかり「汝等愚かなる群よ、」といつたやうな言でも吐かうものなら、衆愚は決して默して止みません。先づ最初は先覺者を狂人扱ひをして自ら安じやうとします。併しこの方法で安じ得ないやうになるとそろ〳〵迫害を加へます。偉大なる先覺者ほど此迫害に對しては無抵抗者です。何となれば彼等は衆愚に抵抗することによつて己れの自尊心を傷けるには餘りに自己の主張に對して信念があり過ぎるからです。又其信念が衆愚の迫害によつて湮滅するには餘りに其人格價値が偉大であるからです。そして迫害者の子か遲くとも孫の時代になると、父祖がさんざん迫害をした其人に對して人類の恩人だとか、國民的英雄だとか、時代の先覺者だとか、新文化の開拓者だとかいふやうな、すばらしい形容詞を澤山押付けて、手もなく偶像に祭上げ、其周圍で提灯行列をやる位で、簡單に父祖の罪を償つたつもりになるものです。かうなると嚢の悲劇は安價な喜劇となつて、バーナード・ショオあたりのいやに理窟ぽい皮肉を浴びる位がおちです。

○

K君

たしかに人間は案外保守的で新しい物を嫌ふ特質を有つてゐるやうに私は思ひます。嫌ふだけならまだ好いが、自分たちの現在所持してゐる秩序を少しでも破壞されないために、きつと新入者を疎外し迫害しやうと試みる自然の傾向を有つてゐます。卑近な例を引けば古參兵は必ず新兵をいぢめるのが兵營の作法となつてゐる。歐米の大學の寄宿舍なぞでは、古參の學生がさま〴〵の方法で新參の學生をいぢめて興がるやうな習慣がかなり廣く行はれてゐます。勿論是等は大した罪のない惡戯的衝動から來るのではありますが、併し決して正しい事ではありますまい。いぢめられる者は決して愉快でないに相違ない。其證據には彼等が地を換へて古參になると又必ず新參をいぢめます。そして前に自分をいぢめた者に對する復讐を後の者に對して行はふとするのです。さうしなければ何うも腹が癒えないのです。江戸のかたきを長崎といふのは此事かも知れませぬ。むづかしく言へば心理學上の報復轉位の法則といふのです。(もつともこれは私の發明した法則ですから、どんな心理學書にも恐らく載つてはゐますまい)此法則に從ふと、人間は直接報復することのできない人に對する恩讐は、必ず代りの者を見付けて、それに報復しやうとするものです。も一つ卑近な例を引けば年

増の世話女房が癇癪もちの亭主に怒鳴りつけられると、きつと五分間以内に、自分の小供が鼻液を垂してゐた位の理由で其頭を張り飛します。尤も孝行をしたい時には親がないので、その代りに――いや待つて下さい。一體私は何のお話を申上げてる所でしたかね。おゝさう／＼文化村の一件でしたね。どうも脱線ばかりしてゐて申譯がありませぬ。これも頭の具合の悪いせいですから何うか勘辯して下さい。

○

K君

現代の日本の文明が西洋の模倣時代に在ることは夙に申上げた通りでありますが、形の上に現はれた事物の中で、比較的最も模倣の遅れてゐるものは住宅であらうと思ひます。洋服のずぼんを皺くちやにしながら、疊の上に座ることとの如何に苦痛であるかは皆様御經驗の通りです。よし和服でも長くあぐらをかいて机に對してゐると背骨の下の方が痛んで來ます。朝夕讀破する洋綴の書籍が悉く棚の上に起立してゐるのに、持主は疊の上に横たはらなければならぬといふことは如何にしても時代錯誤の感があります。現代の日本人殊に知識階級の大部分は俳優も同様です。其職務を執行する場合には必ず服装と住所との様式を全く變更しなければなりませぬ。唯異る所は俳優のそれは他人の計算に於てし、俸給者のそれは自己の計算に於てする。疑ひもなくそれは俸給者に取つて致命傷であります。併し服装の方だけなら解決は容易であり、又現に解決されつゝあると申して差支ないと思ひますが、家屋に至つては談決して容易でありませぬ。確に日本現代の文化生活に對する要求は住宅問題に於て行詰つてゐると申すべきであります。試に三越へ行つて西洋家具部を一瞥して御覧なさい。わざ／＼日本式の客室をこしらえて、其内に椅子や卓子なぞを据えて、鵺式意匠を示してあります。これは痛切に生活様式の過度期に遭遇してゐる日本現代の苦悶を物語つてゐるものです。二重生活を捨てよとは戰後の物價騰貴に脅された中産階級の標語となつて居りますが、最早吾々が和式單一主義に復歸することは、種々なる關係から絶對不可能としなければなりますまい。そこでどうしても二重生活を一重生活に改めなければ到底吾々の消費經濟が維持できないとするならば、進んで洋式單一主義に趣くより外に往くべき途はなからうと存ぜられます。

併しながら洋式單一主義の實行難はいふまでもなく住宅設備に在ります。從來西洋館の建築費は普通の日本家屋の建築費よりも餘程高價とせられてゐます。そこで日本家屋と同じ程度の便利を持つた西洋館であれば、自分で新築するにしても、借家

するにしても、ずつと多額の金を要することはいふまでもありませぬ。問題はそこです。要するに唯金の問題です。そこで如何にすれば比較的廉價に洋式單一主義の下に於て日本現代の住宅問題を窮地から救出すことができるかといふ要求から生れ來つたものが、とりも直さず博覽會の文化村であらうと私は信じてゐます。

○

K君

どうか總ての新しい試み、企て、運動、宣傳に對して寛大であつて下さい。なべての先驅者の心は世人の批評によつて戰いてゐます。新しいものに對する酷評はやゝもすれば彼等の勇氣を挫いて折角の發心を中途に投棄させる原因になります。最後まで戰ひ得るものは特別に選ばれたる數人にしか過ぎませぬ。そんな人は吾々が數千年の人類の歴史を繹ねて、僅か數十名を數へ得るに過ぎませぬ。そんな億萬人に傑出した人々を標準にして小さな天才、小さな先覺者、小さな文化の開拓者を意氣地なしと咎めるのは氣の毒ではありませんか。私は何人が博覽會の文化村を計畫したのか少しも知りませぬ。又其出來ばえもまだ見ないことですから何と批評のしやうもありませぬ。若し私が實物を一見したなら、其拙惡なデザインやフワシリチーに眉を顰めるかも知れませぬ。併し如何にそれが拙惡であつても餘り深くそれを咎めないだけの寛大さだけは私は用意して居るつもりでゐます。あらゆる新しいものが不完全であるやうに、文化村の諸建築も不完全であるに相違ない。私はそれを豫期することができます。それだけ又失望を豫防することができます。或はいつそ最後まで實物を見ない方が私に取つて好いのかも知れませぬ。さうすれば此運動に對する私の同情を少しも傷けることなしに保存することができるでありませうから。

K君、私は重ねていひます。どうかあらゆる新しいものに寛大であつて下さい。そうして文化村運動の前途を祝福してやつて下さい。彼等の志は確に尊重すべき社會的意義を有つてゐます。

○

K君

私は圖らずも大へんなおしやべりをいたしました。何を書いたか讀みかへして見る勇氣もありませぬ。それ程私は勞れてゐます。悪文拙句の行列は定めて御迷惑のことであつたと想像します。どうか悪しからず御容赦を願ひます。T先生によろしくお傳へ下さい。（大正十一年四月十六日）

窓から見た文化村

生方敏郎

文化村と云ふ名は面白い。博覽會の中に在ると、この文化村も一寸お芝居の中の御殿のやうな氣がするけれども、それでも惡い氣はしない。實際の社會に、日本の地理書の中に、本當にこんな名前の、否名實共に備はつた文化村といふものが在つたら、何んなに愉快なことだらう。

日曜の午後、花は散つた後だけれども、子供にせがまれ博覽會へ行き、文化村へと迷ひ込んだ。

小形な可愛らしい西洋館が入口の右手にあつた。價は千五百圓位「私がもつと家族が少い時だつたら、」とも思つた。併し、「若し私がもつと金持だつたら實用にはならないでも、玩具としてでも買はうものを」とも思つた。

私は家に永年不自由してゐるといふ理由からばかりでなしに、たゞ見るものとして、玩具として家屋が好きなのである。

從つて、家賃十五圓や二三十圓位の安普請の家屋なぞ、貰つても厭だと思ふ。

西洋館を外から見ると、仲々いゝ。

文化村には西洋館が幾つか並んでゐた。

一番最初に見た家は、小さい割合に一つ廣い部屋があり前と後の窓ぎわに長椅子を置いてゐる。感じがよかつた。

私は元來廣い部屋を好む性質である爲めか、如何にキチンとした西洋館でも、狹い部屋は好まない。

人々が開いた窓やら戶口やらから、家を覗いてゐるから、私もそれに倣つてのぞいた。

「僕にも見せて」

と子供が言ふから、時々抱き上げて見せてやつた。

先達て末の子供が病氣で入院するに就いて、ワイフが附添ふて行て生憎女中もなく自分でお勝手へ這入つてみて、大にお勝手といふものの無雜作に不便に出來てゐることに氣付いた私は、何とかもう少し樂に仕事が出來て始末よく行くやうにする方法は無いかと考へてゐたところであつたから、何よりもお勝手に興味を持つて覗込んだ。幾軒かの西洋流のお勝手をのぞいたが、何れも狹い。成程狹くても仕事のやりいゝやうに出來てゐる。私は流しを高くして下に棚を吊る工夫をして大工にあつらへて拵へさせたが、西洋式のでは、もうチヤンとそれをやつてゐる。そして私の工夫以上うまい事をしてゐる、と云ふの

は、たわきに洗ひ物をふせる板があり、その板に溝を幾つも作り、洗つた器物の水の滴りが流れて流し臺へ落ち込むやうな工夫までしてある。

私は元來食器を洗つた後でふきんで拭いたのは嫌ひである。螢臭ひ臭氣がするからだ。女中がやるのでは、それを避けがたいからだ。それ故、この様な西洋式の流しにすれば、洗つた食器をふせたまゝで置いて露を切つて乾かすことが出來る。

棚の釣り方等は、矢張自分で工夫しないでは駄目だし、文化村のお勝手ではまだ本當は狹過ぎて、料理をする時の高い大きいテーブルを置く場所も無い。併し、それにしても純日本式、否純東京式のケチくさい不便で働きにくいお勝手に優る事は萬々だ。

湯殿も便利に出來てゐるのがあつた。かまは勿論外だきである。しかし、恁うすると、湯殿だけでも可成金額が嵩む。

その他客間寢間の備へ付く可き家具が、西洋館では割合に要る。それも決して安くはあるまい。

よく中へ這入つて、室内や二階を見度いと思つたが、招待券を持たぬ者には見せられぬ、と云つて、何處の家でも拒絶された。それ故、細かいことは云はれぬ。たゞ窓から覗いただけの觀察に過ぎない。その上、子供からは

「パパ、そんなに人の家を窓から覗いてもいいの」

と詰問され、偶ま裏口の開け放しになつてゐた家を見付け、そこから這入り込んで湯殿を見てゐて、書生及び番人女から

「何うも招待券無しに裏口なんかから入られては困りますな」

と咎められ、追ひ出されるやうな浮き目にも會つた。

村の奥に、日本家屋も一軒あつた。六疊、四疊半、三疊、二疊といふ小さい部屋が四つあるだけで、價は五千圓也だ。これは初め見た千五百圓也の西洋館ほどにしか使へまい。我々の家族が日本家屋に這入らうといふには、此分では二萬圓もする家にならう。何時に成つたら、そんな家を作ることが出來るやら、迚も前途遼遠だと思ふと、淋しい心持にも成つた。日本家屋は玄關といふやうな無駄といへば無駄、つまり氣取つたところがあつた、更に床の間の付いた座敷は、氣品が高い、成程客間としてはいゝに違ひない。併し、お勝手や湯殿や便所や、食堂や生活に必要なところは總てぞんざいにしてある。

先づ住宅としては西洋館を建て、餘裕あらば、風流な晴々した離れか何か、日本間として更に別に建て增すやうにしたいものた。と樣々甘い空想に耽り乍ら文化村を歩いてゐたが、實は今月の家賃さへまだ停滯してゐたのに！　と直に後から氣づいて、微笑を禁じ得なかつた。

文化村を見る人の爲めに

工學博士　佐藤功一

平和博文化村を見てといふ記事をかけとの事ですが、私は實はまだ文化村を見ておりません。併しどうかそれがよく〱行つて居つて觀覽者によい印象とよい知識とをさづけるやうにあつて欲しいと祈つて居ります。

此度の博覽會に建築館を設け住宅の野天陳列をするやうに博覽會當局の諒解を求め得たのは吾々建築家同人の非常な努力であつたのです。兩方共日本の博覽會に於ては此の度が初めての試みなのです。まだ不なれの事なのですからそれは缺點は大にありませうが、此の意味に於てどうぞ同情を以て見ていたゞきたいのです。

家といふものは其中にほんとうの住み手がはいつて初めて活きて來るものなのです。「明き屋」は冬眠中の昆蟲のやうなものです。見やうによつては醜なものです。中に人がはいつてのち眼をあき息づき初めるものです。

文化村の家は、ひとつびとつ某建築會社の出品になつて居るのです。勿論家具は家具で某家具店、電燈裝置は某店、敷物はどこ、水道工事はどこ、臺所道具はどこと、ちやんと今すぐにでも住む事の出來るやうに用意されてある筈です。併しそれが或る人が內に住まうとして眞劍にこれ等の家具什器を撰擇したやうに統一がいつて居るかどうですか。

庭も相當に出來て居るでせう。併しあの種々のはき物で雜多の人が觀覽にやつて來るのですから掃除や何かゞよく行き屆いてゐますか知ら。

何よりもどんな留守番が居るのかを疑問として居ります。ほんとうにキチンと住まはうとする人が中に居るのでなければ、家の心臟が强く正しく脈うちませぬ、從て其容貌は生き〱とせぬ筈です。

ところが現に吾々の住んで居る家は、どんな貧弱な形相の家でも其中には眞劍に人が住んで居るのですから、これと比較して此の博覽會の出品家屋を見ないやうに願いたのです。此の中にほんとうに人が住まつたら斯うなるんだらうといふやうに割引をして考て見たつて本當のところまでは達せぬものなのですから更に其れ以上のハンデカツプを置く必要のあるといふ事を深く心に止めて見ていたゞきたいのです。

それからも一つ御注意をしたいのは、西洋風の家屋といふと人は日本風の家屋よりも材料其他に於て遙に立ち優つて居るやうに考へたがる事です。それは今日迄日本に於ける西洋風の家屋——玆では住家を指して居るのです——の多くが、富者に依つてほんとうの生活とは沒交渉に單に家のお飾りとして採用されたものなのであつて、これ等がみな立派なもの許りでした爲めに吾々はこれに見なれて居りますから、吾々の頭の中には理智的にそういふ考を切り去ろうとしても中々切り去り得ない傳統的の感情があるからなのです。

この事も充分考慮して見ていたゞかなければいけません。

折角の努力に依つてやうやく出來た文化村の建築なのです、そして折角起りかけた新生活方式に應ずべき家なのです。それは見る人に種々の意見はありませう。ありませうが今時の芽生へかけたよい苗木の若芽をもぎとらぬやうに、此の苗木の保育者である園丁達ちの元氣を阻喪させないやうに。門から否定してかゝらずに充分肯定して、そして良い助言を與へてやつていたゞきたいのです。

それからもひとつ御注意したいのは、建築學會あたりを中心としてやつた筈ですから、文化村の住家は銘々の家の戸や窓の大さがたぶん一定して居る筈です。たしか學會できめた「規格」の通りにいつてゐませう。そして尺度もメートル式を使つてゐる筈と思ひます。規格の統一は建物の價格を安價ならしめますしメートル法の採用は昨年法律で發布になつた度量衡の統一を促進したいための吾々の申合せなのです。

實際まだ文化村を見て居らないのです。遠く離れて居りますから急に見に行くわけにも行きませんから、私の想像を取りまぜてかきつけて、皆さんの御覽になる上の何かの參考にもと玆に一文を草しました。(腰越にて)



中形と絞りは
……本年も松坂屋へ！
夏の婦人美に一番調和の好い松坂屋特製の中形と絞りは毎年流行の基準として皆様から多大の御期待を蒙つて居ります
弊店も亦皆様の御期待に背かぬやう本年は一層の努力と工夫とを凝らして五月一日より陳列會を催します。青葉の風も爽かに訪れます、お遊びかたがた御來觀の程御待ち申上ます
東京
上野
松坂屋
いとう呉服店

文學博士 故 箕作元八先生遺著 （全一冊） 最新刊

第十八世紀佛蘭西文化史
社會主義運動史

菊版布裝天金箱入美本・本文五百八十餘頁
挿繪三色版コロタイプ石版等美術圖版九葉

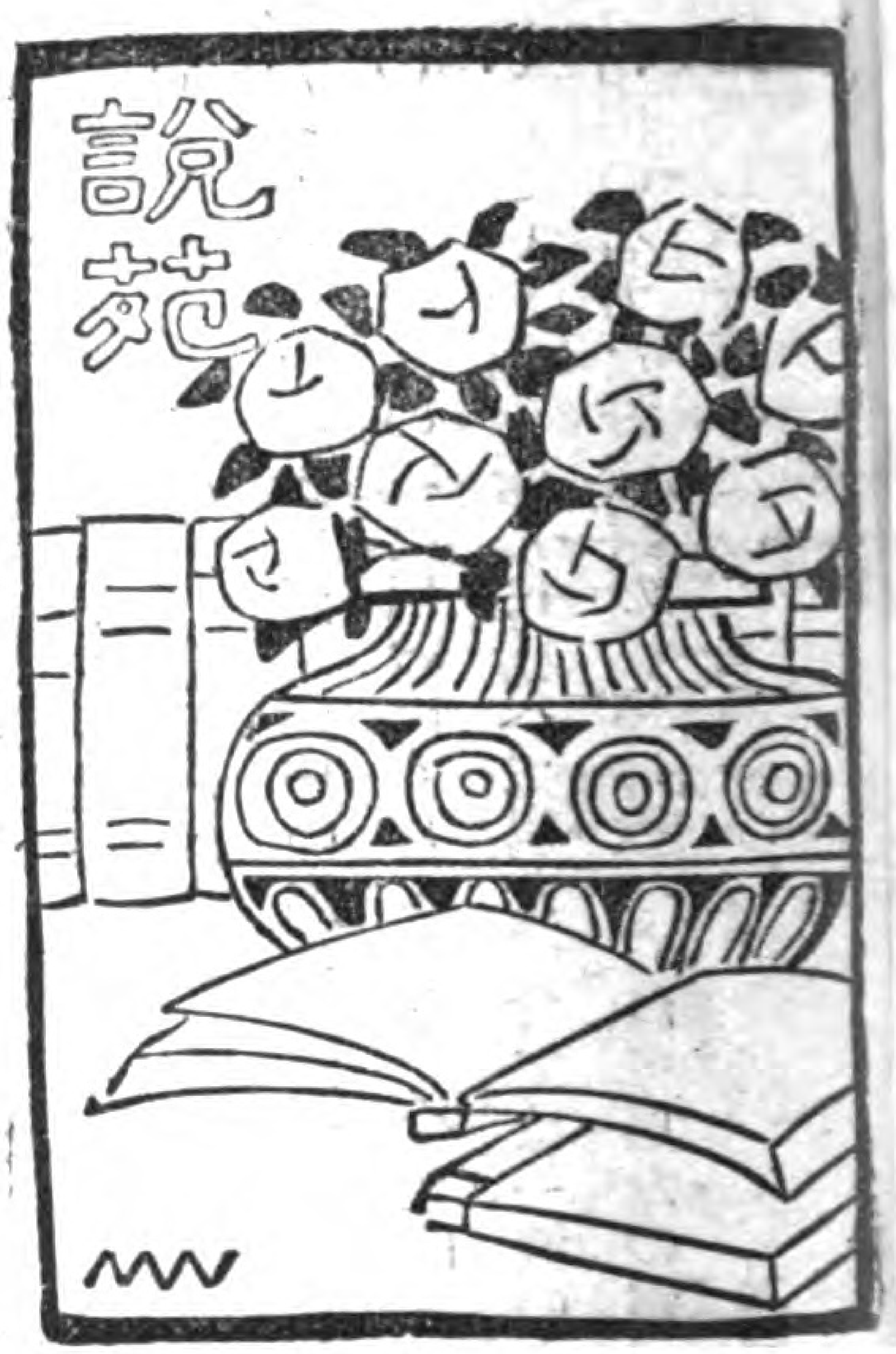
定價金五圓（郵税拾八錢）

世界の形勢に對し、權威ある歴史的批判を以て久しく、國民を指導し來れる箕作文學博士の死は、國際關係の變轉最も極りなき今日に於て、何人も痛惜にたへざる所なり。爰に講堂以外、未だ世に現れざりし博士遺稿中、不朽に傳ふべきもの數種を擇び遺稿全集四卷成る。其の第一部に收めたる『第十八世紀フランス文化史』は曩に出でたる『フランス大革命史』の序曲にして、次に出づべき『ナポレオン時代史』と共に、近世歐洲に於ける民主主義運動史の開幕三部曲を成すもの。今や世界的大文化運動たる社會主義運動の由來及び發達を通叙せる『社會主義運動史』と合册して發行す。共に博士最大得意の題目にして、現下の時勢の最も熱望する讀物たるを信ず。

發行所 東京神田 冨山房 振替一〇五 賣捌 全國書店



滋強飲料
カルピス
の味はオーケストラ！
平和博に
カルピス食堂あり
カルピス共六品にて
五拾銭 文化村郊外動
物園の門に向つて右
一平 カルピス
廣告試案一
祖父「ラ、、上品！」
長男 學生「ラ、、元氣の泉！」
主人「ラ、、生命！」
夫人「ラ、、床しき香！」
花子「ラ、、おいち」
次男二郎「ラ、、あまい！」
一平
販賣所全國・酒店・食料品店・藥店・ 發賣元 東京 國分商店・ 製造元 東京 ラクトー株式會社



生の危機に臨んで

——『無產階級に生れて』中篇——

高須梅溪

(第一)最初の勞働生活へ

奴隷同樣の境涯に落ちた話

大地が熱して火となるかと思はれる夏の眞晝頃、大阪安堂寺町通りを西の方へ、ひどく喘ぎながら行く一人の少年がある。年頃は十三四歲であらう。彼れは河内木綿の細かい縞の單衣を着て、紺色が少し褪めかゝつた小倉帶を締め、青白い疲れきつたやうな顏を汗にぬらして居る。

彼れは、其の瘦せた小さい身體にふさはしくない大きな風呂敷包を背負うて、今にも其の荷の重さに壓し潰されさうに、苦し氣な表情をして、俯向加減に上半身を前の方へ曲げながら步いて居る。彼れはもう今にも倒れさうだが、往來の人々は暑さの方に氣を取られて、重荷に惱む一少年を丸で知らぬやうに、無關心な冷めたい一瞥を投げかけたまゝ過ぎてゆく。

少年が堺筋附近へ來ると、突然背負うて居た大きな風呂敷包が下の方へずつて、其の結び目が解けた。それと共にぱつと白い雪のやうな布片が地上にちらばつた。それは幾ダースかのハンケチであつた。少年は急に眉をひそめて、

「しまつた！」

と舌打ちした、そして彼れは、當惑さうに或しいもた屋——有產階級で商業を營まない家——の軒下へ、辛らうじて風呂敷包

を　び込んだ。彼れは往來の人に踏まれぬやうに、急いで地上に落ちたハンケチを拾ひ集めて、附着した塵埃を拂ひのけた。かうして彼れは元の通り、ハンケチを風呂敷に包むと、思ひきり、全身に力を入れて、顔を眞赤にしながら、それを背負ひあげやうとした。だが餘りの重さに堪えかねて、よろよろと後方へ倒れかけた。彼れは驚いて、側にある大戸の棧へしつかり兩手をかけて、やつと起ち上つた。彼れの顔には何とも云へない不快な色が現はれた。

「嗚呼。」

彼れは覺えず、かう嘆息した。彼れとは私自身のことである。私が一生忘れることが出來ないやうな烈しい勞働の苦みをかうして體驗することになつたのは、高等二年で學校をやめて、南久寶寺町の叔父の家に呼び寄せられてからのことだ。私は其處で、小僧代りに使用されることになつたのだ。安堂寺町通りで背荷に惱んだのは、叔父の命令で、ある印刷屋から刷り上つたハンケチを持つて歸る途中の出來事だつた。

其の時分、田島の家は以前にくらべると、半分ほどの廣さしかない小さい店舗を新たに構へて居た。曾ては一流の木綿問屋で、町内の有力な資産家のうちに數へられて居たのが、長男島次郎の烈しい放蕩のため、大部分の財産を失つて、殆ど行詰つたのだ。それで叔父は其の所有家屋數軒を人手に賣渡して、西隣の小さな家へ引越した。それと同時に叔父は木綿商をやめ、尙ほいくらかあつた資金で、支那人相手の貿易商を始めたのである。それには、島次郎も最初の間、大分熱心に力を入れた。

田島の店は一間半ほどの間口しかなかつた。一方に大きなガラス戸棚を据えて、それへ商品を順序よく詰めてあつた。店の奥にある鴨居の上には、一匹のアラビヤ馬が、長い鬣を振つて、足下に湧きあがる雲を蹴りながら、勢よく走つて居るところを商標にした大きな額が掲げてあつた。アラビヤ馬の上には、TRADE MARK と記し、遙か下方へ TAJIMA & Co. と何れも金字で記してあつた。

私は田島へ呼び寄せられた當座、深い失望と憂欝とに囚はれて居た。叔父に強ゐられて他の奉公人と同じやうに私の嫌ひな紺木綿の前掛を膝の上に垂れて、店先へ座るやうになつても、私は周圍の空氣と同化することが出來なかつた。私の周圍は何處を見ても、商家ばかりであつた。田島の眞向ひや筋向ひにあつた家は三軒共、小間物屋ばかりだつた。其のうちに赤い天狗の商標を看板に出して居る河庄と云ふ店があつた。其處は主人の庄兵衞がいつも朝から外へ出て酒を飲んで廻るので頭を櫛卷きにした細面の美しい年增の細君が店に坐つて商賣をして居

た。河庄は花簪専門の卸屋で店先にはいつも薔薇や牡丹や菊の花や百合の花など色彩とりどりの簪が一杯にひろげられて居た。

田島が元ゐた家は糸問屋になつて居た。そして田島の西隣には繪具屋や、ガラス問屋が列んで居た。私は使ひにゆく毎に繪具屋の前を度々通つた。いつも店の前に繪具の匂ひが強く漂うて居た。戸口に面した路上には、丹朱、紺青、青、黄などの繪具の粉がちらばつて、土へ染み込んで居た。雨の日は左様した繪具が路へ流れて、友禅縮緬を投げ出したやうな趣を見せて居た。

□

田島の家では、いつも叔父が朝早くから店先へ座つて居た。叔父は店へくると、先づ帳場の眞上に祭つてある神棚に向つて、柏手をうつて、禮拜した。其處には天照大神を祭つてあつた。朝の燈明が朗かに輝いて、榊や神酒を具へたほかに十日戎に買つた吉兆――大福帳、黄金の小判、米俵などの玩具を青笹に附けたもの――や火難、盜難除けの御封などが置いてあつた。

私は最初からどうしても商人になるつもりがなかつたので店の事には丸で氣を入れなかつた。それを先づ不快に思つたのは田島の叔父であつた。叔父は、私を愛しないまでも私に向つて少しも惡意を持つて居なかつたが、一日も早く私を一人前の商人に仕立てたいと思ひ込んだと見えて、怠け勝ちに見える私を励ますつもりで、事毎に些細な干渉をし始めた。

殊に叔父は、私が店先で新聞や雜誌を讀むのを心から嫌つた。私が店務の暇を見て、一心に新聞を讀んで居ると、叔父の眼は直ぐに私の頭の上に光つた。

「商賣人の家で新聞を見て居ると不景氣らしくていかん。」

叔父はかう私を叱り付けた。また私が帳場で事務を執る暇に、結界で圍んだ机上へ一二冊の雜誌を載せて、人知れず讀んで居ると、叔父の機嫌がひどくわるかつた。

「晝間から、そんなものを讀むのやないぜ、早うやめんか。」

叔父は鋭く私を睨め付けた。私は不合理に抑へ付けられるのを不滿に思つたけれども、力めて叔父の云ふことを聞いた。そして朝から夕刻まで店に居る時は、成るべく新聞雜誌を手にしないことにした。だが私は毎日、自分の心に染まない勞働や、事務を強ゐられて居ると、せめて一枚の新聞、一冊の雜誌でも讀まなければ、重い憂愁に沈みきつた心を引立てることが出來なかつた。それに私は新聞に續載されて居た歴史小説を讀むのを其の日のはかない樂みの一つに數へ居たので、朝早く、叔父の眼から逃れて、そつと續き物を讀むこともあつた。それは

ど、私の境涯は不自由であつた。

田島の叔母は、私が曾て母のやうに慕つた柔和な謙遜な女性であつたが、矢張商業を何よりも宜いものだと思ひ込んでしまつて居るので、私が田島へ來てから、店務に冷淡で、少しも、心から進んで、きびきび働かないのを見て、深く心配して居るらしかつた。だが叔父のやうに、些細な事に干渉したり、尖つた眼をして、叱り付けたりはしなかつた。

けれども叔母は、叔父へ對する義理から、成るべく私を抑へ付けるやうにして居た。私が叔父に叱られて、不快な顔をしてゐると、

「それは貴君がわるいのやぜ。良人は何でも貴君の利益を思ふよつて、嚴しくしやはるのや、それを有難いと思はんと、いけませんで。」

叔母は、優しい穏かな調子で、叔父には內密で、人の居らぬ時に、臺所でから私を諭した。だが私の不平は中々晴れきらなかつた。

私がいつも羨ましく思つたのは、眞向ひに店を構へて居た田邊と云ふ小間物屋の若主人であつた。彼れは町內で有名な吝嗇漢で、いつも銅の針金で鼻緒をすげた山桐の下駄を店先へ置いて穿いて居た。針金で鼻緒をすげて置くと、長い間、切れる心配がないからだ。左樣した點は私も好まなかつたが、彼れの新聞好きには深く共鳴した。彼れは朝早く店へ出ると得意さうに聲を立てゝ新聞を讀んだ。彼れが妙な調子を付けて、それを讀んで居る具合は、大阪で其の頃、未だ大道藝人の間にかすかに殘つて居た阿呆陀羅經節を連想させた。

彼れにどの位の學力があつたか、私は丸で知らなかつたけれども、彼れは、三面記事ばかりを讀まないで、政治記事なども見た。時には、來客の前で、選擧運動とか、議會とか云ふやうな言葉を繰返して居たのを聞いたことがあつた。私は彼れが誰れにも遠慮すべき必要なしに、自由に新聞を讀む境涯に居るのが羨しかつた。私も早く左樣した自由を得たいと思つた。

新しい知識の世界を求めた話

田島の店には、一人の番頭と一人の小僧とが居た。番頭は久七と云つて二十一二歳の年頃であつた。彼れは顔色がいつも悪くて、小さい眼をしよぼしよぼさせて居た。人物は極めて平凡で、柔かい手觸りを持つたが、何處かしら、頭の一部にぼんやり綻つたやうなところがあつた。久七は芝居が好きで、夜分暇な時は私等の前で先代宗十郎の聲色を眞似て、ひとり、にやにやして居た。そして何處から見付けて來たのか「聲色獨稽古」

と云つたやうな小冊子を持つて、時々それを懸命に讀んで居ることがあつた。彼れは德島の醫者の長男であつた。

　小僧は、山口縣生れで、年頃は十五歲位だつた。身體が少し弱かつたが、多血質で、悧巧さうな顏をして居た。喋ることも、することも、拔け目がなく、てきぱきして居た。彼れは、田舍で高等小學の課程を終へたさうで、『小國民』などを早くから讀んで居たことを私に話した。叔父は此の小僧を新吉と呼んだ。

　私は新吉と直ぐに親しくなつた。それは私の心と新吉の心とが、ぴたりと固く結び付けられたほどの親しさではなかつたけれども、兎も角ある程度まで互に打あけて話し合ふことが出來た。年齡や、學力の上で、彼れと私とは略ぼ同じ程度に居たので、私の好きな學課の話になると、彼れも自然相槌を打つ、左樣なると、私は益々興に乘つていろいろの事を話す、かうして私は新吉と結び付いたのだ。

　其の時分、小僧の境涯は丸で奴隸同樣だつた。毎日、朝から晩まで間斷なしに酷使されて、一年中、殆ど休む時がなかつた。僅かに正月と大祭日位に休暇が與へられるだけであつた。十日戎や、節分などは、早く店を仕舞ふ位のものだつた。そして主人の云ふことはどんな不合理な點があつても、絕對に合理的なものと見做されたので、不當な抑壓の下に呻吟いて居た小僧が多かつた。

　それに小僧の勞働が極めて激しいのに營養を補つてゆくやうな滋養食は、丸で與へられなかつた。朝はお粥と澤庵のみを給する家が多かつた。晝飯と晩食の時には、一汁又は一菜と限られて居た。魚肉の類は、一日、十五日のほかに決して膳に上すことがなかつた。小遣錢は、正月や大祭に五十錢位貰ふだけで碌に芝居一つ見るほどの餘裕がなかつた。かうして小僧は人間並に扱はれなかつたのだ。けれども大阪の商家ばかりでなく、其の時分の社會は、小僧の奴隸化を正當なことだとして居た。

　私はかうした境涯に置かれて身動きも出來なかつた。すべてが不滿だつた、不愉快だつた。それでも、どうして、此の境涯から拔け出ようかと云ふ事に就て宜い考へが一つも出なかつた。私は子供心に其の不合理を憤りながらも、また其の非人情に向つて反感を抱きながらも、默つて奴隸境涯に暫く默從して居た。

　私は、夜分店務が閑散になると、新吉を相手に歷史や、理科の話をした。此の時ばかり、私は輕い快さを感じた。そして私の知識慾は以前よりも、一倍の勢を加へて白熱した。それで私は再び高等小學へ入ることが出來なくとも、新しい知識の世界に對する憧憬と情熱とだけは、何處迄も自分ひとりの力で、は

ぐくんでゆきたいと思つた。

それについて、私はK館から出た『幼年理科讀本』や『少年歴史讀本』などを僅かばかりの小遣ひ錢を出して購入した。私が『理科讀本』を順慶町の書店で買つた時は、心が躍り上るやうな喜びで滿たされた。其の本は、菊半截の小冊子で、さつぱりした和裝で、紫の絹糸で綴ぢ、背中の上下に赤色の絹を用ゐて居た。そして用紙は全部、日本紙で手觸りが優雅であつた。

「これさへあれば、學校で理科をすつかり修めたものと同一の學力が得られるんだ。」

と私は思つた。そして家に歸る途中、人に衝突するのも知らないで、頻りに『理科讀本』のページを繰つた。其の夜、私は饑えたものが矢鱈に食物を胃腑に詰めこむやうに夢中になつて『理科讀本』を耽讀したものだ。

□

私は一つでも、新しい知識の斷片を得ると、一粒の眞珠を得たやうに喜んだ。理化學に於けるエーテルの法則を知ると、一つの新しい驚異を見出したやうに感じた。何事も未だ珍しい十三歳の少年には、單に酸素とか、水素とか、窒素とか、アトムとか云ふ平凡な學名を口にすることさへも、小さい誇りであるかのやうに快かつた。殊に電氣のことなどについて、其の一部分の知識に觸れると、孫悟空や、蜘蛛の妖精などが出沒する世界よりも遙かに幻術的で、神秘の霧が深いやうな氣がした。

私はK館が知識の民衆化を主眼として出した『普通學類全書』などが新刊されたことを少年雜誌、新聞などの廣告で見ると、どれもこれも速座に買ひたくて堪らなかつた。けれども田島へ來てから、隔月位に叔母から五十錢ばかりの小遣しか貰はないので、唯一冊の新刊書を買ふにも、思ふまゝにならぬ場合が多かつた。仕方なしに、私は成るべく古本を求めた。雜誌も新しいのは、一部も買はなかつた。大抵前年度のものを古本屋や、古道具屋などの店頭で探し出して、僅かに讀書慾、知識慾の一部を滿たした。

私が叔父の命令(いひつけ)で隔日位に店の仕事をしてゐる石版屋やミシン職工の家や取引先の西洋反物屋などを一巡する時は、歸途必ず古本屋の店頭に立寄つた。大阪は商工の都會で、學者や文士らしい人間は、新聞社の編輯局以外には、ひとりも居なかつた。それに當時は、讀書家が極めて少かつたので、書肆の數も亦非常に少かつた。大阪の心臟(ハート)とも云ふべき船場のうちにも、僅かに七八軒の書肆がちらばつて居た丈だつた。東京の神田、本郷、早稻田にあるやうな書籍街は、何處を探しても見出すこ

とが出來なかつた。そして船場にある書肆の一半は低級な赤本——通俗小說、講談、繪本など——や、極卑近な學術書などを出版して、主としてそれ等を關西地方に賣り弘めるのを專業として居た。他の一半は新刊書と古本とを一緒に店頭へ列べて賣つて居た。

私は平野町心齋橋筋にあるB書店に時々立寄つた。其處には、いつも若い店員の一人が元氣のない顏をして、退屈さうに座つてゐた。私は古本屋の店頭に起つと、

「あれも買ひたい、これも買ひたい。」

と云ふ強い欲望に刺戟された。ある時、B書店で、私は無名文士の書いたスタンレーの『阿弗利加探檢記』と井上勤と云ふ人が譯述した『月世界旅行』『海底探檢』など云つたやうな本を見出した。それ等は何れも標題を見た丈で、私の強い好奇心を誘ひ出した。私は先づ『阿弗利加探撿記』を手に取つて見た。其の表紙には、欝蒼と茂つた椰子の葉蔭に裸體のアフリカ蠻人が鋭い手鎗を持つて起つて居るところが描いてあつた。それは、まづい石版刷だつた。

私は兎に角『阿弗利加探撿記』の値段をB書店の番頭に問いて見た。定價は四十錢だが、少し古いので、三十錢にするとの答へだつた。それで私は先づ『阿弗利加探撿記』だけ買つた。今一冊『月世界旅行』を買ひたかつたけれども、懐中に五十錢ばかりしかないので、それは後で折を見て求めることにした。だが私が買ふ都合が付く迄に、他の人に購求されてしまうならもう『月世界旅行』を見るわけに行かないであらうと思ふと、私は妙に淋しかつた。無產階級の子の深い悲みは、かうしたところにもあつた。

それに讀書時間が極めて乏しいことも亦私に少からぬ苦痛であつた。毎日、朝から夕刻まで、どんな閑散な時でも　何か知ら用事があつた。ハンケチを折つて紙箱に入れるとか、手巾の原料であるところの羽二重を方形に裁斷して、すぐミシンで縫ふことが出來るやうにするとか、其の時と場合とに應じて、叔父から、いろいろの用事を命ぜられた。

それが忙はしい時になると、丸で小さい戰爭のやうな光景で、私等は荷造のために追ひ倒された。私等は、總がゝりで、嚴重に強固に作られた大きな木箱の中へ五百ダース、千ダースのハンケチを詰めるのである。そしてそれをすつかり詰めてしまふと、固く蓋をして、四方に釘を打込むのである。左樣したことにかけて、極めて不馴れな私はいつも困つた。一つの釘を木箱の隅へ打込むのにも、相當の呼吸が要るのだが、私にはいつ迄も其の呼吸がわかり兼ねた。そして荷造の時には、敏捷な新吉

のために度々私の迂遠さを嘲られた。私は唯自分の無能を苦笑するよりほかはなかつた。

荷造が終ると、いつも、私と新吉とが、貨物を荷車に積んで、川口居留地に居る支那商人の家へ持つてゆくことになつて居た。それがどの位、病弱な私を悩ましたか知れなかつた。田島の店へは、時々支那商人が來た。彼等は大抵、いくらかの日本語を知つて居た。そして商買のことにかけては、狡猾で、抜け目がなくて、流石の大阪商人さへも、彼等に一歩を讓らねばならなかつた。

□

それ等の支那人のうちで、私がいくらか記憶して居るのは、田島の人々が「珍々さん」と呼んで居た一人であつた。私は何となく、珍々さんが好きだつた。私は彼れを親しい一人の叔父さんのやうに心の中で思つて居た。珍々さんは、他の支那商人のやうに下卑たところがなかつた。少し短氣らしかつたが、鷹揚なこせ付かぬところがあつた。そして彼れの背は、すらりと高く、風采が上品で、色が白く、唇が丹朱のやうな色をして居た。彼れは、淺黄色の綸子で作つた唐服を着て、頂上に赤い玉のやうなものが附いた帽子を被つて居た。

田島の店では、珍々さんが來ると、私の叔父も、番頭の久七も喜色を浮べて歡待した。珍々さんは、

「今日は。」

と支那人特有の緩漫な調子で挨拶する。

「今日は。」

と叔父らが答へる。珍々さんが店頭へ腰を下すと、新吉はかねて用意してある銀の水煙管を珍々さんに出すのである。それは、日本の煙管とは全く異つて居た。小さい銅壺のやうなものに長い吸管が附けてあつて、一方へは上等の刻煙草を詰め、一方へは水を入れるやうにしてあつた。珍々さんが煙草へ點火してゆつくり吸ひ始めると、ごろごろと水の音が聞えて、煙草の味が水によつて大分、柔げられ、甘美になるやうな具合になつて居た。

珍々さんが、春の日永を樂むやうな心持で煙草を喫して居るうちに、田島では、ハンケチの見本帳を其の前に差出すのだ。それには、牡丹の花や、まんじ巴や、桃の實などが模樣風に藍色で印刷されたのが多かつた。

「これ大層宜しい。」

珍々さんは、自分の氣に入つた見本に接すると、かう云つた。だが彼れの氣に入らないものは、卒直に、

「これぺケあります。」

と云つた。そして珍々さんは、彼れが「これなら宜い。」と思つたハンケチを取混ぜて二三種註文するのだ。彼れは他の狡猾な支那商人のやうに無暗に値切らなかつた。あつさりと程の宜い調子で、輕く値切つて、商談が総ると、直ぐに「さようなら」と云つて歸つた。

ある時、私は從兄の島次郎が珍々さんを馳走した自慢話をしたことを思ひ出した。島次郎は大抵新町か北新地（曾根崎）に耽溺して居て、商賣のことなどをすつかり忘れてしまつてるやうに見えた。だが、時によると、店の事に力を入れるやうな場合もあつた。

ある日、島次郎は、珍々さんを喜ばせるつもりで、新町のある茶屋（待合）へ珍々さんを迎へて、其處から、選り拔きの藝妓を二人ばかりを珍々さんと一緒に馬車へ乘せ、市中をぐるりと一巡した。そして島次郎は、元の茶屋へ歸つてくると、大勢の藝妓、舞子（半玉）を呼んで、賑かに騒いだ。其の時、新町で、一番美しい舞子六人を撰んで、小さい日支の國旗を持たせて、花やかに踊らせたさうだ。

其の時分の大阪では、府知事や、一二の富豪を除くと、たとひ數十萬圓の資産家でも、馬車に乘るものが殆どなかつた。勿論、彼等も何か儀式の時には、それを用ゐたけれども、其の他の場合は大抵人力車に乘つた。ところが島次郎は、川島の家が大分零落したに關らず、矢張、華美好きな癖を改めなかつた。彼れは最新流行の瀟洒な洋服を着用して、細身の金具が附いたステッキを打振つて、大道を濶歩した。また時には、ひとりで馬車を驅つて市中を一巡したこともあつた。彼れは、珍々さんを馳走した時のことを店の者に話して、

「あんな面白いことはなかつたぜ、知事さんか鴻池、住友でないと、馬車に乘るものがないやろ。そやさかい、皆が吃驚したやうな顔をして私の顔を見よるね。」

島次郎は、久七や新吉を捕へて、それを誇つて居た。彼れは時々氣まぐれに川口の得意先を廻ることがあつた。左樣した場合に支那商人から、ハンケチの代金を受取ると、其の儘、南久寶寺町の店へは歸らないで、茶屋へ至つて、借金を支拂ふことが折々あつた。其の都度、叔父は舌打ちして靑くなつた。

重い荷車を曳いた話

從兄の島次郎が新町や北新地で甘い歡樂の夢を繰返して居るうちに、私と新吉とは、時々、骨身を碎くやうな烈しい勞働を續けて居た。私等は月に五六回、川口居留地にある支那商館へ

重いハンケチの荷物を車に乘せて搬ばねばならなかつた。私等は、貨物の荷造が出來上ると、丁稚車——普通の荷車の稍小さくて輕快なもの——へ荷物を載せて、川口へ出かけたものだ。

久寶寺町から川口まで約一里以上の距離があつた。大阪は水の都であるから、其の間に西横堀や、立賣堀や、其の他二筋の河川があつて、再三、橋の上を通過せねばならなかつた。荷車を曳いて、橋を上下する時は、可なりに苦しかつた。殊に急な傾斜を持つた橋を渡る時は、全力を傾けねばならなかつた。川口へゆく途中、古川橋と云ふ舊式の古橋があつたが、其の橋上を通る際には、元氣な負け嫌ひの新吉さへひどくそれに惱まされた。

私等は、一里餘の道程を川口まで交代で荷車を曳いた。新吉が先きに起つて梶棒を握ると、私が後押しとなつた。そしてある時期に私が新吉に代つて先きへ起つと、新吉は後へ廻つて車を押した。

新吉は、左程健かでなかつたけれども、長い間、田舍で育つた丈に、私よりも遙かに筋骨が、がつしりして居て、力が強かつた。私は空氣がひどく濁つた大阪の眞只中に育つて運動をも怠つたから、筋骨が細く、力も弱かつた。最初、未だ丁稚車に馴れない時は、固い手觸りのある梶棒を握つて、一二町も歩くと、すうすう呼吸をして、心臟が強く鼓動した。殊に私が生れてから始めて、丁稚車を曳かうと試みた時は、第一に一向、氣が進まなかつた上に、重味に壓せられて、唯一歩さへも踏み出しかねた。新吉は、

「意氣地のない人やな。」

と云つて、後から、うんと力を入れて、車を押してくれた。それでやつと、たどたどしい足付で、一町ほど曳いてゆくことが出來た。新吉は、私の切なさうな有樣を見て、憐むやうに笑つた。其の後、折々、丁稚車を曳くやうになつてから、大分呼吸が分明つて來て、以前にくらべると、餘程しつかりしたけれども、十四歳になつたばかりの私には、矢張荷が勝ちすぎて居た。

だが、私は暫く此の苛酷な勞働生活から逃れることが出來なかつた。時には、東京へ出奔しようと思つたり、田舍へ放浪の旅に出ようと思つたが、第一に其の費用の出所がなかつたので私はどうすることも出來なかつた。無一文で丸で知らぬ他郷へ流れてゆくことは、臆病な私に出來かねた。勿論私は當時の境涯を自然に與へられた運命だとあきらめてしまうことが出來なかつたけれども、一時盲從して居るほかはないと思つた。そして私は次第に勞働生活に馴れると共に學問から稍遠さかるや

うになつた、私はそれが悲しかつた。

私等が川口居留地へ荷車を曳いてゆく時に古川橋の際までくると、胸がどきりとした。其の橋は、もう居留地に近い、濁つた水がゆるく流れて居る場末の川にかゝつて居た。橋の名は、多年の風雨に晒されて大方消えて居た。其橋の両端は可なりに傾斜が激しかつた。そして橋板は大抵朽廢しかゝつて、處々が、穴だらけになつて居た。荷車が橋の上をゆくと、橋が、がたびし音を立てゝ、哀泣するやうに動揺した。

私等が重い荷物を丁稚車に乗せて、古川橋を渡る時には、駿馬が急坂を突破してゆくやうな勢で、うんうん云ひながら駈け上つた。車が頂點へ達すると、また呼吸も繼がないで全速力を出して駈け下りた。車は痛快に前進して、一氣に橋を渡り終ることが出來た。それから尻無川にかゝつて居る千代崎橋を渡ると、其處に川口の居留地があつた。

支那商館は、皆木造の洋館で、一體に煤んだ色を帶びて居た。其の戸口には、金字で福壽號とか、泰昌號とか云ふ屋號が掲げてあつた。其の前を私等が通ると、一種の臭氣が鼻を衝いた。それは豚肉の匂ひか、それとも胡椒や、バタなどの匂ひか唐辛子の匂ひか、わからなかつた。何でもそれ等雑多の匂ひが混合して浮動しつゝあるやうだつた。

私等が通りかゝりに開放してある窓を透ほして、ある家の室内を見ると、壁に紅唐紙などが張つてあつて、圓卓の周圍には三四人の支那人が湯氣のぼつぼつ立ちのぼる大丼の粥をさもうまさうに啜つて居た。また餘り品の宜くない三十歳ばかりの支那婦人が、鼠色の服を着けて、四歳ばかりの男の子を抱きながら、戸口のところに物思はし氣に佇立んで居る家もあつた。

私等は、路上でも、折々支那人に逢つた。彼等のうちには往來の人が見て居るのをかまわないで、つんと手洟をかんで行きすぎる男も居た。うす汚い風呂敷包を右の肩にかついで、豚尾を波立たゝせてゆく貧し氣な男も居た。其の男は、大方市内へ緞子や、綸子などを賣りにゆくのであらうと思はれた。

私等は、丁稚車と共に珍々さんの商館へ着いた。其處には、一寸した門や鐵柵があつて、玄關まで石疊が敷いてあつた。室内も小綺麗で、巧みな氣品のある字で「長壽萬福」と云つたやうな目出たい意味を書いた聯が垂れ下つて居た。私は新吉と一緒に此處へ幾度荷物を持つて來たか知れない。新吉が仕切状と判取帳とを出して、番頭の前に置くと、彼れは首肯いて、直ぐに受領の印を帳面へ捺してくれた。私等は裏手にある倉庫へ荷物を搬んでから「左様なら」と挨拶して歸つたものだ。

私は極めて内氣であつたから、殆ど支那商人と直接話さなか

つた。だが『三國誌』のうちへ出てくる支那の英雄らしい人たちには一度も逢はなかつた。支那商人は、軀幹だけ長大であつたが、一體に力が弱さうだつた。そして顔面にいくらか緊張したところがないやうに見えた。それでも、私は支那商人を好まないのではなかつた。機會を見て、自然に親んだら、相當に親み得るやうに思はれた。けれども少年の頃から特に潔癖な私は彼等が不潔を氣に留めないのが、何となく、不快に思はれて仕様がなかつた。

□

閑話休題、さて私等は、支那商館へ荷物を渡してしまうと、やつと一段落濟んだ輕い氣分になつた。歸途は空車だから、餘り人通りのない往來へ丁稚車を道いて、暫くそれへ腰を下して、新吉と共に休息した。そして誰れに遠慮をすることもなしに、大福餅や、煎餅を頬張りながら、新吉と雜談した。此の時ばかりは、私ものびのびした心持で、廣い自由な大空を仰いで、生の悲痛に取卷かれて居るのを暫く忘れることが出來た。

其の時、私の頭には、勞働の苦みの後にくる一種の快感と云つたやうなものが、漠然と浮んだ。殊に夏などには、切にそれが感じられた。荷車を曳いたり、貨物を搬んだりする場合には努力、緊張の心持が始終續いて居た。夏季は全身から瀧のやうな汗が流れ出た。拭いても拭いても汗は中々乾かない。咽喉が頻りに渇く、暑さが強く沁みる、それ等の惱みから「何處でも宜い、此の儘、炎天の下にのたれ死をした方が宜い。」と思ひつめたことがあつた。

けれども商館へ荷物を渡して了ふと、居留地の樹蔭で暫く休むことが出來るので、勞働と暑熱との苦みから始めて解放された氣分になる。そして汗が乾いて、涼しい風が吹いてくるのを感ずると、始めて空車を曳いて歸途に就くのだ。其の途中、橋上に店を出して居る氷屋の旗がひらひらと氣輕さうに風に翻つてるのを見ると、私等は直ぐに驅け寄つて氷水を飲んだ。乾き切つた咽喉に冷めたい氷水が觸れた時の快さは、暑い最中に颯と夕立に逢つたやうな感じに似て居た。

だが、私等は川島の店へ歸ると、疲れが一時に出た。夏は全身がだるくて仕様がなかつた それに家居の人々は、もう入浴や夕飯をすませて、町の少女たちの「をんごく」の群を見ながら、晩涼を迎へて居る頃であるのに、新吉と私とは、午後八時頃にやつと冷水で身體を拭いて、粗末な晩餐の膳に向ふと云やうな有様だつた。私等は食事を終ると、急いで膳を片付けて薄暗い店へ行き、其處で、ごろりと横になつた。兩足の腿

のだるさには、新吉も私も苦んで、自分ながら、持てあまして居ると、

「烏丸枇杷湯」

と街上を呼んでゆく枇杷湯賣の悲し氣な聲が聞えた。それは暑氣を拂ふ功果があると云つて、船場あたりの商家では、誰れも時々それを飲んだものだ。枇杷湯賣は、朱塗の長方形の箱へ藥を入れたものを舁いで、赤玉の中に一羽の烏が枇杷の葉を喰へて羽をのばし乍ら飛んでる姿を黒く描いた提灯を前方の箱へ差出して居た。枇杷湯賣が田島の家の前を過ぎて次第に其の悲しさうな聲が巷から巷へ遠ざかつてゆくのを、寐ころびながら聞いて居ると、私は理由もなく、悲しくなつた。

それから夏の終りから秋の始めにかけて、船場の街の夜の悲みは、枝豆賣の淋しさうな聲から始るやうに思はれた。其の時分、私等は殘暑に惱まされて、夜に入ると、揚げ店へ出て涼んで居た。新吉は時々稻妻が光る空を見やつて、

悲雨蕭々、孤雁啼く、

壯心凛々又驚くに堪えたり。

とうろ覺えの悲壯な詩を低い聲で微吟した。私は、ぢつとそれを聞いて默つて居た。何處からともなく、

ガラン、ガラン。

と鈴の音が聞えてくる。

「さやあ豆、鐵砲豆え」

と長く引張つて眠いやうな聲がする。私は「枝豆賣が來たのだな。」と思つた。晝間は荷車の音、荷造の音、人力車の音、いろいろの物賣の聲などで、騷々しかつた街も、午後九時頃になると、全く死んだやうに靜かになる。左樣した空氣の中に聞える枝豆賣の鈴の音が昔の東海道あたりの宿場などの情趣を思はせるやうな哀愁をそゝるのだ。

ガラン、ガラン。

と鳴らす其の音が、どう云ふものか、私には、淋しい、やる瀬ない心持を起させた。私は勞働に疲れた手足を撫でながら、尚ほ鈴の音に耳澄まして悲し氣に筋向にある巡査派出所の赤い瓦斯燈をぢつと見た。其の時、植松と云ふ小間物屋の屋根のあたりに人魂が一つふわりと現はれて、幽かに光りながら、南の方へ飛んでいつた。私は何となく、全身に水を浴びたやうに、ぞつとした。

私は秋に入つてから、自分の孤獨をつくづく感じた。そして高等三年で、學校をやめて東京へ商業見習のために至つたと云ふ幼馴染の眼鏡屋の龍ちやんのことを思ひ浮べた。

「龍ちやんは、今頃東京で、どうして居るだらう。私のやうに

烈しい勞働と不自由の下に矢張呻吟いて居るだらうか。」

私は曾て見た龍ちやんのフロック姿と共に龍ちやんが、なつかしくなつた。だが、龍ちやんから、何の消息もないので、何處に居るのかわからなかつた。私は唯漠然と遠い東の空の彼方に龍ちやんが居るのであらうと思つた。だが、新吉には、左樣したことを話さないで、私は氣むづかしさうに默つて居た。

(第二)塵埃と汗にまみれて

結婚の裏面に潜む悲劇の話

田島の家庭は、私の從兄島次郎が放蕩するほかには、何の波瀾も起らなかつた。そして私が田島へゆくと間もなく、從兄は美しい妻を迎へた。從兄の結婚については、一篇の無邪氣なロマンスがあつた。從兄の妻は、美人が多いと云はれて居る廣島に生れたのだが、數年前父が亡くなると、母と一緒に大阪へ出て、堂島の裏町に住んだ。

裏町邊は一體に相場師の家が多かつた。從兄の妻となつた菊子は、生れついての美人であつた上に大阪で磨きあげて、一段の光りを加へたので、若い相場師のうちには、早く菊子に眼を着けたものが二三人あつた。「裏町のお菊さん」と云へば「あれだつか」と云はれるやうに、菊子の美しさは、もう人の噂に上つて居た。

それと共に、菊子の許へ結婚を申込むものが少くなかつた。だが、菊子の母は相場師の家業を嫌つた。たとひ小さくとも、堅實な商家へ嫁がせたいと思つて居た。菊子も性質が温和で、少しも御轉婆のやうなところがなくて、附近の花やかな、浮付いた空氣に染まなかつた。そして母と同樣、堅氣な商人を自分の良人に持ちたいと望んで居た。

ある秋の日、菊子は曇つた空の鬱陶しさうに堪えかねて、裁縫の手を暫く休め、氣をまぎらさうと、路次の外へ出た。中肉中背で、仇つぽい顏をして居た菊子の姿は、浮世繪の中から拔け出たやうに、道をゆく誰彼れの視線をあつめた。そこへ二十四五歲の若旦那風の男が、ひとり氣輕さうに通りかゝつた。其の男は、茶色の中折帽を被つて、結城縞の羽織などを着て、澁い氣の利いた風をして居た。彼れは、どんより曇つた空の下に目ざめるやうな女がひとり、銀杏返しに結つた、瓜ざね顏をくつきり浮べて居るのを見て、意外なところに埋もれて居た寶を見出したやうに驚喜に輝く眼を瞬つた。

菊子の視線が、此の若旦那風の男の視線とぴつたり會つた時、菊子は何となく、知らぬ男に見入られるのが恥かしいの

で、少し顔を赤らめた。だが、其の男をいやだとは思はぬらしい素振だつたと云ふのは、若旦那風の男が小意氣で、愛嬌があつて、さつぱりして居るらしい具合が彼れの容貌や態度の上に仄かに現はれて居たからだ。

若旦那風の男は、菊子の前を過ぎて、一寸振返つたかと、思ふと、やがて大通の方へ外れてしまつた。菊子の反響し易い軟かな胸には何となく、其の男の印象が、ひとり際立つて沁み込んだ。けれども何處の人で、どんな身分のものか、一向わからぬので、此の次ぎはいつ逢はれるものやら、豫期するわけにゆかなかつた。菊子は、其の事を母に話さないで胸の奥にたゝみ込んで居た。

ところが、其の翌日、堂島裏町に菊子の家を訪ふた三十歳ばかりの男があつた。平たいすべすべした顔をして、何となく、其の態度の上に藝人らしい垢抜けのしたところがあつた。菊子の母は、丸で見知らぬ客だつたから、不思議さうに出迎へたが話を聞いて見て始めてそれと首肯いた。

其の男は、田島の親戚で、島次郎とは從兄弟の間柄だつた。忠さんと云つて、文樂の人形芝居の三味線ひきをして居る鶴澤龜太郎の長男であつた。忠さんは、父の業を繼がずに、曾根崎新地で、小間物屋をして居た。氣短かで吃りであつたが、正直な蟠りのない人であつた。忠さんの妻は、ある義太夫語りの娘で、一寸見ると、藝妓のやうに黒つぽいところがあつた。

忠さんが、菊子を訪ふたのは、島次郎から縁談について依頼を受けた爲めである。由來を聞くと、前日菊子が路次の外に起つて居た時、通りかゝつた若旦那風の男が島次郎であつたのだ。彼れは菊子の姿を見ると、丸で電氣にでも打たれたやうに強いショックを感じたのである。彼れが菊子を見染めたと云ふと大分古風だが、お染久松や、お駒才三や、彼れがお夏清十郎などのロマンスから、不知々々、強い影響を受けて居る大阪の若い男女の間には、其の時分、往々左樣したことがあつたさうだ。

それで島次郎は、菊子に懸想すると、直ぐに家へ歸つて、父に其の事を話した。そして「是非、今日見た娘を妻にしたい」と云ひ張つた。父は島次郎が結婚すると、自然、耽溺もやめるやうになるだらうと考へたので、快く島次郎の請ひを許した。それと共に先方の身分、素性などをざつと調べた上、略ぼ結婚しても差支えないと思つたので、縁談のことを忠さんに依頼したのである。

忠さんは、左樣したことには馴れて居た。殊に從弟のためだと云ふので、萬事自分のことのやうにして、菊子の家を訪ふた。忠さんの吃り勝ちな話は、菊子の母の耳に、もどかしかつ

たが、要するに、島次郎の家が堅實一方の商人で、相當の資産があること丈はわかつた。結局、此の緣談は菊子の心次第と云ふことになつた。忠さんは、菊子の母の素振や菊子の様子などから推して「此の緣談は多分纏るであらう。」と確信したらしいのである。そして其の事を島次郎らに話して、成功を保證した島次郎も、其の父であるところの田島の叔父も喜んで、忠さんに感謝した。

忠さんの豫想は見當適中した。菊子は最初から島次郎を憎からず思つて居たので、田島の家へ嫁してゆくことに異存がなかつた。かうして菊子は、島次郎が自分に暖い愛を傾けるであらうと固く信じて、樂しい家庭の團欒を胸のうちに描きながら、田島へ來た。

□

ところが、愈々實地に當つて見ると、菊子の樂しかつた豫想は、結婚の翌日から丸で裏切れたのである。菊子は未だ一度も經驗しなかつた不幸と悲みとを味はねばならなかつた。勿論、忠さんが最初、菊子や其の母に話した通り、田島の家は堅實で家風も大體、宜かつたけれども、菊子に取つて肝心の島次郎が、どうしたのか、彼れ自ら進んで、切に求めた戀女房を容易く迎へて置きながら、結婚式を擧げた翌日から、そつと外出して、新町の茶屋へ入り浸り、四五日も歸つて來なかつた。

私には、其の時分、島次郎がどうして左樣なことをしたのか、一向わからなかつた。私は其の間の事情を後になつて聞いたのだが、當時島次郎には新町に深い馴染の藝妓が一人あつて曾て其の女と夫婦約束などして、可なりに離れ得ない關係となつて居たのだ。それで藝妓の方で、島次郎が急に結婚したことを聞くと、意地になつて、島次郎を呼び出し、どうしても離さぬと云ふやうなわけが出來たらしいのである。

一體、船場のぼんちの間には、生れ乍ら贅澤に育つて、十五六歳の頃になると、もう新町や、堀江や、宗右衛門町、北新地などに出かけて、遊蕩の空氣に浸るものが多かつた。そして其の時分から、藝妓の間に深い馴染の女が出來るから、後に妻を貰つても、矢張遊蕩の柔かい夢から醒め切らないのである。船場の商人の家に嫁した美しい女の運命は淋しい。中には若い良人の放蕩のために、一家が潰れて離婚の不幸を見たものがある。若やかな光りに滿ちた人生の春を空しく孤閨のうちに送る女もある。美妓の巧みな罠にかゝて、眞實な妻に背いた良人から見捨てられるやうな女もある。今の大阪はどうか知らないけれども、私の從兄が耽溺した頃には、左樣した悲劇が時々起つ

た。

菊子も遊蕩好きの良人のため一時淋しい日を送つた犠牲者の一人であつた。彼の女は未だ十八歳になつたばかりで、處女の初々しさ、清さ、素直さを持つて居た。島次郎が結婚の翌日から外出して、新町の茶屋に入り浸り、一向歸つて來ないのを、どう思つたか、十四歳の私には、わからなかつた。けれども其の顔には、少しも憂ひの色を見せなかつた。菊子は、毎日食時に私の叔父、叔母の前に座つて、水々しい姿でまめやかに給仕した。

菊子は最初から私を愛した。それは私の叔母に對する義理からでもあつた。菊子は沈默勝ちの方であつたから、言葉の上では、特に私を親愛するやうな心持をはつきり見せたことがなかつたけれども、時々私のために汁粉を拵えてくれたり、餅を焼いてくれたことがあつた。そして毎夜、千日前の竹林寺へ參詣する時には、折々私を同伴したことがあつた。私が行かない時には、叔母か新吉が同行した。

菊子が竹林寺へ參詣したのは、良人の放蕩が一日も早くやむやうにとの心願からであつたらうと今思はれる。だが當時の私には、菊子がどうして、竹林寺に參詣するのか、わからなかつた。多分、千日前の賑かな夜景が見たいからだらうと思つて居た。

久寶寺町から竹林寺へ參詣するには、心齋橋筋を一直線に南へ至つて、戎橋を渡り、道頓堀へ出るのである。私等が其の道頓堀の一角にある丸萬の三層樓について南へ曲ると、千日前になるのだ。其處の夜景は、大きな燈火の海と人の雪崩の中へ出たやうに、賑かだつた。竹林寺は、其の繁華な巷の中心にあつた。

竹林寺への參詣者は日夜絶えなかつた。だが、其の境内は、いつも薄暗かつた。本堂の前へゆくと、奉納の蠟燭の火が、いくつもほの白く、瞬いて居た。本堂の傍らには、護摩堂のやうなものがあつた。其の眞中に石臼のやうな線香立が置いてあつた。それへ無數の線香が立てられて、灰色の煙がゆるく左右になびいて居た。そして若い女や、老女が何か口のうちで唱へながら、狂氣のやうに、ぐるぐる堂の周圍を廻つて、お百度を踏んで居た。中には、跣足になつて居たものもあつた。

菊子は、それ等の女たちの中へ混ざつて、お百度を踏んだ。私はそれが何のためにされるのか一向分らないけれども、お百度が濟むまで、ぢつと待つてゐるのも退屈なので、私も菊子の後について、ぐるぐる廻つた。淡い香の煙、佛前に瞬く蠟燭の光、かんかん鳴らす哀れな鉦の音と共に私の心を沈靜な夢の世

界へ誘ふやうな氣分を味はせた。

菊子のお百度が済むと、歸途、法善寺の境内を廻り抜けて、時には、私に汁粉を馳走したことがあつた。其の汁粉は「夫婦ぜんざい」と云つて、其の邊で有名だつた。一體法善寺の境内から抜け道にかけては、東京の食傷新道と能く似た所があつた。落語の定席が一つあるほかは、縦横に蜘蛛の巣のやうに通じた細い路次に幾十と數へ切れない程の飲食店があつた。みどり、入船、二鶴などは、ずつと後になつて、私が友人を伴れて時々晩飯を喰べに出かけた家だつたが、未だ其の時分は、左様した家のあるところを知らなかつた。唯冬の夜、其の邊を通ると暖い、關東煮——東京のおでん——の匂ひがあつい酒の香と一緒に私の鼻腔を刺戟したことを覺えて居る。

かうして菊子は、熱心に毎夜、竹林寺へ參詣したが、矢張良人の放蕩はやまなかつた。家のものが皆島次郎のことを忘れた時分に、ひよつこり歸つて來たかと思ふと、二三日ぢつとして、またぷいと外へ出てしまうと云ふ風であつた。そして彼れの父が烈しく其の放蕩を責めると、却て反抗的に自棄する風を示した。

それで菊子は、嫁と云ふ名ばかりで、ひとり空閨を守る夜が多かつた。今日になつて考へると、菊子は人一倍美しかつた丈に、殊に健康であつた丈に、堪え難い懊惱と寂寞とを感じたにちがいないであらう。菊子は、重い憂愁を胸のうちに抱いて、人知れず、ほろりと泣いて居たかも知れないが、表面はいつも機嫌よく、愚痴一つ云はなかつた。別に嫉妬がましい風をも見せなかつた。其の心持を私の叔父は能く知つて居たので、いつも叔母と其の話をしては、菊子のことを非常にいたましがつた。そして菊子を眞實の娘のやうに愛した。

「宗右エ門町へ至つたかて、家のお菊のやうな別嬪はあれへん。」

叔父はかう云つて、逢ふ人毎に自慢した。だが菊子の懊惱は、其の位のことで慰められる筈もなかつた。菊子は毎夜、二階の六疊で唯ひとり、わびしく寝た。夜毎の涙は彼の女の袖をどんなにぬらしたであらう。かうして菊子が孤閨を守る日が一年ばかり續いた。そして島次郎が彼の女に優しい素振を見せたことは殆どなかつた。菊子の若い美しい春は空しく徒消されてゆかうとした。

虐げられた犠牲者の話

私は、其の後菊子の悲みを後にして、十五の秋、田島の家を去つた。私の事を一心に打案じて居た叔母は「清やんが親戚

のうちにばかり居ると、矢張わが儘が出て眞の修業が出來まへん。」と云つて、私の祖母と相談して淡路屋呉服店へ私を奉公させることにしたのである。それで私は親しい新吉や、なつかしい弟子らに別れて、一向、氣が進まぬながら、淡路屋の小店員となつた。

淡路屋は、伏見町御靈筋にあつた。有名な天麩羅屋の梅月とは極近かつた。四五代續いた古風な家で、呉服の卸商をして居た。其處には、保守的な空氣が濃厚に漲つて居たから、一般の店員に對しては昔風に厳重であつた。淡路屋の主人と云ふのは、四十歳位で、癇癖の强い人であつた。いつも其の白い額に青筋のあとが見えて居た。曾て彼れは一度發狂したことがあるさうで、眉目の間に沈鬱らしい色が漂うて居た。そして少年時代から少しも苦勞しないで育つたので、私等に對する思ひやりと云ふものが一向なかつた。

淡路屋へ來てから、私は田島に居た日よりも、一段苦慘な日を送らねばならなかつた。朝は大抵五時頃に起された。主人が神經過敏で、朝早く眼ざめるところから、床を離れると、直ぐに店へ來て、

「清藏早う起きや、もう遲いぜ。」

と私に先づ聲をかけるのが常だつた。私は最初、玆へ來た當初、奮發して早く起床したけれども、冬に入つてから、私はどうも、床を離れかねた。寒さが身に喰ひ入るやうに思はれるので、頭からすつぽり煎餅蒲團を被つて、縮み込んで居た。主人は私が尚ほ起きないのだと思ふと、

「清藏、清藏、どうしてるね、早う起きんか。」

と續けて呼んだ。私は仕方なしに寒さに慄えながら起きた。そして押入の中へ蒲團をしまうと、顔を洗はぬ先きに周圍の道路を掃き清め、綺麗に塵一本殘さぬやうにしてから撒水するのである。それが濟むと、拭掃除、ランプ掃除をすることになつて居た。未だ電燈や瓦斯がない時分だから、大小のランプを五つばかり掃除するのに可なりに骨が折れた。大きな鋏で、ランプの心を切つて、油壺へ石油を入れる時に、どうしても石油の餘滴や匂ひが手に附着するので、堪らなく、氣持ちがわるかつた。

それ等を濟ませると、私は始めて顔を洗つて、朝餐の膳に向ふのである。だが食事の時のほかは殆ど休息すべき暇がなかつた。間斷なしに、使ひ歩きや、雑用を命ぜられた。淡路屋ではいくら働かせても尚ほ足りないと思つて居たらしかつた。私の境涯は、牛馬と少しも變らなかつたと云つて宜かつた。私は不平で堪らなかつた。

淡路屋には、大小の番頭が四五人、小僧が私と共に三人居た。番頭のうちで一番年長な佐助は温和な肌合であつたが、偏屈で保守思想の結晶で、階級主義を無暗に振廻した。彼れは私等を自分の召使同様に見て居たので、夜分になると、勝手にいろいろの用事を命じた。

「清どん、一寸淡路町の洗濯やへ至つて來てんか。」

と云つて、自分の汚れたシャツや、猿股などを一纒めにして洗濯屋へ屆けさせた。時には午後八時頃に燒芋や、饅餅などを買ひにゆけと命ずることが折々あつた。私は年長者に對して反抗するのを好まなかつたから、いつでも佐助の云ふ通りにして居た。

淡路屋では、夜に入つてから、遠方へ私を使ひにやることが多かつた。それは、呉服物の回收や、貸與のためであつたが、伏見町から一里以上離れて居る天滿天神附近へ行かせられるのには、私も可なりに困つた。其處には、狹い路次の奥に住んで呉服物の行商をして居る小商人が、二三人居た。私はそれ等の家を訪うて、携へて至つた反物を置いたり、先方から返した品物を背負うて歸つたりした。往復二里餘の道を鋭い冬の夜風に吹かれながら、てくてく徒歩するのは、つらかつた。寒さと疲れとが、一緒に私に感ぜられると、生命のない棒のやうな氣がして、唯夜の暗の中を機械的に歩くと云つたやうな場合が多かつた。

□

淡路屋の主人が夜分、時々外出すると、私は必ず隨行しなければならなかつた。街燈の暗い時代であつたから、私はいつも提灯を提げて、主人の先きに起ちながら路を照らした。そして主人が知己の家に着くと、私は玄關の板の間で、蒲團も敷かずにぢつと其の歸りを待つて居るのであつた。冬の夜は、茶一杯飲まず、火鉢にも當ることを許されないで、がたがた慄えながら、默つて玄關で供待ちをして居るのが、身を切られるよりも悲慘だつた。

ある冬夜、主人が江戸堀の親戚へ赴いた時は、大分話が續いたと見えて、いくら時が經つても、主人は容易に玄關へ姿を出さなかつた。私は三時間も、四時間も、冷めたい板の間に腰かけて、主人を待つてゐた。やつと十一時頃になつてから、主人が私の前に起つた時は睡眠さと寒さとで僅かによろよろと起ち上つた。そして私は殆ど無意識に提灯をさげて、主人の先に起つた。

「清藏、何してるのや、しつかり歩んか。」

と主人が癇癪を起して私を叱り付けたので、はつと吾に還つて、また提灯を持ちなほした。それほど、私は困憊し切つて居た。

かうして私は始終牛馬のやうに扱はれたので、毎日片時も愉快を感じたことがなかつた。私の行く道には、暗い重苦しい坂路がいくつも、いくつも長く續いて居るやうな氣がして仕様がなかつた。私は全く商人となるつもりがなかつたので、呉服反物を扱ふについても些の興味を感じなかつた。店の側にある倉庫のうちには、五彩の美しさを思はせる絹物や、縮緬などが無數に列べられてあつたけれども、私は一度も振返つて見やうともしなかつた。唯私は一日も早く淡路屋を出て、人間らしい自由を得たいと思つた。

其の時分、私は大分烈しい神經衰弱に罹つて居た。自分の目的に副はない勞働に追はれて、日に日に身心の精力を磨り減らしてゆくのは、丸で自分の手で、自分を葬るやうなものだと、私は漠然と痛感した。私は其の事について、一度横堀の家へ歸つて、それとなく、祖母に相談したことがあつた。其の時、祖母は、

「そんな勝手なことを云ふものやないぜ。せめて二三年辛抱しなはらんか。そやないと明石の叔父さんや、近所の人に笑はれまつせ。な宜えか。」

と柔かに私を諭した。私は祖母に心配させるのが心苦しかつたので、其の時は默つて淡路屋へ歸つた。けれども私の目的は最初から呉服商人となるのでないから、いつ迄、祖母を安心させるために淡路屋に居ても、徒勞であり、無意義であることを思つた。そして私はもう一日も我慢して居られなくなつたので、誰れにも相談しないで、突然淡路屋を去つた。

其の時分、横堀の家は經濟上の都合から、阿波座の家から西南の方へ三四町離れて居た。附近には、矢張勞働者の家が多かつた。横町にはキリスト教の會堂があつて、高い尖塔が空を衝いて居た。私が家に歸つて、淡路屋をやめたことを祖母や、叔母に話すと、皆私に反對したけれども、強ゐて私の自由を抑へ付けようとしなかつた。私は其の儘、阿波座の家に留まることにした。

新聞賣子となつた話

今度の家は、私の眼に非常に燻んで居るやうに見えた。横堀の家は小綺麗であつたけれども、此處は店がすつかり土間になつて、陶器の繪を燒き付ける窯や、炭などが置いてあつた。四邊の壁も、天井も煤だらけで、一目見てうす汚い感じがした。

中の間と奥とは、疊の表が處々破れて居て、襖に雨漏りのあとがあつた。庭には、一本の樹木もなかつた。僅かばかりの空地に盥、桶、石臼、植木鉢などが雜然と置いてあつた。かうした家に居ると、心までが塵埃だらけになりさうに思はれた。

家に歸つた當坐、私はぶらぶら遊んで居た。叔母は働き好きだから、私が何もしないで本ばかり讀んで居るのを不快に思つて居るらしかつた。だが表面は素知らぬ顏をして、ちつと私の身の成行を傍觀しようとするらしかつた。田島の家では、私が一年經たないうちに淡路屋を出たと聞いて、

「餘り家で甘やかすよつて辛抱せんのや。もつと嚴しくせんとあかん。」

と叔父が呟いて居たさうだ。私は何もしないで其の日を徒費するのを心苦しく思はぬではなかつた。せめて自分ひとりの生活費だけでも、額に汗して得たいと焦慮した。だが差當り、どう云ふ方面に働いて宜いか、丸で見當が付かなかつた。車夫になるには、未だ年齡が足らないであらうし、日傭人足になるにも、未だ資格が備はらぬであらうと思はれた。私は全く自分の行路を見出しかねた。

其の時、不圖思ひ付いたのは、新聞賣のことである。叔母が其の方の經驗ある人から聞くと、一日二三十枚の新聞紙を賣れば、優に一人分の生活費を儲けることが出來ようとのことであつた。人一倍、内氣が私が人の雜沓する巷へ出て、新聞紙を賣り歩くことは、どうしても、不似合のやうに思はれた。或は丸で失敗するにちがいなからうとも考へた。けれども眼前、紹介も周旋も要らない新聞賣子をやつて居るよりほかに私の行くべき道がなかつた。私は思ひ切つて、新聞賣子となる決心をした。そして其の事を私の祖母から久寶寺町の叔母に話して貰つて五圓ばかりの資本金を借りた。

それはもう眞夏に近い時分であつた。私は二三日前から新聞賣子となるべき準備をした。それが、すつかり整ふと、其の翌日から、愈々巷に出て、新聞紙を賣り歩くことになつた。當日は、空がかつきりと晴れて居た。私は、午前六時に床を出て顏を洗ふと、直ぐに白シヤツ、白股引と云ふ服裝をして、腰へ新しい鈴を附けた。さてこれから藁草履をはいて外へ出ようとした時、どうも氣が臆して一歩も動くことが出來なかつた。

祖母は心配らしい顏で、私の様子を見て居たが、私が何となく躊躇ふ風をして居ると、

「清やん、何をしてるのや、早う行きなはらんか。」

と注意した。私は祖母に促がされて、仕方なしに外へ出て見た。何だか近邊の勞働者たちが私の行動を注視して居るやうに

思はれて二三歩行くと、釘付けされたやうに立ち留つた。

「お前は何たる臆病者だ。正直に働くのを何故躊躇するのだ。」

と私は自ら私の腑甲斐なさを強く嘲つた。そして今更、後へ引返して「それ見たとか。」と家の人たちに云はれるであらうことが、心苦しかつた。私は勇氣を出して、また五六歩進んだ。そしてある小さな文房具屋の前までくると、私は凡て別人のやうに元氣な少年になつた。

□

私が備後町のある新聞店に着いたのは午前七時頃であつた。私は以前、此の新聞店の前を幾度も通つたことがあつた。其の時は、別段、何の氣に留めなかつたけれども、さて改めて、新聞賣子となつて、其の店頭へ起つたは、何となくきまりがわるくて仕様がなかつた。最初、私は二三度、新聞店の前を往來して、どんな具合にして新聞を買はうかと思ひ悩んで居た。其のうちに、時は容赦なく進んだ。

もう私も躊躇して居られなくなつた。そして夢中で、新聞店へ飛び込んだ。店の若者は異様な風をして、何となく、勝手がちがつたやうな顔をして居る私の姿をちつと見た。だが私はそれにも頓着して居る餘裕がなかつた。唯急いで、其の日の『大朝』『大毎』を十五枚ばかりづゝ買ひ入れようとした。

私の傍らには、矢張新聞賣子らしい少年や若者が二三人居た。彼等は五十枚乃至百枚位の新聞を四つに折つて、敏捷に持ち歸つた。私のみひとり後に取り殘された。私は、甚だきまりのわるい思ひをして、三十枚ばかりの新聞紙を求め、それを四つ折にするかせぬかに新聞店を飛び出してしまかつた。

だが、私は買ひ入れた新聞紙をどの邊へ持つてゆけば一番能く賣れるであらうかと云ふ肝心なことを少しも研究して居なかつた。一體、其の頃の大阪では、一二の停車場を除くと、新聞紙の賣れるやうな場所がなかつた。市民の多くは其の家に取寄せて居る一二種の新聞を讀むばかりで、途中、新聞賣子からそれを買ひ求めるやうな人は極めて少かつた。それで東京のやうに諸方の街頭に新聞賣の群を見るやうな處は、私の少年時代に丸でなかつた。

私は、どう方向を執らうかと、歩きながら、考へたけれども、思案が付かなかつた。兎も角、梅田驛へ出かけたら、十枚や十五枚位は賣れるであらうと思ひ定めた。私は草履を引きずりながら、太陽の烈しい光線を頭上に受けて、丁稚車や、荷車や人力車などが、目まぐるしく動く巷を北の方へ歩いた。

私は梅田驛に着いて、待合室の中を彷徨したが、誰れも私に聲かけて、新聞を買はうとするものがなかつた。私の腰に付けてある鈴のみが、絶えず鳴つて居た。私は淋しかつたが、矢張默つて居た。もう待合室の大時計の針は、午前十一時のところを指して居た。

其の時、私は不圖考へ付いて、其の附近に客を待つて居る二三人の車夫に向つて、

「今日の新聞は要りまへんか。」

と勸めて見た。すると、彼等のうちの一人は、口を尖らせて、

「うす野呂め、俺らに新聞なんか要るもんか。」

と頭から嘲んで吐き出すやうに私を罵つた。私は餘りの暴言に嚇となつた。

「私もお前さんたちと同樣、額に汗して生活費を得ようとして居る勞働者ぢやないか。」

と云ひ返してやりたかつた。だが內氣な私には、どうしても、それが云へなかつた。私は默つて齒をくひしばりながら、直ぐに彼等からはなれた。私は「もう此處に居ても駄目だ。」と思ひ込んでしまつたので、疲れた足を引きずつて、空腹を忍びながら、南の方へ歩いた。大江橋を渡つて、中央郵便局の前を過ぎ、肥後橋へ來ても、矢張三十枚の新聞紙が朝買つたまゝあつた。私は、もうどうにも仕樣がないので、泣きたいやうな心持で、氣ぬけでもした人のやうに、阿波座の家へ歸つた。

私は家の人々に新聞が一枚も賣れなかつたことを微塵も話さなかつた。唯默つて新聞紙を押入の中へ投げ込んで置いた。だが、私は最初の一日で失望はしなかつた。二日目は少し賣れるかも知れないと思つた。何となく、前途にいくらかの光りがあるやうに想像した。

□

其の翌日、私は新しい勇氣を出して、夜の明け切らないうちに、床を離れて、備後町の新聞店へ出かけた。近所の家は、未だ深い眠りから醒めなかつた。私は涼しい空に殘つた月影を仰ぎながら、靜かに道を歩いた。未だ町を通る人が極めて少なかつた。一人の牛乳配達夫が忙はしさうにペンキ塗りの赤い車を曳いてゆくのに出逢つた。私が觀通りを歩いて居る時分、夜がほのぼの明けはなれて來た。

私が新聞店へ着くと、太陽がやつと空に上り始めた。私は前日の通り、三十枚ばかりの新聞紙を買つた。店の中は、八九人の新聞賣で一杯になつて居た。彼等は何れも敏活な手付で新聞

紙を四つ折にして積み重ねて居た。其處此處に普通の洋紙や、新聞がちらばつて紙を折る音が、ばさばさ聞えた。

　私は眞先に新聞紙を抱へて街頭へ出た。今度は前日と反對に南の方へ出かけて見ようと私は思つた。道頓堀附近ならば、人出が一番多いから、新聞紙の賣行がわるくないであらうと想像した。私が心齋橋通を南へ行くと、兩側の商家は、今やつと目ざめたばかりで、戸を開けたり、紺暖簾を軒下にかけたり、蒲團を片付けたりして居た。ある洋傘屋の前には、一人の小僧が眠むさうな顔をして、路上の塵を掃きよせて居た。

　私は先づ難波驛の附近へ至つたが、矢張丸で新聞が賣れなかつた。それから私は道頓堀へ引返して、角座や中座の前あたりを通つて見た。其處でも新聞を買ふものがなかつた。私は稍失望したが、今度は、太左衛門橋を北へ渡つて宗右衛門町邊を歩いて見た。日は、其のうちに高く空に上つて、ちりちり暑くなり出した。

　私はもう一枚や二枚は賣れて宜い筈だと思つた。けれども冷かな世の中は、殆ど私の存在を認めなかつた。貧乏のどん底に呻吟いて居る一人の少年を呪つて居るのではないかと私は思つた。そして宗右衛門町でも、矢張新聞が賣れないので、私は大分失望した。もう大地を踏む足にも一向、力がなくなつた。それに正午近くなつて過度の運動のために、烈しい空腹を感じて來た。それを堪えて、炎天の下を歩いたので、眼が昏みさうになつた。

「もう一切が駄目だ。私の行く道は荊棘ばかりだ。此の上は、どうなつても宜い。賣れない新聞紙は、すつかり、道頓堀の中へ投げ込んでしまはう。」

　私は非常にひとりで激昂した。今直ぐに大地震が起つて、大地が亀裂すると共に、私を一呑みにして、呼吸の根を絶つてくれたら宜いと思つた。私は癇癪まぎれに、二三枚の新聞紙を手荒く引き裂いて、大地に捨てた。そして狂的に笑つた。

「新聞屋はん。」

と誰れか私を呼び留めるものがあつた。それは、ある旅館の女中であつた。其の時、私は昏倒しさうなそして狂しさうな氣分から、はつと醒めて新しい元氣によみ返らうとした。そして女中の許へ駈け寄つて、一枚の新聞紙を買つて貰つた。それは唯一枚ではあるが、私には何とも云へぬ嬉しさを感ぜしめた。此の勢でゆくと、私は未だ四五枚賣れるであらうと豫期した。だが、それは餘りにわが儘な空想に過ぎなかつた。どうしても一枚以上は賣れなかつた。嗚呼只の一枚！　私は腹立たしくなつた。町の兩側に列んだ藝妓屋の前を通ると、涼しく着飾つた

女たちが出入して、誰れも彼れも、樂しさうに嬉々として居た。彼等には、何の屈托もなさ〻うであつた。左様した浮いた歡樂の空氣が漲つて居るうちをゆく私は冷めたい大伽藍の一隅にひとり殘されたやうにさびしかつた。

　私は逃げるやうにして、宗右衛門町を去つた。そして午後二時頃、やつと家に歸ると、全身がすつかり汗でぬれて居た。私が泥に汚れた足を洗つて、中の間に落着くと、強い疲勞感が一時に私を壓して、直ぐ横に倒れたま〻、夕刻まで動かなかつた。

　三日目には、もう新聞を賣り歩く勇氣が私にすつかりなくなつて居た。祖母らも、私が非常にふさぎ込んで、疲れ切つたやうな顏をして居るのを見て、強ゐて新聞を賣つてあるけとは云はなかつた。私は僅かな資本を以て始めた仕事が悉く失敗したのを心細く思つた。私は止むを得ず、新聞賣の職業をやめた。そして何か私にふさはしい仕事を他に求めようとした。

(第三)灰色の死を見つめて

生の惱みから逃れようとした話

私が歸つてから、家内では、生活上のことで、多少の紛爭が起つて居た。其の時分、わが國では、西南戰爭以來の懸案だつた朝鮮問題を中心として、支那（淸國）と日本との國交が將に破裂しようとして居た。それで川口在留の支那人らは、開戰を豫想して、日本商品を買ひ入れるのを手控へた。其の影響を受けた貿易商は一體に振はなくなつた。私の家は支那へ輸出する陶器のみを作つて居たので、俄かに生活の上にさし響いて來た。

　すべての問屋は、流石にゆたかな資本を持つて居るので、一兩年の不景氣に堪えてゆく丈の餘裕を十分に備へて居たが、私の家は其の問屋に使用されて、いつも一錢の貯へさへなかつたので、痛切に苦んだ。私が家に歸つた頃から、月末の支拂にも大分不足を生ずるやうになつて、叔母がそつと衣服を抱へて質屋の門を潜るやうになつた。そこへ私が一向、生活費を助けないで、毎日ぶらぶらして居たので、暮し向きは一層苦しくなつた。叔父は、それでも別にいやな顏をしなかつた。だが、叔母は心のうちで「厄介者が歸つて困る。」と思つて居るらしかつた。叔母は冷酷な女ではなかつたが、烈しい生活の脅威を受けると、氣がいらいらして、自然、私が働かないのを物足りなく感じたのである。私はそれが何より心苦しかつた。

其の頃、私には、いろいろの惱みがあつた。直ぐに生活難を

眼の前に控へて居ながら、容易に職業を得られない悩みがあつた。學問、文藝に對する憧憬や、熱情を徹底させることの出來ない悩みがあつた。家族や親戚らに私が持つ本質をいつまでも理解されないで、それ等と葛藤を醸生しつゝある悩みがあつた。本機發動から來た避け難い要求が滿され得ぬ懊惱があつた。だが、それ等の悩みを打開けることの出來る相手がひとりもなかつた。私はぢつと内部に其の數知れない悩みを抱いて鬱屈して居た。それがため、神經衰弱が一段ひどくなつて、私を責め、私を狂せしめようとした。

左様した時、私の周圍にひとりでも、宗教を合理的に信仰する人があつたら、私は其の人の袖に縋つて、神を求めたかも知れなかつた。けれども私の家族は祖母の佛教盲信を除くと、何れも宗教に冷淡なものばかりであつた。田島の家では、叔母のみが毎夜佛前に座つて、讀經して居たけれども、彼の女が信仰する淨土宗の性質については丸で知らなかつた。其の他の人たちは皆物質の追求者であつた。でなければ、惑信、迷信のうちに彷徨して居た。

私は、かすか乍ら、理化學の知識に觸れて近代科學思想の一端に共鳴して居たので、漠然と合理的な信仰を心のうちで求めて居た。其の點から私が出發すると、キリスト教に近付き易かつたのだが、それは私の祖母が佛教盲信の觀念に囚はれて、キリスト教を邪宗門として、異端の教へとして、早くから疑惑の眼を以て眺めて居たから、私にも、キリスト教のことをよく云はなかつた。そして教會の前を通ると、口癖のやうに、

「あれは切支丹のバテレンが居るところや、いろいろの魔術を使うて人を欺ますさうやよつてな、近傍へ行かんやうにしなはれ。」

と云つた。祖母は其の少女時代に京都、大阪で有名だつた豐田貢の疑獄などの様子を聞いて居たさうだから、當時の巷説を信じて、一概にキリスト教を魔法のやうに思ひ込んでしまつたのだ。そして私に『大鹽騷動實記』と云ふやうな低級な實錄物をも讀ませたことがあつた。それ等のことから、私は漠然とキリスト教を邪宗門とのみ誤想して居た。私は十一二歲の頃までキリスト教會堂の前を通ると、魔術を仕かけられるやうな氣がして、其處だけは、飛ぶやうにして走り過ぎたものだ。

かうした關係から私は、キリスト教に近付いて見ようとしなかつた。結局、既成宗教のどれにも救ひを求めず、また求め得ない懷疑狀態に沈み切つて居た。そして私の内部に鬱屈して居る悩みは、其の發露すべき出口を閉されて、もやもやして居た。」私は何となく、自棄的となつた。

□

私は所在なさに時々外出した。そして何の目途もなく、船場邊を歩き廻つた。ある日、私は學校で一番親しくした船田のことを思ひ出した。恰度、其の日は土曜に當つて居たので、午後になつたら、船田を訪はうと思つた。私は、もう二年ばかり、船田に逢はないのだ。

私は學校に居た時分、折々船田の家へ出かけたことがあつた。彼れの家は南久太郎町の本願寺別院に近いところにあつた。入口に小さい門があつて、其の門を這入ると、石疊が十五六間ほど續いて居た。玄關のところに船田の祖父母が隱居して、生花や、茶の湯、謡曲などを船場のぼんち等に敎へて居た。私の學友のうちで一番藏書家だつた山田は、以前から此處へ來て、時々謡曲を習つて居た。船田の祖父の涼しい若々しい聲と山田ののんびりとした太い聲とが交互に私の耳に聞えたことを覺えて居る。

私が阿波座の家を出て、船田を訪ふたのはもう夏の終りに近い頃だつたが、未だ可なりに暑かつた。私は船田がいつも居る二階の大きい室に通された。其處は、昔彼れの祖父が寺小屋を開いて居た時分、敎室にしたところだ。廣さは十二疊敷位あつて、古い色の剝げた疊が敷いてあつた。一方の壁には、大きな一枚の黒板がつるしてあつた。船田は明るい窓に近いところへ、小さい机を据えて勉强して居た。其の机の形は、芝居の『寺小屋』の場で能く見る机に似て居た。其の側に大分年代を經たらしい本箱が置いてあつた。

船田は久振に彼れを訪ふた私をなつかしさうな眼をして迎へた。私は彼れから他の學友の消息などを聞いた。そして船田は此の頃學校で廻覽雜誌が非常な勢で流行して居ることや、雜誌好きな淺山、山田らが熱心に左樣した雜誌へ書いて居ることを話した。私はそれが羨しくて仕樣がなかつた。

「私もこんなものを毎月一冊づゝ出して居ます。」

と云つて、船田は私に『幼年の友』と題した菊半截の廻覽雜誌を見せた。それは改良半紙を二つに切つて、更らにそれを二つに折つて、數十枚綴つたものだ。內容を論說、學園、文叢などに分つて、船田が全部執筆して居た。緻密な頭腦を持つて居た船田は、六號活字位の大きさで記事一切を淨書して『少年世界』や『小國民』の網目木版にも劣らないほどの挿畫を自分で刻明に描いて、ところどころに入れて居た。

勿論それは當時の『少年世界』や『筆戰場』などの摸倣に過ぎなかつたけれども、私は手際よく出來た『幼年の友』に感嘆の

聲をあげた。

「中々面白うおまんな、二三冊だけ、僕に暫く貸しとくなはらんか。」

私は船田の承諾を得て、古い分を數冊借りた。そして畫用紙に日本の國旗を美しく描いてある表紙を幾度ともなく、好愛の眼で見た。

「今日はこれで失敬しまつさ。」

と云つて私は午後三時過ぎに船田の家を出て、阿波座へ歸つた。私は歸ると直ぐに奥の間で『幼年の友』を讀んだ。其の記事は大體私が知つて居たことばかりだつたが、『文叢』のうちにある淺山の『富士山』山田の『納涼記』などが特に私の目を惹ゐた。今から考へると、それは『記事論說文範』などのうちにある文章を眞似て、其の辭句などをも取り入れたのだが、私は其の時分未だ左樣した作文入門の書を見なかつたので、淺山や山田らの進步に驚かされた。船田は卷頭の論說欄で『わが日本』と題して、

「余は日本を愛す。何故愛する乎。其の風光明媚なるが故なり。人民が勇敢義俠に富むが故なり。」

と書いて居た。どれを見ても、私には大きい發達の證據だと思はれた。

「私はもう愚圖々々して居られない。」

かうした感じが先づ胸のうちに起つた。そして自分の修養のために、廻覽雜誌を作つて見たくなつた。それで私は翌日、また船田を訪うて、私の志望を話した。船田は彼れの宜き身方を得たやうに喜んで午後『幼年の友』を協同で編輯することにしようと云ふことを私に告げた。私は夢中になつて、それに同意した。

□

私が『幼年の友』を編輯するやうになつてから、一時自分の悲痛な境遇も、生活のことも忘れて居た。私は『幼年の友』の原稿を書くのを日課のにやうした。自分の好きなことをやり始めると、私の根氣は可なりに強かつた。朝から夕刻まで筆を續けて動かして居ても疲れなかつた。時には晝餐を忘れてしまつて懸命に記事を書いた。祖母は老眼鏡の中から視線を私の原稿に向けて、

「根氣の宜え子やな。」

と云つて呆れたやうな顔をした。だが内心で私が左樣したものを書くやうになつたのを喜んで居るらしかつた。ところが叔母は、私が毎日一文の金にもならない廻覽雜誌を書いて、少し

も一家の生計を助けないのをひどく氣にして居るやうに見えた。祖母や私が外へ出て居ない時は、私の祖母が餘りに私を甘やかし過ぎること、私が途方もなく怠けて居ることなどを話して、少しでも、生活の負擔を輕くすることの必要があるのを良人に向つて切言したらしかつた。

それで、どんな場合にも、私に向つて一切小言を云はなかつた叔父が、ある日、私に

「家も不景氣で困つてるよつて、貴君も、も一度奉公に出て見たら如何や。」

と稍氣の毒さうに云つた。温和な邪氣のない叔父にかう云はれると、私はぢつとして居られないやうな氣がした。だが私はまた牛馬にひとしい奴隷生活に戻ること丈は絶對に好まなかつた。

私は退屈すると、時々二階へ上つた。其處は、窓に或間隔を置いて棧がはまつて居て、それに厚い紙が張つてあるので、光線が鮮かに流れ込まなかつた。いつでも夕刻のやうに薄暗かつた。そしていろいろの古道具が一杯に置いてあつた、それへ白い塵が積つて居た。ある片隅には父の近江屋萬助時代を思はせる十幾冊かの大福帳が蝕んだまゝ積んであつた。いつ頃買つたのかわからないやうな××の折本が二三冊あつた。

私は塵埃の匂ひがして冷めたい空氣がぢつと漂うて居る二階で寐ころびながら、××の折本などを繙いた。柳亭種彦の『田舍源氏』を巧みに應用した××××を精細に描いたものがあつた。そして其のうちにある若い男女の顔は江戸時代の俳優の舞臺姿を其の儘描いたらしいやうに思はれた。中には、××の粋な男女が×××いて居るところも描いてあつた。其時分、性慾についての惱みが私にからみ付いて絶えず私を苦めたので、それ等のロマンスに結び付けた××などを見ると、不健全な考へが深く私を捕へた。私には、それに打克つ丈の意志がなかつた。私は塵埃の匂ひを嗅ぎながら、ひとり頬杖をついて、いろいろの妄想に耽つた。

其の時、先づ私の頭に浮んだのは『大朝』へ本吉欠伸（堺利彦氏の兄）と云ふ不遇の靑年作家が書いた小説中の女主人公であつた。其の女は、美貌で勝氣であつた。そして旅の途中船の上で二三の惡漢らに脅かされると、偶然、其の愛人であるところの若い天才肌の畫家が彼の女の白い豐滿な腕に彫り付けてくれた目ざめるやうな櫻花の刺靑を見せて、却て惡漢らを脅かしたとである。

美しい刺靑の女！　私は左樣した種類の女を愛した。『大毎』にある通俗作家が書いて居た高橋お傳の

やうな毒婦をも私は愛した。私が其の時分、愛した女、夢みた女は、左様した病的な美しい女だつた。强い毒を含んだ妖艶な花のやうな女だつた。

饑餓の貧困に苦められた話

其のうち、日清戰爭が愈々始まつた。

川口居留地に居た支那商人は、大方、本國へ引きあげたので、どの陶器商も閑散になつた。私の家では、それがため全く仕事がなくなつた。叔母は、家計を助けるため、狀袋張の内職を始めて僅かばかりの日給を貰つた。だが、勿論それ丈で、一家の生活を支えることが出來なかつた。それに叔母は、其の時分始めて一人の女子を生んだので、以前よりも費用が多くなつた。

叔父は丸で仕事がないので無收入の形だつた。父は生活のことについて全く無關心であるから、仕事がなくなると、小說や雜誌などを耽讀して、平氣な顏をして居た。かうして一家が空しく日を送つて居ると、乞食になるよりほかがないで、叔父と祖母とが相談した結果、叔父夫婦と私等とは、別々に生活することになつた。そして私は祖母と父と一緒に阿波座のある裏長屋へ急に引越した。それに續いて、叔父夫婦も亦私等が居る眞向ひの裏長屋へ轉居した。かうして一家が、ばらばらになつて別れたのは、私の家に數十年間、曾て見られなかつた淋しい生の悲劇であつた。

其の時以來、私等のどん底生活が始まつた。私等が引越して來た裏長屋は、體の宜い貧民窟だつた。大抵二疊、六疊の二間しかない家が十數軒、窮屈さうに列んで居た。それ等の家に住む人々は職工や肥辨ばかりで、いつも、貧乏を喞つ群のみだつた。それに日清戰爭の影響を受けて、失職したものもあつた。

私の家は、疊が大方破れて汚くなつて居たので、其の上へ澁紙を布いて座ることにした。壁は何處も荒塗りで、此處彼處に古新聞紙が貼つてあつた。それに床が低いと見えて、濕氣がひどかつた。そして共用になつて居た井戸の水は金氣(かなけ)があつて少し濁つて居た。私等が一番困つたのは、引越したのが夏であつたから、夜に入ると蚊と蚤のほかに南京虫が、ぞろぞろ出てくることだつた。

一家はひどく南京虫に苦められた。毎晩、此の虫が一齊に私等を狙うてくる時分には、痛痒のために眠れないことが多かつた。もう堪らなくなると、私は豆ランプを點(とも)して、蒲團の周圍を探し廻つて、扁平な褐色の鎧を着けて居る南京虫を一つ一つ押潰した。其の都度何とも云へない臭氣が彼の虫の身體から放

射されると、私は嘔吐を催ほしさうになつた。

私等の家では、誰れひとり働くものがないので、毎日、家財、道具を屑屋などに賣り拂つて、細々と生活して居た。祖母は左樣した時でも、愚痴一つ云はなかつた。一番安い南京米を買つて來て、三度の食時にそれを粥にして私等に喰べさせた。祖母はまた生計を節約するつもりで、自分が好きな酒を一時すつかりやめた。それは今から考へると、祖母に取つて餘程の苦痛であつたらうけれども、祖母は默つて我慢して居た。」

かうして、二ケ月ばかり賣り喰ひを續けて居るうちに、元來僅かしかない家の道具は次第に減つて至つた。私等は一ケ月余も理髪屋へ行かなかつた。父は蓬々と髯をのばして居た。私の頭髪ものび放題にのびた。錢湯へも殆ど入らなかつた。湯でざつと身體を拭く位のものであつた。毎日喰べる粥も後には、ずつと水を加へて、糊のやうな味のするものを用ゐた。いくら喰べても、喰べても、一時間ばかり經つと、もう空腹を感じなければならなかつた。

私は漠然と餓えの脅威を感じて居た。私は折々、祖母が小さい米櫃を見て「もう米がない、」と力なさ相に呟いて居るのを聞いた。もう私等は、餓えに近い狀態に居たので、此の上行詰ると、三食を二食とし、二食を一食に減ずるよりほかはなからうと思はれた。勿論私はそれについて、はつきりした意識をもつて居たのではなかつたけれども、何か知ら餓えの脅威に日夜、神經を惱まされて居た。

□

私は毎日繰返へされるどん底生活に堪えかねた。そしていくらかの金を得て、祖母の心配をやすめたいと懸命に思ひつめた。其の時、私は久しく逢はない亡母の弟のことを胸に浮べた。それは私の叔父に當るわけだから、たとひ平生餘り交通しなくても、現在の窮境について話したら、多少の補助をしてくれるであらうと私はひとりで想像した。

其の叔父は、濱田兵三と云つて、島の内の佐野屋橋筋に小さい古着屋の店を張つて居た。もう四十二三歲の分別盛りになつて居たが、若い時に無斷で家を飛び出して、諸方を放浪してあるいた末に、大阪へ戻つて、鍋燒うどんを夜分賣つて廻つたこともあつた。大阪ではそれを「夜なきうどん」と云つた。

兵三は左樣した苦勞を重ねた人であるから、私は、可なりに同情があらうと思つて居た。それで私は、ある日、五圓ばかりの金を借りたい爲めに、暑氣の烈しい時分に洗ひざらしの單衣を着て、兵三の店を訪ふた。

兵三は私の母に似て矢張近眼であつた。唇が少し厚くて、口の大きいところも母と同様だつた。彼れは私の姿を見ると、眼を細めて、

「満之助か、よう來たな。」

と云つて、もう大分古くなつた薄い一枚の座蒲團を出した。

「叔父さん、どうも御無沙汰して、すみまへん。」

と私は叮嚀に頭を下げた。兵三は私の母の話をして、感慨深い顔をした。そして私の母が亡くなつてから、近江屋の家も全く滅亡同様の状態に陥つたのを嘆いた。

私は無口な方で、兵三の話ばかり聞いて居た。そして五圓の借金をいつ云ひ出さうかと考へたが、どうしても、云ひ難くかつた。折々「五圓」と云ふ言葉だけが、口の際まで出て來さうだつたが、それを胃の腑へ呑み下すやうに、私は唾を嚥下した。

だが、私は阿波座の裏長屋に祖母と父とがはかない日を送つて居ることを思ふと、此の儘、默つて歸るわけに行かないと感じた。

「叔父さん　誠に勝手だすが、此の頃は家が非常に困つて居ますので、五圓ばかり拝借さして戴きたいと思ひますが、どうでつしやら。」

私は顔を赤くして、やつとこれ丈頼んで見た。それを聞いた兵三は、ちらと苦い色を顔に浮べたが、貸すとも、貸さぬとも、はつきり答へなかつた。

「左様か、それは氣の毒なことや、何ならお前が私の家へ小僧代りに來たら、どうや。其の方が双方のために宜えぜ、毎日三度の飯はどつさり喰べさしてあげる。」

兵三はかう云つて、冷かに私を見た。それは私を励ますためであつたか知れなかつたが、一本筋に自分の道をゆかうとする私には、強い反感を與へた。

「そんなに威張る奴に一錢も借りたくない。」

私は憤りに燃えて、かう決心したので、兵三に一寸挨拶すると、鐵砲玉のやうな勢で、夢中に其の店を飛び出した。半町ばり北へゆくと、涙をほろほろとこぼして、ぢつと立ち留つた。私は其の儘、大地へ倒れて、思ひきり、泣きたかつた。

私は家に歸つてから、もう廣い大阪中に誰れも手頼るべき人がひとりもないことを思つた。私の環境は金錢の前に人情も義理も何もない人々で満されて居ることを切に感じた。そして饑えのために愈々倒れる日が來たら、祖母も父も私も一緒に死んでしまはうと決心した。

左様したせつぱ詰つた中で、父のみは一家のどん底生活につ

いて考へて居ないやうに見えた。唯空腹に責められるため、父は食時には餓鬼のやうに、粥を貪り食つた。澤庵などは碌に噛まないで鵜呑みにした。

「萬助、もつとよう噛んで、ゆつくり喰べんか。」

と祖母が注意しても、一向父の耳に入らぬやうであつた。父は懸命に箸を上下させて、瞬くうちに、六七杯の粥を啜つた。食事が済むと、父はけろりとして居た。そして退屈しのぎに私と將棋をさしたり、五目ならべをした。家には碁盤も、將棋盤もなかつたので、父がそれを紙で作つて用ゐた。

控訴院の給仕になつた話

日清戰爭は、少年の頭にも強く響いた。

私は貧しいうちから、祖母にねだつて、K舘の『日清戰爭實記』やS社の『日清戰爭錄』などを一冊づゝ買つた。正直で單純な私は、支那に對する强い敵愾心を燃やした。曾て私が好きであつた珍々さんまでが憎くなつた。そして日本兵の勇敢さに心を躍らせて『日清戰爭實記』などを貪り讀んだ。

それには、豐島沖の海戰、成歡、牙山の陸戰などが記されてあつた。大鳥公使や松崎大尉の名が殊に私の注意を惹ゐた。松崎大尉が敵彈に股を貫かれて「殘念！」と唯一聲叫んで倒れた最期は、私に悲壯な感じを與へた。私は船田と一緒に編輯して居た廻覽雜誌へ『松崎大尉の戰死』と題した記事を寄せた。

私等の周圍の人々も、井戸端へ集ると、戰爭の話ばかりして居た。街上を時々驅けて歩く號外賣の鈴の音が、私等の心を强く刺戟した。かうして戰爭氣分が、大阪市民を支配して居る最中に私等の家は、毎日餓えの脅威の下に生き甲斐のない日を送つて居た。私は、其の時分妙な夢を見た。それは蒸暑い晩であつた。私はいつもの南京虫や、蚤蚊に攻められて、うとうと眠つて居た。不圖、私の前へ來た祖母と父とを見ると、二人共、骸骨のやうに痩せ切つて、肋骨が一枚々々見えるほどになつて居た。そして頬の邊が、げつそり落ち込んで 眼ばかり光らせて居た。

「もう一錢の貯へもないのや、米櫃もすつかり空になつた。明日からどうして暮らして宜いか見當が付かん。」

祖母はかう云つて居る。父は何が可笑しいのか、それを聞いて、げらげら笑ひ出した。私は悲しい心持になつて、自分の頬の邊を撫でゝ見た。矢張私の頬の肉もすつかり落ちて顴骨ばかり高くなつて居た。また私の手足を見ると、細い棒のやうになつて居た。私は堪らなくなつて、吾知らず泣き出した、其の聲と共に私の夢は醒めた。私は全身にびつしより汗をかいて居

た。

私は其の妙な夢が、一家の運命を暗示したのではなからうかと思つた。餓死するか、乞食になるか。私等は近いうちに、何れかを撰ばねばならないだらうと思つた。それに私等と別れた叔父夫婦も、矢張、其の日の生活に追はれて、到底私等を助ける丈の餘裕がないやうに見えた。私はいつそ横堀に身を投げて死んだ方が宜いと思ひつめた。そして雨が淋しく降る初秋の夜に唯ひとり家を出て、信濃橋の上に起つたことがあつた。私はどうして此處迄道を歩いて來たのかわからなかつた。不圖、橋の下を靜かに流れて居る暗い水の上をぢつと見つめた時、私はぶるぶる慄えて、覺えず、欄干によりかゝつた。

だが、私は左樣した危機を辛らうじて通過することが出來た。矢張、生に對する執着の火が、尚ほ何處かに炎々と燃えて居たのだ。そして私は其の後、間もなく、曾て西横堀の家で馴染になつた人の世話で、控訴院の給仕となつた。其の時、私の月給は二圓五十錢だつた。それは餘りに少い額であつたけれども、新聞賣子となつて、苦い經驗を嘗めた私には、新しい希望を起させる光りとなつた。

控訴院は、若松町の大阪地方裁判所の東隣にあつた。貧しい裏長屋にのみ生活して居た少年の眼にはそれが可なりに宏壯な建物に見えた。私は其處で一番忙はしい民事書記課の給仕を勤めた。私は最初の日から、諸帳簿の運搬や、訴訟記錄などを判事の許に屆けるため、朝から夕刻まで、休みなしに駈け歩いた。

控訴院には、給仕が十二三人居た。彼等は大抵無産階級の子であつた。一體に粗末な服裝をして居た。だが、中には、小さい煙草屋や、洋服屋などの子も居て、小ブルジョアの氣分を漂はせて居たものが二三人あつた。彼等は、私等にくらべると、遙かに美しいさつぱりした服裝をして居て、顏の血色も宜かつた。

彼等のうちで、私が親しくしたのは秋野と北村とであつた。北村は給仕のうちで一番古参で私よりも一歳長じて居た。彼れは頭を角刈にして、妙に氣取る癖があつた。そして給仕仲間の誰彼れに向つて、勿體振つた言葉を用ゐた。何となく、外見は「官僚の卵」と云つたやうなところがあつた。私は最初、北村を好まなかつた。成るべく、彼れに接近しないやうにして居た。ところが彼れも私も漢文學が好きなため、自然彼れから私に交際を求めたので、私も次第に彼れと話すやうになつた。そ

して私が「官僚の卵」と見た彼れの人物が存外、無邪氣で、心の弱い青年であることを知つた。

秋野は、鹿のやうに愛らしい眼を持つてゐた。彼れは、其の態度が示すやうに、優しく從順であつた。それに能く人の氣を外らさない悧巧な所があつたので、彼れが勤めて居た民事第三部の判事たちは、云ひ合せた樣に秋野を愛した。私も秋野が好きであつたが、唯男らしい、凛としたところが彼れに欠けてゐたのを物足りなく思つた。

秋野と北村の二人のほかに、私が忘られない一人の可憐な少年が居た。其少年は板倉光太郎と云つた。彼れの父は、曾てある新聞の校正係をしたことがあつた。また『漢文大全』とか『文章軌範釋義』とか云つたやうな小さい本を出したこともあつた。だが彼れは途中で志を變へて、控訴院の雇書記となつた。そして彼れの長男や次男を給仕に出してゐた。光太郎と云ふのは、彼の次男である。

光太郎は、十一歳ばかりの年頃で、丸々と肥つた顔をして居た。そして其兄と異つて、腕白で、惡戯好きだつた。だが、彼れはどう云ふものか、いつも青黒い顔色をして居た。彼れは、民事第一部に勤めて居て、判事が法廷へ出て居ない時は、極めて閑散であつた。それでも、彼れは其の暇を讀書に用ゐやうとはしなかつた。氣むづかしい風をして、大きな眼を光らせながら、餡パンや餅菓子を頬張つて居た。時には、円い顔を机の上へふせて眠つて居た。偶ま廷丁らが集つて居る雜用部屋へゆくと、同じ年頃の給仕に向つて必然喧嘩を挑んだ。かうして彼れは特異な性格を持つて居たのだが、後に過食のため死んだ。それは私が北村と一緒に控訴院を去つて間もない頃だつた。

□

此の時分、私は控訴院の用事を濟ませると、夕刻から曾根崎のお初天神附近にある白鷗學舍に通つて、其處で詩文を修めた。學塾の主人は大原國助と云つた。ある小學校の正教員で、晝間は學校で教鞭を執り、夜分は、私塾に詩文を教へて、生活の補ひとして居た。彼れは秋水と號して、何となく、賴山陽の畫像に似た風采をして居た。だが、山陽のやうに天才的な閃きは、少しも容貌の上に出て居なかつた。唯酒が好きで、世事に疎く、超然として脫俗したところは、何となく、昔の文人らしかつた。私はかうした白鷗學舍の主人を好んだ。

白鷗學舍へ通學して居た人のうちには、優しい秋野松次郎も居た。それに野山段之助、川田讓が居た。此の二人は、私が秋水の講義を聞くやうになつて始めて知つたのだ。野山に間が

一文字を引いて、口元が引締り、聰明らしい眼付をして居た。彼れは甲州武士の血を受けて、其の父は可なりの幕臣だつた。ところが、幕末の際、彼れの父は逆境に起ち、それから間もなく、妻も前後して世を去つたので、野山は大阪のある商家に貰はれて、其の養子となつた。彼れの養家は最初富裕であつたが主人の歿後、次第に零落した。野山が中學に入るべき年齢となつた頃はもう其の日の生活に困るやうになつて居た。

けれども彼れは、左樣した貧乏に屈撓しなかつた。彼れは寫字生となつたり、文房具などの行商をして、一家の生活を助けた。そして夜分は、白鷗學舍に通ふばかりでなく、其の時分、始めて出たT館の『中學講義錄』を取寄せて、中學程度の學課を獨習した。哲學や文藝に關する新刊書、雜誌なども力めて讀んだ。彼れは私の友人中第一の讀書家だつた。

川田は、頬が痩せこけて、眼と眉との間が險しく迫つて居た。そして何處となく、多感で物に激し易いところがあつた。彼れはいつも鼻聲で物を云つたが、其の熱情の籠つた態度と才氣が迸るやうな辯舌とは、深く人を動かした。彼れの家は、野山や、私の家のやうに窮迫して居なかつた。兎も角、彼れの父はある會社の下級に居て、若干の月給で、一家を養ふことには差支なさ相だつた。そして川田は十二歳頃から郵便局の給仕になつて、後に局書記に昇進した。

彼れは、野山のやうに博く讀書したかつた、けれども詩文が好きで、一度彼れが感服した古人の文章や、詩歌はいつまでも記憶した居た。彼れは蘇東坡の文章と賴山陽の詩を好んだ。詩文の話になると、彼れは涼しい聲で、此の二文家の作品を朗誦した。其處には彼れの強い感激が滿ちあふれて居た。

私は野山、川田らと机を列べて、大原秋水の講義を白鷗學舍で聞いたのである。秋水は私等のために『十八史略』『文章軌範』から始めて『日本政記』『唐宋八家文』『史記』『論語』『孟子』などを講述した。彼れの講義は可なりに親切で、熱が籠つて居た。そして詩文を味讀する上にも、修辭學の方面から、多少の暗示を私等に與へた。私が司馬遷に共鳴し、柳子厚や、蘇東坡に傾倒するやうになつたのは、此の白鷗學舍へ來てからのことだ。

私は控訴院で一日用事のために駈け廻るので、白鷗學舍へくると、安心して疲勞が出て講義中、時々眠ることがあつた。耳許に秋水が何か云つて居て「此處は抑揚だ。」とか「伏線が效いてあつて、後の詞句と照應するのだ。」とか云ふやうな修辭學方面から說明する聲が聞えて居た。だが、私は眼を閉ぢて俯向いて居る丈で、一向、要領を得ることが出來なかつた。半醒半睡の間を彷徨うて居た。

私が白鷗學舍の講義を聽いてから歸途に就くのは、大抵午後八時頃だつた。其の時分に一里以上もある阿波座の家へ歸るのは、大儀だつた。私は疲勞の上に甚しい空腹に惱まされた。控訴院で、時々、午後三時頃に餡パンなどを喰べることあるが、直ぐ激しい勞働で胃腑に消化されて了ふから、白鷗學舍へ來た時分にもう空腹を感ずるのである。そして茶一杯さへ飮まずに講義を聞いて、徒歩で一里餘の道を歸るのだから、途中、腹のうちに力がなくなつて、目まひがしさうになつたことが度々あつた。

父が世を去つた頃の話

私の家は、其の後、都合で眞向ひの裏長屋に居る叔父の家と元の通り合併することになつた。其處は、私等がどん底生活を送つた家と略〻同じ貧しさを現はして居た。私が古机を据えた奥の間は、一日、太陽の光線が流れ込まないで、いつも夜のやうに暗かつた。

其の時分、私の父は脚氣を病んで居た。私等は其の日のパンを得ることに間斷なく追ひ倒されて居るので、ゆつくり父を養生させる丈の余裕がなかつた。父自身も、脚氣を左程、氣にして居ない樣子だつた。ところが、かうした油斷が父を死の方へ導くことにならうとは、誰れも思ひ及ばなかつた。

父の脚氣は、大抵每年起るので、今年も、昨年と同樣に間もなく全癒するであらうと私等は別に心配しなかつた。父は兎角養生を怠り勝ちにして居た。それがため、脚氣は急に重くなつた。其の上腎臓炎を併發した。それ以來、父の衰弱は烈しくなつた。もう附近の醫師を呼んでも、大分手遲れの形だつた。叔父夫婦も、いろいろ父を世話してくれたが、運命はもう父を見捨てた。父は梧桐の葉が心あり氣に地に落ちた朝、呼吸を引取つた。

今當時のことを考へると、私は堪らなく、父が氣の毒になる。私は僅かな月給を貰つて自分ひとりの生活費を支持する丈の力しかなかつたので、父のために十分の療養費を出す事が出來なかつた。叔父も亦同樣のはかない境涯に居た。かうして私等が、どん底生活のうちに喘ぐ間に父は淋しい終焉をとげたのだ。

父の前半生は、藥種問屋の主人として、相當に人に尊敬されたが、後半生は悲痛の連續だつた。貧乏と孤立と病氣とのうちに呻吟して、薄暗い六疊の一室で、少數の家人に取圍まれながら、四十五歲で世を去つた。何と云ふ寂寞、何と云ふ不幸！

父を長柄の葬場へ送つた日、會葬者の數は十人を越えなかつ

た。二人の人夫が見すぼらしい父の棺を舁いで、秋の巷をゆくあとへ、私は頭を垂れながら力なく續いた。私は天地がすべて憂愁の一色で包まれてしまつたやうに思つた。かうして私は永久に父と別れた。

今思ふと、父の晩年は殊に淋しかつた。別に何の仕事もしなかつたので、其の小遣錢は次第に減つてゆくのみであつた。父が一番樂んで居た貯金も、かうして不可能になつたことは、ひどく父を失望させたにちがいない。父の紙入は、年々古びると共に、其の中も空虚に近くなつた。父はそれについて一度も愚痴を云はなかつたけれども、内心、それが、どんなに淋しかつたらう。

それに父が貯金の次ぎに樂みにして居た食事も、朝晩、粥ばかりで、季節に伴ふ美味は一度も父の口に這入つたことがなかつた。此の事にも父は相當の淋しさを感じたであらう。かうして父の晩年は、人らしい生活をすることが出來なかつたのだ。彼れは無産階級の一人として、最も悲慘な生を終つた。嗚呼悲運の父よ！

□

私は父の死に逢つて、自分の心に鞭たねばならぬことを痛切に感じた。いつ迄も、控訴院の給仕をして居ては、到底自分の新生命を開拓してゆくことが出來ないのを知つた。此の事について、北村も私に同じやうな話をして居た。それで私は相談して、郵便爲替貯金局の書記補となるべき試驗を受けることにした。

爾來、北村と私とは、毎夜午前二時近くまで試驗の準備をした。愈々書記補の試驗が眼前に迫ると、私は二三日、徹夜して勉強を續けた。其の功果は、覿面に現はれて、七八十名の受驗者中、六人ばかり採用された中に、北村と私とが居た。

間もなく、私は天神橋南詰の爲替貯金局へ通勤するやうになると、七圓五十錢の月給を支給されることになつた。そして遞信省から桐の紋の付いた辭令を受取つた。私の名が同省の公報の末に六號活字で、ぽつりと北村と共に出て居たのを見た時、内心輕い誇りを感じた。それは、私の十七歳の春であつた。此のことをいつか聞いた田島の叔父は、始めて、私の才能を認めたと見えて、やつと私にいくらかの信頼を置くやうになつた。

私が爲替課の一員となつて、暫く通勤するうちに、私の周圍に文學趣味を愛する人々が少くないのに氣付いた。私と机を隔てゝ、斜めに向ひ合つて居た三谷は『文藝俱樂部』の愛讀者で

あつた。私の右隣に居た土屋は、嵯峨の屋主人の『初戀』や二葉亭の『浮雲』などを愛讀して居た。土屋は、私よりも遙かに文學の修養が深かつた。彼れは土佐出身で、濃い眉、高い鼻暖かい眼の所有者だつた。彼れは夜分、折々創作の筆を執つて彼れの一人雜誌であるところの『水車』に幾篇かを發表して、同僚の間に廻覽せしめた。其の原稿を見ると、彼れの筆蹟は山田美妙齋に能く似て居た。

それに土屋は、器用な男で、巧みに尺八を吹いた。時々役所からの歸途、其の師匠の家へ立寄ると見えて、友禪モスリンの袋の中へ一管の尺八を收めて、携へて來て居たことがあつた。忙はしい、色彩に乏しい事務室のうちに、彼れの愛する尺八を見出すと、私は何となく、一脈の藝術味に觸れる心持がした。

其の時分、日本は戰勝の勢につれて、社會が著しく活氣を帶びたので、出版界も自然に勃興して、いろいろの雜誌が一時に續いて出た。其のうちで、私が常に讀んだのは『太陽』『新小說』『文藝俱樂部』『靑年文』『文庫』『新聲』『早稻田文學』『少年文集』などであつた。そして私は小說も讀んだが、それよりも論文や紀行文を愛讀した。そして雜誌のほかにカーライルの『英雄崇拜論』や、ギゾーの『歐洲文明史』などを見た。早稻田專門學校から出て居た『文科講義錄』をも見た。

私の文藝に對する熱情は、自然、私の周圍に强固な、そして自由な文學的結合を作らねば措かなかつた。當時『文庫』『新聲』『少年文集』などで、東京に於ける文閥を打破るつもりで頻りに無名靑年の詩文を募つて、其の佳作を紙上に發表して居た『少年文集』では、大阪の小村忠藏（秋雨）や、三田村謙次（醒夢）が隔月位に作品を出して居た。小村の小說『千蘭盆會』『雛祭』『妹の墓』などは、どれも一味の哀愁が漂うて居て、野菊やうな趣致が私を魅した。私はかうした作品を書く彼れがどんなに瀟洒な風采をした才人であらうと、窃かに彼れの風采を胸に描いて見た。

三田村謙次は『西行法師を論ず』『鴨長明の人生觀』と云つたやうな題目の下に彼れの流麗な筆致を見せて居た。私は其の時分、漢文直譯式のごつごつした文章ばかり書いて居たので、三田村はどうして、かう柔か味のある文章を自由に書くことが出來るのであらうと思つた。

小村、三田村のほかに白鷗學舍の友人であるところの川田讓も、矢張『少年文集』に『一日の探勝』と題した紀行文を出して居た。それは『太陽』に出た田山花袋の『日光の山水』から暗示を得たものだ。かうして雜誌に注意すると、大阪の靑年中に、文學上の才能を持つたものが可なりにあつた。其の頃、私

は『新聲』に時々短いものを寄せて居たのである。
　當時、私は漢文直譯體の文章を書いて居た。今から考へると、それは可笑しいやうだが、其の頃は別にそれを怪むものがなかつた。それに一方では、また國文を書いたり。歐文直譯體の文章を書いたりするものがあつて、文體がひどく紛亂して居た。だが、誰れも、それを統一しようとしなかつた。何處までも亂れてゆくまゝに任せて居た。

（第四）暗中の微光

文學に志した若き群の話

　ある日、私は貯金局の食堂で、川田と文學上の理想などを話し合つた序に、不圖、小村忠藏のことを噂すると、
「君、其の男なら、貯金課の方に居るよ。」
と川田が云つた。私は小村が同じ役所のうちに居やうとは丸で豫期しなかつた。私は意外の歡喜に打たれた。
「それは愉快だ。是非一度小村君に逢ひたいから紹介してんか。」
と私が云ふと、川田は辨當箱をしまつて直ぐ起ち上つた。そして
「君これから直ぐ行かう。」
と私を誘つた。で私は彼れのあとについて貯金課へ出かけた。室内には、數十人の事務員が机によりかゝつて、懸命に算球を彈いたり、記帳をしたり、高い聲で字を讀みあげたりして居た。其のうちに長身で瘦せた五分刈頭の大きな一靑年が、考へ深かさうな顏して、帳簿をくり返して居た。
「あれが小村君だ。」
と川田が指した。そして彼れは小村に近付いて何か囁くと、小村は帳簿を閉ぢて、のつそり椅子から離れた。私は其の時、始めて茫漠として捕へどころのないやうな小村の顏を見た。
「始めて御目にかゝります。僕は西野です。」
と私が云ふと、小村は、
「僕は小村です、何卒宜しく。」
と答禮した。小村は縞ネルのシャツを肌に着けて、田舍者らしい手織木綿の袷を着て居た。始終、首を左へ傾けて、何か考へて居るやうに見える癖が彼れにあつた。私が窃かに想像して居た小村とは丸で異つて居た。瀟洒な才人ではなくて、正直な朴訥らしい、がつしりした靑年であつた。
　それ以來、私は小村と次第に親しくするやうになつた。時には、同じ役所で、寫字生をして居た野山や川田らと私が食堂で

落ち合つて居るところへ、偶然小村が來て、左に文學に就て氣焔を吐き合ふやうなことがあつた。

「今の大阪は文學的に全く振はない。一時出て居た文學雜誌も皆屏息してしまつた。二三の新聞に出てゐる駄小說が僅かに大阪文壇の殘喘をつないで居るやうな有樣やないか。」

私は激昂したやゝに、かう叫ぶと、誰れも熱した顏をして、若い眼を輝かした。

「僕には、大阪が餘りに物質にのみ囚はれて居るやうな氣がする。ソロモンの榮華は、野の百合の花に如かないではないか。靈に生きることを忘れてゐる大阪は禍だ。」

小村は重い口を動かせて、哲人のやうな態度で、大阪の物質的傾向を嘆いた。今の大阪は、どうか知らないけれども、私等が大阪に居た時分は、思想や靈性のことに注意を拂ふものが殆どなかつた。

「僕等も同感だ。强い靈性の姿で、物的文明の弊害を一思ひに燒きつくさんといかんな。」

野山は嚴しい調子で、鋭い意氣を眉のあたりに現はして、革新の第一聲を揚げた。

「賴山陽が生きて居て今の有樣を見たら、必度憤慨するにちがいない。」

と賴山陽好きの川田は腕を捲つた。

〔一〕

私等は主として漢文學や、西歐文學の感化、影響の下にあつて、江戸文學について余り知つて居なかつた。殊に戯作、好笑の末に墮した化政前後の輕浮な文學などを知らなかつた。そして文學に對して、最初から眞面目な、嚴肅な考へを抱いて居た。左様した立脚點から私等は大阪文壇を眺めて、ひどく失望した。また東京文壇で勢力を占めて居た硯友社一派の小說に對しても一種の反感を持つて居た。そして私は德富蘆花の『夏の夜語』や國木田獨歩の『武藏野』などに共鳴して、何か知ら、もつと清新な生眞面目な文學を頻りに求めて居た。

其の時分、私は『新聲』と大分密接な關係を結んで『新聲』を中心に七八人の友人が大阪に出來たので、それを土臺として、大阪に居る青年文學者を結束して、一つの新運動を起したいと考へた。それで私は各雜誌の投書家中、特に秀才と目されて居た人々と天下茶屋の一旗亭に會合したいと思つた。其の事をある日、貯金局の食堂で、小村、野山、川田らに話すと、誰れも「是非やり給へ。」と云つて賛成した。私は益々乘り氣になつた。

十月下旬、私は天下茶屋の松濤亭で在阪青年文學者の會合を天長節の日に開くことを各雜誌の投書家にあてゝ通知した。其の案内に接した人々の中から、八九名のものが出席の旨を答へて來た。それへ發企人側の小村や私を加へると、十二三名になるわけだ。私はそれ丈集れば十分だと思つた。

かうして私等は、十一月三日の午後、天下茶屋松濤亭に集つた。其の頃の天下茶屋は今とちがつて余程淋しかつた。廣い街道に沿うて、藁葺屋根の家が、少しばかりちらばつて居た。其の他はすべて田畑で、極めて閑寂であつた。私等は秋になると時々観月や、聽虫のために此處へ出かけたものだ。

松濤亭に人々が集つた日は、晩秋初冬の空が能く霽れて居た。亭を繞つて居た樹木は、大方黄葉となつて、時々、枯れた葉が、はらりはらりと芝生の上に落ちた。私等は、飛石傳ひに、茶室のやうなところへ集つた。床の間には、紅葉に瀧を添へた一幅の畫がかゝつて居た。そして大きい花瓶に黄菊白菊がとり合せよく活けてあつた。

其の日は私に取つて、初對面の人たちが多かつた。其のうちには、ある雜誌の懸賞小説に毎號應募して、いつも當選しないで、選外佳作の名で止むを得ず滿足して居た大石赤鱗が居た。ある毛織物商の番頭で、茶屋酒の味を少しも知らないで、暇があると、小説を書いて時々『少年文集』へ發表した村林天秋が居た。富井銀行の計算係をして、晝間は冷めたい數字に親み、夜は家で、新體詩の筆を執る織部周文が居た。ある醫師の藥局生をして、藥の香のうちに沈淪しながら、短歌を作る大山松風が居た。其の他、ある印刷所へ出て活字工をして居た藤川眠聲や、牛乳配達をしながら俳句を作る月野蘆舟なども居た。S書店の番頭で「文學狂」と云はれた海邊風來も居た。

私が發起人を代表して短かい挨拶をしてから何れも打くつろいで話し合つた。私が浪華青年文學會を設立して、文學上の新しい運動を起すべき月刊雜誌を出す計畫について話すと、誰れも心から共鳴した。それは私にしつかりした成算があるわけでなかつた。けれども自分の乏しい月給の半ばを割いて印刷費の一部にあてることや、編輯、庶務一切を自分が引受けることについては、最初から固く決心して居た。私には、おぼろ氣ながら一個の確信があつた。

私等が快く漫談するうちに、もう夕暮の色が白い障子の外に迫つて居た。少し風が出てうすら寒くなつた。私等は一滴の酒も飲まないで、熱い茶を啜つてから、思ひ思ひに歸途に就いた。私は質素な、親み深い其の日の會合を嬉しく思つた。

其の後、間もなく、浪華青年文學會は、私の貧居を事務所にし

て其處から、月刊雜誌『よしあし草』創刊號を發行した。それは菊版十六頁の貧弱な小雜誌だつた。標題は私が昔の大阪にちなんで附けた。編輯も、庶務も、會計もすつかり私ひとりで負担して、やつと形だけ出來た。

『よしあし草』の創刊號卷頭に『發行の辭』や文藝評論を書いた小村秋雨は、宙堂と云ふ匿名の下に『鬼面囈語』の題で、當時の關西文壇を烈しく罵つた。彼れは、二三の有力な新聞紙に據つて、低級な通俗小説のみを書いて居る大阪の某々文士を鋭く攻撃した。そしてある新聞に出て居た古い歴史小説を「チョン髷文學」の名で非難した。小村秋雨の口は重かつたが、彼れの筆は自在に動いた。

私等の意氣は、小村の『鬼面囈語』によつて代表されたが、素より最初から大した反響を期待して居なかつた。ところが當時文壇の一權威を以て見られて居た『早稻田文學』は、其の彙報欄で『よしあし草』創刊號の内容を紹して「前途有望な青年文士の鋭氣が現はれて居る。」と述べて、私等を推奬した。私等は、此の批評、紹介に勵まされて、前途に一縷の光りを認め得たやうな氣がした。

だが、文學を愛し、それを心から素直に熱心にはぐくんでゆかうとする青年が、當時の大阪に極めて乏しかつたので、私は文學會や雜誌のことについて、日夜、奔走しなければならなかつた。私はパンのために一個の俗吏として、毎日朝から夕方まで、爲替貯金局で執務したが、夜分は青年文學會の書記として、會員募集のために働いた。それが爲め、私はどの位修養の時間を失つたか知れなかつた。

私は會員募集のことで、日曜には、神戸や堺へ出かけた。其の他、市内に居る會員を時々訪問した。また新たに入會すべき見込のある人たちを尋ねて廻つた。それ等に要した雜費は、私が酒も飮まず、煙草も喫せず、懸命に節約して剩し得た金で支辨した。

「私は貧しい孤獨の一青年だ。私には兩親もない、兄弟姉妹もない、又唯ひとりの愛人もない。だから私は浪華青年文學會の事業を私の愛人だと思つて、私の力の及ぶ限り、其の宣傳と擴張とにつくしたい。そしていくらかでも、私の故郷であるところの大阪を文藝的に淸めたい。硯友社派のやうな戯文學ではなく、もつと密接に人生に交渉のある淸新な文學を創造して大阪に元祿期のやうに文藝復興の時代を再現させたい。曾ては大近松を生んだ大阪だ。西鶴を生んだ大阪だ。半二や出雲を生んだ大阪だ。かうした文藝に縁の深かつた大阪に新しい文學が生れないわけがない。」

私はかう思つて、自分の勞力も金錢も時間をも惜まなかつた。それが私に取つて一つの樂みだつた、慰めだつた、抑へ難い內部要求の發露だつた。かうして私が自己の孤獨を忘れて居るうちに、日は流るゝやうに過ぎた。そして私の十八の春、私の家は、苦い思ひ出の深い阿波座の裏長屋を去つて、大阪の東端にちかい北桃谷町へ移つた。

靈性の光りを求めた話

北桃谷へ來てから、私は以前にくらべると稍幸福であつた。其處は昔池があり、田畑があつて、桃花の名所となつて居たのである。そして往年、大阪の知名文士が桃谷を中心として住んで『浪華文學』や『葦分船』などを出したところである。私が桃谷へ移つた頃にも、ある知名の小說家が二三人居た。

此の附近は、阿波座や、船場とはちがつていくらか自然の風致に親み得る機會が多かつた。桃谷から五六町離れたところに豐太閤を思ひ出させる大阪城や、廣い馬場があつた。南の方へ十二三町もゆくと、平野の木立の間から直ぐ眼の前に天王寺の五重塔を仰ぐことが出來た。桃花の名所となつて居た桃山や、產湯稲荷にも近かつた。私は日曜や土曜などに暇があると、左樣した方面を散步した。

私はまた寺町邊を屢々散策した。其處は私の家から二三町の距離のうちにあつた。大阪のうちでも、寺町は別に閑寂な一小天地を形造つて居た。十數町の間、町の兩側に大小の寺が幾十軒も列んで、晝間でも、冷めたい沈靜な空氣に包まれて居た。『五人女』や『一代男』や『一代女』などを書いた井原西鶴の墓は、寺町八丁目の誓願寺にあつた。

私は寺町の淸い靜かさを愛した。殊におぼろ月夜の寺町を好んだ。夜に入ると、其處には、人通りが殆ど絕えた。柔い春の夜の月光を浴びた寺々は、淋しい陰影をかすかに地に投げかけて居た。ある淨土宗の寺に咲いて居る櫻の花が風もないのに、ほろほろと白壁のあたりに散つて、何處からともなく、木魚を叩く音が遠く聞えて居た。私は左樣した夜の情趣を心からなつかしく思つた。

桃谷へ來てから、私が自然の美に對する興會が次第に加はつた。私が芭蕉の俳文に傾倒したのは、其の頃のことであつた。殊に私は『嵯峨日記』を幾度となく愛誦した。私も出來るならあゝした內的に豐かな自然生活がして見たいと思つた。けれども私の生活は、左樣した自由も余裕をも、私に與へなかつた。私は內部に深く湛えて居る自然美渴仰の熱情と私の眼前に於ける醜い、そして貧しい實生活との間に於ける矛盾、葛藤の感じ

を『よしあし草』で論じたことがあつた。

私が自然美に共鳴し、芭蕉の俳文に傾倒して居るうちに、沈着な態度で、文藝研究の一路を辿つて居たのは小村秋雨であつた。彼れは當時、貯金局へ近い島町の汚い下宿屋に居た。それは、荒廢その物のやうな古い家だつた。彼れは、二階の一室に居たが、其處へゆくには、普通の階段とは丸でちがつた古梯子を上つてゆかなければならなかつた。

ある夕刻、私は貯金局から家へ歸る途中小村を其の下宿に訪ふた。私は踏むと、めきめき動く危い梯子を上つて小村の室へ這入つた。彼れの室は四疊半ばかりの廣さで、天井が極めて低かつた。壁は悉く紙塗りで、大分剝落したところがあつた。何となく、陰欝な感じを誰れにも與へる室だつた。後で小村から聞くと、彼れが此の室に住む前に下宿人が其處で爭闘して、一方の男が白刄をひらめかして、相手を斬つた時、鮮血が颯と逆つて天井や壁を汚したさうである。能く注意して見ると、小村の室の壁や天井に尚ほ血のあとが黑くなつて殘つて居た。

〔　〕

だが、小村は左樣したことに一切頓着しなかつた。彼れは田舍から持つて來たらしい色のさめた赤毛布を布いて、壞はれかゝつたやうな一脚の古机を前に据え、懸命に勉强して居た。彼れは、無口な方であつたから、いつも首を左へ傾けて、相手の云ふことをぢつと聞いて居ることが多かつた。稀れに口を開くとぽつりぽつりと言葉を途絶えさせながら、神の福音を說いた。

小村は、嚴肅なキリスト敎信者だつた。彼れの古机の上には、一卷の金縁の聖書が、燦然と光つて居た。彼れは朝、床を出て顏を洗つた後や夜分就床する前に熱心な祈りを神に棒げた。日曜每に、彼れは必然（きつと）天滿の敎會へ至つた。彼れは、其處である西洋婦人から、英文聖書の講義を聞いた。そして平生、飲酒、喫煙の害を私等に向つて話した。

彼れは、思想の自由を尊重して居たので、誰れに向つても、强ゐてキリスト敎に歸依すべきことを勸めはしなかつた。だが私が久振に彼れを訪ふた夜、彼れは私に向つて嚴肅な調子で「弱い羊のやうな人間は、偉大な神の力に縋つて生きてゆかなければ到底靈的に永生を得ない。」と云ふことを說いた。私は彼れの强い信仰を尊重した。けれども懷疑的な空氣に親み過ぎた私は彼れの云ふがまゝに心を決して、神の淸い暖い懷ろに飛込むことは出來なかつた。それに私は眼前の生活や、文學會の仕事などに追はれて、靜かに落着いて思索を高遠な境に向ける餘裕さ

へも持たなかつた。私は心のうちで、それを深く歎いた。

「僕はかうした懐疑的な性格に生れたのが堪らなく悲しい。小供のやうな清い心で神を求めようとする熱情が、どうしても湧いて來んのや。僕は近代科學思想に導かれた爲めに合理的な宗教を求めてやまないのだけれども、既成宗教のうちには僕を滿足させてくれるものがないやうに思はれる。僕は力強い信仰に生きてゆく君が羨ましくて堪らん。嗚呼僕は實際の上ばかりでなく、思想的にも悲痛な孤兒だ。」

私は小村に私の苦悶を打開けた。

「兎も角、キリスト教を研究し給へ。近世の新神學は、キリスト教が科學的にも合理的だと云ふことを證明してゐる。」

と小村は私を慰めるやうに云つた。彼れの茫漠とした顏には、明かに暖い同情が浮かんだことを其の眼の色に示して居た。彼れの眼は、慈悲深い一個の哲人のやうな表情をして居た。

□

私は薄暗いランプの下で小村と晩餐をすました。そして小村と近松の戯曲などについて、研究の結果を話し合つてから、彼れの宿を出た。私は空の星を仰ぎながら道を歩いて、小村が今まで眞直に辿つて來た道について考へた。

其の時、不圖、私の胸に浮んだのは、小村が未だ島町の下宿屋へくる前、其の附近にあつた商業義塾に寄宿して居た時分、三田村醒夢を感化したことだ。三田村は、伊勢山田の出身で、十四歳の時分、大阪へ出てある辯護士の書生をして居たことがあつた。彼れは、潑溂とした才氣を持つて居た丈に、早く遊蕩の味をも知つた。そして其の才氣を利用して、いつの間にか商業義塾の講師となつた。それは彼れが二十歳の時だつた。

其の後、三田村は塾長の信用を得て、寄宿生を監督をもするやうになつた。當時、偶然小村が寄宿舍にゐたので、互に毎日、顏を合せた。三田村は、小村の朴訥な樣子を見て始めから迂遠な田舍者だと侮つて居た。そして小村が嚴肅なキリスト教の信者で、文藝の上に於ても、優れた才能を持つて居ることを知らなかつた。

「此の鈍物め。」

と三田村は小村を眼下に見て居た。彼れは寄宿舍を一巡して、小村の室へゆくと、いつも傲然たる態度を示した。時には些細な口實を設けて、小村を罵つた。けれども小村に默つて、三田村に反抗しなかつた。

ある時、三田村は小村の挨拶の仕方がわるいと云つて、激昂の色を其の面に現はして

「失敬な奴だ、許して置かんぞ。」

と云つて手強く、小村の胸をどんと衝いた。

「あ痛い。」

と小村は叫んで、俯向いた。そして痛さを忍んで、ぢつと其の胸を抑へた。此の時、三田村は小村が怒つて起ち上るだらうと豫想したところが、一向抵抗せぬので、張合ひ抜けがした。小村が眼を閉ぢて、胸を抑へて居る様子を見ると、却て氣の毒になつて來た。だが、其の場は、三田村も默つて、小村の室を去つた。彼れの心には新らしい動搖が起つた。

小村の無抵抗主義は、いつの間にか三田村を征服した。大阪へ來てから、小村のやうな人格を有したものに未だ一度も逢はなかつた三田村は、始めて靈的なある物に觸れたのを感じた。そして彼れは、自分から進んで、小村と親しくするやうになつた。

私は小村と三田村の關係を思ひ出して、二人のために、其の前途を祝福した。私は輕い幸福な氣分になつて、桃谷の家に歸つた。夜は、大分更けたと見えて、家の人たちは、私が歸つたのも知らずに寢入つて居た。

□

其の後、浪華文學會の事業は、意外に順調に進んだ。『よしあし草』も第五號まで出た。勿論其の間に小村と私とが雇ひ入れた事務員が、印刷代にあてゝあつた金を持ち逃げして、私が苦しいうちから、すつかり辨償したやうな出來事もあつたが、最初にくらべると、餘程旺んになつた。私等は、京阪神の會員と奈良へ旅行して、序に龍田川の紅葉を見たり、五月雨の中を宇治、八幡に行吟して、俳句を作つたことがあつた。

其のうち、私は文學の一路を眞直にゆくについて、どうしても、一度東京に出て正式に修養しなければならぬ必要を痛感した。それには、いつまでも俗吏となつて居るわけにはゆかないので、誰れにも相談しないで、思ひ切つて、爲替貯金局の書記補を辭した。

其の頃、私にはいろいろの惱みが矢張附き纏うて居た。自分の好きな文學に親み、自然美を渇仰して、ロマンチックな夢を日々繰返して居るうちにも、青春時代に誰れもが切實に感ずるところの戀を得ないことが、どの位、私を淋しくしたか知れなかつた。私は小村が神を呼び、神の世界に憧憬をよせて居ることに對して、勿論強い共鳴をば持つて居た。けれども私は、

神よりも、より多く戀を求めてやまなかつた。私の懐疑的な心は、神にゆくよりも戀の方へ先づ行きたかつた。私は心の奥で切實に戀を追求した、優しい少女の暖かい心に觸れたいと云ふ望みを強く持つた。

だが、私の陰鬱な心持と孤獨な態度とは、どうしても、自分から進んで、少女に近付くことが出來なかつた。桃谷の家へ來てから、東隣の北山と云ふ家の娘をそつと愛してゐたが、彼の女に對して、私は何と言葉をかけて宜いか、其の方法がわからなかつた。私は、ひとり彼の女が朝や、夕方に美しく唱ふ聲をを家のうちで聞きながら、彼の女の可憐の俤を胸に描いて居た。それは私の片思ひに過ぎなかつたのだ。彼の女は、私と一度も話さないので、素より私の心持ちを知るわけがなかつた。私はひとり彼の女を戀し、彼の女を思つた。そして彼の女と一度も話し得ない自分の鬱屈した心を咀つた。

私はかうした戀の悩みから一時離れる爲にも東京へ行く方が宜いと思つた。東京へ行けば、必然私の新生涯が開かれるに違いないと信じた。それで私は東京行のことを小村や、三田村などに話した。彼等は何れも私の前途を祝福した、そして彼等も亦後から東京へ行くことを告げた。

東京には『新聲』を發行して居る加藤紫香を除くと、私には一人の友人も、親戚もなかつた。生馬の眼を抜くほどに敏捷だと聞いてゐる東京の都の人の中へ、私のやうな鈍い、迂濶なものが混つて生活してゆけるか、どうか、私には丸でわからなかつた。

私の懐中には、汽車賃のほかには二三圓の小遣しかなかつた。けれども私は時と場合とによつて、新聞配達でも何でもする考へであつたから、前途について杞憂しなかつた。行けるところまで行かうと決心した。それは私の十九歳の冬であつた。

私が大阪を起つ日、梅田驛まで私を見送つたのは、田島の叔父と小村秋雨の二人だつた。私は二人に別れを告げて、孤獨の身を東京行の汽車にまかせた。それは浪華青年文學會が大阪で未だ一度も開いた事のない文藝講演會を土佐堀の青年會館で催ほす一ケ月前のことであつた。

附記

本篇の人物中には現代文藝界、宗教界、學術、實業の方面などに相當優越の地歩を占めて居る人々が多くありますがすべて假名を用ふる事にいたしました。下篇『受難から光明の世界へ』にも人物は成るべく假名を用ひます。此の點は讀者諸氏の御高諒を請ひます。下篇には、無産階級の一人として、それに纏綿するところの悲痛、懺悔に滿ちた暗い生のうちに幽かな光明を追ふた眞相を率直に記します。切に讀者諸氏の御愛讀を請ひます。

將門論

——武士階級勃興の史的考察——

中島孤島

一 東國及び東國人

▲關東の狀態

日本民族の征服の針路が、西から東へ、南から北へと順を追つて進むにつれて、その文化も、關西から關東へ、關東から奧羽へと、年を經て擴がつて行つた。併し平安朝の文化がもう爛熟の域に達して、京都では藤原氏の黃金時代を現出した時にも、一歩帝都を離れると、そこにはもう暗黑な影が漂つてゐた。そしてこの文化の暗影は、その中心を遠ざかるにつれて、いよ〳〵濃厚になつて行つたことは爭はれない。取り分け、東國は西國よりも新しく開發されたことや、交通の不便なことや、人口の稀薄であつたことなどの關係から、文化の光に照らされることも、西國より遙かに後れてゐた。

阪上田村麿の大討伐を一段落として、蝦夷の勢力は全く奧羽以北に驅逐されたけれども、關八州の平野は、尙ほ久しい間太古の面影をそのまゝに、生ひ茂る草の底に眠つてゐた。波のやうに起伏する丘陵の裾をめぐり、沼澤の間を縫ひながら、豐島の入江に沿うて、騎馬武者の持つた弓の先も見えないまでに繁茂した蘆荻の間を一筋の道が、蛇のやうに走つてゐた武藏野の驛路の光景や、果てもない平原のこゝかしこに、ぽつり〳〵と部落を形作つて、泉の周圍や河の兩岸には、水田を拓き、草原には馬を牧つて住まつてゐた人民の狀態や、又その間には多くの土豪が、所在に城を構へて、五百騎、六百騎の郎等を養ひ、平生は山林を驅け廻つて、鹿狩り、狐狩りに日を送つてゐるが、何かといへば、互に家子郎等を召集して、河原の砂に血を流し

た殺伐な時代の有樣を、「今昔物語」や「源平盛衰記」などに散見する色々な傳說によつて想像しても見るがいゝ。

その頃の關東は、まだ充分に植民地の空氣を脫してはゐなかつた。獰猛な蝦夷人が、この平野に出沒した時代は、今では遠い過去の傳說のうちに消えて行つたが、それでも奧羽地方の守備として徵發された東國の壯丁が、騎射に長じたあの慓悍な夷族と接觸して、火の出るやうな、戰を交へたことは、まだ新しい記憶として、人々の胸に殘つてゐた。この後關東の武士が、馬上の勇者として、强弓の射手として、天下に名を轟かすやうになつたあの騎兵戰は、この異種族との多年の接觸の間に、自然と訓練された戰術であつた。

▲關東の豪族

彼等の祖先は、始めてこの平原に植民した當時から、「額に箭は立つとも、背に箭は立てじ」といふ有名な標語を振りかざして、頑强な蝦夷をこの平原から驅逐した勇悍な種族であつた。彼等の同胞はまた大宰府の防人として、遙々九州まで派遣されて、海岸の防備に任じ邊境の戍兵は東人でなくてはならぬとまで稱へられた。その東人の氣象は、今でも東國人の血に傳はつてゐた。彼等の間には、早くから歸順し同化した慓悍な蝦夷の血も多量に混じてゐたであらう。それと共に、地方官として、京都から赴任した貴族の血が、絕えず注入されて、土民の間に新しい貴族を形作つて行きつゝあつた。

大化の新制では、全國に國、郡、里の制を定め、里長、郡司、國司、を任命した。そのうち里長や郡司は、多く國造、伴造、縣主などといつたやうなその地方の舊家から採用して、その職を世襲させたけれども、國司は大抵中央政府の官僚のうちから任命し、陸奧、出羽及び太宰府を除いて、一般に在職年限を四年と限り、職田、位田を給する外に、官田の收入の一部をもその俸給に加へたので、位の低い割合には、收入の豐かな職であつた。

國には又その擴狹によつて、それ〴〵に大國、上國、中國、小國の等級があり、等級によつて官吏の數にも多少はあるけれども、大體、守、介、掾、目、史生、などの官吏が置かれて、國務を行つて行つた。これらの國司には、在任中その任國で新に土地を開墾すると、轉任の時までは、その土地を私有することが許されてゐた。こんな事情から、最初のうちは、割のわるい京官よりは、收入の多い地方官を望む者が多く、又一旦國司になつた者は、樣々な手段を講じて、その任期を延ばし、その間に有力な郡司などと結托して盛んに私田を開き、國司をやめ後た

も京都へは歸らうとせず、そのまゝ土着して、地方の豪族になりすます者が多かつた。この弊害を矯めようとして、朝廷では屢禁令を出して、國司が部下の郡司の女を納れて、妻妾とすることを禁じ、この禁令を犯した場合には、國司も郡司も一様にその任を解くといふ規定を設けたりなんぞして見たが、一向にその効果が擧がらなかつた。

當時はまだ多妻主義の遺風が、一般に是認されてゐる時代で、貴族の間では、正妻の外に多數の妾をもつのを普通のやうに思つてゐた。藤原師輔や、道長や、道長の父の兼家が、正妻を二人三人と有つてゐたのは、當時でも聊か例外であつた見えて、兼家は世間から、「三妻錐」といふ渾名をつけられてゐたといふことであるが、併し妾として多數の婦人に關係することは、一向に異しまなかつた時代だから、多少地位權勢のある男子の家庭には、正妻に生ませた嫡子の外に、妾腹の子女が澤山にあつた。尤も正妻の外は、大抵は女の里方へ預けておき、生れた子は母の手許で養育させるのが通例であつた。

それで又國司などとなつて、遠國へ赴任する官吏は、交通の不便その他の事情から、大抵は妻子を京都へ殘しておくので、自然と行く先きざきで、この手輕な婚姻を行つて、部下の郡司や土豪なぞの女を妾として、到る所に落胤を遺したことであらう。これらの落胤は、當時の習慣に從つて、母の手許で養育され、成長した後は、父の姓を名乘つて、土民の間に貴種として仰がれるのである。源頼義は相模守となり、平直方の女を納れて、嫡子義家を生んだが、又常陸の豪族多氣權守宗基の女にも一女子を生ませたことが、「奥州後三年記」に出てゐる。高望王の多數の子孫が、關東へ土着して、所謂阪東八平氏となつたのも、やはり同一の順序を踏んだものであつたらう。

こんな風に中央で志を得なかつた貴族の子弟は、續々地方官となつて諸國に下り、その地方の豪族と婚を通じて、次第に民間に勢力を扶植するやうになつた。かうして一たび地方へ土着した國司や、又はその落胤が、土民の尊敬を受けて、幾代か經過する間に、一門は次第に繁榮して、勢力範圍を擴張し、それ〴〵に土地を開墾して、一部の領主となると共に、或は皇室御領の庄官となり、或は權門勢家の莊園の莊司となり、或は廣大な牧場の監理者に任命されて、愈々その富と權勢とを加へて行つた。

▲「住人」階級

これらの新豪族は、舊來の土豪と相並んで、所謂「住人」の一階級を作り出して、所在に割據の勢を形作つた。「住人」とは

各地方に割據した大地主を指した語で、その地方の「草分け」といふほどの意味であつたらしい。これらの住人のうちには古代の國造、縣主などの家系に連なつた舊家もあつたらう、又下野の宇都宮氏尾張の熱田大宮司などのやうに、諸國の大社の神職を世襲して、その地方に重きをなしたものもあつたらう。又永年莊園の支配や、牧地の監督をしてゐる間に、その地方に根據を据えたものもあつたらう。併し中でも勢力のあつたのは、京都から下つた國司の子孫が、新たに地を開いて、その地方に土着したものであつた。桓武天皇の曾孫高望王が、初めて平氏の姓を賜はつて、人臣に降り、上總介として任國に下つてから、その子孫は、東國に繁茂し、王の諸子のうち國香は常陸の大椽となり、良持(又は良將)は鎭守府將軍となり、良兼は下總介となり、良文は武藏守となり、良茂は常陸少椽となつて、一族門葉が關東の平野へ根據を据えた。將門は實に良持の子で、將門の亂を鎭定した貞盛は國香の子であつた。貞盛の子維衡の子孫は伊勢にゐて伊勢平氏を起し、次男維持の後は、伊豆にゐて北條氏となり、貞盛の弟繁盛の子孫は、奧、羽、信、越に勢を張つて城、仁科、岩城の諸族となつた。良文は武藏守として荒川の沿岸にある村岡の地を開墾して、村岡五郎といつたが、その子忠賴は陸奧守となり、忠賴の子將常は武藏權守となつて、秩父郷に住み、その子孫世々秩父の牧の別當職となつて秩父氏を唱へ、その一門は畠山、葛西、豐島、河越、江戶、稻毛、榛谷などの諸族に分れて、武藏、下總、相模の諸方に蔓延した。忠賴の次男忠常は上總介となり、武藏押領使を兼ねて、武、總の間に勢力を張り、終には叛亂を起して誅せられたが、その子孫は一方には上總、千葉の兩氏となつて、房、總二國に割據し、一方には武藏に繁榮して、野與、村山の二黨となつた。又三浦、鎌倉、大庭、梶原の諸族は、いづれも忠賴の三子忠通から出たといはれてゐる。

それから源氏は淸和天皇の孫經基が、源氏の姓を賜はつて、武藏介に任ぜられた以來、平氏と相並んで、地方に勢力を扶植した。經基の子滿仲は、常陸介、武藏守、陸奧守となり、その長子賴光は、攝津の多田に居て、多田源氏の一流を起し、次子賴親は、大和守となつて、大和源氏の祖となり、三子賴信は、陸奧守、甲斐守に任じ、平忠常の亂を平げて、威名を東國に振ひ、鎭守府將軍に任ぜられた。賴信の子賴義は、相模守となり、子義家と共に奧羽の亂を平定し、義家は、その後關東の諸族を率ゐて、再び奧羽を平定した。この時から關東の武士は、大抵源氏の家臣となり、東國は源氏の勢力範圍となつた。義家の子義國の子孫は、上野に根を張つて、新田、足利の大族とな

り、頼義の弟賴清の子孫は、信濃に入つて村上氏を起し、義家の弟義光の後は、常陸では佐竹氏となり、甲斐に入つては、逸見、武田など、所謂甲斐源氏の一流を起した。

源平二氏について、東國に勢力を扶植したものには、藤原秀卿の一流がある。秀卿は下野の押領使として、貞盛と共に將門の亂を平げ、その功によつて、下野守、武藏守、鎭守府將軍に歷任し、その子孫世々下野の佐野にゐて、佐藤氏を稱し、分れて結城、小山、足利、下河邊の諸族となり、陸奥へ入つては、平泉の藤原氏となつた。その他嵯峨源氏の一流で、村岡五郎良文と相並んで、武藏に雄視した箕田源次宛、横山、猪俣、兒玉、丹、西、私市など、世に武藏七黨と呼ばれる諸族も、その祖先に遡れば、いづれも國司として下向した名族から出て、廣大な私領を拓き、ある者は又御料の牧場の監押者に任命されて、多年土民の間に勢力を扶植したものであつた。

▲武士階級の發生

こんな風に諸國に蔓延した所謂住人階級は、その勢力の根柢として、多くの土地を占有し、その土地によつて富を積んだものであるが、同時に彼らはその富を保護するための威力を備へてゐた。

元來大化の革新では、一般人民の帶劍を禁じ、徵兵の制度を立てゝ、全國の壯丁三分の一を徵發し、諸國に軍團を置いて、武備を練ることに定めてあつたが、その後この制度は次第に弛んで、種々な弊害が生じ、軍團の兵といへば、物の役には立たないものと相場がきまつてしまつたので、桓武天皇は一大英斷を下して、延暦十一年を以て、太宰府、陸奥、出羽、佐渡などの邊要の國々を除いた他の諸國では、斷然徵兵の制度を廢し、郡司の子弟から少數の健兒を採用して、兵庫や國府や關所などを警備させることにした。

この前後から諸國の秩序は次第に亂れて、京都を初めとして諸國に盜賊が横行するやうになり、安心して旅行をすることも出來ないといふやうな有様になつた。陸路には山賊が出沒して、往來の旅人を脅かし、海上には海賊が跋扈して、海上の旅客を襲ひ、諸國から京都へ運搬する貢納なぞも、途中で掠奪されるやうなことが度々であつた。「今昔物語」を見ても、兇賊袴垂の話や、源頼信が馬盜人を追つた話や、又豐後の僧が瀨戸内海で海賊に遭つた話や、さういつた當時の旅行の不安を想像させるやうな逸話が、數限りなく傳へられてゐる。

こんな狀態だつたから、當時旅行でもしようといふ者は、是非武勇に長じた從者を連れて行くばかりか、多少身分のある者

は、自衛のために武器を帶びて行かねばならなかつたのである。

で、帝都の治安を保つ必要上、嵯峨天皇の時には、今の警視廳ともいふべき檢非違使ノ廳が置かれて、治安警察の職を執ることになり、文德天皇の時には、諸國にもこの制度が布かれて、各國に一人の檢非違使を置いて、それ〲に部內の警務を掌らせたが、特に清和天皇の貞觀年中には、武藏に盜賊が多かつたので、各郡に一人の檢非違使を置いて、部內の盜賊を逮捕させたこともあつた。その他押領使とか、追捕使とかいふ名義で、諸國に置かれたのも、略同樣の職務を委任された一種の武官であつた。これらの職は、國司が兼任するか、さもなくばその地方で多少の武力を備へた豪族を採用したもので、國司の兼任の場合には、特に朝廷から隨兵を給せられる例であつたらしい。

かういふ世態の變化につれて、大寶令では太宰府管內の諸國及び三關國の國郡司に限つて許された兵仗を、貞觀以後は、公然その他の國々の國郡司にも許すやうになつた。從つてこれまでは地方に赴任する國司は、一族子弟を連れて行つてはならぬといふ規定が、多少は行はれてゐたが、この頃になると、一族子弟はいふまでもなく、隨兵をも連れて行かなくては、國司の職務が執れないやうなことになり、その結果は本來一の文官に過ぎなかつた國郡司が、公然兵權を帶びて、部民に臨むといふことになつた。

かうして大化革新で、折角豪族の手から奪つた兵權が再び新しい豪族の手に歸することになつたのであつた。

併し地方の住人階級が、實際に武力を蓄へて、自己の防備に備へたのは、これよりも以前からのことであつた。これらの豪族の子弟には、六衞府の舍人として、久しく京都に住したものもあり、又は功錢を出して、舍人の官を買つて歸つたものもあり、又或は緣故を辿つて、攝關家の家臣となつた者などもあつて、故鄕に歸ると、その官職や、主人の威を笠に着て、國司郡司などに對抗し、課役にも加はらなければ、租稅をも納めず、中には多數の郎等を養ひ、兵馬を備へて、近隣に威を振ふ者さへあつた。その後これらの豪族のうちには、又百方當路に運動して、檢非違使、押領使、追捕使の官名を得て、公然その兵權を使用する者も出來た。

こんな工合で、それ〲に領地の大小に從つて相應の兵力を具へてゐた大小の土豪は、年月の推移につれて、攻守の關係や土地の利益の上から、互に黨を結び、又は自分よりも優勢な豪族の門に出入して、家人といひ、門客といつて、その保護を仰ぐやうになつた。例へば武藏七黨が、それ〲に旗頭の下に關

結したことや、源頼義が相模守となつた時、關東の武士が、大半源氏の門客となつたといふのを見ても分る通り、つまりかうするのが、その私領を安全にする最良の途であつた。

かうして土地私有の問題が基礎となつて、後年關東の豪族と源氏との間に見るやうな牢固な主從關係、譜第關係が結ばれ、それがまた永い間の馴練を經て、武士道の發達を見るまでになつたのである。

かういふ順序で、諸國の住人の階級は、次第に土地の富と共に、兵馬の權をも握るやうになり、それ／＼に郎等を養つて、弓馬の術を勵み、事ある時には、その部下を率ゐて、武功を競ふといふことになつた。これが後に所謂「兵馬の家」で、又これらの住人のうちでも、自己の家名を冠らした土地の大小に從つて、大名、小名の別が生じた。要するにかうして土地の上に根をおろして、富と力とによつてその勢力を支へた所謂住人の階級が發達して、中世の歴史に一大轉廻を與へる有力な武門武士の階級が起つて來たのであつた。

▲豪族の狀態

地方制度の紊亂と、それに伴ふ地方豪族の勃興は、何も東國に限られた現象ではなかつたであらうが、併し西國に比べると遙かに中央の文化に後れてゐた荒漠たる東國の平野と粗野な民情と、更に北方に未開暗黑な奥羽の曠野を控えたその地勢とは、そこに發生した豪族に特殊な修養、特殊な發達を遂げさせるだけの條件を具備してゐた。

かういふ東國の豪族の狀態を最も雄辯に語るものは、「今昔物語」に現はれた源ノ宛や平維茂の傳說であらう。

源宛は嵯峨天皇の皇子河原の左大臣融の子孫で、その父仕が武藏守となり、足立郡箕田の郷を開いて土着したので、箕田源次と呼ばれ、數百騎の部下を養つて、武名を遠近に知られてゐたが、これも同じく村岡の地に土着して近隣に威を振つた村岡五郎良文と爭ひを起して、終には武力によつて事を決することになつた。兩家では互に使を送つて、決鬪の日時を定めた。その日になると、双方とも五六百騎の部下を引連れて、約束の野に出會ひ、一町ばかりを隔てゝ、楯を突き列べた。かういふ場合には、先づ互に名乘り合つて、堂々と矢戰を始めるのが當時の習慣であつた。兩軍は弓に箭を番へて、鬪戰の合圖を待つてゐると、良文の陣から使を立てゝ、宛に一騎打の勝負を挑んで來た。宛も快く承知して、互に馬を陣頭に進め、馳け違ひ馳け違ひして射合ふのを、兩軍の兵は息を凝らして見物してゐたが、良文が射れば、宛が避け、宛が射れば、良文が外して、容

易に勝負はつかなかつた。そのうちに良文は宛に聲を掛けて、「互ひに手練の見えた上は、この上、戰ふにも及ぶまい。もう止めよう」といふ。「それもそうだ、强いて命を棄てるにも及ぶまい」と宛も同意した。二人はすぐと兵を引いて、右と左に立別れた。その後は互に和親を結んで、隔てのない仲となつた。

東國の豪族の殺伐な狀態を、一層よく語るものは、餘五將軍維茂と澤股四郎諸任と爭ひの物語であらう。維茂は平貞盛の弟繁盛の子で、諸任は藤原秀鄕の孫であつた、二人は共に陸奥に住んで武威を振つてゐたが、領地の爭ひがもとになつて、終には武力に訴へて事を決するまでになつた。最初は諸任が維茂の不意を襲つて、その館を燒討したが、維茂は池の中に忍んで、危い命を全うし、間もなく敵の引上げる後を追擊して、終に諸任の首を取つた。この事があつてから、餘五將軍維茂の勇名は、關東八州に轟き、後には鎭守府將軍にも任ぜられた。

こんな風に地方の豪族は、銘々に多くの部下をもつてゐて、何かといへば私鬪に訴へて勝負を決める。實際中央政府の權力の及ばない東國に於て、各人が自己の權利を正當に主張し、自己の領地を他人の侵略から保護するには、私鬪に訴へるより外に適當な道がなかつたのである。

かうして年を積んで關東の平野に鬱積した豪族の潜勢力が、初めて現實の事實となつて、政治の表面に爆發したのが、將門の叛亂であつた。

併し進んで將門の亂に入る前に、その背景となつた當代の政治と社會とを瞥見したい。

二　解體に向ひつゝある社會

▲社會の暗流

平安朝の政治と社會との根柢には、一つの暗流が潜んでゐた。それは大化革新の精神たる土地國有の理想に對して、大化以前の土地私有制度の復活を希望する精神であつた。

大化の革新では、從來全國の豪族の私有に歸してゐた天下の土地人民を、悉く政府の手に收めて、公田、公民とし、班田の制を定めて、全國の土地を人民の間に均分した。この變化は、確かに政治上、社會上の一大革命で、從來各部族の酋長が、その部民に對して、專制の權を揮つてゐたいはゆる氏族制度の社會は、こゝに一變して、皇室の主權の下に統一された中央集權の社會を現出した。天下の土地は悉く國有となり、人民はすべて皇室の有となり、從來の豪族は、朝廷の官吏として、一定の

俸給を受けることになつた。かうして從來氏族が下に隷屬してゐた部曲の民は、その半奴隷の狀態から解放されて、皇室治下の自由民となり、獨立の戶籍も作られ、一定の土地を配給され、それに對する一定の租稅を納れて、朝廷に奉仕するものになつたのである。

この革命は、外部に於ては、支那大陸に於ける隋唐の文化と、その勃興の餘波を受けて起つた朝鮮半島の動搖に刺戟されて、治者階級の間に、國家的統一の必要が痛切に感じられるやうになつて來たこと、內部に於ては、國內の豪族がだん〳〵跋扈して、天下の土地人民を兼併し、皇室をも凌ぐほどの勢になり、又社會的には、人口の增殖と共に、貧富の懸隔の甚だしくなつたことなどが、主な動機となつて起つたもので、主としてこの革命を指導したのは、あの文化主義の廐戶皇子（聖德太子）と蘇我氏誅戮の首動者中大兄皇子（天智天皇）とであつた。

この革命の進行中、當時の閥族中には、進步保守の兩派を生じ、保守主義の物部、中臣二氏が先づ倒れ、一時は蘇我氏の天下となつたが、中ノ大兄皇子の英斷によつて、終に閥族の勢力を朝廷から一掃し、大多數の國民を身方として、國家の權力を確立することが出來た。かう云ふ點から見て、大化の革新は、丁度明治の維新と同じやうに、對外的には、新文化政策の採用であると共に、對內的には、一種の社會政策の實施であつた。

この革命以前に於ける閥族の强盛と、富の分配の不平均とは、孝德天皇の大化元年の詔勅のうちに、「臣、連、伴造、國造等各己が民を置きて、情を恣にして驅使し、又國縣の山海林野、池田を割きて、以て己が財となし、爭戰して已まず、或者は數萬頃の田を兼倂し、或者は全く針を容すの少地なし」とあるのを見ても分る通りで、大化革新の政治は、一方に豪族の兼倂を抑へて、中央集權の國家を立てると同時に、一方には大多數の民衆を半奴隷の境遇から解放し、班田の制を設けて、富の分配を平均することに全力を注いだ趣が認められる。そしてこの二つは實に聖德太子の憲法十七條のうちに含まれた根本の精神であつた。即ち「國に二君なく、民に兩主なし、率土の兆民は、王を以て主となす、任ずる所の官司は、皆これ王臣、何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せん」といひ、「夫れ事は獨り斷ずべからず、必ず衆と共に宜く論ずべし」ともある一種の民本主義の理想は、大化の新政によつて實現され爰に一の社會主義的國家が打建てられたのである。

中ノ大兄皇子によつて斷行された大化革新の理想は、着々實現されて大化元年から五十六年を經過した大寶元年には、大寶令が制定され、全國の戶籍も略々完備して、西南は大隅薩摩の

邊隅を除き、東北は蝦夷の境を除けば、全國に亘つて、班田の制が實行され、租税の收入によつて支持される鞏固な政府が組織された。かうして內外に對する國策が確立され、國家の進路が明白に指示されて以來、王朝政治家の雄健な氣魄と熱心な指導の下に、國家統一の事業は、着々として歩を進めて行つたけれども、一方に於て、當時の民衆文化の程度を考へると、革新の事業は、大陸の文化に心醉した一部の新人が、空想裡に描いたユートーピヤの一朝にして實現されたものに過ぎなかつた。あの立派な律令や、雄大な建築物や彫刻物などと同じやうに、當時の一般文化からは遙かに懸け隔たつた飜譯的制度であつた。

當時はまだ奴隷制度の行はれてゐた社會で、奴隷は家畜や物品と同じやうに、一の財產と見られ、賣買をも許されてゐた。人民はまだ貨幣を用ゐることを知らず、大抵は物々交換で、時には米や布を以て貨幣の代用としたぐらゐな素樸な狀態であつた。奈良朝になつてから、朝廷では頻りに錢貨の通用を奬勵し、一時は錢を蓄へるものには、位を授けるといふ法令さへ出たくらゐであつた。農具として　まだ木の鍬や木の鋤が用ゐられてゐた時代で、鐵製の農具はまだ一般に普及するまでにはならなかつた。大多數の民衆は、かういふ素樸な生活を送つて、何等の自覺もなく、當然のことのやうに豪族の下に奉仕してゐた社會に、忽然として大化の新法が施行されて、多數の良民は、半奴隷の狀態から解放された。

けれどもこの改革も社會組織を根本から改めることは出來ず、大寶令も明かに賤民の階級を認めて、公田公民主義の原則の下に、奴隷の所有と使役とを許さないわけにはゆかなかつた。そればかりでなく、朝廷の官吏に俸給として下された功田、賜田、職田、位田、又神社や寺院へ附けられた封戶、神田、寺田などは一轉すれば從前の私領に逆戻りする可能性をもつてゐた。もと〳〵民情の必然の要求よりも遙かに行き過ぎた模倣的制度のことであれば、改革の熱意が、當局者の精神に燃えたつた間こそ、萬難を排して猛進することも出來たけれども、創設的事業が一段落を告げて、一たび緊張した改革の精神が、次第に弛んで來ると共に、かういふ矛盾が元になつて、制度の運用が、だん〳〵と困難になり、そこに色々な破綻が現れて來たのも不思議はない。

▲班田制度の崩壞

第一の困難は、班田の實施上の困難であつた。大寶令の規定では、班田は六年目に一度づゝ行はれることになつてゐたが、それが規定通りに行はれたと想像されるのは、ほんの最初の間

だけで、戸籍の改正や、その他の調査に意外な手數がかゝつたりなんぞして、中々規定通りには行はれなかつたらしい。そんなことからして、大寶元年から百年を經過した桓武天皇の延暦二十年には、十二年目に班田をすることに改正されたが、それでもまだ規定通りには行はれず、十九年目に行はれたこともあれば五十年間も行はれなかつたこともあり、又地方によつては、三十年に一回、四十年に一回行はれたところもあるといふ有様で、百二三十年も經過したが、天慶の亂前後からは、もうばつたりと止まつてしまつて、何等の記錄をも遺さないやうになつた。

かうして班田が規定通り行はれなかつたのは、又一つには田地の不足からも來てゐる。人口の増殖につれて、配給すべき田地がだん／＼と足りなくなつて行くといふことが、この制度の運用上の第二の困難であつた。從來開墾された田地には一定の限りがあるけれども、人口の増殖には殆んど限りがない。單に内地人の間で、年々繁殖するばかりでなく、當時恰も朝鮮半島の動搖に際して、大陸から歸化して來る人民も少からぬ數に上つたことを考へれば、それらの民衆に配給する田地が、次第に缺乏して來るといふことは、見易い道理である。

そこで當局者は、この困難を救はうとして、或は寺田、功田、位田などを取上げて、人民に配給して見たり、又土地の狀況によつて、或は班田の反別を増減したり、或は女子に給與する口分田を減じて見たり、奴婢には口分田を與へないことにして見たり、色々な手段を講じる一方では、土地そのものを増加する手段として、頻りに開墾を奬勵した。

元來大寶令では、墾田の制があつて、官廳の許可を得て荒蕪地を開墾した者には、一定の時期の間、所有を許すけれどもその期限を經過すると、引上げて公田に加へるといふ定めとなつてゐたが、元正天皇の養老六年には國司、郡司に命じて、その部内の百姓に十日の勞力を課して、土地を開墾させ、又人民に對しては、荒野を開墾して、雜穀三千石以上の收穫を増加した者には、勳六等を授け、一千石以上の者には、終身課役を免除するといふ特典を與へて開墾を奬勵したが、その翌年には、更に一歩を進めて、新たに用水路を造つて開墾をした者には、多少に拘らず、三世に傳へさせ、又在來の用水路から水を引いて開墾をした者には、その身一代の間所有させるといふ法令を出した。これが「三世一身の法」と呼ばれて、土地公有制度の崩壞する端緒になつたものである。

▲土地私有制度の復活

千丈の堤も蟻の穴から崩れるといふ喩の通り、班田制度の缺陷に對する種々の縫綴策は、結局土地國有の原則の下に、一種の私有制度を認めたものであつた。つまり目前に迫つて來た國民の人口問題、食糧問題に對する政策としては、どうしてもかうするより外に途がなかつたのである。けれども當時の政治家をして、この政策を採用させるやうにした時勢の傾向は、行くところまで行かないでは已まない。三世一身の法令が出てから二十一年を經過した聖武天皇の天平十五年には、更に進んで一たび開墾した土地は永久に私有させるといふ法令を出して、荒蕪地の開墾を奬勵してゐるのを見ても、當時の政治家が、如何に食糧問題に苦んでゐたかが想像される。

かうして大化の革新から僅かに百年ばかりで、土地均分の精神は、事實上破壞されてしまつた。一方には、まだ班田の制度が不完全ながらも行はれてゐる間に、他の一方では、大化以前の土地私有制度が、明かに復活されて、人民の私有地が到る所に現れることになつた。しかもこの新しい奬勵法の恩惠を蒙るものは、無智無力な一般の民衆ではなくて、寧ろ權力と資本とを充分にもつてゐた貴族や富豪の階級であつた。勿論當局者もこの點には最初から多少の注意をして、開墾を許す地積に制限を置いた。例へば一品の親王及び一位の朝臣は五百町以内、二品の親王及び二位の朝臣は、四百町以内、それから次第に降つて、五位の朝臣は百町以內、六位以下八位以上は五十町以內、初位以下庶民までは十町以内の地積を限つて開墾を許すが、その土地を受けてから三年經つても開墾に着手しない場合には、沒收して他人に交附するといふ規定が設けられてゐた。又國司には、その管轄内の土地の開墾を許可する權限を與へてゐるばかりでなく、在任中は自身でも自由に開墾することを許されてゐた。併し任期が盡きると同時に、その開墾地は公田に編入する規定であつた。こんな取締りの規定は設けられてはあつたが、併し私有制度の復活といふ洪水の前では、そんな堤防が畢竟何の役に立たう？　資力の豐かな者や、權力を握つた者は、廣大な地積を占有し、人民を使役して、どし／＼私墾田を開いたので、食糧問題は、これで大分緩和される傾向にはなつたであらうが、一方に大化革新の精神であつた土地國有の原則は、全く破壞されて、天下の土地は再び豪族の占有に委される形勢を現出した。

この趨勢を見た當局者は、俄に狼狽して、一時は開墾禁止の法令まで出して見たけれども、元より天下の大勢は、一片の法規で支へられる筈はない。間もなくその禁令も解かれて、大勢はいよ／＼土地私有の方向に奔馳して行つた。

▲寺領と王室御料

この私有制度復活の大勢のうちで、特に都合のいゝ地位を占めてゐたものは、朝野の信仰の的となつてゐた大寺院であつた。奈良朝時代は佛教全盛の時代である。一天萬乘の君主が、佛像の前に跪伏して、「三寶の奴」とまで身を遜した時代である。當時朝廷や權臣の尊崇の厚い大寺院が、莫大な封戸と寺田とを寄進されて、多數の奴隷を使役して、非常な勢力を占めてゐたのに不思議はない。聖武天皇は全國に國分寺を建てゝ、寺毎に封戸五十戸、水田十町を附け、尼寺にも水田十町を附けたが、その後僧寺には水田九十町、尼寺には四十町を増加した。地方の寺院でさへ、かうであつたとすれば、その前後に帝都の附近に建てられた諸大寺の勢力が、どれほど盛大であつたかゞ想像されるであらう。

當時法隆寺には、奴婢の數合せて五百三十三人あつたといひ、天平勝寶二年に聖武天皇が東大寺に幸した時には、食封五千戸と奴婢二百口とを寄進し、同四年更に一千戸の封戸を加へたと記されてゐる。封戸といふのは、その家から出るだけの租税をそつくり與へられるとであるから六千戸の食封といへば、數萬の私民を領有することになるのである。かういふ朝廷からの寄進のある上に、貴族や富豪らが、爭つて田地を寄附したので、寺領の高は年々に加はつて行くばかりであつた。

かういふ大資本を擁した寺院は、その封戸や寺田からの收入と、奴隷の勞力を用ゐて、大規模な開墾事業を起したり、或は人民の開墾した田地を買收したりして、いよ〱その領地を擴げて行つた。

そこで最初のうちは、或は人民が墾田を寺院に賣ることを禁じて見たり、或は寺院の墾田に制限を加へて見たりしたけれども、當時の寺院の勢力からいつても、到底そんな法令の行はるべき筈はなく、大規模な開墾事業か、寺院の力で着々遂行され次第に人民の開墾地をもそのうちに包括して行つた。かうして平安朝の盛時になると東大寺の寺田が一萬町歩に上つたと言はれる程の勢力を現出して、寺院は國家の力をもつても、どうすることも出來ない程の經濟上の一大勢力を築き上げたのである。

土地私有制度復興の大勢に促がされて、土地の占有に力を注いだものは、右に掲げた中央の貴族や、地方の豪族や、大小の寺院ばかりでなく、王室自身がまた廣大な御料地を設定して、或は王室の費用に宛てたり、或は神社や寺院に寄附したり、或は皇族や女官に賜はつたりした。これを勅旨田といつて、未墾のまゝで下賜して、自由に開墾させるのであつたが、平安朝の

水を引いて行つたり、開墾した後に、そつと古田とすりかへたり、どうかすると、横着な貴族が勅旨の名を假りて、私田を開墾するものもあるといふ有樣になつた。

この王室御料地の設定は、土地私有の傾向を抑壓するに力を用ゐた桓武天皇の頃から盛んになつて、その後數代の間にいよ〳〵勢を加へ、淳和天皇の天長年間に定められたものばかりでも、武藏國に二百二十町、攝津國に九百八町、下野國に四百町などといふ廣大な地域が、王室御料に編入された。

▲庄園の發達

かういふ風潮の中で、官吏の俸給として授けられた功田、賜田、職田、位田などが、神田や寺領と同じやうに、大化以前の莊田に後戻りして、いつともなく世襲の領地になつて行つたのに不思議はない。それらは無論最初から租稅を免除された私領ではなかつたけれども、或は法制の弛みにつけこんで、租稅をも納めなければ、期限が來ても朝廷に返納せず、ずる〳〵に私領になつてしまつたのもあらうし、又或は寺院の勢力を利用して、表面は寺院に寄進した形に繕ひ、それによつて寺田と同樣に租稅をも免れると共に、永久に占有したものもあつたらう。

こんな風にして自然に變化して行つた貴族や寺院の私領は、開墾によつて作られた占有地や、勅旨によつて設定されたとか呼ばれるやうになつた。さういふ庄園の御料地なぞと一括されて、古來の習慣に從つて、「庄」とか「庄園」とか呼ばれるやうになつた。さういふ庄園の多くは、單に田地ばかりでなく、その周圍の廣大な山林や原野までも包括して、そこから生じる產物は、悉く所有主の手に占有するのであつた。それらの收獲物を貯へるためには、庄家を建て、庄司を置いてそれを管理させた。これらの庄園の所有者は國司の管轄から離れて、その地域内の農民を奴隷のやうに使役し、そしてその土地の利を獨占してゐた。

かうして奈良七朝の間に徐々として發達した寺院、貴族乃至王室私領の庄園は、平安奠都の時代になると、もう諸國に蔓延して、政治上の一大弊害を醸すやうになつた。その弊害の第一は、諸國の小地主が、寄進とか、賣買とかいふ名目で、田地を寺院や權門へ献じて、その庄園に移すことである。かうして寺院や貴族の庄園は、いよ〳〵膨脹すると共に、人民は國司の課役を逃れて、實際には、よく安全にその田地の利得を占めることが出來た。第二は國司の誅求に苦められて、故郷を出奔した浮浪の徒を庄園のうちに吸收して、天下の公民の數を減少して行つたことである。

平安遷都を斷行した桓武天皇は、先づこの弊害を看破し、

樣々な勅令を發して、宿弊の刷新に鋭意した。或は寺院の領地が年々に膨脹して行く趨勢を見て、この勢で行つたら、いまに畿内地方はみんな寺領になつてしまふであらう、といつて、寺院が人民の土地を併呑するのを禁じたり、或は諸國の國司が、廣大な土地を獨占し、勝手に人民を使役して、開墾事業を起すことを禁じたり、或は貴族の庄園に流れ込んだ浮浪人を調べて、その調庸を追徵させたりした。けれども一片の禁令ぐらゐでは、到底時代の大勢を挽回することは出來なかつたものと見えて、平安朝の盛時を通じて、庄園處分の問題は、歷朝の政治家が頭を惱ました一大懸案であつた。しかも何人もこの懸案に向つて、根本的解決を下すことを躊躇してゐる間に、天下の大勢は、有らゆる障害物を押流し、新しい時代の地層を到る所に形作りつゝ、洪水のやうに日本全國の隅から隅まで氾濫して行つた。そしてあの改革の熱意に滿ちた後三條天皇が、最後にこの難問に指を觸れた時分には、この新しい地盤の上に、新しい武士階級の基礎が、立派に築き上げられてゐた。

三　民衆生活の不安

▲治者階級の毒害

かうして天下の大勢は、大化の革新によつて出現された空想的な社會制度の崩解に向つて動いてゐた間に、京都はなほ主權の所在地として、長い間の惰力を以て人心を支配してゐたけれども基經以來皇室は殆んど藤原氏の一門となり、彼らはその慣用手段として、自家の女を天皇に進めては、その所生の皇子を天皇とし、外戚の關係を利用して、政權を握ると同時に、その權力を維持するためには、家格を定めて、人材登用の門を塞ぎ、極力他族を排斥して、藤原氏以外の者は、假令皇族であつても、朝廷の樞要な地位には立たせないやうにした。さういふ他族排斥の策略も、安和の變で、左大臣源高明を失脚させた以後は、最早用ふべき競爭者がなかつたので、今度は更に一族の間で、權力の爭奪が行はれるやうになり、そして最後に道長に至つて、藤原氏の黃金時代を出現した。

この間に天皇はすつかり藤原氏の家の物となり、好んで幼沖の天皇を立て、年長の女を後宮に納れて、内部から主上を補佐させる手段を取つた。そればかりでなく幼沖の天皇は、屢々姉のやうな中宮の邸で生長したので、藤原氏の邸は一時皇居となつたことも珍しくない。こんな事情の下に藤原氏の子弟と後宮との關係は、愈々密接となり、「源氏物語」などに見るやうに宮中はさながら近代の妓樓にも似た局の集りとなり、櫻かざして日を暮らす大宮人が、夜毎にぞめき廻る歡樂の場となつた。

かういふ淫風の吹きすさむ所に何の政治があらう。政治の實權は攝關家の政所に移り、朝廷はたゞ故實と先例を守つて、恒例又は臨時の儀式を行ふ式場か、歌舞音樂の遊興場か、さなくば歌合せ、繪合せ、貝合せ、香合せ、艶書合せ、若くは蹴鞠の遊戲に現を拔かす一の倶樂部たるに過ぎなかつた。

併し藤原氏の政權が、單に皇室を一家としただけで持續されるものではない。彼らがその一門の榮華を續け、同時にその姻親たる皇室の威嚴を保たせて行くためには、相當の苦心を費さずにはゐられなかつた。彼らは一方では諸國の國司に私恩を施して、到る所に自家の大莊園を立てると同時に、一方では、當時次第に頭を擡げかゝつて來た武門武士の階級を懷柔して、自家の爪牙とすることを忘れなかつた。かうしてある時期の間はいはゆる土地兵馬の權を、間接にその一門の手中に握つて、天下に號令することが出來たのである。藤原氏の榮華が道長に至つて、その絕頂に達したといふのは、取りもなほさず、この傳統的政略がその効果の絕頂に達したことを意味するのであつた。この頃になつては、藤原氏の莊園から上つて來る收入は、遙かに皇室の富を超えてゐたのである。長和元年の大火で、道長の京極の第が燒けた時には、諸國の國司が、任國の政務をも打棄てゝ、遙々と京都へ火事見舞に來た。そして競つて再建の負擔を申出て、銘々に寢殿の一間を引受けた。その後あの驕奢を極めた法成寺の建立の折にも、同じく國司一人に一間の費用を分擔させ、公事は差措いても、この造營を急ぐやうにといふ布令を出したので、國司らは朝廷に納めるものは後廻しにして、先づこの建築に用ゐる材木や、檜皮や、瓦などを續々送つて來て、一年とたたぬうちに有名な大伽藍が竣功した。

又藤原氏と結托したために、富と勢力を得たものには多田源氏の例がある。六孫王經基の子源滿仲は攝津國司であつた時、攝津多田郡に廣大な莊園を開いて、根據地としたので、多田の滿仲と呼ばれた。この多田源氏一門が、藤原氏の保護の下に驚くべき富裕を致したことは、關白兼家の二條京極の第の落成の賀に滿仲の子賴光が大臣以下の賓客に頒つための引出物として、鞍や鐙に金銀を鏤めた乘馬三十匹を獻上したことや、その後道長が京極の第を造營した時に、屛風二十帖、几帳二十基、夏冬の裝束を初め精巧な家具の一切を獻じて、道長を喜ばしたといふ逸話によつても窺ふことが出來る。

▲享樂と迷信

こんな風に藤原氏の庇の下に入つた者は、假令位階は低くとも、富と勢力とを占める便宜があつたけれども、その以外の廷

臣や下級の官吏になると、隨分糊口に窮するやうなものゝ少くはなかつた。「宇治拾遺」にある利仁將軍の薯蕷粥の物語や、「今昔物語」に出た越前守爲盛と六衞府の官人の物語なぞを見ても分るやうに、五位の官人でも、薯蕷粥が充分に啜れなかつた者があるし、遙任の國守が、粮米を納めないために、衞府の官人に扶持米の渡らないことゝ珍しくはなかつた。帝都の中央でさへ、强盜が横行して、家財でも、子供でも、手當り次第にとらへて行く、相當の身分のある人ですら、白晝追剝にあつて、赤裸にされたといふやうな噂が絶えないほどの物騒な世の中だから、政府や權門の保護を受けない民衆の生活上の不安は、殆んど言語に絶してゐた。

さういふ今日あつて明日の知れない生活を送つてゐた民衆の心が、たゞ／＼目前の快樂と、愚昧な迷信に支配されて居たのに、何の不思議もない。

猿樂及び田樂の流行は、その著しい徵候の一つであつた。猿樂は滑稽な、又は猥褻な演伎や物まねを演じて、下劣な看客の趣味に迎合したものに過ぎなかつたが、田樂になると、更に一種の狂熱を伴つて歡樂に憧れた上下の人心を魅惑した。丁度現代の八木節とお會式の行列を一しよにしたやうなもので、貴族も、平民も、侍も、坊主も、衞府の官人も男も、女も、一しよになつて、赤裸形になつて腰に紅い布を卷くものもあれば、剃髪に田植笠をかぶつて、百姓のやうな風をするものもある、鼓を鳴らし、笛を吹き、踊り狂つて、往來を練り歩いた。その有様は、まるで狐にでも憑かれたものゝやうで、熱狂の餘り、途中で喧嘩を始めて、死人を出すやうなことも珍らしくはなかつた。さういふことが晝夜の別もなく繰返されて、或は祇園に、或は石淸水に、その他洛中洛外の神社佛閣を目ざして練つて行く。誰か一人神佛の夢想があつたといひ出すと、忽ち幾百千とも知れない群衆が集まつて來て、行列に加はるのであつた。それがまた後にはだん／＼と華美に贅澤になつて、富貴な者は、衣裳や持物に意匠を凝らして、人の目を惹かうとするやうになりこれがために身代を費ひ果した者もあるといふほどになつた。

かういふ狂的な歡樂を追ふ心は、また種々な淫祠邪教に額く心であつた。陰陽道や佛教から來た色々な迷信は、古くから上下一般に行はれてゐたが、その外にまた一層卑俗な信仰が行はれた。北斗星を拜すれば、福が得られるといつて、夜陰に男女を集めたこともあれば、岐神又は御靈と稱へて、街の角々に木を刻んで男女一對の神體を作り香華を供へて祀つたともあり、又辻々に寶倉を造り、鳥居を建て、福德神とか、長福神とか、白朱社とかいふ額を打ち、多數の男女が集まつて、神前で酒を

飮むことも流行した

▲人情の酷薄

かういふ不安と迷信との結果は、人間の胸に宿るべき美しい、自然の人情を銷磨し盡して、當代の社會では、一般に病者や老衰者を不淨として、その穢れに觸れることを避けるために、戸外に運び出して棄てる習慣があつた。壯健な時には目をかけて使つた召使なぞも、一旦煩ひついて、もう治らないと見ると、物置の中などへ轉がして置く、烈しいのになると、野原へ運んで行つて、籔の中なぞへ棄てゝ來るので、病人は病氣に死なないまでも、飢餓のために死んでしまふ。あの有名な信濃の姨捨山の古事を引くまでもなく、京の中でも羅城門なぞの樓上には、澤山の死骸が遺棄されてゐた。するとそこへ忍び寄つて、屍骸の髮を拔いて、鬘に賣らうとする鬼のやうな老婆があれば、更に死人の衣を剝いで行く盜賊もある。又待賢門では、一人の狂女が現れて、その邊に棄てられた死骸を獵つて、その肉を喰つたが、中にはまだ死にきらずにゐて、生きながら喰はれたものもあつたといふほどの有樣である。政府では屢々布令を出して、病人を棄てることを禁じたけれども、一片の禁令ぐらゐで中々やみさうにもしない。

かうして棄てられた病人の死骸が、到る所に轉がつてゐるばかりでなく、假令親兄弟でも、一旦病死すれば、大抵は河原とか野原とかへ持つて行つて棄てる、それも多くは棺なぞには納めない、砂でも掘つて埋めた上へ、河原の石でも積みあげたのは、上の部で、大抵はそのまゝ轉がして置いて、犬や鴉の腹を肥やすのが普通であつた。流行病でもあつた年なぞには、遠方へ棄てに行くだけの手數も取れないので、澤山の死體が往來に轉がつてゐた、仁明天皇の承和九年に、左右京職に命じて、鴨ノ河原に轉がつてゐる髑髏を集めて燒かせたことがあるが、この時片附けた數はかりでも五千五百あつたと傳へられてゐる。

▲地方政治の紊亂

中央政府の所在地であり、日本文化の中心である京都の民衆生活が、こんな不安な狀態の下に置かれてゐるとすれば、ましてこの文化の中心から遠ざかつた地方の民情が、どれほど粗野な蒙昧な狀態にあつたかは、略々推察される。

大化の革新は、天下の土地人民を、各地に割據した豪族の手から奪つて、王室の主權の下に集めたけれども、この革新と共に採用した唐の文化は、僅かに帝都の四方數里の間を霑ほしたばかりで、大多數の民衆は、依然として大化以前の狀態を繼續

して、自然な無自覺な生活を送つてゐた。あの理想的な班田の制度も、かういふ無自覺な民衆に取つては、何等の共鳴をも感ずる筈がない、そのうちに本來民情の自然から出たのでない翻譯的制度は、內部から自然に崩壞して、公田の側らに、より多くの私田が開かれて行くと共に、國司は政府に納める租稅の受負人として、たゞ／＼自己の富を作るために就職するものとなり、無智の民衆は、只國司や郡司の私慾を充す道具と見なされるやうになつた。

かういふ地方政治の紊亂を具體的に示した最も極端な例は、有名な尾張國の解文である。この解文は一條天皇の永祚年間に、尾張國の郡司や百姓が、時の國司藤原元命の不法を訴へたもので、種々な名目の下に、人民から財物を徵集して、それを近江國にある別宅に運ばせたり、息子の賴方を初め、澤山の家來を官邸へ置いて、人民から酒を出させては、一日に五六斗も飲んだり、又國分寺の修理に備へてある國府の公金を著服して、國分寺の修理をもしない、といつたやうな罪狀三十一ケ條を擧げてある。元命はこの告訴によつて、兎に角尾張の國司を免職されたけれども、別に處分を受けた風もなく、その後も京都に住んで、相當の官職に任命されてゐた。

つまり政府へ納める租稅さへ滯らさなかつたら、國司が人民から誅求するのは、當然の事と認められてゐたのである。これらは國司の惡政の最も極端な例として今に傳はつてゐるのだが、併し私慾を營むといふ點から言つて、國司郡司の大多數はいづれも元命の仲間であつた。

▲浮浪人の波

かうして人民保護の任に當るべき地方官が却つて人民を虐げて、私慾を圖る機關となり、多數の民衆は全く政府の保護にたよつて生活の安定を保つことが出來なかつた。その中でも當時の民衆を苦めたのは、上代の奴隷制度の遺習として、人民に課した勞役の制であつた。大寶令では農民は租庸調の外に、一年六十日以內の雜徭に從はねばならぬ規定になつてゐた。この勞役は本來官田の耕作とか、道路や堤防の修理とか、公けの土木工事とか、傳馬とかいふ各地方の公事のために、國司郡司に委任して、人民に課せしめた勞働であつたが、その後橫暴な國司郡司は、この規定を濫用して、勝手に農民を徵發しては、私田を開墾したり、無用な土木を起したりする風があつたので、孝謙天皇の時には、この勞役の日數を三十日以內に制限し、その後も政府では屢々法令を出して、百姓の勞役を輕くするやうにしたけれども、一たび發した弊害は、一片の法令ぐらゐで容易

に防ぐことは出來なかつた。

かういふ虐政の結果として、地方の人民が疲弊したのは、決して新しいことではなかつた。疲弊した民衆は、往々政府から給與された口分田を沽つて、他郷に出奔した。或は課役をのがれるために、殊更出家して僧籍に入る。かうして天下の公田は次第に豪族の手に併合されたり、或は空しく荒廢したりして、戸籍の上で政府に租税を拂ふべき公民の數は、年々に減少して行く一方で、浮浪人と僧侶の數が、著しく增加して行つた。

三善清行があの有名な封事のうちで、この時弊を極言して、天下の人民の三分の二は僧侶だと言つたのは、誇張した言ひ方ではあるが、併しあの封事を讀むと、延喜、天暦の治と併稱された清行の時代に、地方政治は既に紊亂の極に達してゐた有様が窺はれる。清行が引いた備中國邇摩郡の實例なぞは、最もよくこの事實を語つてゐるものであつた。そこには皇極天皇の時代に、朝鮮へ兵を送る必要から、この郷の兵士を徴集した時、精兵二萬人を出したので、邇摩といふ名がついたといふ傳説があるくらゐに繁榮した所だが、その後天平神護年中に調べた時には、課丁が千九百餘人となり、貞觀年中には、更に減じて七十餘人となり、寛平五年清行が備中之介となつて赴任した頃には、老丁二人、正丁四人、中男三人あるばかりであつた、それが延喜十一年には、最早一人の課丁もなくなつてしまつた。

大化革新から二百五十年ばかりのうちに、もうこれくらゐの變化があつた。しかもこの一郷の例で類推することが出來るとしたら、まことに清行のいふ通り、國家の滅亡は目前に迫つてゐると言はなくてならぬ。

地方農民の生活が疲憊して行く傾向は、この頃から年々に酷しくなつたが、その中でも天慶の亂後東國には戰亂が絕えなかつたので、一亂每にその地方の農民が流亡して行つたことは著しい事實であつた。

實際大化革新の精神が、遵守されて、班田の制が忠實に行はれたのは、最初の二百年ばかりで、延喜の頃にはもうそれが頽れかけて來た。一切人民の私有地を國家に沒收して、更にそれを均分して、人民に給與しようとした班田の制は、その急激な改革のうちに存在した不自然のために、改革の精神の薄らぐと共に、內部から壞れかゝつて、貞觀の頃には、もう大化以前の私有制度が、到るところに復活されて來た。貞觀から延喜にかけての數十年は、丁度班田の時代から莊園の時代に移る分水嶺であつた。この前後から戸籍の改訂も形式的となり、班田の收授も規定通りに行はれないやうになつたゝめに、一方では、死んだり、逃亡したりした者の口分田が、寺院や豪族の手に兼併

されると同時に、一方では、多數の民衆が當然給與されべき筈の口分田を受けることが出來ない上に、一年六十日の勞役は必ず課せられるといふやうな不合理な事態が生じて來た。その結果として、餘儀なく身を沽つて他人の奴隷となる者も出來た。浮浪人や僧侶の數は、いよ／＼多くなつた。そして戸籍の上には、往々男といふものがなく、殆んど女ばかりが殘されるやうになつた。

かうして一旦戸籍を脱した浮浪の民は、最初は負擔の輕い所輕い所と選んで、畿内へ流れ込んだり、陸奥や出羽の新殖民地に流れて行つたりして、盲目的に浮動してゐたが、終にその最後の避難所を貴族や土豪や寺院の經營する莊園のうちに發見し、同時にその力によつて一層莊園の發達を促進することになつた。

こんな風にして武士階級の勃興を促した同一の時勢は、民衆生活の上から、新時代の打開を促してゐた。

四　關東の動搖

▲將門とその一族との關係

將門の活動した時代の背景を語らうとして思はずも長くなつた。併し歴史は端のない一つの鎖だとすれば、一つ／＼の事實はそれぞれに無限に連續した大きな鎖の一つの環に過ぎない。將門の叛亂もやはり獨立した一つの事實と見るよりも、寧ろその時代の暗流を明示した一つの現象として、又これから引續いて起つて來る武士階級勃興運動の一つの烽火として見るところに多くの意味がなくてはならない。

將門の叛亂もその發端に溯れば、東國の土豪の間には、日常生活の一つとなつてゐた私鬪から始まつて思ひもよらない方向へ發展して行つたものに過ぎなかつた。將門は鎭守府將軍良持の第三子であつたが、二人の兄は早く死んだので、彼れは事實上良持の相續人として、その領地のある下總の豐田郡に育つたが、當時豪族の子弟の常であつたやうに、少年の頃から京都に出て、太政大臣藤原忠平の家臣となつて、出世の手蔓を得ようとした。その頃將門は瀧口の衛士となつてゐたが、檢非違使之佐になりたいといふ希望を抱いて、主人の忠平に取りなしを頼んだけれども、その志望が達せられなかつたので、年少氣銳の將門は憤然京都を後にして、郷里豐田郡に歸つて來た。

將門の物語はこの時から始まるのだ。

その時分には父の良持はもう世を去つてゐたが、將門と同時に京都へ出て、仕官を求めてゐた從弟の貞盛が、將門を罵つ

て、「彼奴は何か事を起さずにはゐない奴だ」といつたといふ傳說でも想像されるやうに、その頃から覇氣を帶びてゐたこの青年は、京都から歸ると間もなく父の遺領のことから叔父の下總介良兼と爭論を引起した。その頃前ノ常陸椽源護といふものがあつて、將門の伯父に當る國香、良兼、良正の三人が、いづれもこの護の家と姻戚の關係を結んでゐたが、將門は女の事から護の子の扶、隆、繁の三人と遺恨を結んで、お定りの私鬪となつた。將門は奮鬪して護の三子を殺し、勝に乘じて常陸に侵入し、常陸の豪族平眞樹を一味として伯父の國香をも攻殺した。そこで叔父の良正は舅のために報復の軍を起したが、將門は下總の國境に邀へて、良正の兵を破り、揚々として凱旋した。これは共に承平五年のことであつた。

この間に國香の嫡子貞盛は、京都に止つて左馬允となつてゐたが、父の訃を聞くと共に官を棄てゝ歸國し、將門に對して報復の機會を狙つてゐた。良兼はもうこの時まで事の成行を傍觀してゐたが、とう〳〵弟の良正から加勢を賴まれて見るともう引くに引かれない場合となつて、翌承平六年六月、上總下總兩國の兵を發して常陸に入り、良正、貞盛と會合し下野を迂回して下總の國境に向つた。將門は情報に接するや否や手勢を率ゐて、敵の大軍を下野の國境に邀へ、奇襲を加へて、敵の先陣を破つたので、敵は忽ち潰走して、下野の國府に逃げ籠つた。將門は追擊して、國府を包圍したけれども、女の事から叔父を殺したといはれては武士の名折れだと思つて、殊更一方の圍を解いて、良兼の逃路を開き、すぐに國府へ入つて、下總介良兼が無法の戰をしかけた次第を府廳の日記へ記錄して置いて、豐田の本領へ引あげた。

これより先、護の告訴によつて、將門の暴擧が京都へ聞えたので、承平六年九月朝廷から、護、將門、眞樹らに對して召喚の命が下つた。それを聞いた將門は、京都の樣子はよく知つてゐるので、急に上京して當路に運動し、進んで檢非違使の調べを受け、一伍一什を隱さず申立てた。朝廷でもその辯解を聞いて、さまでの罪でないと認め、結局言開きが立つて、將門は承平七年の夏の初、晴天白日の身となつて再び故鄕豐田郡へ歸つて來た。

すると間もなく、良兼は將門の京都から歸つたことを聞いて、不意に攻寄せて來た。將門はこの度の訴訟以來さすがに謹愼の實を表して、何の用意もなかつた所へ敵に攻寄せられて、散々に領內の人家を燒拂はれた。そこで將門は俄かに兵を集めて敵に向つたが、不幸にして將門はこの時旅行の疲れや何かで脚氣を煩つて、意氣沮喪してゐたので、思ふやうな働きが出來ず、

散々に敗北して、幸島郡の山中に逃げ込み、妻子を船に乘せて、沼の中へ隱しておいた。良兼の兵は思ふがまゝに敵地を荒らし廻つたかばかりでなく、引返す途中で、將門が妻子を隱して置いた船を發見して、一同を虜にして、凱歌をあげて引上げて行つた。

將門はこの不意討にあつてから、いよ／＼叔父に對する遺恨を深くし、一方ではすぐに訴狀を書いて朝廷へ訴へると共に、一方では自分ばかり神妙にしてゐても無駄だと悟つて、報復の機會を窺つてゐた。そのうちに良兼が常陸へ赴つたのを知つて、急にその後を追つて、筑波山の麓まで攻め寄せたけれども、今度は敵が山中へ閉籠つて戰を避けたので、將門方は散々に敵地を荒らしたばかりで、目的を遂げずに引上げて來た。そこで良兼からもこの由を早速朝廷に告訴した。朝廷では双方からの訴狀を受けて、最初は良兼に對して追捕の命を下したが、間もなく手の裏をかへすやうに、今度は、關東の諸國に向つて、將門追捕の官符を下した。併し近國の國司らは、この官符を受けながらも、双方の威勢を憚つて、どちらにも手をつけることが出來なかつた。將門はこの形勢を見て、心中ではいよ／＼朝廷を侮り、自分の武力を唯一の身方とたのむやうになつた。

その後良兼は一度將門の家來で丈部子春丸(ハセツカベノコハルマル)といふ者を買收して、將門の石井(いはゐ)の營所の案內を探り、八十騎の勇士を選んで、夜襲をしかけたけれども、その途中で將門方の騎士の一人に覺られたために、その計畫もまた／＼失敗に終つて、折角敵陣に斫入りながら、十騎にも足らない將門の手勢のために擊退されて、その過半は空しく敵陣に命を棄てた。この事があつてからは、良兼ももううつかり手出をしないやうになり、同時に將門の威名はいよ／＼遠近に振ひ關東の豪族と相結托して、だん／＼と勢力の根柢を固めて行つた。

▲將門の叛亂

平貞盛が父の訃を聞いて京都から馳せ歸つてから三年經つた。彼れは父の後を繼いで常陸の大椽となり、二人の叔父良兼良正と力を戮せて將門に向つたけれども、將門の惡運はいよ／＼强く、今ではもうこのまゝでは手の出しやうもなくなつた。そこで貞盛は朝廷へ愁訴して、報復の機會を作らうと考へ、表面には「もういつまでかうしてゐても仕方がないから、自分はやつぱり京都へ出て仕官の望を果すつもりだ」と聲言して、將門の心を弛めておいて、承平八年(天慶元年)二月そつと常陸を立つて、東山道から上京を企てた。將門はそれを聞いて、すぐ

に貞盛の陣中を覺つたので、急に百騎ばかりの部下を連れて、その後を追ひ、信濃國小縣郡國分寺の邊で、やう〳〵追ひついて、矢軍を交へたけれども、貞盛は山中に逃げ込んで、行方を晦ましたので、將門は空しく本國へ引返した。

貞盛は間もなく京都へ着いて、將門の惡逆を訴へ、將門追捕の官符を帶びて、六月の中旬に京都を立ち、關東の諸國に觸れて、將門を追討の軍を起さうとしたが、無爲無力な國司は、將門の威勢に壓されて、誰一人起つて朝廷の命を奉じるものもなかつたばかりか、たのみに思ふ叔父の良兼は、この年の六月の上旬に病死したので、貞盛は今では身の置きどころさへもなく、この年の十月舊知の陸奧守平維扶が、陸奧へ下る途中、下野の國府へ到着したのにすがつて、一しよに奥州へ避難しようとした。この時にも將門は、貞盛の不意を襲つて、攻め寄せたけれども、逃げるに妙を得た貞盛は、どこかへ姿を隱してしまつたので、維扶はひとりで陸奧へ立つてしまつた。

その頃武藏權守に興世王と武藏介經基が新たに武藏の國司となつて下向したが、前例を破つて、また正式の任命のない前から部内の檢視をしようとしたので、端なく武藏の豪族として勢力のあつた足立郡の郡司武藏武芝との間に葛藤を生じ、將に合戰に及ぼうとした。將門は隣國のことではあり、豫て武芝とも交際してゐる中であつたから、その仲裁のために、天慶二年の初兵を率ゐて武藏に入り、双方の間へ立つて和睦をさせたけれども、その際豫て興世王との間にも一物のあつた經基は、ふとした誤解から、將門が武芝と興世王とを握手させて、自分一人を拔け者にするやうにひがんで、すぐさま京都へ逃げ上つて、將門と興世王が謀反を企てゝゐるといふことを、誠しやかに太政官へ訴へて出た。

これまでも將門の事は、護、良兼、貞盛らの訴によつて、朝廷の注意に上つてゐたのだから、その將門が謀反を企てたと聞いて、京都では今更に驚かない譯にはゆかなかつた。そこで先づ將門と主從の關係のある太政大臣忠平から將門に向つて事の實否を糺して來た。將門はこの時興世王を武藏の國衙に入れて、石井の營所に歸つてゐたが、攝政家から問責の教書が下つたので、吃驚して、すぐに常陸、下總、武藏、下野上野五箇國の國司に證明書を書かせて、差出して、謀反の企のないことを辯明した。この辯明書を提出したのは天慶二年五月二日であつたが、これによつて將門に對する朝廷の疑ひは消えたが、この事件によつて將門の名はいよ〳〵朝臣らの注意に刻みつけられ、中にはこの際寧ろ將門の功を認めて、相當な官位を授けたらよからうといふ意見を持つた廷臣もあつて、そのことが朝廷の議

に上つたこともあつたらしい。

この事があつてから、將門の東國に於ける威望が一層加はつたことは、いふまでもない。叔父の良兼が死んだ後は、下總一國は殆んどその勢力範圍に入つたであらう、諸國の國司も將門の請求に應じて、すぐさま證明書を出すくらゐに、もう將門の前に屈從してゐた。特に當時常陸の國司は藤原維幾といつて、貞盛の叔母婿に當る人であつたが、それすらも將門のいふなりにその謀反を否定した證明書を出してゐる。將門がもう關東一圓の大親分として、陰然東國の豪族の上に臨んでゐたことは、あの興世王と武芝との爭を扱つた態度によつても窺はれる。この間に將門から目の敵にされてゐた貞盛は、殆んど天地に身を置くべき所もなく、僅かに叔母婿の維幾によつて、日陰者のやうな日を送つてゐた。

こゝに又常陸國の住人に藤原玄明といふものがあつた。廣大な土地を占有して、租税を納めないばかりか、國司の使が來て督促すれば、辱めて追返すといふ亂暴者なので、維幾から朝廷に奏して、追捕の官符を發することになつた。そこで玄明は妻子を携へて、逮捕を逃れて、大親分の將門の懷へ飛び込んで來た。しかも常陸を出奔する際に、行方、河内兩郡の不動倉を開いて非常準備の糒を盜出して行つたことが分つたので、維幾からはすぐに下總の國衙と將門に通牒を發して、玄明の逮捕方を照會して來た。けれども將門からは、いつも犯人が逃亡して見つからないといふ返事ばかりで、一向埒があかないので、維幾はそれなら下總へ踏込んで力づくで埒を明けようといふ氣勢を示した。玄明はこの形勢を見ていよ／＼將門に縋りついた。そこで將門は持前の俠氣を出して、前に興世王と武芝の紛議を扱つた時のやうに、一千餘人の兵を率ゐて、天慶二年十一月廿一日常陸國に入り維幾に通牒を送つて、「玄明の罪を宥して本領にかへし、逮捕の命令を撤回してもらひたい」と申送つた。將門の腹の中では、恐らく自分の威力を以て迫る以上は、相手もこちらの要求に應じないではゐられまいと高をくゝつてもゐたであらう。ところが維幾の側には、貞盛といふ者が居り、又維幾の子の爲憲も血氣の若者であつたから、正面から將門の要求を刎ねつけたばかりか、官兵を繰出して戰を挑んで來た。こゝに至つて將門も引くに引かれない行掛かゝりとなり、一戰の下に優勢な敵を擊破して、常陸の國府を占領し、維幾を擒にし、官の印章を奪ひ、掠奪を恣にした上、府廳を燒拂つて、廿九日に下總へ歸つて來た。

これまで將門は幾度の戰陣に、人を殺し、財を掠めたことはあるけれども、それらはみな私人と私との鬪ひで、公然官憲に

向つて抵抗したことは、まだ一度もなかつた。彼れが幾度か告訴され、幾度か追捕の命令を受けながら、幸に法網を免れて來たのはこれがためであつた。この點から考へても、彼れは決して最初からたゞ無法な暴れ者ではなかつた。彼れが京都の事情にも通じ、相當に智慮もあり、機略にも長じ、特に叔父良兼に對する態度や、この後貞盛の妻を虜にした時の樣子でも察せらるゝやうに、何處か人情の深いところもあつて、これまでは努めて謀叛の名を避けるやうにしてゐたのが、勢にかられてとう／＼破目を外すやうになつた。かうなつては、いくら贔負目に見ても、最早叛亂の罪を辯護することは出來なくなつた。相應に目先も見え、膽略も人並以上にあつた彼れが、終には決心の臍を固めたのはこの時であつたらう。

　もうかうなつては、將門として、行くところまで行くより外に途がなかつた。この時興世王は新任の國司とまた激しく衝突を起して、武藏國を去り、下總へ來て、將門に身を寄せたのであつたが、この時將門に向つて獻言した。「一國を取るも、數國を取るも、罪を受けるのは同じことだとすれば、いつそ關八州を占領して、天下の形勢を窺つたらどうか？」將門はそれを聞いて、大きく點頭いた。「おれもさう思ふ！　おれも王統に生れた身だ。同じことなら、阪東八國から始めて、帝都をも攻取らうと思ふ。何はともあれ諸國の印鎰を奪つて、掌に八國を握り、腰に萬民を附けようではないか。」

　そこで天慶二年十二月十一日、數千騎の兵を率ゐて下總を發し、下野から始めて、上野、武藏、相模の四國に入り、その印鎰を奪つて、國司を京都に追ひ上ぼしたが、到る所一人の抵抗する者もなく、安房、上總、伊豆も風を望んで降伏したので一月ばかり內に阪東八箇國を征服し、弟將賴を下野守に、多治經明を上野守に、藤原玄茂を常陸介に、興世王を上總介に、文屋好文を安房守に、弟將文を相模守に、弟將武を伊豆守に任じ、天子に代つて阪東八ヶ國を支配する由を太政官に發して、相模から下總へ引返した。

　丁度將門が兵を率ゐて堂々と上野の國府へ入つた時であつた。一人の女が現はれて、自ら八幡大菩薩の使だといつて、天位を平將門に授けるといふ神意を傳へたので、將門は喜んで神意を受け、群衆は歡呼して、將門を拜した。そこで將門は自ら新皇と號し、詔勅を發して、王城を下總國猿島郡石井郷南亭の地に定め、左右大臣以下文武百官を任命した。この時弟の將平と、近臣の伊和員經の二人が、大義名分を說いて、皇帝の名を用ふることを諫めたけれども、將門はその頃丁度渤海の扶餘城を攻落して、東丹國を建てた契丹王の例を引いて、「當世では强

い者が天下を取るのは當り前のことである。阪東八國を領する以上は、一朝官軍が攻めて來ても、足柄、碓氷の二關を固めさへすれば、何の恐れることがあらうや。お前たちのいふことは迂遠だ」といつて用ゐなかつた。

關東はもう久しく中央政府の勢力範圍を脱却しようとしてゐる。國司はまだそれ／＼に任國に下つてその任務についてゐるけれども、實際の勢力はもう廣大な土地と、兵權とをもつた前任の國司や多くの土豪に歸して、國司の命令も行はれないやうな場合が多かつた。將門が京都から歸つて以來の樣々な出來事は、最も雄辯にこの事實を語つてゐる。彼れはこの間に朝廷の命令の朝令暮改で、實力のあるものに向つては何等の威力もないことをつく／＼と痛感した。彼れの經驗は直に「強い者の天下」であることを自覺させたに相違ない。叔父良兼が死んでからは、關八州には實際彼れの手に立つほどの強敵はなかつた。彼れの戰法を見ると、いつでも割合に微弱な兵力を以て優勢な敵を破つてゐる。そこに彼れの膽略と機敏とが窺はれる。彼れはこの膽略と機智とを以て、次第に關八州の豪傑を懷柔して、隱然として關東一の大親分となつた。土豪と官憲との爭が起るたびに、彼れはいつも土豪の身方となつて、巧みにその紛爭を扱つた。かうして無位無官の相馬小次郎將門は、土豪の勢力を背景に負つて、その叛亂以前に於て、事實上總の國司を驅使してゐた。彼れがふとした行掛りから、公然官憲の敵となつて、公然阪東の諸國を占領する決心を定めた時、一人の抵抗する者もなく、諸國の國司が、魚のやうに驚き、鳥のやうに飛んで、こそこそと京都へ逃げ歸つてしまつたのに不思議はない。關八州はもう久しく土豪の手に歸してゐる。將門はたゞこれらの土豪の勢力を代表して、無形の勢力を有形にしたものに過ぎないのであつた。

將門の心事は彼れが新皇と稱したのと同時に舊主なる太政大臣忠平の息に宛てゝその心情を訴へた書面によつても、窺ふことが出來る。彼れは初めに歸郷以來の境遇を細かに記した後、この度の事に及んで「將門本意にあらずと雖も、一國を討滅しつれば、罪科輕からず、百縣に及ぶべし。之によつて朝議を俟つの間、しばらく阪東諸國を虜掠し了んぬ。伏て照穆を案ずるに、將門は已に柏原帝五代の孫なり、縦ひ永く半國を領すると も、豈非軍と謂はんや。むかしは兵威を振つて、天下を取るは、みな史書の見るところなり、將門天の與ふるところ、既に武藝に在り、等輩を思惟するに誰か將門に比せんや。然るに公家褒賞の由なく、屢々譴責の符を下さる、身を省るに恥多く、面目何ぞ施さん。推して之を察したまはゞ甚だ以て幸なり。抑

々將門少年の日、名簿を太政大殿に奉じ、數十年にして今に至りぬ。相國攝政の世、意はざりきこの事を擧げんとは、歎念の至り言ふに勝ふべからず、將門國を傾くるの謀を萠すといへども、何ぞ舊主を忘れんや、貴閣且つ之を察し賜はらば甚だ幸なり。」といつて、暗に攝政家のとりなしによつて、この度の罪を宥され、阪東諸國をこのまゝ管領したいといふ底意を示してゐる。單純な武人であつた彼れは、恐らくこれまで近國の國司らを威嚇したのと同じやうに、かうして實力を以て朝廷を威嚇することによつて、關東領有の目的を萬一にも僥倖し得るものと考へたでもあつたらう。

▲將門の滅亡

併し將門の蹉跌の第一步は、何といつてもその新皇と號し、王城を建て文武百官を任命して、天位をも幷かさうといふ心情を露骨に表白したことであつた。民衆の心の底に眠つてゐた皇室に對する宗教的感情が、この表白によつて覺醒されたことは、將平や貞經の諫言のうちにも看取されるが、配下の軍民があの八幡大菩薩の宣託によつて、狂喜してゐる間に、一方では却つてその僭越を苦々しいとする感情が、一部の人心を支配したに違ひない。關東の野人相馬小次郎將門であればこそ、多くの土豪が自己と同等の階級として、多くの親しみをも持ち得たであらう、その將門が俄かに皇帝となつて、東國に君臨すると聞いた時に、不羈奔放な土豪の自尊心は果して、それに滿足し得たであらうか。下野の押領使藤原秀郷の如きは、少くともその一人であつたらう。

秀郷は藤原魚名の後裔で、多年下野に住して勢力を張つてゐた豪族の一人であつた。彼れは延喜十六年に罪があつて下野へ配流されて來たほどの人物で、梟雄たる資格からいつても、恐らく相馬小次郎よりも一枚方上の役者であつたかも知れない。傳説によると、將門がいよ〳〵謀反人として現れた時に、秀郷は加擔すると號して將門の陣營へ行つた。その時將門は丁度髮を結ひかけてゐたが、喜悅の餘り、結ひかけた髮をそのまゝにして、烏帽子を引つかぶつて對面した。秀郷はこの會見の間につく〴〵將門の輕卒な樣子を見て取つて、人物の小いのに失望して、貞盛の身方になつて將門を滅ぼしたといふのである。

とにかく將門叛逆の宣言は、一時朝野の人心を激動させた。朝廷では將門に逐放された東國の國司らから詳細な事情を聽き取つて、いまにも京都に押寄せて來るやうな騷ぎをし、諸方の神社佛閣に勅使を立て、逆賊平定の祈禱を行ひ、一七日の間に七斛餘の芥子を焚いて、將門の頓死頓滅を祈らせた。丁度こ

の時、西國には藤原純友の亂があつて、その部下の海賊は、瀬戸内海を横行して、南海、山陽兩道の沿岸を荒らし、間牒を京都へ入れて、毎夜のやうに諸方へ火を放ち、將門と純友と東西相應じて京都に迫るといふ噂まで流布させたので、京都の動揺は甚しかつた、朝廷では先づ純友の方は一時僞詔を下して懷柔して置いて、その間に將門の亂を鎭壓しようといふ方針を定め、天慶三年正月參議藤原忠文を征東大將軍に任じ、東海、東山兩道から東國に發向させた。

將門は相模から凱旋すると間もなく、天慶三年正月の中旬大兵を率ゐて常陸へ進發し、貞盛、爲憲を捜索して、後日の患を防がうとしたが、貞盛らは巧く逃げ廻つて、どうしても所在が判明しなかつたが、そのうちに部下の兵が、貞盛の妻と源扶の妻を見つけて、引立てゝ來た。見るとその女どもは衣類まで剝がれて、恥かしさうにしてゐるので、將門は不便と思つて、一襲の衣服を與へて、解放してやつた。

こんな風にして貞盛、爲憲はとう／＼見つからなかつたが、將門はもう常陸も心配なことはないと思つたので、下總へ引返して、千人ばかりの手勢を殘して、一時諸國の兵を解散した。すると豫てからかういふ機會を覗つてゐた貞盛と、秀郷とは、四千餘人の兵を率ゐて、不意に下總へ攻込んで來た。將門は情報に接して、二月一日下野の國境まで出陣して、敵を防いだけれども、先鋒の軍が先づ破られ、將門の奮戰もその甲斐なく、ジリ／＼と領内へ退却して、援兵の集るのを待つて居た。十三日には秀郷、貞盛、爲憲らが勝に乘じて將門の營所近くまで攻寄せて來たけれども、將門は手勢四百餘人を率ゐて、猿島郡の北山に遁げ籠り、島廣山の要害に據つて敵を防いだが、秀郷らは敵軍の集らない先に勝たなくてはならないと思つたので、火を放つて、將門の營所を燒いて進擊した。將門は甲冑を着け、馬を乘廻して奮戰し、一時は敵の大軍を蹴散らしたけれども、亂軍の間に、貞盛の射出した矢に中つて馬から落ちた。將門の惡運も終に盡きて、三十八歳を一期として、秀郷のために首を揚げられてしまつた。

間もなく將頼、玄茂、興世王を初め、將門の殘黨も殘らず誅戮されて、京都の朝廷を震駭させたこの一大叛亂も、僅かに八十日餘りで平定した。

五　天慶の亂は何を意味するか

將門には何となく楚の項羽を聯想させるところがある。その個人的男氣とその膽略に於て、彼れは正しくその當時の關東の諸豪を壓倒してゐたであらうが、項羽と同じやうに、かういふ

叛亂を指導して、天下を取るだけの政治的手腕を缺いてゐた。彼れが瞬くうちに關八洲を風靡したにも拘らず、島廣山の一戰で、脆くも首を授けたのは、これがためであつた。將門の叛亂は寧ろ突發的で、勢に制せられた趣があるが、それでも弟將平の諫言に對して、「苟くも關八洲を領して、足柄、碓氷の二關を固めてしまへば、どれ程の大軍が攻め寄せても恐れることはない」と豪語するだけの自信をもつてゐた。

大化から天慶まで、三百年、この間に關東の平野に蓄積された土豪の勢力は、將門によつて、初めてその聲を揚げた。將門の生涯は、東國に於ける土豪の生活を示した最も鮮かな縮圖である。そこには人生のあらゆる方面が、最も生き〳〵と描かれてゐる。戀もあれば、遺恨もある。その後も、いろ〳〵な姿となつて、長く武士階級の生活にまつはつてゐる所領の爭ひもあれば、後の武士道の萠芽も、そのうちに現れてゐる。彼れが相馬内裏の設計は、終に京童の嘲笑の種子となつたけれども、後に奧州の藤原氏が、平泉の設計に悉く京都を模して、陸奧の邊隅に小京都を現出させようとしたことなどに思ひ比べたら、檥橋を京の山崎と號し、相馬郡大井津を京の大津に擬らへて、下總の一隅に、京都の生活を移さうと思ひついたのは、京の文化が全國の人心を支配してゐた當時に於ては、決して笑ふべき空想ではなかつたらう。

將門は時代の傾向を示すべきたゞ一人の代表者に過ぎなかつた。當時關東の豪族が、如何にその首領を求めてゐたか、又これらの豪族が如何に自尊の氣に充ちてゐたかといふことは、秀郷對將門の傳説が、遺憾なく物語つてゐるではないか。恐らく所在に蟄伏して居たらうと思はれる幾十の將門、幾百の秀郷を想像することなしには、將門のあの華々しい勃興をも、同時にあの呆氣ない最期をも、充分に諒解することは出來ないであらう。彼れをして名を成さしめたものも、これらの豪族であると共に、彼れを滅ぼしたものも、やはりこれらの豪族であつた。この點に於て、將門は頼朝に先んじて、頼朝の事業を成さうとした最初の人であつた。たゞ武士階級の專制を實現させるには、時機がまだ少し早く、それだけの地均しが出來てゐなかつたことや、大江三善なぞのやうな適當な參謀を得なかつたことや、頼朝に見るやうな政治家的資を缺いてゐたことなどが、將門の覇業をして一敗地に塗らさせた原因であつたらうが、とにかく一擧して關八洲の平野を席卷し、京都の公卿をし顔色を失はしめたといふことは、東國の土豪をしてその存　を自覺させた最初の刺戟であつたといはねばならぬ。

しかもこの時征東軍の諸將が、悠々海道を下つて、淸見ケ關

で詩などを賦してゐる間に、關東の事は關東の土豪の力で、片づけられてしまつた。征東軍の諸將はすご／＼中途から引返し、秀郷は將門誅伐の首功として、從四位下に叙し、功田を賜はつた上、下野、武藏兩國の國守に任ぜられ、貞盛は從五位上に叙し、右馬助に任じ、又經基は豫め將門の謀叛を見拔いて告訴した功によつて、從五位下に叙し、大宰少貳に補任された。叛亂の結果は、要するに關東の豪族をして、その力を自覺させ、いよ／＼その根據を固めさせることゝなつた。秀郷の子孫は、關東には、足利、小山、結城の一族となり、陸奥では藤原氏となり、爲憲の子孫は、駿河、遠江、伊豆に住んで工藤、狩野、伊東、河津、天野、の諸族となつた。而して經基、貞盛の子孫が、源平二氏となつて、天下を爭つたのも偶然ではない。

天慶の亂から二十九年にして安和の變があつた。秀郷の子相模介藤原千晴、經基の子左馬助源滿仲もこの陰謀に與つたが、滿仲の變心によつて大事に到らずしてすんだ。安和の變から五十九年にして、平忠常の亂が起つた。忠常は村岡五郎良文の孫である。忠常の亂に滿仲の子甲斐守源頼信は、勅命を奉じて鎭定の功を擧げ、忠常の從兵を家臣とすることを許されたので、源氏は始めて東國に發展する機會を得たが、頼信の子頼義は、後に相模守に任ぜられ、阪東八平氏の棟梁であつた上野守平直方の女を納れて、關東に於ける平氏の勢力を掌中に收め、父子二代の威名を負つて、悉く關東の諸豪を服從させた。忠常の亂から二十年を經て、陸奥の夷族安部氏の亂が起つた。この時頼義は陸奥守、鎭守府將軍に任じ、關東の兵を率ゐて征討に從ひ、嫡子義家と共に十二年の辛酸を積んで、終にその一族を滅ぼしたが、その後又二十年たつて、出羽の夷族清原氏が亂を起したのを、その時陸奥守であつた義家は、三年の苦心を積んで征討の功を擧げた。前後二回の奥州戰爭の間に、源氏の一門と東國武士との主從關係はいよ／＼濃厚を加へ、頼信以來東國に扶植した源氏の勢力の根柢を一層深からしめた。義家の時になると、東國の武士はもう大部分源氏の家人となり、八幡太郎義家の名は、武人の守護神のやうに崇拜されるやうになつた。後三年の役から數年を經た寛治五年に、領地の問題から事が起つて、義家、義綱兄弟の間に戰爭が始まりさうな形勢になつた時、朝廷では宣旨を五畿七道に下して、前の陸奥守義家の從兵の京都に入ることを禁ずると同時に、諸國の百姓が、土地を義家に獻じて、その庇護を受けることを禁じてゐるのを見ても、民衆に對する義家の勢力が、當時の朝廷に危惧を懷かしめるまでになつた有樣が窺はれる。その後源氏の勢力は、一族間の内訌によつて一時大に衰へたけれども、それでも尚ほ頼朝の父義

朝は、源氏の嫡流として海道十五箇國を管領したと言はれるのを見ても、東國に於ける源氏の富と勢力とは、將門の時よりも一層根深いものになつてゐたことが諒解されるであらう。源氏一門の背後に横るこの偉大な脊景に眼を閉いだら、眞に頼朝の事業を解することは出來ない。

要するに天慶の亂によつて、武士勃興の一大烽火が擧げられて以來、一たび覺醒された土豪の勢力は一亂毎に加はつて行つて、終に頼朝の覇業によつて一段落を告げるまで武士階級勃興の大運動は、二百五十年に亘つて、徐々として進行を續けたのである。

泊翁先生を中心として

法學博士　吉野作造

○

明治初年の文化發達の跡を研究するに當り看逃す可らざる人々を算へると、福澤先生を筆頭として中村敬宇、西周、津田眞道、神田孝平、加藤弘之、西村茂樹等の諸氏がある。昨今僕は頻りに之等先哲の書き殘したものを集めて居るが、今差し當り西村先生の往事錄といふを手に取つて見る。一種の自叙傳の様なもので、初めに祖考先考の略歴を述べ、次いで自分の經歴は幼時より明治二十九年の頃に亘り、公け向きの行動を主として可なり詳しく叙して居る。夫れ丈け歷史的材料としては少らぬ價値があるものと思はるゝ。西村先生の遺著は其の後泊翁叢書といふ大部の二冊に纏められ日本弘道會から出版されて居るが、どうしたものか此の往事錄だけは收められて居ない。坊間にも餘り多く見掛けぬやうだ。

以下書き列ぬる所は往事錄を讀んで明治文化史研究上參考となると思つた點を書き拔いたものに過ぎぬ。西村先生を中心とはするが、皆當時の形勢に觸るゝ所がある。事柄を明にする爲に間々他の書からも若干拔萃した。

猶一言斷つて置くが、此處には明治以後の分だけを紹介する。往事錄は一つ書きにしてあつて章別はないが、約半分は明治

以前の事に係る。こゝには後編に就てのみ述べ、前編の紹介は別の機會に讓りたい。

○

初めに版籍奉還より廢藩置縣までの頃の天下の形勢が說いてある。版籍奉還は明治二年二月の事、薩・長・土・肥卒先して決行し、自餘の列藩之に倣ふもの多かりしも、形勢を觀望して遲疑決せざりしものも少くは無かつたとある。新政府に果して全國を背負つて立つ丈けの力あるかが疑はれた爲であらう。全部の奉還が了るには數ケ月かゝつた。六月に至つて漸く『府藩縣三治一致の制度を立て』る事が出來た。次いで明治四年の廢藩置縣となるのであるが、此時は大分諸方に不平があつたらしい。歷史の傳ふる所に依れば、廢藩置縣の一事は天下の擾亂を恐れて非常に秘密の裡に決行されたとあるけれども、世間の噂には餘程早くから上つて居たらしい。現に西村先生も此噂を耳にし明治二年の秋すでに、郡縣議一編を草して集議院に提出して居る。郡縣議は先生の著建言稿の中に收められ、建言稿はまた前記泊翁叢書の第一輯の中に在る。

廢藩置縣の發令は云ふまでもなく明治四年七月十四日の出來事だ。先生の記する所によると、『在京の藩知事を宮城に召し、天皇臨御ありて廢藩の旨の勅諭あり。何れも其職を罷められ、舊藩大參事以下に命して假に事務を管理せしめ、大事は朝裁を取らしむ』とある。翌十五日には在京の各藩大參事を召して三條太政大臣より同樣の勅諭を申渡された。『宮城の大廣間に天皇出御、諸藩の大參事は皆直垂を着す』は一寸振つて居る。

さて廢藩の當時諸方に不平のあつた事は致し方がない。西村先生の手錄の中から其の二三を拔かん乎。曰く、新縣の事たる、舊數藩各異なる民政を合せて一の模型に入れんとする事なるを以て、不齊を齊へ不均を均しくする爲に事務甚煩雜なりと。曰く、其間に朝廷が地方を治むる意見を伺ふに、舊藩の士民を待することと降附の國民を待するが如きの風あり。又縣令は速に成功を立んと欲して急劇の變化を爲さんとする者多しと。曰く、舊藩主は其遇を怒るもの少からず。士族の祿制も金祿公債證書と變じ、其處分は定りたれども要するに奪祿の難に逢ひたることとなれば、其朝廷に對して不平を抱く者甚多しと。

今朝鮮でごたついて居る樣な事が、丁度此頃の政界にも在つたものと見へる。

○

廢藩置縣後の天下の形勢をば先生は非常に危險と觀られた。

『其形勢を察するに、遠からざる内に國中に叛亂の起るは鏡にかけて見るが如し。廟堂の上を見るに屢々大官の進退ありて、國家大政の基礎確定せざるものゝ如し』。其處でどうしても士族をして『不平の氣を消散せしむるの法』なかるべからずと考へられた。之には立法院を設立するに若くはない。況んや『君民同治は我邦今日の急務にして又我邦に最も適當するの政體』なるに於てをや。但し君民同治の理想から云へば上下兩院を設くべきだが、平民の方は『其知識未だ國事を議するに足らず』『下院の事は之を他日に期して可い、今日は先づ士族を集めて上院を作るを急とすといふ意見を定められた。當時としては一種の見識であるが、僕の特に興味を感ずるは先生の單なる學究に非ず常に國士の風貌を具ふるの點である。

先生はまづ其案を以て福澤中村の兩氏に諮つた。兩氏の之に對する態度がまた面白い。敬宇先生は、法律の事は不案内だけれども良い事なら大に助力しやうと云はれたが、福澤先生は、御尤もの說だが予の說の如くせば華士族の勢力を增すに至るだらうとて頭をかたげられたとある。夫より西村先生は躍起となつて大名華族の間に運動された。往いて意見を述べた人を算へると、北條氏恭、松浦詮、黒田老侯、木戸參議、毛利元德、松平春嶽、池田章政、伊達宗城、細川護久の歷々がある。其際先生は自ら起草せる大日本會議上院創立案なるものを持廻つたのであるが、之を見ると頗る珍妙なものである。即ち舊諸侯を以て議員とし、議員は世襲だといふ如き、又議員は自ら出席せず、藩の大小に依て一人乃至三人の代議員を舊臣中から出して職を執らしめ、之れの任期は五ヶ年とするといふ如き、而かも之は政府の設立に係るものに非ず、私立の立法院とすべしといふが如き、啻に理窟が通らぬばかりでない、一種の舊藩復興を目論見る形になる。如何に先生の誠意を諒とする人でも、馬鹿氣て贊成も出來なかつたものらしい。但だ僕等は之等の事實を通しても當時如何に新政府に對する精神的支持が國民の間に弱かつたかを察することは出來ると思ふ。

○

西村先生は、前の上院設置論でも又後に說く條約改正論に於ても、政治法律の方面の活動では餘り芳しい成績を示して居られぬが、純文化的方面、殊に教育の方面に於ては、中々大きな功績を遺された

中にも特筆大書に値するは明六社の創設である。先生の手記に依れば、明治六年の春森有禮氏米國より歸り横山孫一郎氏を介して先生に面會を求められた。森氏曰ふ『米國にては學者は

各其學ぶ所に從ひ、學社を起して以て互に學術を研究し且講談を爲して世人を益す……余は本邦の學者も彼國の學者の如く互に學社を結び集會講究せん事を望む云々』と。先生即ち其事の可なるを贊し更に都下の名家に謀り、其同意を得て出來たのが、明六社である。最初相談を受けたのが福澤諭吉、中村正直、加藤弘之、津田眞道、西周、箕作秋坪の諸氏である。詰り明六社は、森有禮氏の發意に始り、西村先生が當時の新進學者を糾合して出來たものと謂ふべきである。會員相會して談話討論するの外、毎月一回精養軒の樓上で公開講演會を開き、又明六雜誌を發行して、口に筆に文化の開導に盡したのである。『其頃まで本邦の學者は、其知識皆和漢の二學に限りて西洋の事を知るものなし。明六社の說く所は多く西洋の新說なるを以て、官員學者來聽する者甚多し。』兎に角非常な影響を與へたものだ。明六雜誌は四十二號まで出して明治八年にやめた。新聞條例讒謗律の發布あり言論に對する政府の束縛甚だ嚴しくなつた爲だといふ。明六社は其後七八年も續いたが、學士院の創立ありて自然に消滅した。

今手近にある明六雜誌の第一號を出して見る。明治七年三月の發行だ。券尾に次の樣な抱負が書いてある。曰く、

本朝ニテ學術文藝ノ會社ヲ結ビシハ今日ヲ始メトス。而シテ社中ノ諸賢ハ皆天下ノ名士ナリ。人皆謂ハン、卓犖奇偉ノ論千古不磨ノ說ハ必ズ此會社ヨリ起ラント。何トソ諸先生ノ卓識高論ヲ以テ愚蒙ノ眠ヲ覺シ、天下ノ模範ヲ立テ、識者ノ望ヲ贖フセザランコトヲ是祈ル』

猶明六雜誌所載各論文の內容については近き將來に於て評論して見たいと思つてゐる。當時の思想界の有樣を知るには是非とも之を十分に研究することを必要とする。

次に教育行政の方面でも西村先生の功勞は頗る大なるものがある。先生が文部省に出仕されたのは明治六年十一月である。先是明治五年太政官より學制の頒布があつた。之が新政府の出した始めての統一的教育令である。全然米國の制に倣つたもので、今から見れば珍妙なものだが、政府では頻りに其の強行を謀り、各府縣を巡回監視するために翌年には大少督學をさへ置いた（但し之は十年に廢された。尤も仕事其ものを廢めたのではない、仕事は大書記官をして繼續せしめたのである。）其の爲めにや此の制は割合によく行はれたといふ。但し地方官中には隨分強壓手段を用ゐたものもあつたとの事だ。而して急いで強行した結果、規則に拘泥し機械的に流れたといふ弊害は免れなつたとて、先生は其一例に或る小學校で習字を爲さしむるに墨を摺り筆を取り字を書き筆を置く等一々號令を以てやつて居たといふ事實を擧げて居る。夫れでも政府の威權當時盛大を極め

で居つたので人民に一人の之を批議するものがなかつたさうだ。只學費の賦課に付ては、從來に例のない全く新規の徴收なりしが故にや隨分苦情があつたとの事である。

此制度は明治十二年に改められた。新しい教育令は文部大輔田中不二麿氏の發意に基き、顧問米人デヴィッド・モルレーの起案に係るものである。改正の要點は從來の干渉的方針を緩和するに在つた。即ち政府の發令は大綱を示すに止め、其の細い施設は町村に委かさうといふのである。然るに其の結果は表面太だ良くなかつた。『是を行ふこと一年許、全國の學事忽に衰退の狀を現はし、或は既設の學校を閉鎖する者あるに至れり。』之ではならぬといふので、政府は學事視察出張中の田中氏を急に司法卿に轉じ、司法大輔河野敏鎌氏を文部卿に移して教育令の改正に當らしめた。斯くして出來たのが十三年冬の發布にかゝる改正教育令である。『自由教育の精神を改めて舊時の干渉の制に復』したのであるが、先生は『是により表面は教育再興の狀を現はしゝといへども、政府の專權と人民の依頼心とは更に一層を增加せり』と批評して居る。

西村先生は大に田中氏に與する所ありて、河野氏とは全然ソリが合はなかつたらしく見ゆる。外の色々の所にも此點がほのめいて居る。夫は感情から來たのか、又は前者が比較的自由にして後者の動もすれば劃一專制に流るゝを觀ての話かよく分らない。孰れにしても西村先生が當時既に一種の自由な教育意見を有たれたことは大に注目に値すると思ふ。

先生の自由思想は、小學中學模範規則制定問題についても現はれて居る。河野文部卿は、十三年の冬改正教育令を發布して後、小中學の模範規則を作つて各府縣に頒ち、以て全國の教則を統一せんと企てた。先生は斷然其不可なるを說いたが、文部卿は之を聽かぬ。遂に先生は其委員長たる囑命を辭したのであつた。

○

教育行政部内に於ける先生の功績はまたいろ／＼の方面に亙つて居る。

先づ第一に來るのは編輯事業である。新教育の發展には新しい書物が要る。此の點に深く意を留められたのは早い頃に時の文部卿だつた大木喬任氏である。今の司法大臣たる大木伯はどんな偉い人か知らぬが、其の先考は慥に日本國民の深き感謝に値する人に相違ない。斯くて文部省内に編書課と反譯課とが置かれた。先生は明治六年十一月入つて前者の課長となり、後者の課長には河津祐之氏が据られた。編書課では小學讀本から理

科算術の教科書、さては歴史や自然科學や外國語學の類に至るまで、手寄り次第に手を着けたものらしい。反譯課では主としてチエムバアの百科全書を譯し、小冊子の形でドン／＼世上に送り出した。代價は十錢二十錢といふ程度である。僕の有つてゐるのでも、論理學とか法律沿革事體とか天文學とか洋教宗派とか、北歐鬼神誌とか人口窮救及保險などいふがある。有名な加藤弘之先生の國法汎論や内田正雄氏の輿地誌略も此課にて出版したものだ。この仕事は明治十年一月の官制改革の時までに及んだのだが、此時以來は教科必要の書だけに止めることになつた。

斯く書いて來て僕は圖らず子供の時讀んだ小學入門といふ本を想ひ出す。僕の小學校に這入つたのは明治十七年で、その時の學校は寺小屋時代から脱し切れぬ甚だ幼稚なものであつた。這入つてすぐ「いろは」を習ひ、一ケ月ばかりで大分六かしいものを讀まされた記憶がある。中に『神は天地の主宰にして人は萬物の靈長なり』などいふ文句があつた。意味は無論分らない。只暗誦するのみである。之れも今考へて見ると西村先生の主裁の下に此頃編成されたものであらう。無鐵砲な教科書だが併し文章は中々簡潔にして要を得て居ると思ふ。序に二三の句を引用して見やう。『朝は五時に起き夜は十時に臥す。働く時は勞を厭はず食するときは飽くを求めず。』『急に走るときは速けれども躓くことあり、緩く歩むときは遲けれども疲るゝこと少し。』『庭にあまたの花を栽え、池に多くの魚を畜ふ。春秋の景色もあり、朝夕の眺望もよし。』實際に筆執つた人が誰だか知りたいものだ。

編輯の事に關連しても一つ特筆すべきは古事類苑のことである。學術の振興を謀るには其の基礎として學術大辭典の編なかる可らずと爲し、明治十二年之を時の文部卿代理田中不二麿氏に建議した。其許可を得、編輯局の事業として那珂通高 榊原芳野、小中村清矩、佐藤誠實、小杉榲邨等の碩學を集め、更に十餘名の助手を附して作つたのが古事類苑である。十八年の改革を機とし此書編纂の事業は文部省の手を離れたけれども、西村先生の着想を待たずんば此書或は永久に出來なかつたかも知れない。大槻文彦先生の言海についても西村先生に同じ様な功勞を認むべきは、其の序文にも明である。

先生は大學教育に就ても頗る熱心であつたらしい。大學では始め英語を以て教授して居つたのだが、文部省顧問米人モルレーが、大學の教育に他國語を用ふるの不面目を説くに感激し、先生は初め之を田中文部大輔に説き、次で大學總理加藤弘之氏の同意を得、之から段々日本語で講義する様になつたといふ。

併し先生は後に至て此考は必しも正しくないと自認されて居る。そは國語で教授するには國語で書かれた立派な書物が無ければならず、夫には反譯では追つ付かぬ、又急に良反譯の澤山出來るものでもなし、殊に邦人中より良教師を得るは一朝一夕の事でないといふに在る。此點に於ても西村先生の俗説に捉へられざる卓識の程が窺はるゝ。

明治十九年二月、文部大臣森有禮氏より大學總理に就任せんことを勧告せられ、之に對し大學改革の意見を陳述して辭したとある。時の大學に對しては可なりの不滿を有つて居られた樣だが、詳しいことは書いてない。要するに先生は大學教育に就ても意見は大にあつた樣だが、結局實際には遂に之を行ふ機會に接せずして了つたのである。

先生はまた學士院の事に付ても書いて居る。學士院の創立は明治十一年十二月九日だ。時の文部卿は西郷從道氏であるが、實際の計劃は田中大輔の久しく考案せる所なのである。最初は東京學士會院と呼ばれ、第一回の會員として文部卿より擧げられたのは西周、加藤弘之、神田孝平、津田眞道、中村正直、福澤諭吉、箕作秋坪の七氏に過ぎなかつた。後の會員は本院の選擧によるとされ定員を四十名と限られたが、翌年三月最初の選に入つて先生もやがて會員となつたのである。初め大に任ずる所あり、專ら教育界に貢獻せんとして、文部省に向つても盛に建議などしたものだが、田中氏去りて後は邪魔物扱され、建説亦概ね卻けられしを以て、後には公開講演に專ら力を注いだといふ。何れにしても當時の學士院の意氣込の盛なるは、今日の夫に比して雲泥の差がある樣である。

序に記して置くが、僕の所藏に各國學士院紀略といふがある。明治十三年五月東京學士會院の版に成るものだ。序言によると、學士院創立の參考に供する目的で文部省で聚めた稿本を田中文部大輔から下附を受け、五百部を限つて印行したものだと云ふ。之に由つて觀ても、學士院の創立には田中氏の功を看過す可らざることが分る。而して田中氏自身が學士院に對て今日あるが如きよりも遙に大きな期待を繋けて居たことも、想像が出來る樣に思ふ。

○

西村先生が教育の任を以て宮中に仕へた功も亦頗る大なるものがある。明治八年五月加藤弘之氏の元老院議官に轉ぜるに代つて三等侍講の兼勤を仰付つたのを振り出しとし、暫く聖上及皇后宮の御前に進講したが、明治十年十一月には特別の御依頼により有栖川宮、小松宮、北白川宮、伏見宮の四親王殿下にも

西洋史の御講義を申し上げ、明治十八年十一月には皇太子殿下の『御教育御世話可申上旨』の御直命を蒙つた。明治廿一年七月には華族女學校長の任に就き二十六年十一月に及んで居る。

兩陛下御進講に就ては先生は次の如く書いておる。『御學問の御課業は、日曜日の外は日々にして、午前午後共に進講あり。時刻に至れば聖上御學問所へ出御あり。侍從試補三人（藤波言忠、堤綱丸、荻昌吉）代る〱御左右に奉侍し、侍講御正面に進みて講義を申上ぐ、聖上先づ本文を御素讀あり。次で侍講其義を解き、傍ら治亂の迹、政事の得失を援引して本文の意を補足す。皇后宮にも日々御讀書の御課業あり。午前午後兩回に分ちて侍講出で、是を進講す。皇后宮の御課業は内廷にて遊ばされ、聖上とは全く御別なり。講義の時は常侍權掌侍代る〱奉侍す。』と。此時の侍講は、先生の洋書を受持てる外、國典は福羽美靜氏 漢籍は元田永孚氏であつた。斯く當初は毎日御聽講遊されたのである。『明治十二年の頃より、聖上御政務御繁劇にならせられ、夫故御學問は追々御休暇多く、』遂に明治十八年に侍講は全く廢官となり、毎年一月の御講書始めの事のみ儀式的に永く殘ることとなつた。

四親王殿下の御進講も、元田氏と毎月三回代る〱出講し、三年程續いたさうだ。『其御待遇極めて鄭重なり』と述懐して居らるゝ。之も各殿下の御職務御多忙となるに連れて自然と中止された。

皇太子殿下は、當時中山從一位、嵯峨正二位の御補導の下に、高辻修長、勘解由小路資生の二氏御讀書御手習の御世話を申し上げて居つたのだが、皆舊式のやり方で、現代の教育法に適合しないと云ふ所から、新に西村先生に恩命が降つたものなさうだ。後土方久元氏代つて御輔導の任に就かるゝに及び、御教育法をも根本的に一新することゝし、湯本武比古氏を勸めて御教授を擔當せしめ奉つたとある。

○

明治十八九年頃の歐化主義の風潮に反動して國家主義乃至國粹保存主義が勃興したに付ては、良い意味に於て又わるい意味に於て、貢獻した人が澤山にあるが、西村先生の如きは其の良い意味に於ての功勞者の随一であらう。先生の立場は、一言にしていへば開明國家主義とでも謂つてよからうか。今日謂ふ所の皇室中心主義の倫理説の如き、先生はすでに可なり古くから之を鮮かに説いて居られた様に思ふ。

併し先生の思想を細かに究明することは今僕の仕事ではない。往事録について先生の立場や考へ方の傾きを推定すべき二

三點を引くだけに止めやう。

先生が一面に於て可なり自由な考を抱いて居られたといふことは前にも述べた。教育方針としては田中不二麿氏の自由主義に賛して河野敏鎌氏の劃一主義を喜ばなかつた事や、大學の講義に外國語を用う可らずとする説に一旦は成程と合點して而かも忽ち其意向を飜した事なども、其證據の一つにはならう。併し乍ら先生は結局する所國家主義者としての確信に一貫して誤らなかつた人である。之を證明する第一の仕事として僕は日本弘道會の創立を擧ぐ。

先生自ら語る所によれば、日本弘道會創立の發念は、明治五年太政官の頒布した「學制」の序文中『專ら生を治め産を興すことのみを說き一も仁義忠孝を教ふるの語なき』に憤慨せるを端緒とするといふ。其後靜に世相を觀するに、官民共に西洋文明に眩惑して修身道德を蔑視し、『人心肆然として放恣となり、其流弊の極る所を知らず、』遂に明治八年より九年にかけて、阪谷素、丁野遠影、植松直久、那珂通高、杉亨二等の諸友に謀り、東京修身學社といふを作り、毎月一回集會して相互に修身道德を講究したのが、即ち今日の日本弘道會の始めである。日本弘道會が其後今日に至るまで何を日本文化の發達に寄與したかは、今改めていふの必要はなからう。

斯う云ふ傾向の人だから、明治十八九年頃の輕佻なる歐化の風潮に對していたく顰蹙したことは、之を察するに難くない。先生は十八年十二月の改革に關連して、『伊藤内閣の新政は、法律制度風俗禮儀一々是を歐米に模倣し、專ら外面の文明を裝ひ、外人を優遇し、舞踏會、假裝會、活人畫等其他外國の遊戲を行ひ、務めて其歡心を求め、本邦古來國家の基礎たりし忠孝節義勇武廉恥等の精神は棄てゝ顧みざるものゝ如し。其の登用する所の官吏は、多く怜悧便佞の人にして、質樸剛毅の者は常に排斥せらる』と憤慨して居る。伊藤公に對しては特に度を超えた反感を有つて居つた樣にも見ゆる。孰れにしても時流に快とせざる所あり、不平鬱勃たるものがあつたやうだ。斯う云ふ氣分の中から出來たのが即ち日本道德論の一篇である。之に就て先生は新にまた伊藤公の怒りを挑發したといふ隱れたる事實もある。

日本道德論は、明治十九年十二月帝國大學で開いた三日に亘る公開講演の草稿を印行したものである。始め大臣以下の諸知人に贈つたのだが、世上に賣り出した第二版は、伊藤公の怒りに遇ひ若干『語弊を改刪して』發行したものださうな。其譯は斯うだ。最初此書を各方面に配つた時、文部大臣森有禮氏などは大に賛成し中學以上の教科書とすべしとまで賞讃したのだが、

伊藤總理大臣は『新政を誹謗し政事の進路を阻礙する者となし』て大に怒り、森氏を見て嚴しく詰責したといふのである。森氏乃ち秘書官小牧昌業氏に命じて其の不穩當と見らるべき個所を摘出せしめ、其刪除を忠告した所、先生は改刪よりは寧ろ絶版すべしと答へたが、世上僞版を作りて不正の利を貪る者あるに依り、遂に森氏の忠告を容れて改訂版を出したのだといふ。猶先生は之に附け加へて『伊藤氏が大に怒りしは此時谷農商務大臣が新政に反對する意見書を出し、總理大臣頗る憤懣せし際に余の道德論を讀みしに、其說谷氏の說と相符合するの點ありしを以て、兩人相約して新政を妨碍したりと思ひ、此のごとく怒りしものなりと聞けり』と述べて居る。

先生が一種の皇室中心主義の倫理說を把持して居られたことは先にも述べた。敎育勅語の御發布などについても、先生の宿說が間接に與つて力あつたのではあるまいかと推せらるゝ節がある。先生は西洋の諸國が耶蘇敎を以て國民の道德を維持するが如く、本邦には『世界無雙の皇室ある』が故に、之を德育の基礎とすべしと云ふ見地を有つて居つた。之より更に廣義の敎育の中知育體育は依然之を文部省の管理に留め、德育は皇室自ら之を管理するを得策とすとの意見を執つて居られた。副島種臣、佐々木高行、佐野常民の諸氏亦皆之を贊せるにより、三條公にも說いたが、結局可とせられたので、愈々勅選を以て普通敎育に用ふる修身書を作り之を全國に頒行せんとの具體案を立て、先生自ら副島佐野の二氏と共に起草の任にあたり、時の宮內大臣土方久元氏にも謀りて其承諾を得たといふ。隨分突飛の考ではあるが、誠意はまことに諒とすべきものがある。幸にして森文部大臣の堅く執て之を非とするあつて行はれなかつたが、先生は飽くまで此事に熱心であつて、廿二年二月には更に『宮內大臣に面して國民の德育は帝室にて直に御管理あらせられんことを述べ』たとある。其事の文字通りに行はれざるは固より當然だが、之が敎育勅語の發布と何等かの思想的連絡あるのではあるまいかと思はれる。但し先生自身はこの點については何事も語つて居ない。

○

先生が普通の洋學者に似合はず若干偏狹な傾向を有つて居られたことは、條約改正に關する態度に最もよく現はれて居る。併し條約改正問題に對する先生の態度に就て吾々の最も感興をひく點は、之よりも寧ろ先生の志士的風貌の濃厚なることである。先生が終始一貫敎育界の人を以て任じ、且つ入つては聖上の侍講たり出でゝは華族子女の敎育の任に當れるの身を以て、

一旦國家の大問題と觀ずるや直に東奔西走殆んど寢食を忘るゝといふのは、到底尋常の學究に見る能はざる特色と謂はなければならぬ。

先生の記す所によれば、明治政府の始めて條約改正の談判に手を着けたのは十一年寺島外務卿の時であるといふ。此時の目標は専ら稅權の回復に在つて、法權回復の方は暫く顧みない事になつて居た。北米合衆國の外は我が提出の案に同意しなかつたので此時のは御流れになつた。之に次ぐのが明治十八年の井上外務卿の改正談判である。先是井上外務卿は、我國の法律を西洋風に改めるのみならず、又風俗等にも歐風を輸入し、以て談判に成功せんとしたのであつたが、此の子供らしい考そのものが忽ち輿論の反抗を惹き起したばかりでなく、間もなく改正協議の内容が世間に洩れて更に非常な物論の沸騰をかもした。當時政府も有力に反對意見を述べた者に佛人ボアソナード氏あり、又農商務大臣谷干城氏があつたのであるが、此兩者の意見が秘密出版として世間に洩れたのであつた。而して政府は輿論の攻擊に堪へず、談判を中止して井上外務大臣をも罷めた。

廿一年春新外務大臣大隈重信氏三度改正の談判を開いた。内容は依然として秘密である。只世間では大隈氏の對外硬の經歷より推してやゝ安心して居つた形である。然るに二十二年六月タイムスに出た改正條目を見ると、井上時代のよりは幾らかいゝが要するに五十歩百歩だといふので、民間にも依然として反對の聲が高まつた。それは大隈氏は外國に對して既に(一)外國より判事を雇ふ事、(二)大審院の判事は必ず外國より聘する事(三)内地雜居を許す事、(四)外國人の土地所有權を認むる事の四點を讓步して居たからである。而して米・獨・露などは最早調印を了つて批准を待つばかりになつて居るといふ。夫れだけ反對運動も頗る猛烈なものであつた。そこで閣議でも遂に延期といふことに決したのであつたが、其の會議からの歸途夫の大隈氏の遭難があり(十月十八日)、之が幸となつて談判が無期延期となつたことは人の知る所である。

西村先生の政治的活動は此時から始るのである。夫のタイムス所載の改正要目を見るや、先生憂慮措く能はず、乃ち總理大臣黑田清隆氏に面して之を責めた。之を發端として先生は後鳥尾小彌太氏、三浦梧樓氏、谷干城氏を歷訪して改正中止に盡力すべきを約し、更にまた副島種臣、元田永孚、佐々木高行、曾我祐準、海江田信義の諸氏とも心を合せ斷乎として改正談判を中止せしむるに決心した。而して條約改正の反對の聲は當時實に全國に喧しくなつたのに勢を得て、先生達は一層運動續行の膽をかためたものらしい。かくて先生の同志は、三浦梧樓氏の

發議により大隈失脚後も其結束を續け、爾後引續き毎月一回宛星ヶ岡茶寮に相會して懇談を結んだといふ。

大隈の後を承けて靑木周藏氏新に次官から外務大臣の地位に陞った。彼も亦井上大隈の案に基いて別に一新案を作り、改正の談判を開かんとすとの噂がある。此時は既に議會が開かれて居つたので、先生は勅選議員として專ら議會で此問題に盡力せんと決心された。其の手始めに廿三年十二月『條約改正案ヲ本院ニ明示セラレンコトヲ政府ニ建議スルノ動議』を提出せんとしたが、議員多く政府を畏憚し、條約締結は天皇の大權といふを口に藉して此案に賛成する者少く終に定數の賛成者を得ること能はず『因て已むなく質問書の形に改め、辛じて定數三十名の賛成者を得たのであつた。質問の要點は、(一)外人ニ內地雜居ヲ許スノ有無、(二)外人ニ土地所有權ヲ與フルノ有無、(三)稅權囘復又ハ稅率改正ノ有無、(四)外人又ハ外船ニ沿海貿易ヲ許スノ有無、(五)外人歸化法ヲ設クルノ緩急、の五項であつた。之に對して政府は久しく答へなかつたが翌二十四年三月に至り、やうやく外相の答辯があつた。第二と第四は之を許さぬ、第三は無論囘復するが、第一は許さねばなるまい、第五は議院の立法權の問題だといふ樣な要領であつた。要するに政府は西村先生の私に期待せし所に反し、條約改正速行論であることが明になつた。

然らば其內容は如何と云ふ問題になるが、噂によると、我よりの提出案がもと／＼從來の案を少しく修正した程度のものなのに、英國よりは領事裁判權の撤去と海關稅增加の件は拒絕して來たらしいといふ。夫にも拘らず民間では近頃は前のやうに餘り反對の叫びも聞えない。斯くては猶更同志の士を糾合して反對運動に熱中するの必要があるとて、先生は病を押して運動され、五月一日華族會館に同志の會合を催す運にまで至らしめた。新なる同志としては大井憲太郎、坂本則美、富田鐵之助、千頭淸臣、綾井武夫、三浦安、山川浩、高崎五六、等の名が加つて來た。其間鳥尾の意見が少し曖昧になつたとか、千家尊福氏も三浦安氏の紹介で來會したが、後にて聞けば政府の廻し者であつたといふ樣な事も書いてある。富田氏と先生とが起草委員となりて政府に談判中止の建議をしやうと云ふ段取りにまで進んだが、同月十一日圖らずも露國皇太子殿下遭難といふ意外の大珍事が出來し、天下騒然として悉く耳目を之に集中することになり、條約改正の方の問題は自然立消えてとなつて仕舞つた。

其後明治二十五年四月十三日に至り、總理伊藤を始め外、榎本、內相副島、遞相後藤、樞府議長黑田、樞府議官寺島井上(毅)の六名御前に召されて條約改正取調委員を仰付られた(但し公表されたのではない。)先生之を側聞し、政府が益ゝ改正に熱心なるを察して再び同志の會合を謀つた。四月十七日三浦安邸の集會に出席せるは、曾我祐準、黑田淸綱、高崎五六、小澤武雄、富田鐵之助の諸氏と先生とであつた。之等の人々の一致せる說は、『到底今日は內治必要の時にして外事に手を出す

べき時にあらず。縱令對等の條約なりとも、國の强弱民の智愚貧富甚だ懸隔せるを以て遂に國家の損害を引起すは必然なり』と云ふに在る。只此考を實地に貫く爲の手段としては、(一)正面から改正尙早論 押し通さうといふ說と、(二)政略上對等條約希望を申出るを可とするの說と、(三)法權は他日に殘して先づ、稅權の回復に努むべしとの說と三つに分れたのであつた。此時の會合も一つには他の諸氏に先生程の熱心が無かつた爲と、も一つには政府の方に捗々しく取り運ぶ模樣の見えぬに自ら氣勢を挫れた爲め、何時とはなしに有耶無耶になつたのであつた。

明治二十六年の春に至り、伊藤總理復た陸奧外相を督して條約改正の談判に入るべしとの風聞がある。先生の最も憂ふる所は內地雜居の事であり、從て民間に於ける熱心なる尙早論者安倍井磐根、神鞭知常の二氏の如きは特に先生の目を付くる所であつた。三月末高崎五六邸の會合には、近衞公の外この兩氏をも招いだ。先生誌して曰ふ『此、集會の諸人は、其精神の十分ならざる者あり。爲に相談も良結果を得ずして散ぜり』と。夫から先生は志士の力案外賴み難きに鑑め『內地雜居にならば、宗教上の關係より殊に其迷惑を受くるは神佛二教なるべし』とて、先づ神道家を蹶起せしめんとの考から、神道本局管長稻葉正邦子爵を說いたが、要領を得なかつたと述べて居る。此頃になると、時勢と共に所謂有志の頭も段々進んで來るのに、先生獨り頑然として世の進運に取り殘されて行く傾がないでもない。神道家を恃むなどは丁度今日の政府が頹勢を挽回せんと焦るの餘り國粹會などを賴りにするのと似て居る。國粹會を惡いとはいはぬ。政權を以て利用すべきものではないと思ふ。此年の秋頃になると、內地雜居尙早論はだん／＼民間にも盛になつて來る。十月には安部井大井の諸氏の大日本協會を作るあり、政府の烈しき壓迫あるに拘らず盛に全國に遊說する。學者の側には、加藤弘之、井上哲次郞二氏の書を著して尙早を力說するありて、此勢侮る可らざるものがあつたが玆にまた圖らずも日淸戰役といふものが起つて、條約改正問題に一大轉回の機會を與ふることゝなつた。

戰勝の餘威に乘じ遂に陸奧外務大臣が二十年來の懸案たる條約改正に成功したことは、普く人の知る所である。逐次の改正は、明治二十七年七月英京倫敦に於て日英通商航海條約の成りしに始まり、夫より國を別つて談判を重ね、三十一年十二月に至つて全く終了したのであるが、之に就ても先生は嫌味を云つて居る。曰く『政府は必ず改正の事業を成就して其功名を成さんと欲するの意强く、遂に日淸戰爭兵馬倥偬の際に於て其事を起し、志士をして是を顧みるに遑なからしめんとす。從前改正の談判は、常に東京に駐剳せる外國の公使と我外務大臣との間に開きしか、今度は其方法を改め、各國に駐剳せる我國の公使をして各國の外務省と談判せしむ。是に依り談判の終を告ぐるに至るまで、國人一も是を知る者なし』と。故に突如條約の公布を見てびつくりしたのだが、其成績はといへば、『新條約は政

府にて對等條約の名を誇稱せるを以て、世間無識の徒は是に滿足を表するもの多し。縱令其文面は對等なるも、彼我國力の伴しからざるを以て、彼に利多くして我に害多し。況や其文面も對等に非ずして彼に屈するもの少なからず……唯新條約中に於てや〻取るべきは、十二年にして此條約の消滅すること〻、土地所有權を彼に與へざるとの二件のみなり』とこき下して居る、華盛頓條約に付て兎や角言ふものあると異曲同巧の考方である。而して先生は何處までも尙早論者であつて、其の理由とする所は、『今日民智民産の大に彼に及ばざるものあるを以て、假令條約文には缺失なきも、今日改正を行ふは國情に於て甚早きに失するの恐あり』と云ふに過ぎない。蓋し斯は恐らく當時の多數の人の齊しく考ふる所であつたのだらう。

○

終りに先生の思想のや〻偏狹に失する方面を二三列擧して見やう。之を擧ぐるは敢て先生を誣るに非ず、當時の眞面目なる識者の一面の考方を代表的に明にして置きたいと思ふからである。

土地所有權の許否に付ての先生の意見は斯うである。曰く『歐洲諸國は金錢多くして土地少なし。故に土地の價非常に貴し。洋人我邦に來り、我土地の價の廉なるを見る時は、必ず鉅萬の金を投じて是を買はん……邦民の愚なる、其價少しく高しと聞く時は、後來の事を慮ることを知らず、爭ひて是を賣るべし。然る時は、國中の便利よき土地、形勝の土地は、大抵彼の所有に歸し、遂に國中の地主は多くは洋人にして、邦民は多く地借か小作人となるべし』と。斯くして鑛山も鐵道も諸工業も或は彼等の手に歸し、又は其の壓倒する所となりはせぬかと憂慮して居る。更に進んで內地雜居の結果については、『商賈の利權全く彼の手に歸するに至るべし』と斷じ、又『宗教上よりして言ふ時は、耶蘇教の我邦に入ること益〻多く、我舊來の宗教と衝突を起し、是が爲に人心大に動亂すべし』と憂へて居る。斯か〻る理由あるにも拘らず政府の改正を急ぐ所以は如何。先生は其理由を數へて次の五點を擧げて居る。(一)『條約改正を成し遂げたいと云ふ政府の功名心、』(二)『早く文明國の仲間入りをしたいと云ふ輕躁心』(三)『國內人民の財産智識の度を測るの疎躁、』(四)『外國の歷史の無識、』(五)『後來の國患を料るの周密ならざること』即ち是である。而して僕は思ふ。此程度の頭の所有者は、今日でも所謂識者階級に可なり多いことを。

伊藤公に對して先生が格別の反感を有つて居たことは前にも述べた。明治二十一年七月の華族女學校設立に付ては、『其裏面は伊藤宮內卿が下田歌子に官祿を與へんが爲に建てたるものなりとの風聞あり』と述べ、又二十六年十一月突如同校長を辭すべきの旨を諭さる〻や、或人の說として『下田歌子華族女學校學監の職を失ひしを以て西村氏の所爲なりと思ひ、深く西村氏を怨み竊に是を伊藤氏に訴へたりと聞く。君の免官は其結果なるべし』との疑を洩らして居る。明治十八年の改革について伊藤

公を攻撃する一節中の『獨逸人を宮内省に雇ひ、其妻をして内廷に出入せしめ、皇后宮以下女官の衣服を改めて洋装となし、又華族女學校を設立し、其生徒をして盡く洋装せしむ』の一句の如きは、聊坊主を憎んで袈裟にまで及べるの譏を免れまいと思ふ。

もう一つ先生の固陋を證すべきものにこんなのがある。『京都に第四回勸業博覧會あり。洋畫家黒田清輝といふ者、婦人裸體にして陰部を露せる畫を作りて是を出す。審査官是を美術館の樓上に掲ぐ。京都の有志者及び警察官共の風俗を壊亂するを以て是を撤去せしめんとす。審査副長九鬼隆一頑として聽かず。余京都に滯留の日九鬼に面して是を論ぜんとし數々其旅寓を訪ふ。九鬼避けて逢はず。已むことを得ず書を贈りて是を論詰す。九鬼返書を送りて辨疏す。然れども遂に其非を撤することなし』と。

○

先生の思想と全く關係のない事で往事録中一寸面白いと思ふ記事一二を摘録して此稿を終らう。

山口縣の地租の格外に安きを説いて次の言がある。『往年地租改正ありし時、當時の縣令中野梧一氏如何なる意に出たるか、縣下の地租の額を甚しく低くしたるを以て、縣民の生活餘裕ありて甚しき窮困の者を見ず』と。

備後の中舊福山領の地居民の生活豐なるを叙する中に『舊士族中に勤勉社といふありて、勞働を以て生計を立つ。余が福山より新に赴く時に乗りし人力車の車夫は此社員なり』の一句がある。今の資本家にも之れ位の心掛あらば、社會改造の聲にも驚くことがなからうなどの感想が湧いて來る。

先生の貴族院觀も面白い。曰く『五爵議員及び多額納税議員は無學無智の徒、多く唯政府に屈從するを以て務めとし、獨立の志操を有する者少なく、勅選議員の中には、學識經驗に富む者もあれども、是亦卑屈の議員多く、然らざれば輕浮なる洋説を信ずる者多し』と。又研究會に付ては、『研究會といへる一派ありて、政府の要路に立る者内々其威權を執りて愚昧なる多數の貴族を操縱し、以て政府の意思を貴族院中に執行せしめんとす。此策其肯綮に中り、政府の議案出る毎に此輩は理非を論せず是に盲從す』と評して居る。『此の如くなれば、貴族院は只政府の傀儡にして決して獨立する議院と稱すべからず。』之等の徒と肩を比するを快とせず、第一議會の畢らざるに辭職した三浦梧樓氏の轍に倣ひ、先生も亦遂に二十五年十一月斷然辭職して仕舞はれた。辭職せることの當否は別論として、先生の此の一言、此の態度は、今日も尚ほ貴族院に對する儼乎たる警告として觀るの價値は十分にあると思ふ。

腰越雜感

工學博士　佐藤功一

春雨や船待つやどの風呂加減

こんな句をよんだ事があつたな、もう随分遠い昔の春のことだ、伊勢路から宮川を遡て、二五坂峠とかいふ峠を越へて紀州の長島に出て、あすこから船路を熊野へ行つた時だつたな。雨の日だつた、乗込む筈の汽船が來ないので宿の二階に待ち暮して居ると、やつと夕刻につなてから汽船の到着は明日に延びましたと女中が知らせて來たのだつた。それを聞いた時はたまらない不愉快な氣持がしたつたが、併しどうしても仕方がないんだといふ一種の諦めから却つて安易な落着きを生じて、女中に導かれるまゝに裏梯子を下りて軒の點滴の間延びた音を聽き乍らゆつくりと風呂の湯につかつた時の、その折よんだ即興の句だつた。

いま、かうして春の夕暮を腰越の寓居の二階で、雨に煙る小動(コユルギ)ヶ濱を心に描きつゝ波の音を聞きながら病後の身を横たへてゐると、恰度あの時と同じやうな心境を覺える。それは早く仕事をしたいとあせる氣持と、病後の健康回復のために當分は自然の成行きにまかせねばならぬといふ諦めと、のんびりした春雨の光景から受け入れる感じと、此の三つの「コンポーネント」から成り立つ「リザルタント」が然らしめる心境だ。

昨日までは、遙か沖の方まで白い泡を見せて岸邊に向つて幾段にも波が卷き返つて打上げてゐた。それだのに今日は全くそれと反對に海は本當に鏡のやうで、珍らしく一點の曇りもない蒼穹からの春の光を受けて輝いて居る。そして其の全反射の光線を吸込んで、岡も林も建物も海岸にある總てのものは微動してゐる。輕い風は乾いた路面にさゝやかな埃の渦卷を起して小動(コユルギ)ヶ崎から稻村ヶ崎までの間約一里餘の「七里ヶ濱」の眞晝はのどかだ。こういふ光景にひたつては　んなに勞れ衰へた人でもグツト強い呼吸をして手を振り動かして見たくなるもの

だらう。

日蓮上人の御難で名高い行逢川の手前、峰ケ原あたりに立つて眺めると、左手の方小松の繁り生へた丘から引き續いて目睫の間に突出てゐるのが稻村ケ崎で、鎌倉は勿論、其次ぎの逗子もなかば以上は此の崎に遮ぎられて居るが逗子から先きは葉山、秋谷、永江と三浦三崎迄折り重なつて浦曲を見せながら、ずつと南に突出して居る。又右手の方は江の島と片瀨の間に富士が高く眞白な姿を浮べて、其前には大山や箱根が横たはり、眞鶴ケ崎はずつと霞んで、大きな牛の脊のやうな伊豆半島の裾の所に蹲踞つて居る。伊豆半島から左に依つて、正南遙かに薄く姿をあらはして居るのが大島だ。

いま、此のひがし三浦三崎の尖端と、にし眞鶴ケ崎の突角との間を結ぶ直線を引けば、人が殊更に巧んで此の地形を作つたやうに線はまさに正しく東西を指して、長さ十里の此の線に依つて劃された今自分の目前に見てゐる此の海、それはこれもまた有意的に企圖せられたやうに此の東西の線を長徑として描いた周線二十里の半楕圓の入海が、相模灣と呼ばれるのだ。此海岸線二十里の間に於て北に山を負ひ南に面した避寒地として理想的の場所は、僅に腰越から稻村ケ崎迄の一里强の間と大磯から國府津迄三里弱の間と丈けだ。鎌倉は由比ケ濱が如何にも狹く地が壺のやうに奥に入り込んで居るのと海岸に砂丘のあるのとが海からの反射光線を深く惱かしめぬやうに思はれるし、鵠沼から辻堂・茅ケ崎・平塚と此の間はたゞもう平凡な砂地に松原で前に述べた理想には遠いものだ。

斯う考へると、如何に此の腰越から稻村ケ崎の間と國府津大磯の間とが所謂惠まれた貴い地勢であるかといふ事が解かる。そして前者は東京から鎌倉か藤澤まで汽車で、あとは電車で合せて二時間、後者も汽車で同じく二時間の道程だ。

國府津から向ふは海を東に控へる事になり、東京へ日々日歸りの出來るといふ距離でもなく、それに伊豆に近づくに從つて冬の西風が殊に烈しい。

また、鎌倉から先きの逗子葉山は、海の向ふに富士を見られるといふ得難い眺望があるが西に海を控ゆる事になるので、よいあんばいに山で東北の塞がつて居る谷戸でなければ冬の暖かさもさほどではない。葉山御用邸からさき、長者ケ崎を越へて大崩(オホクヅレ)のちよつとした部分には、寒中豆の花が咲いて蝶が飛んで居るといふ極めて暖い所もあるが、土地が至つて狹く、がらがらと崩れる崖の中腹で、それになほ水が悪いといふ事は到底家を建てるに適せぬ所だ。そしてまた其所まで行くと車馬の便も思ふやうに行かず、これまた樂々と東京へ日歸りとも行かな

くなる。

斯う考へて見ると、大磯や國府津や七里ケ濱附近が東京近傍の避寒地としてよい場所である事が一層明瞭になつて來る。そのうちでも此の地が江の島や鎌倉といふ名所の間にある事が更に其價値を高めてゐる。

大磯あたりは殆ど金持の別莊でうづまつてしまつた樣だが、こゝはそうはいつては居らぬ。峰ケ原あたりには澤山な小さい貸別莊が建つらねられて居り、家賃も割合に安いやうだ。大きた贅澤な別莊のない事は、相當の規模の保養院が二つも建つて居るやうに、此地が眞の虛弱者の保養地として開け始めた事のたのだらうが誠によい事でこういふ天然の健康地は出來得る丈け多くの人々の眞の必要に對して役立つやうにしたいものだ。

稻村ケ崎附近の村有地には新渡戸さんや有島壬生馬さんや青木徹二さんなどの所有になる洋風の質素なしかも形勝の地をしめた家々がかたまつて居るが、峰ケ原からさき其所までの長い間は、まだ一帶に松の茂つた小丘のまゝだ。横濱の或人の所有地だそうだが、これも早く整理されて、手頃な家が澤山に建つやうになつたらよかろうと思ふ。

江戸時代にも小梅や柳島の寮へ出養生といふ事があつた。明治になつてから交通機關の發達と海濱の空氣が特に健康に好いと考へられるやうになつた結果、小梅や柳島は鎌倉や大磯まで延びた。

どういふ理由からか知らぬが、鹽水にはいつて赤むくれになるほども脊中を日にほしつける事がそれは〱大變に「くすり」になると考へられた結果、避暑と稱して夏を海で暮す事が流行になつた。そして相模灣に面した此の一帶い地に湘南などといふ支那の地名に似せた名をつけて湘南の避暑地などゝ呼ぶ事になり、多くの別莊が避暑用として建てられ、建築の樣式も堂々と威風的に取りあつかはれたものだつた。

事實夏に於て避暑をしやうといふ場合に海岸ほど苦しい所はないやうだ。あのギラ〱と視神經を刺戟する強い光線、夕なぎとよばれて夕刻海と陸との溫度の平均する際に起る無風時、ベタ〱と氣持惡く膚をねばらす鹽分など、私には考へるだけでも耐へ難く感ぜられる。それだのに避暑の意味でこういふ海濱に別莊をたてる人の氣が知れぬ。ほんとうの避暑なら寧ろ靜寂な山に行くがよいだらう。

別莊には氣の轉換といふ事が重な要素として存しなければならぬ。それだのにあの威風的な堂々たる形式の建築ではとうに

もたるまい。別荘建築は當然ぐつとくだけた田舍屋風のものである可きだ。瀟洒の趣がよいとて、あの茶室風といふやうなものではまた却て苦しみを增す種にもなる。

海濱は避暑地としてよりは避寒地として考ふ可きで、別荘は簡易な生活の出來る手輕なものにすべきものだ。

近來は避暑地としては山に行く事が盛になつて來た。そして此の海よりは後で出來た山の別荘が、西洋人によつて開拓——輕井澤などのやうに——された事から初まつた爲めに、ごく簡易な物に出來て居る。破風造りの堂々たる建物好きな日本人も、山に於ては簡易生活に應はしい建物をたてるやうになつて來た。本宅は純日本造であるが山の別荘は所謂洋式にしてあるなどといふのは一寸時代錯誤のやうだが、山の別荘が西洋人から初まつた事と知識級の人々に依つて行はれて居るといふ事が、當然さういふやうな形勢を導いたものだらう。

近來の社會問題から、人々の考が餘程眞面目になつて、所謂成金流の人と雖も徒らに贅澤を人に示さうとする事がなくなつた。從て、別荘などゝいふ事はなる可く人前では口にせぬやうに、そして家の造りは目立たぬやうにとする傾向を生じて來たから、何千坪といふやうな大敷地を屋敷に持つものもなくなるだらうし、ほんとうの必要から生ずる小さい質素な家が山や海べに澤山出來る事になるだらう。

相模の海岸では一時平塚が別荘地として大きな富者に廣く土地を支配されてしまつた爲めに、僅かな數の大きな屋敷が存在する丈けで、一向に町の發展を來さなかつたと聞いて居る。それでは全く町の人の爲めにもならぬ、町の繁榮策としては大きな別荘よりも小さな家が澤山出來 方がよい筈だ。

自分は今腰越の表通の家の二階を借りてゐるのだ。八疊と六疊との二間で、八疊の方は床の間付きの座敷で六疊の方には長火鉢が置かれて茶の間になつて居る。六疊の方が眺めもよく南むきになつて居るのと勝手がそう出來て居るので自分は常に此の方に居る事にしてゐる。そして來て居る家族のものゝ方が座敷に居る事になつてゐるのだ。

扨て、飯や汁は階下の臺所で作るが、小魚を燒いたり肉を煮たりするのは茶の間の長火鉢でするのだ。そして火鉢の側の茶簞笥は實は獸人ならず兼用になつて居り、時々書き物などをする机は食事の時には食卓として用ゐられるのだ。されば此の室は食堂であり居間であり書齋であり又主人の寢間であり且つ又廚房であるのだ。一つの室でこんなにも種々の用途に用ゐられる

ものは最新式の亞米利加のアパートメントハウスにもない筈だ。併し在來の都會の中流家庭の茶の間の總ては食堂と居間と家族の中の誰れかの寢間との兼用になつて居り、そして長火鉢で魚を燒いたり肉を煮たりするからまた厨房とも見なす事が出來るのだ。この樣に一つの室が種々の用途に使はれるのは長火鉢といふ不思議な職能を有する道具の存在に基因するのだ。此の道具は日本に特殊に發達したものであつて、これを廢する事は日本の家庭生活の樣式を根本に變化する事になるといふてもそんなに言ひ過ぎではない筈だ。

居間から食堂を引離して獨立させるなどゝいふ事は、貴族の家の形式を模倣する事から生じた歐洲中流家屋の慣習的形式であつて、日本の中流家屋に取り入れる事は考へ物だが、都會の家の茶の間は出來る丈け早く椅子式にしてそして此處を家族たちの集まる「居間」としたいものだ。勿論食事の時刻には食堂ともなるものとしてだ。そして止むを得ぬ場合は致し方はないが此室を寢間に使用する事丈けは避けたいやうに思ふ。まして厨房の役目を帶びさせる事は避くべきだ。

此の理想のもとにあつては、長火鉢は當然廢せらるべきもので又廢する方がよいといふ事になる。といふのは坐る方式の長火鉢は到底同じ室内の椅子テーブルとは兩立し難いからだ。魚を燒いたり肉を煮たりする事は厨房でやつてよかろうし、裁縫に使ふ火熨斗や鏝のためには卓子の側へ臺を置いて上に小さい火鉢を乘せるか一層電氣を利用したらよかろう。やたらにお茶を飲む事は廢したらよかろうし、またどうしても此の風習がやめられなければ、前にいふた臺の上の火鉢に鐵瓶をかけておくもよかろう。

食事する部屋で肉を燒たりするのは、歐洲だとて所謂グリル・ルームではやる、しかし正式の食堂や家庭の食堂ではやらない、しかし何から何まで歐米の模倣をしなくともよいのだから、牛肉を煮乍ら食いたければ、其時は食卓の上へ七輪に鋤鍋もよかろう。それでは鍋の位置が高過ぎはせぬかといふ批難もあるかも知れぬが、全體今日迄のテーブルが高すぎるのであれはもつと低くする方がよい。それでもまだ鍋の位置が高いといふならば、あの朝鮮でいふ神仙爐、支那でいふ火鍋子(ホコーズ)を用ゐてみるのもよいではないか。それは中央に火が入つて其周圍に煮ようとするものを入れる金属製の泥爐兼用の鍋の[illegible]だ。

磨きたてられた長火鉢、奇麗にかきならされた白灰、かすかに湯氣の立ち上る鐵瓶のたぎる音、此の茶の間情緒は趣味深い人には捨てかねるものだろう。然し新しい形式には更に又新しい情緒のある事を考へねばならぬ。

今此の六疊の茶の間の前の窓の外は物乾し風の臺になつて、其所に出で市街や江の島の方や富士山やを眺める事の出來るやうになつて居る。この邊はまだそうではないが鎌倉あたりは屋根に赤瓦の用ゐられたものが多い。赤い瓦は郊外の住家などには誠にふさはしいものだ、綠の林や芝生の色などと調和してほんとうに繪のやうな趣を見せるものだ。

　在來の日本の住家は何から何まで規格の統一が行き渡つて居つた。これは誠に良い事だつたが、しかし色彩までも餘りに一律に統一されて居つた。日本の住家の色彩が統一されて居つたといふよりは寧ろ日本人は住家に灰色ばかりを使つて居つたものだといふ方が至當かも知れぬ。殊に東京の町に於てそのやうであつた。下から上迄四分板の下見張りで上には灰色の屋根瓦を乘せる、下見張には雨露に對する何等の防禦的の塗料も施さな　から、建てた時は綺麗だが一年もたてばこれもまた灰色になつてしまう。それでも窓の近くにでも白漆喰塗などの小壁でもとつたら、まだずつと引きしまつて見ゆるだろうにそれもしない。これは大江戸の頻繁な火災の影響から、燒あとの假屋普請の形式が其のまゝ慣習になつたものと見る事が出來ぬだろうか。まだ普通の木造の住家はそれでよいとしても、日本橋通りあたりの目ぬきの場所の商店が、土藏造りにして居り乍ら是れもまた態々漆喰に墨を入れて黒色或は灰色に仕上げてしまうといふやりかたをしたものだ。此の黒漆喰をテラ／＼と光澤ある仕上げに磨き出す技術は江戸の職人でなければ出來ぬものとされたほども此の墨塗りが好まれたものだ。關西から京阪更に中國から西の方には此の方法は極めて少なかつたものだ。斯ういふやうにして古い日本の町殊に東京の町屋は、外國人が見たら全部が喪に服して居るのではないかと思はれた程も色彩に乏しかつたものだろう。

　明治になつて新しい建築が學校で敎へられるやうになつてから、所謂個性の發現とか、意匠の自由とか云ふやうな事が、意識的或は無意識的に考へられるやうになつて、新しい建築には形に於ても色に於ても種々な變化を見るやうになつた。所が此事は延いて切角よく統一されて居た規格を破る事になつた。在來の家は疊でも、襖や障子でも、屋根瓦の大さでも、屋根の勾配でも、一定の標準があつたのであるから　建築は出來合の材料を以て自由に安價に作る事が出來た。それに簞笥でも長持と云ふやうな調度にも自ら一定の規格があつたものであるから、これらの置き場所を意匠すれば、買つて來たこれらのものを自由

に其處に置くことが出來た。所が新らしい建築には規格がなかつた、木造下見張りの安價建築でも、それが特に綿密な考案に依つて設計せらるゝ可く小屋ノ同に どんな細部迄も恐く鉛筆と物指とによつて圖案が意匠されたものであつた。ために建物は材料に於ても、手間に於ても大へんに高くつき、工事の日限も長くかゝるやうになつた。總ての建物が、窓の大さ戸の大さ及び棧や骨の組み方迄一として同じものはなくなつた。其の最も甚だしい例は學校建築であつた、それは或る年齡の少年を入れて教育するといふ簡單にして明瞭な用途の建物だ、一教室に收容すべき人員も大體一定してゐるのだ。斯のやうな明瞭な問題に對して與のよき答は唯一つである可きだ。即ち小學校中學校とも、各其窓の大さ戸の大さ階段の廣さ天井の高さなど總てが一定す可きを原則としなければならぬ、所が事實そう行つて居らなかつた。今でも恐らく此れが一定しては居なかろう、最も早くこれの決定を見たのは兵營建築だつたやうに記臆する。兎に角斯ういふやうな有樣であるから、今日なほ西洋風の建築をするのは在來の日本風の建築をするよりはずつと高くつくといふ現象を生じて居る。若し規格が統一されておつたならばもつとよい結果を見る筈だ。窓や戸や腰羽目や其他斯ういふ種類のものが五六種に統一されて、それが器械的製作に依つて常に出來合品となつて居り、建築しやうとする時には其内から一種づゝを撰定して用ゐるといふやうにすれば、工費も日限もずつと少くてすむのだ。これは明治になつて新しく入つて來た西洋建築の話だが、固有の日本家屋にあつても、現今はこれに入れる可き家具調度が自由意匠になつて規格が大に破られたから昔しのやうには行つて居らぬ。

よくある事だが、電燈器具屋などに行つて、形のよいシャンデリアなどを見て、此の種類のものがもつとないかと店員に尋ねると、それは某氏の邸宅に用ゐたもので見本に一つだけ取つてあるので他にはないといふ。なぜこんなによい品を澤山に作つて置かないのかと問ふと、それはもう某氏の所で使つてあるのだから、作つて置いても人は買ひませんよ、ときつと斯う答へる。日本人には――或は日本人に限らぬのかも知れぬが――出來合品を好まぬといふ癖があるやうだ。

近來一般の工業品と同じく建築にも規格の統一といふ事が盛に唱へられて居るけれども、これも住宅問題と同じやうに實行よりも聲の方が大きいといふ狀態に見える。斯くの如き問題は一日も早く目的の處に進めねばならぬものである。

現今世界の中で、總ての事物に於て其種類の最も複雜して居るのは、恐らく日本より甚だしい所はなかろう。一つの確然たる標準を持たなければならぬ度量衡ですらも、其種類が數種あるのだから他は推して知るべしだ。譬へば物指を例に引いても　日本尺があり、メートル尺があり、英吉利尺がある。そして其の日本尺の中にも鯨尺と曲尺とがあり、寸と尺と丈とは十進法だからよいとしても　其他に間あり町あり里あり、英尺の方にもフートの外にインチありヤードありチエーンありマイルあり、といふ有樣だ。目方の方も匁と貫とは十進法だから一つと見てもよいとして、なほ斤ありポンドありグレーンありオンスありトンありグラムありといふ有樣だ。そして是等の單位を我々は悉く知つて居らねばならぬのだ。物指しはメートル式だけ目方はグラム式丈け知つて居ればよい佛蘭西や獨逸あたりの人々がうらやましい。

現今の日本に於ては前に述べたやうな單位が複雜に入りこんで使はれて居るのだ。日常用ゐらるゝ「斤」といふ名稱に對しても一〇〇匁あり一二〇匁あり一六〇匁あり他にまた二〇〇匁と二五〇匁と合せて五つの種類があるといふに至つては實に驚くではないか。

人は今度の平和博覽會へ行つて、其建築物の配置や形色や、見る人の服裝や其他を觀察して其の亂雜な事をいふが、あれはたゞそれが適確に現はれて人目に觸れるに過ぎないので、實は社會生活の根本が既に亂雜を極めて居るのだ。基をなす所を正さないで末を論議して居つては何にもならぬ。生活の基調をなす度量衡の統一から眞先きに始むべきだ。政府は昨年法律を發布して、度量はメートル、衡はキログラムを基本とする事に極めた、そして其他の度量衡を使はぬやうに規定して居るが、執行の期日は追て勅令を以て定むとしてあつて、まだ執行期日が定まつて居ない。聞く所によると右勅令案は目下農商務省で起草中でたぶん十月頃には發布になるだろうとの事だ。そして實施の猶豫期間は官公署及重なる民間會社は五ケ年以内其他は二十ケ年以内とするといふ事が新聞にあつたが、若し本當だとするとこれは餘りに永すぎる。これは政府が度量衡及び工業品規格統一調査會に諮問した際に同會から答申したやうに、官廳工廠其他の公務所及び教育場に於ける度量衡並に民間の重なる事業に於ける度量衡は三ケ年以内にメートル式とする事、止むを得ざるものに付ても五ケ年以内には其完成を期する事、十ケ年以後は特種の事由ある場合の外、メートル以外の度量衡器及計量器の檢査を禁じ及び其販賣を差止むる事位いの所にする方がよいと思ふ。二十ケ年とは永がすぎる。獨逸が一八七〇

年一月一日から隨意に使用することゝし一八七二年一月一日からはこれを强制するといふ事にして僅か二ケ年の猶豫期間を置いたのにくらべると十倍の時日に當るわけだ。

全體長さや、重さや、容積の標準は隨分古くから定められたもので、既に紀元二千五百年の昔にバビロンの官憲に依りて長さ、重さ、容積の標準が發布されて居る事は書板に依つて明かだ。これがあれよりも大きいと云ふことは單に感情で、それが智識となるには只大きいといふ丈では不完全で、一方が他方の何倍になると云ふ測定でなければならない。文化の或時期に達した時には如何なる民族にも相當に物の大さの測定法が定められるものだ。其の測定には何等かの標準が置かれる。支那では長さを測るものを度と云ひ、容積を測る枡を量と云ひ、物をかけて其權にまかせて其の輕重を衡る道具、即ち「はかり竿」を衡と云ふ。度に就いては十髮爲レ程、十程爲レ分、十分爲レ寸とか或は古以二一黍之廣一爲二一分一、横二絫十黍一得二古尺一寸一、今以二一黍之縱一爲二一分一、直二絫十黍一得二今尺一寸一。斯う云ふ風に最も手近かに人體の或部分を標準に用ひたか、或は當時の最も重なる生産物なる穀物によると云ふことになつて居る。尺の文字は十寸爲レ尺、尺所ニ以指ニ尺規矩事一也といつてある。又衡の方は十黍之重爲レ、絫十絫曰レ銖、二十四銖曰レ兩。十六兩曰レ斤、三十斤曰レ鈞、四鈞曰レ石、謂ニ之五權一とか、又は十二粟爲ニ一分一、十二分爲ニ一銖一。或は六豆爲ニ一銖一と云ふやうにこれもまた穀物から出て居る。

英吉利で用ひられて居るグレーンも亦肥つた小麥の粒の目方から來て居るのであるし、フートは人の足の長さから來て居るといふやうに、太古に於ては孰れの地方でも共の度量衡の基本標準を人體か或は最も生活に密接な關係のある穀物においたものらしい。

英語の inch は拉典語の uncia より轉化したもので、uncia は十二分の一といふ事だ。これが inch となつて呎の十二分の一を意味する事となり、又 aunce となつて封度の十二分の一を指す事になつたのだ。

封度即ち Pound は拉典の pondo から出たもので初め pendent 即ち「ぶらさがる」といふ字から pendere 即ち「秤ではかる」といふ文字が出てこれから來た文字だそうだ。

佛蘭西で地球の子午線の四千萬分の一をメートルと定めたので、此の語はもと拉典の Metrum から來たので、初めは詩句の韻律の事に關したものだつたが、漸次に法則、測定といふや

うな意味になつて來て、これが尺度の單位に用ゐらるゝに至つたのだ。

新しい事を規定するのは中々むづかしいものだ。地球の子午線を測定して、其の全周の四千萬分の一を以て長さの單位としてこれをメートルと名けたのは、佛國の學者ガブリール・ムートンで、時は一六七〇年ルイ十四世王の治世だつた。ムートンの理想は單位は一定不變のものでなければならぬ、それにはこれを大自然に置かねばならぬといふのであつた。然し此の理想は其當時は行はれなかつたので、永い年月の間になるほど此れはよいといふ事が漸々世評に上るに至つたのだ。此のやうにして約百二十年を經過して一七九〇年に共和政府が出來た時に、政府はムートン式の調査機關を設けて多數の學者をしてこれに當たらせたものだつた。そして一七九五年に至つて初めて此の式を國法としてこれを强制したが行はれずして失敗し、眞に國内を通じて整然と之れを守るに至つたのは一八四八年ナポレオン三世皇帝の治世だ。

銀座通りが煉瓦で改築されたのは明治五年で、大火の後であつたが、之れを見て如何に當時當局者が防火といふ事に苦心したかといふ事が分る。所が何時も忘れつぽい國民は火災の當時こそいろ／＼考へるが、元の木造をそのまゝ襲踏して今日に至るも未だ都市の建築は改められないで居るのだ。昨年あたり建築物の防火宣傳が矢釜敷く行はれたが其時丈けで程なく熱は醒めて了つた。島國民の常として一面に非常に進步的であり乍ら一面何處か保守的な此國民には、法命に依り定められるのでなければ防火建築の普及は難かしい事のやうに思はれる。

恰度其の銀座の改築が行はれた明治五年に出來た「西洋家作雛形」といふ本がある。其の序文に「東京火災ノ甚シキハ其因三アリ一ハ都府繁華ニシテ火ヲ用ユル度ナキナリ一ハ土地曠漠ニシテ風ヲ受クル烈シキナリ一ハ人戶衆多ニシテ材ヲ取ル事粗濫ナルナリ昔人防禦ナキヲ苦ンテ之ヲ全盛世間繁華地方ノ事奈何スベキナシトセリ今壬申仲春ノ災其慘極マル官之レヲ憫ンテ救恤ノ典ヲ擧行ヒ且後災ヲ慮カリ大ニ家屋ノ制ヲ釐革シ一ニ洋式ニ效フソレ洋人ノ家屋ヲ築造スルヤ素ヨリ美麗ヲムネトスルニアラス專ラ火災防禦ヲ主トスルナリ故ニ自ラ失火スル事ナケレバ他ノ延燒累焚ノ患ナシ今官ヨリ令シテ其方法ニ傚ハシムニハ祝融風伯冦スルト雖モ連衡比屋一時焦土ノ慘ナカルヘシ其仁

豈大ナラスヤ」と。十度之れは銀座通りを煉瓦で大改築をする時に出て居る出版物だから斯う書いてあるのだ。で半紙版の木版の約三十枚位づゝの四冊本で英吉利の書物を飜譯したものだ。此時分い本としては大へんに好いものだ。恐らくは日本で出來た洋風建築の書物の最初のもだらう。尤も之れより先き明治三年に兵學寮で出した造營法と云ふ書物がある。之れは兵舍の建築法を個條書きに書いたもので立派な煉瓦造りの圖面なども入つて居るが完全なる建築書とは見做し難い。

都市の防火宣傳に就いて述べた最も古い書籍だと思はれるのは寛政年間（百二十餘年の前）に書かれた本多利明氏の（天文算數學に長じ、物産學を能くして夙に夷華太などの北地經營を以て任じた人だ）の著はした「經世秘策」に書かれた記事だら。これは瀧本さんの「日本經濟叢書」に載つて居たものから引用するのだが、その「經世秘策」に斯う書いてある。「火災ト云ハ、江戸ノ儀ハ日本最第一ノ都會ノ儀ナレバ火ニモ憂ナク水ニモ苦ミナク、永久不朽ノ石家造リニアリテ萬民大安堵ノニナケレバ、王城ノ地ニ相應セズ、然ルニ江戸四里四方ニ燒ケ安キ木ノ家居ヲ建テ並ベ其體餘リニ手薄ナリ、毎年四季ノ内旱リ續キ乾燥ナル事ハ毎度ニテ大地モ枯レ井水モ絶ル程ノ炎天ナル時、萬一大風吹キ起リ砂石モ飛バスル節、フト過チニテ風上前後左右ノ端々處々ヨリ失火アラバ、忽チニ大火トナリ殘ラズ燒失スベシ小風小火ノ内ハ人力ヲ以テ消留メモ安カルベケレドモ大風大火トナラハ人力モ鎭ムベキニ非ズ、此ノ如キ大災害ハ木家作リヨリ出來セリ、故ニ歐羅巴洲都會ノ地ハ貴賤萬民皆石家作リノ住居ナレバ稀ニ火災アリテモ内造作ノ木品ヲ燒失スルノミナレバ、隣家モ知ラザル程ノ事ナリ、歐羅巴洲トテモ國初ヨリノ石家作ニモアルマジ、度々ノ火災ニ遇ヒ漸々シテ石家作制度建立セシナルベシ、御府内草創以後明暦ノ大火ト明和ノ大火ノ外大ソウノ失火ナキガ故ニ人情脆弱ニシテ恐ルベキヲモ恐レズ、且又制度教示ノナキ故ナリ」と。

苟も一國の首府ともあらうものは、水の心配のない土地で建築が總て耐火構造でなければならぬのに、江戸の家屋は皆燃易い木造であるのは不都合だといふのだ、恰度今の防火宣傳と同じ事を述べて居るのだ。今日から見ればなんでもないやうに聞えるが、其の當時にあつては隨分思切つた議論だつたのだらう。それはよいとして歐羅巴の都會ではどんな家でも皆石造だとは何をいつたものか、いくら歐羅巴だとて石造の民家などは極めて稀な筈だ。和蘭のアムステルダムなどは十八世紀中にはもう

既に改造が出來上つて、木造家屋などは殆どなくなつては居る筈だが、それにしても石造建築は一つもないといつてよい。そして其等は孰れも赤煉瓦造なのだ、他國の都會のものも大抵煉瓦造で、たゞ煉瓦をまる出しにせぬものは上を石造のやうに漆喰（シツクイ）で塗つたものだ。明治時代には割合に後期まで煉瓦を煉瓦石といつて居たほどだから、煉瓦を石の內に入れて考へて居つたのかも知れぬ。「歐羅巴洲トテモ國初ヨリ石家作ニモアルマジ、度々ノ火災ニ遇ヒ、懲々シテ石家作制度建立セシナルベシ、」といふ句は實に達見だ。現今でも相當な教育を受けた人で歐羅巴の家屋は古來石や煉瓦造のもの、日本のは木造のものときめて居る人が多い。それだから時々變な議論をきかせられる。それを此時代に於て玆に言及して居るのだ。そして度々の火災にこりごりして遂に石造建築法を設定したのだらうといふに至つたは實に中々の見識だといはなければならぬ。次に、先に掲げたやうに江戶に耐火建築が起らないのは此の頃大火がないので人々恐ろしさを知らず呑氣に構へて居るのと且つ建築法も出來て居らず上からの敎示もないからだといつて、更に論をすゝめて

當時治平二百有餘年ノ內、佛閣、宮殿、伽藍　庶民貧託、殊ニ大造ニ甍並ル跡ヨリ、或ハ火災ニテ燒拂ヒ、或ハ修理建間ナク、此故ニ手近キ山々ハ皆伐盡シ、次第に深山ニ臨ミ、昔は人倫絕タルモ、今ハハヤ殘ル所ナク、終ニ柱トナルベキ樹木伐絕ベシ、

と述べて居る、至極道理ある言葉だが、缺點を搜し出せば柱となるべき樹木伐絕べしが一寸おかしく感じられる。柱となる可き木よりも梁となるべき木の方が先きになくなる道理だ。尤も我國では古來より、底津盤根に大宮柱太しく建てゝとか太黑柱のゆるがぬやうにとかいふ如く、柱といふ文字が建築といふ文字の「シノニム」として用ゐられて居るのだから、修辭的に柱の字を用ゐたものと見れば差支はないわけだが、其のすぐあとの、

左アラバ是非ナクモ石ヲ以柱トナサデハ造營モ出來ガタカルベシ、是即石家の制度行ハルベキ勢ナリ、

に至つては一層妙に感ぜられる。それは耐火建築としては柱よりは先づ壁と屋根とを不燃質物にせなければならぬのだから。併しこういふ事は餘りに末節に拘泥するわけになるから、大體の論旨だけを見る事にして、次に

火災ホド人力ヲ破ル費ヘハナシ、國政ハ人力ヲ扶ケ費ヲ省キ庶人ノ欲スル所ニ隨テ建立セザレバ永久ニ傳へ保ツコトハ能ハザルモノナレバ、人情ヲトルヲ主トセリ、今既ニ備前國中ニ大小ノ橋々皆石橋ナリ、熊澤氏の手蹟ニテモアルカ、石ヲ以村木

ニ換ル意石家作ノ萌ナリ、是等ヲ賞美スレバ漸々ト傳移シテ、石家作モ終ニ行ハルベシ、

といふて居る。備前の石橋を架げてもつと古い九州各地の石橋を架げなかつたのはなぜだらう。或は九州のを知らなかつたのかも知れぬが、それはどうでもよいとして、橋梁建築が石になつたからこれを推し進めて行けば家屋建築も石になり得るといふて居るのが面白い、どこの地方でも家が不然不朽の構造になる前に、先きに橋の方が不朽の構造になつて居る。

更に其の次の文章には

俗吏ノ思フ所ヲ察スルニ、石家作ハ能モアルベケレドモ、入用大造ニシテ容易ニ出來ベキニ非ズト云フベシ、庶人ナラバ左モアルベケレドモ　國君王侯ノ通用金銀ハ、寶貨トシテ秘藏スベキニ非ズ、通用スルヲ以寶貨ナレバ惜ムベキニ非ズ

とある。卽ち、勿論石の事だから金はかゝるだらうが、政府が直接の都市の家屋の改造に當るのならば差支ない筈だ、金は通用さす可きものなのだから、こういふ事には惜しまず投ず可しだといふて居るのだ。當時にあつては實に思切つた事をいつたものだ。

そして其の後には、これに使はるゝ職工人夫が異國人だつたらば、金が異國人の手に渡るから損になるが、日本人の手に渡るのならば一向に差支ないではないかと述べて、終りに國君と執政と其下の役人との三者が一致してやるのであれば　都市を石造家屋にするのはそんなにむづかしい事ではないと議論を結んで居る。

其の文章の中に

國君德器マシマシテ、又執政ニ人ヲ得ザレバナラズ、サレバ執政ハ大身ノ内ヨリ選擧ノ定例ナレバ、本才本能ノ人少ナカルベケレドモ、其下ノ有司ハ數多キ内ヨリ選擧ナレバ其人ハアルベシ

といふ句があるのが一寸面白い。

惜、此の本多氏の論は今から百二十餘年前のものとしては隨分進んでおるものだ、が併しいふ所は結局單なる理想論であり大體論であるのだ。若し、お前のいふやうに石を以て都市家屋の大改造をやらうから直ちに其の準備に着手せよといはれたらどうする積りだつたらう。當時は歐洲の建築術も入つて來ては居なかつたし、お隣りの支那や朝鮮をお手本にする事にも氣がつかなかつたらうから、きつと內部を在來風の木造にし、周圍だけを石を積み上げ　軒先きを蛇腹形に塗りかくす樣にする事だつたらう。今日江戸時代のお寺の建築の殘つて居るものに見るやうな、外側を在來の木造の形のまゝに漆喰でぬり包んでし

まつたものもあるし、座敷にも所謂座敷といふ土藏の中に疊を敷いたものもあつたのだから、周壁を是等と同じやうに石で積み上る事になつたに相違ない。それとも長崎に來て居つた支那人にでも學んで、骨組は木造建築と同じく周壁に當る部分にも柱を建て、其柱で桁　梁や、根などを支持させて、其柱を中におし包んで所謂或は漆喰で小石片を積上げた石壁をめぐらすといふやうな、支那や朝鮮の常用手段を採用したかも知れぬ。孰れにしても是等の構造では二階建はむづかしかつたらう。

大正の今、さへも東京の耐火的構造はむづかしいのだから、其頃こんな理想が實行されやう筈もなし、政府事業としてやつたならば、末期に近く漸次に財政に困つて來た德川政府は都市改造事業の幾分の一にも達せぬ内に破産してしまつたらう。

それに島國人の特性たる頑固な保守的な精神は、きつと人々をして周圍を取りかこんだ石の家になど窮屈で住へるものかと途中から苦情を申し出させるに立ち至つたに相違ない、それは今でさへも同じやうな言葉を往々にして聞くのだものを。

今から二十年ほど前までは煉瓦建築などは甚だ殺風景なものだと往々にしていはれたものだし、ペンキ塗りの家の如きは今日に於てもまだ多くの人々にきらわれる。

新しいものに對して、感情の上から最初の間種々の批難をあびかけるのは、どこの國でも變りないものだ。これは一九一〇年に出版されたものだがミユンヘンのヨゼフ・アウグスト・ルツクスといふ人の「技術美學（インゲニユーレエステチツク）」といふ本の緒言に次のやうな言葉がある。

「多くの人々は今なほ技術（テクニツクス）は吾々人類の理想を實現するものだといふ事は認めて居ない。技術には嘗て既に人々の心に夢として詩としてユトピヤとして存しなかつたものは一も起つて居ないのだ。「若し私が小島であつたら……」と昔の憧憬が歌つて居る。昔バベルに一つの塔が築かれたが完成するに至らなかつた。夫れ以來人類はバベルの塔の人間わさならぬものを夢みて居つた。然るに今日の技術者は此夢想を實現し世界最高の塔も之に對して侏儒の如く見ゆる摩天閣を築いた。吾々は吾々の聲を海の彼方に送りたいとは、むかし空想家のいつたことであるが、人々はそれを單に迷信者の言たるに過ぎずと思つて居た。今日の技術者は多くの點に於て或は空想家であるかも知れぬ。然し迷信者ではない。彼等は電纜を設置した、而して今や君たちは安々と君たちの聲を海の彼方に傳へる事が出來るのだ。私はなほ之れ以上數へ立てる要があらうか。讀者は寧ろ私がなほ擧ぐ

べきものを遺し置く事を反て有難く思ふだらう、吾々にとつて今日は既に幼い時から技術がプレトより〻重要なものである。これは自然の勢の然らしむる所で決して我々の咎ではない。然るに、我々は有ゆる愉快、あらゆる滿足乃至生活の安易を技術の進步に負ふところ大なるにも拘らず、今日の文明の程度に於ては工學は美の大なる破壞者として批難されて居る」。

飛行器や潛水艇や無線電話の如き多くの新技術は實現の過程と手段とこそ近代のものだが、それは遼遠の昔から詩人の空想であつて、これが詩人の空想として取扱はれて居る間は實に美しい事柄として考へられてあつたのに、實現されたものは美の破壞者の如く見られると、斯ういふ意味にいつて居るのだ。

然し乍ら實は私はこれを單なる詩人の空想とは見ないのだ。寧ろ古くより人間の文化の理想であり目的であると見るのだ、此の點に於て著者の意見と異つて居る。それはたしかに古く人間の大理想であつた筈だ。それだのに其の理想が實現せられた場合に、それが殺風景なものと思はれるのはなぜだらう。たしかにこれを實現する過程と手段との方に寧ろ眼がうつつてしまつて、細部を批判的に眺めやうとするからだ。

それは兎に角として、獨逸あた・でも新しい技術に對してこんな風にいはれて居るのだから、科學の取扱はれるやうになつてから日のまだ淺い日本で此の種の青年が勢力あるのは止むを得ない事だ。しかし今日ではそれも昔ほどはひどくなくなつて居る。それにしても未だ木の腐朽を防いで耐久力を增すために日本風の家屋をペンキ塗りにするやうな事にしたら、大概の人は口を極めて美を損するといふ點から其の非をならすに相違ない。

これは單にチヨツトした一例を擧げたに過ぎぬが、こういふ例は數へ盡きせぬほどもある。そして此の例は單に些々たる傳習を破るといふ丈けの事なのだが、實は傳習を破るといふ事の方が自然を破壞する事よりも却て大きな非難を受けるやうに私には感ぜられる。

ごく一寸した傳統を破る事を大罪惡のやうに批難する極めて保守的な老人でも、自然破壞の事業に對しては寧ろ快哉を呼ぶ事が多いやうだ。むづかしいのは傳統の問題だ。

總て工作物の形は、其の目的とする用途と、これを組成する材料と、其の構造の方法と、此の三つに依つて定まるもので、此の三つの基本原理が眞の要求から過不足なくぴつたりと有機的に統一せられて融合した場合、此の工作物の形は美をな・も

のなのだ。而して此の如き主張が所謂機能主義(ファンクショナリズム)といはれるのであつて、古くはゴットフレッド・ゼムパーなどの稱へた所（一八七八年に出版した Der Stil in den technischen und tektonischen Künsten といふ著書がある）のものだ。然し乍ら斯くの如くして組成せられた新しい工作物が一般の慣習的形態となる迄は其の美の認められる事が概して少ないものだ。此の事は確かに在來の藝術的教育が餘りに考古學及び史的の眼鏡をかけて居つた事に基因する。

これはもう確かにそうであるには相違ないが、其所に一寸困難な問題がある。といふのは、以上述べた基本原理が有機的にピツタリと統一された時に美がある可きで、それがそう見えないのは傳習的の心の雲が取り去られて居らぬからだ、とこう考へた時其所に藝術的良心の痲痺が起るからだ。卽ちこう理性的に肯定してしまうと却て本當の美の判斷がむづかしくなつて來るのだ。誰のいふた言葉であつたか忘れたが、美を亡ぼして整頓をもたらすといふ言葉があつたが、たしかにそれはありがちだ。

ルックスの「技術美學」の緒言には引續いて此の點に言及して居る。それは斯うだ。

「我々は一鐵橋、一エーッフェル塔が甚だ我々の意に適つたものである事を承認する（中略）實體的內容、單なる骨組が美の最後の言葉であるとは斷じて眞ではない。一鐵橋、一エーッフェル塔、又これに類似の技術的作品は單なる骨組に過ぎない。これは我が理性を滿足させるが決して我が心情を滿足させるものではない。而して藝術眼は心情を以て見、理性を以て見はしない一つの譬喩を撰み出して見やう。人間の骸骨は實に最も完全なる技術的作品だ、併し乍ら我が美を求むるの眼に決定を與ふるところのものは花咲ける肉體だ。」と、こういふて居る後に、我々は傳統主義に固まつた一般素人を相手にすると同時に、建造材料、目的をのみ充たさうとしてこれと共に美に向けられた文化的意向を充たさうとしない專門家をも相手にする必要がある、といふ意味の事を述べて居る。

私は今此の書の緒言だけをこゝに掲げて其の精しい內容は玆にはあげまい。以上の言葉は單に工學の問題に就て論じて居る事だが、獨り工學上の問題のみならず今日の社會制度や風俗其他此の過渡期にある萬般の事にあてはまるものと思ふ。

戰後の獨逸で稱へられて居る表現主義の藝術は、總ての寫實的な因襲に反逆を企てた藝術の流れで、此の主義の人は音樂家

のやうな氣持で製作し、線や色彩等に依つて新鮮な美を得やうとするものであつて、自然に合致させるといふやうな事を主としては居ないのだ。

つまり科學的の合理を主とする事を退けて他に美を求めやうとするので、そうすると勢ひ浪漫的の方向へ行きがちになるが此の傳統主義の流れなる浪漫的の行き方を避けて、新しい美の領域へ突き進まうとするのだ。譬へ題材は自然の印象から取り入れても、其れをそのまゝに用ゐずに自我の熱に熔解して主觀的に所謂藝術的創造に依つて表現しなければならぬといふのだ。

そして此の主義が建築の領域にまで入り込んで來た。繪畫や彫刻ならば純然たる觀賞を主とするものだから差支ないとして、科學的合理を主とせねばならぬ構造物をこれで取扱はうといふのだから、種々の矛盾が出て來るのだ。

たしか米國の或る建築雜誌だつたと記臆する。昨年の秋見たものだが、中に或る表現主義の舞臺裝置を現はしたものがあつたが、室は不規則な三角形になつて居り、窓もまたゆがんだ三角形を形作り、壁が歪んで電燈が曲つて取りつけられたりして居つた。殊更に自然の合理をぶちこはしたものであつた。東京でも同じ頃に同じやうな場面の活動寫眞が演じられたそうだ。

これが獨逸からの種を日本の國土で獨逸流に花咲かせたいとあせる或る一派の建築家だち——愛新(フィロネイズム)は人間の通性で人間は凡て新しい經驗を要求する熱烈な本能を持つて居るものだそうだが、それにしてもこれはづばぬけて盛な愛新性だ——の嗜好に投じたものだ。

最近來た伯林の建築雜誌に或るカツソエーの寫眞があつたが、これは舞臺裝置とは違がうから室や窓が不規則な三角形になつたり壁が歪んだりはしては居らぬが、其の天井は平らな板石が不規則な形に粘着して垂れ下つて居るやうに作られて居つた。自分はこれまでも屢々獨逸の美術雜誌などで、建築の外部や内部の壁面裝飾が表現主義の手法で取扱つてあつたのを見たが、單に裝飾といふには餘りに盛高く殆ど構造的に取り扱はれて居る此の種のものは餘り見なかつた。それでもこのカツフエーの椅子やテーブルは普通の形のものが整然と並んで居つて何の奇もなかつた。

獨逸からの近信によると、建築に對しても此の表現主義的手法が盛に稱へられて居るものらしい。しかしどの位此の趨勢が續いてどの位建築物の形態を變化さす事が出來るかは疑問だ。同じく傳統主義を排するにしても繪畫なぞと違つて工作物の方は自然の方則を無視しては成り立たぬ筈だ。それは裝飾はどん

なにでもやれぬ事はなからうが、其の全體の形態を定める構造はどうもならぬ筈だ。

表現派の藝術は要するに智識の遊戯に過ぎない。

エマースンに從へば建築のやうなものを實用藝術といふ。そして彼はそれに付いて斯ういつて居る。

「實用藝術の第一の教訓でありまた最後の教訓となるものは、自然が總て吾々の作業を左右して居るといふ事だ。人間の作業はみな自然の法に從はなければならぬ、さうでなければ自然のどこにでもはいつて居る其の活動力の爲めに全く粉碎されて仕まふだらう、馬鹿げたもの、變なものは永續するものではない。自然は絶えず藝術に干與して居る。」と。

實用藝術に對する此のエマースンの言の如きは蓋し千古不易の言ともいふ事が出來るだらう。

エマースンの言にはまた斯ういふ事がある。

「建築（アーキテクチュアー）と辨口（エロクェンス）とは混合藝術（ミックスト・アート）だ、其の目的は時には利便（ユース）で時には美（ビューティー）だ。」と。

又自然論に於て次のやうな事もいはれて居る。

「抑も類似は、化石した蜥蜴の足跡に人間の手の徴候を認むるやうに、類似の點明白な事物にのみ存するものではなくつて、表面には著しく不同な事物にも存するものだ。さればド・スタイルとゲエテとは建築を「凍れる音樂」と呼んだ。ヰトルウヰウスは、建築家は音樂家でなければならぬと思つた。コオルリッチのいふには、「ゴシック寺院は石化した宗教である」と。ミケエル・アンゼロは建築家には解剖學の智識は必要缺く可らざるものだと主張した。云々」と。是等の例は宇宙間の事物の間には統一ありといふ所に引用せられて居るのだ。

またこれは孫引きであるが、十九世紀初頭の獨逸で有名な詩人で批評家を兼ねた、カール・ヰルヘルム・フリードリヒ・フオン・シレーゲルがやはり「建築は硬くなつたそして凍つた音樂だ」といつたといふ事だ。

ゲエテやド・スタイルやシレーゲルやの此の「建築は凍れる音樂なり」といふ句は一寸面白い。所がこれを動かす可らざる建築の定義のやうに擔ぎあげて、これを以て建築を論ずる尺度にしやうとするものがあるので困る。素人にもあるが玄人にも中々多い。

元來物の定義といふものはむづかしいもので、大抵のものは當初定義が出來てこれに基いて作られたものでないから、其の物のもつて居る種々相を一つに纒めやうとしても、細かく考へ

れば考へる程所謂上手の手から水が漏りでうまく行かない事になる。要するに定義は大體の概念を與ふるものと見ればよいので、問題は自ら別ではあるが所謂「法三章」といふ所が却て良い場合が多い、それは大部分をこれを見る所の各自の主觀に任せるからだ。同じ理由に依つて譬喩が用ゐられる。そして復雜な事物になると客觀的な細密な解析よりも此の方が却て良い場合が多い。事實分別智に基いた言詮よりも一片の詩が却て深く心に徹するものだ。此の意味に於て譬喩を事物の説明に用ゆる事が許される。事實これは佛教などの慣用手段であつて、東洋人の特に得意とする所だ。

譬喩の巧みなものにあつては、珠玉の名句を以て至極の妙諦を傳へるけれども、しかも一歩誤るときは却て一條の惡洒落に陷りがちのものだ。

「建築は凍れる音樂なり」といふ句が、もと〳〵どういふ意味で、或は何物を説明するために、或は其の主題は何にあつて如何なる場合に、これが用ゐられたかを知らないから深く論ずる事は出來ぬが、此の文句を一つの獨立した辭句として、所謂金科玉條の名目として、無批判に、如何なる場合にでもかまはず使用するときに、惡洒落になりがちだ。

なぜかといふに、先づ第一にこれは建築の形丈けを見て居る言ひ方だといふ事が一つの原因だ。建築には用途がある、敢て形の美醜を第二義的のものとするわけではないが、單に外形丈けに付ていつて居るのが惡い。若し譬喩ならば――これはたゞちよつと例を示した丈けだが――「飛行器は人を乘せて空を翔る鳥だ」といふやうにありたいものだ。

次には「建築は凍つた音樂だ」といふ此の言葉はどうも要所を指して居らぬ。これを聞いて直ぐに建築の概念が浮んで來ない。

それは、夕日に彩られた空を背景としてあの天に聳立つゴシク寺院を見るとき、中央の大塔を取り卷いてすくすくとむらがり立つた小塔、是等の塔の尖つた屋蓋に付いて居るフイニアルやクロツケツト、軒小壁の彫り造やクレスチング、更に獨逸地方のものになると塔自身の屋根が細かにレースの樣に透し彫りにせられた石からなつて居て、總て是等が或る韻律の下に集まつた形、金色の光に浮んだ其の美しい形を見た時、誠に維れ凍れる音樂だといふ感が起る。たしかに器樂からの諧調だ、いふにいはれぬ交響樂(シムホニー)だ。「建築は凍れる音樂なり、」何たる巧な言廻しだらう。確かにこういふ場所を言表はす詩句としては絶好の珠玉に相違ない。然し乍ら此の辭句を綱領として一般建築論を解かうとしてはならない。單に建築の模型に付ても同樣の感

は起り得るものであり、また高さも低く無技巧の外形を有する住宅などであつては、如何にそれが立派に理性も感情をも滿足さす事の出來るやうに作成されてあつても、決して凍つた音樂などの感は起り得ぬからだ。

形良き樹木、枝の出し振りや葉の繁り具合、其間を彩る點々たる紅果、これも確かに凍れる音樂であり、更に又、緑の森、白い河、黄色な野邊、青い海、赤い雲の諧調、これもまた確かに凍れる音樂だ。たゞ建築が器樂であるのに此の方は聲樂で、前者がハーモニカルであるに對して後者はメロデカルであるの相違だ。

斯う述べて來ると、建築は凍れる音樂なりなどゝいふ句はそんなに賞賛すべき句でもない。

確かに、藝術は其國特殊な民族精神の結晶である可き筈だ、私の取扱ふ問題としては少し大き過ぎるが私はそう信じて居る。

今、日本人と歐米の或る國の人と比較して其の特殊の體質（特殊の腦細胞から來る民族性といふものはたいしたものではないに相違ない。日本人が米食するから殆ど總てが胃弱者で短氣であきつぽいなぞといふのは體質から來るのではなくて環境から來るのだ。）民族精神の大部分は歷史的傳統と地理的環境から來るものと私は確信する。

それで、此の民族精神が明瞭に發達して居る所に特種の藝術が發達す可きだ。其の藝術は其の民族精神の結晶であり乍らしかも世界的に普遍性を有す可きだ。藝術には國境がないといふ事には賛成だ、しかし國の特色が出てはいけぬといふ筈はない。のみならず其國特有の色の出て居らぬやうた藝術はだめだ。人間の個性のにじみ出て居らぬ藝術に價ひものがないと同じく民族精神のにじみ出て居らぬ藝術に碌なものがない。獨逸模倣だと見える作品にたいした作品のありやう筈がない。他國の藝術への年期奉公はいつまで續くのだ、いつまで外國の收獲の枯萎びた殘物を食はふとするのだ。

よい種子を外國から取りよせ、よい耕作道具を外國から輸入するのもよい。何も其の通りの花を咲かせずともよいではないか。勿論在來の日本建築は日本古有の神道が耶蘇教回教佛教などゝ異つて世界的であり得ないやうに世界的であり得ないのはわかり切つた話だ。眞宗や法華宗なぞでも今では材料が古るすぎるかも知れぬと同じく建築も在來の材料では古る過ぎるだらう。今はほんとうに民族精神に徹してしかも世界的普遍性を持

つた新建築が生れ出る時が來て居るやうな豫感がしてならぬ。もう上げ潮の時が來て居るのでないかと思はれてならぬ。

美術展覽會へ行つて見ると、繪畫は日本畫と西洋畫と別れて居る。單に其の材料から來て居るものを二つに別けるのはおかしい。もしそう別けるのが本當ならば、なぜ支那畫印度畫波斯畫などゝいふ部門もおかないのか。其所へ行くと彫刻の方は其の區別のないのがうれしいが、此の方は明瞭に材料別にして人々の間によばれては居る、塑造木彫といふやうに。しかしそれは差支ないだらう。偖て、西洋建築・日本建築といふ言葉はどうだらう。

此の頃、新小説に出たのを初めとして二三の新聞雑誌にLese-drama 卽ち「讀む戯曲」と Bühnen-drama 卽ち「舞臺戯曲」との二つの論が出て居つた。讀む戯曲とは不可思議な辭句だ。こうすると工藝圖案などにも、「單に眺める圖案」と「實施する圖案」と二つあつてよい事になる。ところが實際に於て此の二つが存在するのだからおかしい。室や窓が不規則な三角形で壁がゆがんで居るなどの極端な表現主義の圖案や、内部の室の配置などはどうでもたゞ外形を凍れる音樂などに応用した圖案の如きは結局單に眺める圖案といふものだらう。

其時々に筆に隨て書きためて來たものがこんなになつた。初めから終り迄ひと時に讀み下して見ると隨分矛盾もあるやうだ併し勿論雑感で前後を通じて一つの議論とす可きものでないから差支ないだらう。先づ此の邊でひと句切り筆を止めやう。

來た時は春はまだ極めて淺かつたが、今は春も既にたけなわだ。土曜から日曜にかけて電車は江の島鎌倉へ參詣といふよりも遊山に來る人々で一ツパイだ。殆ど三年越しもかゝつた鎌倉の手前極樂寺坂の隧道も出來上つて四月の一日が開通式だつた。今日迄は表ての通りには人力車すらも見かけなかつたが、道路が藤澤から鎌倉まで通ずるやうになつてから、表には盛に自働車の音がするやうになつた。

健康も大いに恢復して來たので、もう家族も歸らしてしまつた。天氣さえよければ殆ど室に居る事もなくなつた。實際此の頃の外光の心地よさはたまつたものではない。木々の梢は若葉に萌えたつて居る。桃や李のが盛りだ。土をすき返へした田にはもう間もなく蛙がなき出すだらう。

腰越も飽きた。大磯か國府津あたりへかはらうと思ふ。國府津の海の眺めがよささうだ。あすこでも少し保養をしてから、まあゆるゆると東京へ歸らう。

想華

一つの思考實驗

理學博士　吉村冬彦

私は今の世の人間が、自覺的或は寧ろ多くは無自覺的に感ずる色々の不幸や不安の原因の可也大きな部分が、新聞といふものゝ存在と直接間接の關係をもつて居るやうに思ふ。或は新聞の存在を餘儀なくし、新聞の內容を供給して居る現代文化そのものが此等の原因になつて居ると云つた方が妥當かも知れないが、それはいづれにしても、私はあらゆる日刊新聞を全廢する事によつて、此の世の中がもう少し住心地のいゝものになるだらうと思つて居る。

新聞を全廢したら定めし不便な事であらうと一應は考へられる。其不便を感ずる種類や程度は勿論人々の位地や職業によつて色々であらうが不便といふ事に異議はなささうである。併し其れ等の不便がどれだけ根本的で、どれだけ我慢の仕切れないものかといふ事は、少しゆつくり考へて見なければよく分らないと思ふ。吾々の日常生活に必要缺ぐべからざるものと思はれて居る器具調度の類でも、それを全廢してしまつても少しも差支のないものはいくらでもある。例へば西洋ならば、どんな簡易生活でも、此ればかりは必要と思はれて居る椅子やテーブルがなくても差支ない事は多數の日本人に明瞭である。昔の日本の女になくてかなはなかつた髮飾りや帶は外國の女には無用の長物である。

新聞を必要とするやうに今の吾々の生活を導いたものは新聞自身であるかもしれないとすると、新聞が必要がられるといふ事實だけでは決して新聞の本質的必要を證明する材料にはならない。

新聞の記事は其日〱の出來事を出來るだけ迅速に報知する事を主な目的として居る。其の當然の結果として肝心の正確といふ事が常に犧牲にされ勝ちである事は誰れもよく知る通りである。併し此の一事だけでも新聞といふものが現代の人心に與へる影響は中々輕少なものではない。外の事は凡てさし措いても、「遲くとも確實に」といふあらゆる「眞」の探究者に最も必要な心持を凡ての人から段々に消散させやうとするやうな傾向のあるのは如何ともし難い。尤も大概の人間には「眞」に對する潔癖はあるから、さういふ不正確な記事はたま〱其の潔癖を刺戟して却つてそれを亢進させるやうな効果がある場合があるかもそれは分らない。又大多數の人は始めから新聞記事の正確さの程度をのみ込んで居て、從つて新聞の與へる知識にはいつでも或る安全係數をかけた上で利用するから、餘り大した弊害はないと考へられるかも知れない。有數ないゝ新聞ならば實際さうかも知れない。併し正確でなくてもいゝから出來るだけ早く知るといふことがどうして、又何處まで必要であるかといふ事が一番の先決問題になる。

海外に起つた外交政治經濟に關する電報は重要な新聞記事の一つである。かういふものがあらゆる階級の人に興味があるといふ事は、望まるべき事でもあり、又事實であるとしたところで、此等の報知を一日でも早く知る必要を本當に痛切に感ずる人が國民の中で何人あるかといふ事を考へて見なければならない。

次には內國の政治經濟產業方面に關する記事でも、大多數の國民が一日を爭ふて知らなければならないものがどの位のパーセントを占めて居るかを考へて見なければならない。

全く囚はれない頭で冷靜に考へて見た時に、此等の記事の大部分は、多數の善良な國民が假令一ヶ月位おくれて知つても少しも不都合のないものであると私は考へる。

唯國民の中で恐らく極めて少數な或る種のデマゴーク的政治家、或は投機的の事業にたづさはる人達は、一日でも一時間でも他より早く此等の記事を知り度いと思ふだらう。さういふ人々の便宜を計るといふ事が假りにいゝとした處で、さういふ人はよしや新聞を全廢しても恐らく少しも困る事はあるまい。それ〳〵自分で適當な通知機關を設けて知るだけの事は知らなければ承知しないに相違ない。此に反して大多數の政黨員乃至政治に興味をもつ一般人、それから眞面目な商業や産業に從事して居る人達にとつて、例へば佛國の大統領が代つたとか紐育の株が下つたとか、或は北海道で首相が演說したとか、議會で甲が乙とどんな喧嘩をしたとかいふ事を、二週間或は一月遲く知つた爲にどれだけの損害があるかゞ私には疑はしい。

此れ等の記事が凡て正確であると假定した場合でさへ、その必要が疑はしい位ならば、記事が不正確である場合にはどうなるだらう。

かう云つても恐らく私の云はんと欲する處は容易に通じないだらうと思ふ。それでくどいやうでも同じ事を繰返す事を許してもらひ度い。

新聞を最も必要と感ずる人の種類を考へて見ると、それは、廣義に於ける投機者であり、又一種特別な意味でのブールジョアである。好い意味での善良な國民、穩和な意味でのプロレタリアは、實際銘々の眞面目な仕事に眞劍に從事して居る限り、拙速主義の疑はしい知識に飛びついて朝夕心を騷がせ氣をいら立てる必要は毛頭ないのである。

あらゆる先入觀念を捨て、あらゆる枝葉の利害を除いて最も本質的に此の問題を考へて見たならば、私が玆に云つて居る事が必しも無稽なものでない事が了解されはしないかと思ふ。

次に考へなければならないのは所謂社會欄である。此欄の記事の內容は可也雜多な方面に亙つて居る。其中でも季節に關する年中行事の報道や或は近き未來に關する各種の豫告など、かう云つた種類のものを日々新聞で承知するといふ事は決して惡い事ではない。併し今日實際に存在する新聞の社會欄で最も大きな部分を占めて居るものは此の種の事柄ではない。此の種の記事は却つて何處かの隅に小さな活字で出て居る。此に反して驚くべく大きな見出しで出て居るものゝ內で、知名の人の死に關する詳細な記事とか、外國から來た貴賓の動靜とかは未だいゝとした處で、其等よりももつと今の新聞の特色として目立つて居るものは此の世の中にありとあらゆる醜惡な罪に關する詳細の記事である。此の種の事實を吾々が一日も早く、しかも誤謬によつて甚だしく歪められた形で知らなければならない必要が何處にあるか私には分らないのである。

此等の報道は多くの人々の好奇心を滿足させ、所謂ゴシツプと名けらるゝ階級の茶談の話柄を供給する事は明であるが、さういふ便宜や享樂と、此種の記事が一般讀者の心に與へる惡い影響とを天秤にかけて見た時に、どちらが重いか輕いかといふ事は少し考へて見れば誰れにも分る事ではあるまいか。

少し事柄が脇道へはひるが、新聞の社會記事程人間の心理を無視したものは稀である。尤も所謂講談の如きものも、可也心理を歪めたり誇張したりしては居るが、歪め方もあれ迄徹底すれば却つて害はなくなる、さうして嘘で固めた馬鹿々々しい饒舌の中に自ら又何物か本當のものに觸れて居る處がないでもない。然るに普通の社會記事となつて現はれた、例

へば人殺しや喧嘩の表現が、一度び關係者の心理に觸れる段になると、それ等はもう決して吾々人間の心理ではなくて全く異つた「存在(ビーイング)」の心理になつてしまつて居る。そしてそれが如何にも尤もらしく本當らしく提供されて居るのである。此れは併し記者自身が人間の心理を理解しないのではない、唯所謂社會記事の「定型」といふものが、各種の便宜的必要から自からきまつてしまつて、其れに據らない譯には行かない爲だといふ說明を、其方の事情に通じた人から聞いた事もある。

罪惡の心理がもし本當に科學的な正確さを以て書き表はされては居れば、それは讀者に取つて可也有益であり、そうしてさういふ罪惡を豫防し減少するやうな効果を生じるかも知れない。此に反して罪惡の外側のゆがんだ輪廓が徒に讀者の病的な好奇心を刺戟し、やゝもすれば「罪の享樂」を暗示するだけであつたら其の影響は果してどうであらう。罪惡と反對な人間の善行に關する記事も稀には見受けるが、其れが一度び新聞記事となつて現はれると、不思議に其の善い事の中味が拔けてしまつて、妙に嫌な氣持の惡い輪廓だけになつて居る場合が可也多いやうに思はれる。さういふ記事を讀んで居て人事ながらも獨りで顏の赤くなる場合がありはしないか。

しかしかういふ不滿は今茲で論じて居る問題とは別問題である。

あらゆる記事が此等の缺點を脫却して非常に理想的に出來たとした上で、それを吾々が日刊新聞によつて朝夕に知る事がどれだけ必要かといふ事が現在の問題である。それが必要でないといふ事になれば、まして不完全不眞實な記事を毎日慌たゞしく讀む事の價値は果してどうなるであらう。

私がかういふ事をいふのは畢竟餘りに新聞記事といふものに重きをおき過ぎるからの事だといふ人もあらう。

なる程新聞記事を極めて輕くしか見て居ない人は事實上多數にあるかも知れない。併し、さういふ風にして、元來決して輕く見るべき筈でない、あらゆる意味で重大な多くの事柄を、朝夕に輕々しく見過ごすやうな習慣を養ふといふ事自身に現代の思想上の缺陷の一つの大きな原因があるのではあるまいか。

唯一つだけでも充分な深い思索に値するだけの內容をもつた事柄が、數限りもなく唯萬華鏡裡の影像のやうに瞬時的の印象しか止めない。そのやうにして吾々の心の網膜は疲れ麻痺してしまつて、其瞬時の影像すら明瞭に認める事が出來なくなつてしまふのではあるまいか。

かういふ習慣は物事に執着して徹底的に其れを追究するといふ能力をなし崩しに消磨させる。例へば本當に有益な纒まつた書物でも熟讀しやうといふやうな熱心と氣力を失はせるやうな弊がありはしまいか。

此のやうな考から、私はいつその事日刊新聞といふものを全廢したらよくはないかといふ事につい考へ及んだ譯である。今の處それは容易に實行される見込のない事である。併し少くもさういふ事を一つの思考實驗として考へて見る事は何の差しつかへもなく、又强ち無意味な事でもないかも知れない。

私は現代のあらゆる忙がしい人達、一日も新聞を缺し得ないやうな人達が、試に寸暇を割いてかういふ思考實驗をやつて見るといふ事は、さういふ人達に取つて非常にいゝ事でありはしないか、又多數の人がそれを試みる事によつて前に云つたやうな新聞の惡い影響が幾分でも薄められはしないだらうかと思つて見た。

私はさういふ實驗を他人にすゝめたい爲に先づ自身でそれを試みて見やうと思ひ立つた。其實驗は未了で其結果は未成品に過ぎないが、それに拘らず玆に其の大要を誌して見度いと思ふのである。

實驗を始める前に私は先づ過去の經驗を搜して見た。

いつだつたか印刷職工がストライキをやつて東京中の新聞が休んだ事があつた。あの時に私はどんな氣持がしたかを思ひかへして見た　餘りはつきりとは思ひ出せないが、少くも私にはあの時そんなにひどく迷惑を感じたやうな記憶がない。勿論毎朝見て居るものを見ないといふ一種の手持無沙汰な感じはあつたに相違ないが、それと同時になんだか急に世の中がのんびりしたやうな氣持がないでもなかつたやうに思ふ。尤も自分のやうな閑人は恐らく除外例かも知れないから、先づ大多數の人は可也迷惑を感じたものと見た方が妥當には相違ない。

先づ誰よれりも一番迷惑を感じたのは新聞社自身であつたらうが、茲ではそれは問題に入れる譯には行かない。それと前述の投機者階級を除いた以外に迷惑したのは誰れだつたらうと考へて見た。

續きもの丶小說が肝心の處で中絕した爲に不平であつた人もあらうし、毎朝の仕事のやうにして居た演藝風聞錄が讀めないので何だか顔でも洗ひ損つたやうな氣持のする閑人もあつたらう。

かういふ善良な罪のない不滿に對しては同情しない譯にはいかない。併し現在の實驗を遂行する場合に此の物足りなさを補ふべき代用物はいくらでも考へ得られる。其れには所謂新聞小說よりも、もつと面白くて上等で且つ有益な小說もあらうし、風聞錄の代りになるもつと纒まつた讀物もあるだらう。さういふ書物を毎日新聞を讀む時間に一と切りづ丶讀む事にしたらどうであらう。其の積算的効果は可也なものになりはしまいか。

纒まつたものを少しづ丶小切つて讀んで行つて、さうして前後の連絡を失はないやうにするといふ事は必しも困難なとは限らない。事柄によつては却つて一時に詰み込むよりも適當に小切つた方が理解にも記憶にも有效な事であるのは

實驗心理學者の認める處である。私の知つて居る範圍でも毎日電車に乘つて居る間だけ露西亞語を稽古したり、カントを讀んだりしてそれで相當な効果をあげた人さへある。併し假りにさういふ人が例外であるとしても、兎も角も毎朝新聞を讀むのといゝ纏つた書物を讀むのと比べてどちらが頭腦の足しになるかといふ事ははじめから議論にならないやうな氣がする。

それでも多くの人の中には新聞なら毎日讀む氣になるが書物と名のつくものは肩が凝つてとても讀む氣になれないといふ人があるかも知れない。それは恐らく習慣の養成でどうでもなる筈のものだとは思ふが、どうしても書物の嫌いな人があるとすれば、さういふ人には又それなりの新聞の代りになるものはいくらでも考へ得られる。

謠の好きな人は其時間に一番づゝ謠ふもよし、盆栽を樂しむ人は盆栽をいじるもいゝし、蒐集家は蒐集品の整理をやるもいゝだらう。

晝も夜も忙がしい人は出勤前の僅かな時間迄も心せわしさを貪るかのやうに急いで新聞を讀む代りに、さなくばめつたに口をきく事のない家族と四方山の談を交はすもいゝだらう。或は特にさういふ人達は此の時間を利用して庭にでも下り、高い大空を仰いで白雲でも眺めながら無念無想の數分間を過ごす事が出來たら其の効果は肉體的にも精神的にも意外に大きなものになるかも知れない。私は寧ろ大多數の人の爲に何よりも一番に此の方をすゝめ度いやうな氣がする。さういふ僅かな事によつて人々の仕事の能率が現在よりもいくらかでも高められ、さうして人々の心持の平安はいくらかでも增し行き、詰つた心持と智惠とは何等かの新しい轉機を見出しはしないだらうか。

小説や風聞錄のやうな所謂閑文字に就て云はれる事は、實は大多數の讀者にとつて、他の大部分の所謂重要記事につ

いても云はれるのである。多くの讀者が社會記事や政治欄を讀む心持が小說其他の閑文字を讀む心持と根本的にどれだけ違ふかといふ事はよく〳〵考へて見ると却つて容易に分らなくなつて來る。差別の要點は記事の內容の現實性にあると考へて見ても、讀者自身に切實な交渉のない、しかも所謂定型の爲に却つて眞實性の稀薄になつた社會記事と、事實はどうでも人間の中身に幾分でも觸れて居る小說や風聞錄との價値の相違はさう簡單には片付けられないと私は思ふ。しかし其處迄追究するのは刻下の問題ではない。

此處では私もあらゆる政治欄社會欄等の記事の內容が凡ての種類の讀者に絕對的必要なものであると假定する。さういふ假定の下に新聞全廢の實驗を遂行するとすれば、必然の結果として、何か日刊新聞に代つて此等の智識を供給する適當な機關が必要になつて來るのである。

此の必要に應ずる最も手近なものは、週刊、旬刊乃至は月刊の刊行物である。名前は矢張り新聞でもそれは差支ないが兎も角も現在の日刊新聞の短所と弊害をなるべく除去して、しかも此處に假定した必要の智識を必要な程度迄供給する刊行物である。

私は此の二三年ロンドンタイムスの週刊を取つて居る。ロンドンで出てから私の眼にはひる迄にはどうしても一と月以上はかゝる。しかし私はそれが爲に英國や歐洲のみならず世界中に於ける重要な出來事を餘りに遲く知つた爲に著しい損をしたと思つた事はないやうに思ふ。のみならずこちらの新聞の電報欄の不徹底な記事で何の事だか分らずに居た事柄が此を讀んで始めて腑に落ちる事も屢々ある。此れは恐らく自分のやうな職業のものに限つた事ではなく、始めに擧げたやうな所謂善良にして眞面目な大多數の日本國民に就いて恐らく同樣ではあるまいか。

もしさうだとすれば內國に於ける所謂重要な出來事を十日乃至一月おくれて、其代り纏まつた形で可也確實に知ると

いふ事もそれ程不都合であらうとは思はれない。其れで不都合を感ずる人は勿論あつてもそれは前に繰返して指摘しておいた少數の除外例に過ぎない。さうして其等の人は日刊新聞がなくなつた處で決して困りはしない。困るとした處でさういふ人々の便宜の爲に大多數の幸福を犧牲にする必要は少しもない。

あらゆる記事の中で本當に其日〳〵に知らなくては意味のないものは捜して見ると案外少ないものである。

先づ天氣豫報などが其の一つである。此れは今の處一週間も前から豫報を出す事は困難であり、又昨日の天氣の豫報は今日にとつては無意味であるから、どうしても此れだけは日々に知らして貰ふ必要がある。尤も天氣豫報といふものの本當の意味や價値は兎角誤解され勝ちであつて、てんで始めから當てにして居ない人が可也多數である。さういふ人は天氣豫報など知る必要を感じないでもあらうが、多少でも天氣豫報の原理に通じ、豫報の適用の範圍を心得て居る人にとつては、此れは時にとつては非常に重寶な難有いものである。併し此れとても必しも新聞によらなくても他に報知する方法はいくらでもある。所々の交番なり電車停留所に掲示するもいゝだらうし、所々に信號の旗を立てるもいゝだらう。

不幸の廣告も一週間待てない種類のものだと考へられるかも知れない。併し私の考では不幸の知らせは元來書狀で本當の意味の知友にのみ出すべきもので、其れ以外の人は葬式などがすんで後に聞き傳へ或は週刊旬刊でゆつくり知つても大した差しつかへはない筈である。もしも國民の大多數の尊敬し或は憎惡するやうな人が死にでもすれば其の噂は口から口へ所謂燎原の火のやうに傳へられるものである。三月三日に井伊大老の殺された報知が電信も汽車もない昔に、五日目にはもう土佐の高知に屆いたといふ事實がある。

知名の人の旅立ちでも、新聞がある爲に妙な見送り人が增して停車場が混雜する。此場合にも前と全く同じ事が云はれ得る。

展覽會、講演會、演藝、其他の觀覽物も新聞廣告で豫告を受けて都合のいゝものかも知れない。しかし此等の大多數は十日位前からプログラムの作れぬものでもなし。又さうでなくても適當な揭示やビラによつて有効に知らせる事が出來る。一般の人々が每朝起きて床の中で居ながらに知らなければならない性質の事でもない。さういふ刺戟の目にふれないといふ事は、仕事に沒頭して居る多くの人の爲には寧ろ有利な位である。

かういふ新聞廣告がなくなつても芝居やキネマの觀客が減る心配はないといふ事は保證が出來る。興行者と常習的觀客の間には必ず適當な巧妙な通信機關が色々と工夫されるに違ひない。

其他の多くの廣告は大抵日刊新聞によらなくてもすむものである。例へば書籍雜誌の廣告にした處で、恐らく日本程多數で仰々しいのは何處の國にもないかも知れない。そして廣告の仰々しさと書籍の內容は必しも伴はない。此れも實は斷然止めた方がいゝ。私だけの注文を云へば書店の店頭の大きな立札もやめて貰ひ度い位である。其代りに眞面目な信用の出來る紹介機關が欲しい。なるべく公平嚴密な立場からあらゆる出版物を批評して讀者の爲に忠實な指導者となるものがあつてほしい。此れは完全を望む事は困難でも或る度迄は不可能ではない。例へば科學の方面で云へばネーチュアーの卷頭の紹介欄のやうなものでも可也便利である。假令いくらか批評の見地が偏する恐はあつても、利害を離れたそれぞれの專門家の忠實な紹介である限り、勝手の分らぬ讀者がとんでもない贋物を押しつけられる恐は少ない。

其他のあらゆる商品の廣告についても全く同樣の事が云はれる道理である。

單に體裁の上からでも毒々しい廣告欄を除けてしまつたら今の新聞はもう少し氣持のいゝものになりはしないだらう

か。吾々が朝の仕事に取りかゝる際にもう少し淸らかな頭をもつて神聖であるべき其日の勤めに對する事が出來はしまいか。さうして唯徒にいらだゝしい心持から救はれて銘々の大事な仕事の能率を高める事が出來はしまいか。

廣告の次に所謂三面記事を取つてしまつたらどの位氣持がいゝものになるだらう。昔「日本」といふ新聞があつた。三面記事が少しもなくて、うるさいルビーがなかつた。私は毎朝あれを唯あけて見るだけで氣持がよかつた。あゝいふ新聞は今日では到底存在しにくいさうである。

今年の正月にノースクリッフ卿がコロンボでタイムスの通信員に話した談話の中に、『東洋の新聞の中では日本のが一番信用が出來る、但し所謂「第三面」として知られた notorius scandal の爲に害はれては居るが』とあつた。此人のいふ事が何處迄信用出來るか私にはよく分らないが、兎も角も「第三面」は世界的の notoriety を保有して居る事になつては居ると見える事がある。

「三面」記事も純客觀的に正しく書かれゝば有益であり得る。例へば議會や公判の筆記でもそれが忠實なものなら凡ての人の參考になり少くも心理學者の研究材料になる事は多い。それで日刊廢止の場合に此に代るべきものゝ社會記事は出來るだけ純客觀的で科學的であつてほしい。さういふ意味で有益な面白い記事をタイムス週刊の第一頁や所々の余白の埋草に發見する事がある。

若し假りに私が此のやうな週刊や旬刊の社會欄を編輯するとしたらどういふ記事を主に出すだらうと考へて見た。人殺しや姦通などを出すとしても其等はなるべく少くそして簡單にしたい。書くならば出來るだけ本當の徑路を科學的に書く事によつて凡ての人の頭の奥に潜む罪の胚子に警告を與へるやうなものにし度い。併しさういふ例外な事件の記事よりも、日常街頭や家庭に起りつゝある、一見平凡でそして多數の人が輕々に看過して居て、しかも吾人の現在の生活

に對して重要な意味のあるやうな事實を指摘し報道して、いくらかでも人々の精神的の幸福を増し不幸を豫防するやうに勉めるだけは勉め度いものである。

裏町の下水に落ちて居る犬を子供が救けてやつた事實でも、自轉車が衝突して兩方であやまつて居た實例でも適當に描かれゝば有意義である。公園の花便りでも動物園の鳥獸の消息でも何等かの深い觀察があれば何物かを讀者に與へる。それよりも、起るべくして僅に起らないで居るあらゆる過失や危險の芽を摘發し注意を與へる事が一層有益である。例へば電車や公共建築物の設備の不完全或は破損の爲に將來當然に起るべき怪我や病害を、兎角不手廻り勝ちな當局者に先つて發見し注意したい。不完全な救助網や不潔な腰掛、倒れさうな石垣や崩れさうな崖、病菌や害蟲を培養する水溜りやごみ溜、龜裂が入りかゝつて地震があり次第斷水を起すやうな水道溝渠、役に立たぬ自働電話や危險な電線工事、かういふ種類のものを報道して一般の用心と當局の注意を喚起したい。

社會の風教を亂すやうな邪教淫祠、いかゞはしい治療方法や藥劑、科學の假面を被つた非科學的無價値の發明や發見、さういふものに世人の多くが迷はされて深入りしない前に其等の眞價を探求したい。官衙や商社に於ける組織や行政の不備や吏員の怠慢に對しても犀利な批評を加へたい。

此れ等のあらゆる探究摘發批評の動機が純粹に好意的のものでありたい。不備に對して當事者を攻撃し誹謗する事よりも寧ろ當事者の味方になり、さうして一般讀者と共に其の不備を除去する最善の方法を講究する機關となる事を心掛け度いものである。さういふ心持がもう少しはつきり現はれて居さへすれば、現在の新聞でももう少し氣持のよい者になりはしまいか。

以上の理想を實現させる爲には、新聞社はあらゆる實務や學術技藝は勿論一般思想上の各方面に就て第一流の人達を

記者として網羅しなければならない。此れは隨分困難な事かも知れない。併し私は社會の先導者としての新聞の本當の使命を果す爲にはそれは寧ろ已む得をない當然の事ではないかと思つて居る。あらゆる方面の文化の先達となる爲には、なるだけの根抵を作らなくては無理ではあるまいか。

此のやうな考から私の「實驗」は一つの夢のやうな大新聞の設立に移つて行つた。

此の社の主脳を形成するものはあらゆる官廳學校商社のみならず各政黨や宗教家思想家のあらゆる團體の代表的人物を網羅したものでなければならない。そして其等の社員は單に寄書家といふ格で外樣大名のやうな待遇を更けるのでなくて其社の仕事の全體に參與し且つ責任を負ふものでなくてはならない。此等の記者達は其れ〴〵專門の方面で一般の爲に有益であるべきあらゆる重要事項の正確な報道紹介や、災害の防止に關する適當な助言や注意を提供し、又公共事業に對する問題を提出して最善の方案を公衆に求める事を勉めなければならない。勿論此等の人々は其れ〴〵の本來の職務に從事して居るが其の職務時間の若干を割いて公衆の爲に此等の記事を草するといふ事は少しも不都合とは思はれないのみならず、寧ろそういふ事は職務に附帶した義務の一部分と考へられない事はない。又さういふものを記述する事によつて各自の職務の遂行上有益な啓示を得る場合も可也多いだらうと思はれる。かういふ新聞社の經營を少數な資本家の手に委ねるのは穩當ではあるまい、此れは寧ろ全國民自身か、少くも其の大部分の共同經營によるものとしなければなるまい。さうする爲には經營維持に必要な費用は租税などと類似の方法で一般から集め、記者や編輯員等も適當に組織された選擧制度によつて定めるべきであらう。併しかういふ選擧制度にいつも附き纏ふ弊害を防止する爲には此等の記者の地位を決して物質的に有利なものにしてはならない。記者たる事によつて一身の利益を計るに便宜を得るや

うな可能性は始から除去するやうな制度組織が必要である。本當に社會の利益のみしか考へない人ばかりならば其必要はないが、此の用心は誰れも知る通り今の處どうしても必要である。

若し此のやうな新聞社が出來たとすれば、それは從來の意味の新聞社とは大分ちがつたものになる。寧ろ國民社會一般の幸福安寧に資すべき調査研究報告機關のやうなものになつてしまふ。かういふものは全國に唯一つあつて、各地には適當に支局を分配して、中央を通じて相連絡すればよい。

政治經濟教育宗教學藝産業軍事其他ありとあらゆる方面に亘る現實の正確な智識を與へ、一般の輿論に基いて各當局の手に廻らぬ處を研究し補助して國家社會のあらゆる機關の圓滑な融合を計るが爲に、かういふ特別な一大組織を設けるといふ事　寧ろ一國の政府自身としても當然考へなければならない事のやうに思はれる。單に小官衙の片隅の一課に委しておくべきものではないとも思はれる。

尤もいふ迄もなく現在の新聞といふものは此の一大機關と同じやうな役目を果す爲に生れたものであらう。唯其れが遺憾ながら理想的に行つて居ない爲に、玆に此樣な問題が起つた譯である。

私の思考實驗は未だ僅に此程度迄しか進んで居ない。充分な洗錬　經ない以上、基礎前提にも推考の論理にも缺陷が多いかも知れない。それにも拘らず私は此れだけの「實驗」によつ　新聞といふものに對する自分の考に幾分かの進展を得、そして從來とはいくらか違つた眼で新聞に對する事が出來るやうになつた。

こんな實驗をやつて居る矢先に都下の有力な新聞で旬刊が發行されるやうになつた。私の思考實驗の一半は既に現實化されたやうでもあるが、殘る半分卽ち日刊の廢止といふ事は一寸實現される蓋然性が乏しい。

併し旬刊週刊等の發行によつて個人々々に此の實驗を不完全ながらも遂行する事が可能になつたやうに見える。即ち旬刊週刊だけを讀んで日刊には手を觸れない事にすれば目的は達せられさうである。

私は輕卒に此の實驗を人に强いる氣はないが、兎も角も先づ自分で試みて見たいといふ希望はもつて居る。しかし現在の旬刊や週刊が依然として日刊と並行して出て居る限り、又其の編輯方法が私の考へて居るのと同一でないとすると結局私の考へて居る思考實驗は到底實行する事は出來さうもない。

日刊全廢といふやうな重大な問題を直ちに實行問題として考へるといふ事は餘りに現實を無視した痴人の夢であるかも知れない。併し前にも述べたやうに、此れを兎も角も一つの思考實驗として出來るだけ愼重に徹底的に考へて見るといふ事は、新聞讀者にとつても又新聞當事者にとつても可也面白くもあり又有益な仕事であるに相違ない。そして其結果は恐らく誰れにも何等の害をも與へるやうな性質のものではないと信ずる。

時論

青年將校の觀たる西伯利出征軍の實狀

法學博士　吉野作造

次の一篇は西伯利出征軍中の親しき友人からの音信である。眞面目な青年將校が出征と駐兵とを如何に觀じ、又軍事諸制度の上に何樣の改革意見を有するかを觀るに頗る適切なるものあるを思ひ、玆に其大要を摘錄することにする。

第一信

○

命を惜しむ樣な將卒で組織された軍隊は、軍隊としての價値はない。併しいくら命を惜むなと云つた所で、野蠻人でない限り、命の惜しくないと云ふ者はない。そこで軍隊が眞に勇敢なる軍隊たり得るが爲には、二三の條件が要る。即ち總ての戰士が命を惜まず戰はなければならぬといふ譯をよく理解することが一つ。其上に命を棄てると云ふことに一種の感激を有つたことが一つ。而して其の爲には何よりも國民的後援があると云ふことが最も大切な一つである。然るに今度の西伯利出征には之等の要件が具備して居るかと云ふに、殘念ながら然うとは云へない。第一に兵卒などは何の爲に出征したのかを殆んど全く理解して居ない。次に國民的後援の方はと云へば、多數同胞は寧ろ出征の無意義を唱へてゐる有樣である。そこで出征將卒の方から云へば、丸で無益の徒事に心力を浪費して居る樣な譯になる。如何にして其間に感激の起りやうがあらう。國民も出征將卒の勞苦には同情して呉れることであらう。併し彼等の信念が既に出征を無意義として居る以上、其の慰問や送迎やに更に熱のないのは當然だ。之を受くる將卒にした所が、痛し痒しの

有様で、實のところ未だ嘗て感情の興奮を覺へた事が無いのである。而して之等の事情が現に出征軍の意氣なり行動なりの上に最も著しく影響して居ることは、何と云つても隠すことが出來ないのである。

○

西伯利に於ける我が軍人の行爲は、何と辨護しても決して勇敢と稱することは能はざるは、公知の事實である。私自身の見聞せる所だけでも隨分數多い例があるが、併し私は其の一つをだに擧示するに堪へない。只之れ丈けは明白に斷言し得る。かの適當な指揮官もなく又之といふ訓練もないパルチザンや馬賊などでも、若しモ少し立派な武器を有つて居つたなら、或は我が軍を見事に負かしたかも知れぬといふ事是である。我が將卒の志氣は實のところ不幸にして斯程まで萎靡してゐる實狀に在る。さる高級武官は、這般の現象を説明して物質文明の旺になつた結果だと云はれたさうだが、私は單に夫れだけではないと思ふ。歸する所は、戰爭の意義に對する理解と感激とを缺くからではあるまいか。私の知つて居る或る將校は、こんな、戰爭で兵卒を殺すのは忍び得ないから、命ぜられた仕事を最少限の範圍に限局して、一人でも部下を殺さぬ様に努めたと云つて居た。所謂志氣の不振は必しも至誠報國の氣魄の消耗とのみは云へない様である。

併し孰れにしても、志氣の沈淪と軍紀の弛緩とは軍隊に取つては最も憂ふべき事だ。其の原因の何れにあれ、一旦この病弊に取り付かれると、之は戰爭終了の後までも長く繼續するものである。殊に缺陷にみち〲て居る我國今日の軍隊の如きに於て然りとせざるを得ない。丁度病弱な身體が病菌の生育に都合がいゝ様に、今日の軍隊は思へば餘りに缺陷が多過ぎる。夫れ丈け西伯利出征に依て誘起された志氣沈淪軍紀弛緩の將來の影響は恐しいのであると思ふ。

第二信

○

凡そ相手のない戰爭ほどやりにくいものはない。西伯利に於けるが正に即ちそれだ。過激派が相手だ馬賊が敵だと口には云ふものの、過激派や馬賊だとて、鼻が二つあり目が三つあつたりする譯ではない。日清日露の戰爭の時の様に、支那人や露西亞人を皆敵人と見ていゝのとは譯が違ふ。普通の支那人や露西亞人は、良民として之を保護してやらねばならぬのだ。而して之と同じ顔同じ装の馬賊やパルチザンだけを敵として攻めやうと云ふのだから甚だ遣りにくい。況して彼の國情にも通せず言葉

も判らない下級の兵卒などに在て、良民と馬賊パルチザンとを見分け得ないのは、當然の話である。

たゞに夫ればかりではない。彼等は平常は良民をよそうて居るが、此方が少數で與し易しと見ると、すぐ武裝して不意打に出づる。故に幾ら油斷をせず拔目なく警戒して居ても、時々飛んでもない大損害を與へらるゝを免れない。歩哨や斥候の往々敵にやられるのは之が爲めだ。之を豫防するためとて餘りに嚴重にやると、今度は徒らに良民を苦める事になる。外の誰から頼まれたといふでもなく、謂はゞ周圍の非難に拘らず勝手に出兵して居るだけ、さう手厳しい手段に出ることも出來ないといふ羽目にある。此處に西伯利出征軍の云ふに云はれぬ困難があるのである。

○

歩哨の武器使用を例に取つて這般の苦境を明にしやう。陣中勤務令には三度誰何して答へざれば射殺して可なりとある。併し此規定は西伯利には應用する譯に往かぬ。露國其ものを敵とするのではない。西伯利を一般臨戰地境の樣に取扱つては、露西亞の良民は勿論のこと、在留外國人の迷惑此上もなからう。依て西伯利では舍營勤務規定に依ることになつて居る。之に依ると左の通りに定められて居る。

警急ノ場合ノ外、平常舍營勤務ニ服スル者ハ、左ノ場合ニアラサレハ兵器ノ使用ヲ許サズ。

一、自衞上止ムヲ得サルトキ。

二、暴行鎭壓ノ爲、兵器ヲ用ユルニアラサレハ他ニ手段ナキトキ。

三、人及物件ヲ防衞スルニ當リ、兵器ヲ用ユルニアラサレバ他ニ手段ナキトキ。

即ち衞戍勤務令に示してあるものと殆ど同一だ。然るにパルチザンとか馬賊とか我が軍に敵意を有つ者の頗る多い處に於て斯くまで武器の使用が制限せられては、十中八九機先を敵に制せられ、歩哨に取つては隨分險呑な話なのである。そんならこの規定は不當のものかといふに、公平に考へてさうは云へぬ。そこに出征軍の苦しい立場がある。

私共の同僚中には、此の規定が不都合だと論ずる者もある。併し私は、舍營勤務の規定だけでは足りない樣な――即ち露支兩國民を丸で敵國人の樣にしてしまつた、我が國官憲のやり方が惡い。否更に一歩を進めて云へば我が將卒をしてこんな苦境に立たさるを得ざらしめた出兵そのものが間違つて居るのではないかと考へる。

しばらく私の斷案を容認して出兵そのものが間違の原だとせ

よ。這の第一步の踏み誤りは、實に爾後のすべての行動を掟だらけにしてしまつた。野戰陣中勤務令に依らざる可らざるが如き形勢を作りつゝ、而かも舍營勤務令の制限を踰ふる能はざる地位に居るのだから、その結果飛でもない失態を來すのも怪むに足らぬ。其の最も顯著なる例に夫のラングトン事件がある。元來最高軍事官憲は、舍營勤務規定に依て步哨に許さるべき武器使用の場合を豫め公示してある。けれども既戰地境に在る樣な氣持で居る司令官等には、不幸にして此の明がない。從て步哨として如何なる場合に武器を使用していゝかを彼等は十分に教育して居たかつた。否、私かに聞く所に依ると、怪しいと思つたら直に射擊して可なりとさへ命令して居つたといふ。ラングトン事件は、上級者が誤りなく命令して居なかつたといふので、步哨の無罪と云ふ事になつて落着したが、上級者のこの失態は、單に怠慢とのみ責めることは出來ない。迂つかり彼等をして交戰地帶に在るかの如き思をさしむる所に、根本的な問題が潜むと思ふのである。

○

此種の例は外に幾らもある。之に依て下級者も困るが、一番可愛相なのは兵卒だ。殊に彼等が之が爲に拂はせらるゝ無益の犧牲に至つては、實に言ふに忍びざるものがあるのである。

試に派遣軍部內で時々出す種々の訓令等を見るがいゝ。よく見て居ると、一體どうすればいゝのか分らなくなる底のものばかりである。考へ樣に依ては、如何樣にも意味の取れるものと謂ても差支ない。そこで各種の命令は各指揮官の勝手な解釋に由て運用さるゝ結果になる。そこで部下の兵卒は自ら上官一個人の感情と利益との爲に無益に驅使さるゝことになるのである。例へば治安維持といひ過激派討伐といつても、どの程度まで軍隊を動していゝのか、命令がもと〱甚だ曖昧である所から、指揮官は勝手な解釋を下す。而して指揮官の中には、自己の好惡に從て隨分突き進んで討伐の鋒先を向ける者もあれば、別に援助すべき必要もない者に、因緣や私情に絡まれて特別の助勢を敵　する者もある。又助ける討つといふ特別の考もなかつたのに、近づけて居た者　奸言に乘せられて無益の骨折りをするに至るのもないでない。或る意味に於ては、我が軍は絕へず馬鹿〱しくも彼等に利用されて居る形にもなつて居る。其の一例を示さうなら、ハバロフスク撤退の風說の起つた頃、頻りに日本の步哨が狙擊されたことがあつた。最初は全くパルチザンの所爲とばかり思つてゐたが、一度兵を出して犯人を捕へて見ると、豈圖らんや我が軍と特別親しい右黨側の兵等であつた。調べて見ると 日本軍の撤退が自分達の危險の因となるので、故らに過

激派の跳梁なるかの樣によそうて撤退を差控へさせやうとしたとの事であつた。

此外馬賊に對してもさうだ。我が指揮官の中には、隨分好んで戰を仕掛けるやうな者もある。又そんなことをやればどの道戰は避け難いと云ふ樣な處置に出づる人もないでない。而して以上擧げた樣な各種の場合に、何時でも無用の犧牲を拂はせらるゝのは、言ふまでもなく下級の兵卒のみである。

嗚呼無意義の出兵！どうしても戰はねばならぬといふ確信なくしての出征だから、命令の曖昧なのも無理はない。私も嘗て一夜ある町の市場を警戒する命令を受けたことがある。馬賊が支那人の商務總會を襲ふといふ噂があり、支那人の方から懇請して來た結果であつた。そこでいよ〳〵馬賊が來た時どんな態度を取つていゝのか分らなかつたので、いろ〳〵訓令を研究して見たが、普通の警察事項には干與せなくてもよい樣であり、又干與するも妨げない樣にも見へる。馬賊に對しても傍觀的態度を取るべしとする樣でもあり、又進んで其不法行爲を阻止すべき樣でもある。干與して可いのかどうか、干與するとしてもどの範圍まで突つ込んでよいものか、甚だ明瞭でなかつたので、私は發令者に就いて直接に質して見た。之に對する答はかうであつた。『警戒に出てゐると聞いたら、馬賊も掠奪をやめるだらう。彼等を諭して其儘引き返させれば誠に好都合で、何も干涉といふ所まで行かなくても濟むだらう。要するに駐屯地内のことを知らないとあつては軍隊の恥辱だから、やるまでの事だ』と。果して馬賊は來なかつた。併し來たとしても之を抑止することが日本に取つて何の緊急の仕事であるか。斯んな事に貴重な兵卒を犧牲にされては堪つたものでない。而して斯んな場合に、得たり賢しと我から馬賊の根據を求めて戰を賣りに出たものも少く無いことは、私の敢て斷言するに憚らざる所である。

もつと非道いのになると、警戒を命ぜられたのを機に、相手が本當の馬賊だらうが良民だらうがそんなことには頓着なく、盲滅法に突進するといふのもある。若し夫れ何か事があつた際、何の處置にも出でないでは如何にも無能か怠慢かの樣に思はれはせぬかの懸念から、利害得失や効果の如何をも省みず、況んや部下の勞苦や危險などは全然念慮の外において、輕々しく部隊を動すと云ふ者に至ては、數限りなくある。橋梁が破壞されたといへば橋梁守備隊を繰り出し、鐵道が爆破されたと云つては線路偵察隊を派出する。其度毎に無用の犧牲を拂はせらるゝものは常に下級の兵卒である。長い線路を完全に守備しやうとすれば、何十師團あつたつて足るものではない。二ケ師團や三ケ師團の兵をいくらバラ撒いたとて、破壞しやうと思へば課

はない。夫にも拘らず、敵に引かれて漸次兵力を分割すると、遂に不意の襲撃に我が虚を衝かれて思はぬ失敗をするに極つて居る。此の種の失敗を繰り返して如何に多くの兵卒が空しく異郷の鬼となつたかを思へば、我々は實に慄然として膚に粟を生ぜざるを得ないのである。

然るに驚くべきは、斯んな苦い經驗を繰り返し〳〵甞めて居るに拘らず、最高幹部が毫も其の過誤を覺らぬことである。彼等は口癖の樣にいふ敵にやられたからとて止めては國軍の名譽に關すると。馬鹿〳〵しい。馬賊やパルチザンに勝つたつて何が名譽か。加之、我々の眉に唾して聞かねばならぬことは、所謂國軍の名譽なる言葉である。軍の名譽とは往々個人的野心の變名であることを看過してはならぬ。何をやつても命をすてるのは下級の兵卒だ。而して功は上長官たる自分が收める。そこで何か一手柄したいといふので、勝手な理窟を探し索め、かくして無益な討伐が行はれるといふこともあるのである。一將功成萬骨枯とは、西伯利出兵に於て特に痛切に感せらるゝ。

序だから云ふが、私は勳功表彰の今日の制度にもかねがね不平を有つて居る。昔の戰爭なら、個人の功績といふことも言ひ得るが、今日の戰爭に於ては、果して何人の力が勝利の原因たりしかを判定し得るものではない。而して今日の制度は、集團的奮鬪に對して國家の與ふる報酬の大部分を、上長官の一人占めに歸せしめて居る。之が自ら因をなして、下級軍人が上官功名心の滿足の爲に無遠慮に犧牲にさるゝことになる。此點宛も資本家の勞働搾取と異曲同巧である。爲政家の深く思を致さねばならぬ所であらう。

第三信

○

露國ノ政治團體ニ對スル我軍ノ態度ハ、一ニ軍司令官ノ命令若ハ指示ニ依リ決スベキモノニシテ、此間些末トイヘトモ各自ノ私情若ハ意見ニ依リ之ニ斟酌ノ加フルガ如キコトアルヘカラス

西伯利の駐兵が幾多の失態を重ねた揚句、から云ふ訓令が屢々に派遣軍の本部から發せられた。是れ各級指揮官や獨立部隊長などが、私意に依つて所謂右黨側に各般の援助を與へ、以て我が對西方針たる内政不干涉嚴正中立の地位を著しく困難ならしめた爲に外ならぬ。

私の西伯利に往つた頃は、可なり八釜しく嚴正中立主義が守られて居たやうだ。夫れでも去年五月末の浦鹽政變の場合の如く、日本軍の尻押しと云ふ樣な噂が中々打ち消し難いやうであ

つた。あの政變後間もなく浦鹽憲兵司令官が待命となつたのは、一部の風説の通りこの政變に何等かの關係があつた爲めかどうかは知らないが、只同司令官が極端の右黨贔負であり、從つて其配下の憲兵等亦擧つて赤ぎらひであつたことは、疑なき事實だといふ。而してかうした種類の偏見者流は、不幸にして我々軍人仲間のうちに餘りに多いのである。

軍隊は一々上級者の命令通りに動く樣になつて居るとは云ふものゝ、軍人も木偶の坊でない限り、命令事項の實施に方り其本人の私意の混るは免れない。故に上級者が幾ら露國の政爭に濫りに加はるなと訓令しても、受命者の頭が發令者と同じ程度に意味を吞み込んで居ない以上は、うまく行はれるものでない。殊に今度の樣な政略的な出兵に於ては、各種將校の頭を開拓し、政府の根本方針を十分に理解せしむるは、格別必要なことである。所が、肝要の政府の方針なるものが元來グラ〳〵であつたのだから致方もないが、將校などは元來が沒常識の敎育を受け世界の大勢には頓と觸れさせられて居ないのだから、今度の樣な場合には全く臨時機宜の處置に出づるとが出來ないのだ。而して世界の大勢に通じないのは、實は下級將校ばかりではない、上級官そのものも亦決して御多分に洩れぬのだから困る。

最高主腦部に居る連中も當初熱心な右黨後援者であつたことは隠れもない事實である。夫れでも司令部の方は、直接陸軍本省の制肘を受けたり外務官憲等との交渉も多いだけに、幾分――比較的の話ではあるが――開けて居るらしいが、交通部となると丸で沒分曉漢の寄り集りである。彼等は純然たる參謀本部型で、何處までも保守黨後援で押し切らうとする。虛實の程は確ならねど、甞て大井軍司令官と星野交通部長とはかうした意見の相違から數時間に亙つて激論を鬪はしたこともあるとか。チタ撤退の命に接した第五師團長が、中央の參謀長に向つて「高柳健在なりや」の電報を打つたと聞いて、手を拍つて喜んだのは交通部の連中である。ハバロフスク撤退に際し、兵士を損せさらんと專心して執つた第十四師團の處置を、頗る軟弱だと極力非難したのも彼等であつた。遂に彼等は本音を吐いていふ。今日この儘西伯利を撤退するのは武士道の恥辱だと。

武士道の名折れを云々する説の中には、折角援けた者を途中見殺しにする譯には往かぬといふ意味もあるさうだ。成程我々に賴つて居る弱い右黨側を今更見すてるのは氣の毒である。併し彼等が今日孤立無援の窮地に陷つたのは何の故であるかを、我々は考へて見なければならぬ。又彼等を援けることがどれ丈け露西亞の爲になるのか、更に我國の立場より打算して、彼等

は陛下の赤子を惜氣もなく犠牲にしてまで助けねばならぬものかをも、反省して見る必要はあらう。一切の先入的偏見を去り少しく注意すれば彼等の多くが何等顧慮するに足らざるツマラヌ人間ばかりであることは明白に分る筈だ。去年三月末の沿海州の反動革命にしても、又五月末の浦鹽革命にしても、成功の上は誰が要塞司令官になる、裁判所長は誰れ、警視總官は彼れといふ様な方面は、巨細を極めて居るに反し、肝腎の革命計劃の方は、驚くべき程杜撰なものであつたといふではないか。之に由つても私利の外何物もない連中であることが分るであらう。私利でかたまつて居るのだから眞の一致協戮の缺けて居るは怪むに足らない。右黨側に内訌の絶へないのは、畢竟之が爲である。而して我々軍人には、不幸にして這般の鑑別が出來ないらしい。それといふのも畢竟我が國の軍人が由來獨斷的に又非反省的に物事の價値を決めることに慣らされ切つて居ることの結果であると思ふ。

○

軍隊では、立身出世の要訣として、(一)引、(二)運、(三)技倆、(四)馬鹿、(五)理窟といふことを算へる。良い縁者を上級者に有つのが立身の第一捷徑で、次が運のよし悪し、本人の能力はやつと三番目、馬鹿では出世の遅いのは當然だが、夫れでも理窟をいふ者よりはよいと云ふ意味である。是れ實に一面に於ける軍隊の實状を穿つものだ。軍隊では、理窟をいふことは何よりの禁物である。否、殆んど罪悪だとせられて居る。價値判斷の標準は、專ら上官の獨斷的指令に盲從することである。其間に決して獨自の合理的省察を許さない。だから軍人の頭は頗る單純だ。之が帝國軍隊の長所だと誇つて居るのだから驚くではないか。

斯くて私共の仲間は始めから右黨とはよいもの、過激派とは悪いものと決めて怪まない。何故よいのか。何故わるいのか。そんな詮索は全然無用とされて居る。而してかうした考が西伯利ではドン／＼實行の上に現はれて來るのだから堪らない。

○

將卒が單純な頭で過激派を悪者扱ひにしゐるばかりでなく、西伯利に於ける失態の他の一面の原因は、著しく國際的精神に缺くる點である。從來軍隊が國際的精神の涵養を全然怠つたといふ點である。否、國際的精神の涵養を全然等閑に附して――否、之と相容れざる寧ろ正反對の教育のみを施して來て――さて突如として國際的精神を最もよく發揮せねばならぬ場所に兵隊を持つて來た。出征軍の事毎にヘマをやるのも考へて見れば無理もない話である。例へば夫のラングトン事件にした所が、本當の原因は國際的精神の乏しい所から起つた事なのだ。當時

多くの將校連は『相手が米國人だからあんな面倒な事件になつたのだが、あれが露西亞人や支那人であつたら文句はなかつたのだ』と云ひ合つたが、卽ちこゝだ。內地人は勿論、外人でも面倒な文句の起りさうなのは注意をする。さうでもない側の者共の事なら、如何でもいゝといふのである。眞に人命を尊重するといふ精神がない。强弱に拘らず、保護すべきは十分に保護するといふ精神は、上下を通じて見られない。されば野外で射擊の演習をするにしても、內地などでは想像も出來ぬ程の不注意と無警戒との下に行はれて居る。是れ私の屢々實地に遭遇した所である。附近の村落や通行人の危險などは全然念頭に置いてないのである。故にラングトン事件以前にも、隨分類似の事件はあつたのだ。私の知つて居る所でも、步哨が無害な露人を射殺したり、又少くとも傷けた例は尠からずある。餘り亂暴だといふので憲兵が飛び出し、之に對して隊の方では正當防衛だと抗辯して、論爭數次に及んだといふのもある。相手は弱者だけに默つて居るが、之が爲に日本帝國の聲價がどれ丈け傷けられたか分らない。

下級兵卒の國際的精神に乏しいのは已むを得ぬとして、將校までが、ラングトン事件の當事者たる步哨の行動を表面から勇敢だなど賞讃するものもあるに至ては言語道斷である。夫れだから兵卒の中には、支那人や露西亞人を殺すのを面白半分に考へ、我から其機會の到るのを待つといふ樣なものも出て來るのだ。相手が弱ければ夫れで濟むと云のは皮相の見で、米國の如く正面から抗議して來ないだけ、問題は却て永遠に濟まないのである。米國の樣なのは、一寸は面倒だが、交渉はすめば夫れで完全に事落着に及ぶのだが、泣き寢入りになる方は何時までも恨みを忘れない。朝鮮あたりの排日でも隨分手を燒てゐるのである。我々はも少し此邊の事に反省してもいゝではなからうか。

第四信

○

私は曾て西伯利から還つた兵卒に其の僞らざる所感を尋ねたことがある。彼等の異口同音に答ふる所は、『兵卒といふ者のつまらぬ者だといふことを、今度しみじみ感じさせられました』と云ふのであつた。何故かと問へば、『將校方があんな贅澤をして居るのに、我々のみ散々苦しい仕事をさせられるからです』と云ふのであつた。

聞く、日露戰爭の當時、極東は露國士官の一大歡樂場であつたと。かくして上下人心離背して敗戰の因をなした。今日西伯利に在る我が派遣軍も、果して之に類する非難を免れ得やう

か。私は自分の實際の見聞に基き、帝國將校の德操の斯くも堕落せるに驚かされたことを斷言するに憚らないものである。

浦鹽方面に於ける步卒の勤務は、可なり劇しく又可なり辛いものである。兵卒は隔週每に必ず步哨勤務に服するを要し、猶其間巡察とか斥候とかにも服務せねばならぬ。零下何十度といふ嚴寒に之等の野外勤務に服するのは容易なことではない。然るに此間軍司令部や其他高等官衙の自働車は、國旗をたなびかせつゝ威勢よく料理屋さして馳け行くではないか。夫の高柳參謀長恩賜煙草一件の如きは、偶々其數多き一例の運わるく外聞に洩れたものに過ぎない。上の好む所下之に習ふで、弊風の滔々として流行すること、傳染病よりも早い。偶々之を攻撃するものはある。併し之は自分で自働車が乘り廻せないからのことで、之等の者にはまた夫れ〳〵身分相應に劣情を滿足させる途は備つて居り、又現に之にはまり込んで自ら品性を傷けつゝ居るのでもある。

私はこんな話をきいた。市の警戒に任じて居た步哨が、眞夜中ブラ〳〵和服姿で通る醉漢があるので誰何すると、『おれだ！おれだ！』と平氣で居る。『おれでは判らん』といふて捕へて見ると、豈圖らんや自分のとこの中隊長であつたさうだ。之が翌日は眞面目な顏して精神教育を云々するのだから呆れるではないか。

其外將校の日常生活を並べ立てゝ見ると、語學研究の名義で以て無作法に露西亞人の家に入り込む事である。交際上手な彼等が內心迷惑に思ひつゝも外面餘儀なく好遇するのをいゝことにして、勝手な振舞をする事である。隊の加給品の酒の半分以上を自分達幹部丈で呑んでしまう事である。少し上の方になると、前にも云つた通り自働車で料理屋通ひをする。之に見倣つてか交際費のあてがはれぬ下士などは、內々兵卒の分を頭をはねて、自分達の贅澤の資にあてゝ居るもあると云ふことだ。之れでも兵卒が溫順にして些の不平も云はぬとならば、夫れこそ稀代の不思議と謂ふべきである。

○

其外に、兵卒をして自らつまらない者だと感ぜしむる原因はまだ幾らもある。其の中最も重なるは、現今の制度が上に著しく厚くして下に不當に薄いことだ。軍隊をして眞に一致團結せしむるには、上下の間に感情の疎隔があつてはならぬ。利害の乖離があつてもならぬ。此點に於て今日の制度は、餘りに放漫であり餘りに不用意である。

私は曾て部下の一兵卒から斯う云ふ愁訴を受けたことがある。曰く、私の國では只ひとりの老父が頻りに私の歸鄉を待つ

て居ります。人情として一日も早く歸りたいのですが、下士の方々は、も少し長くこゝに居りたい、一年を越せば戰役加算が倍になるからなどゝ云はれますので、兎角話のソリが合ひませぬ』と。彼は元來三年兵で、出征のために除隊が延びてゐるのであつた。歸りたいのは無理もない。況んや長く居つたとて、下士の樣に何等の實益なきに於てをや。こゝにも重大な制度上の缺陷があると私は思ふのである。

戰争に依て與へらるゝ軍人の特典に、第一に從軍年加算といふがある。一年戰地勤務に服すると、別に二年の加算がついて三年軍隊に服役したと同じことになる。一年未滿では假令一日足りぬのでも、この加算は貰へぬ。而して之は恩給の上に可なり重大な關係のあることは言ふまでもない。從て將校や下士やは、九ケ月や十ケ月も勤務すると、いつそのこと、もう二三ケ月居りたいと願ふ氣分になる。併し恩給といふことに何等の關係もない兵卒に取つては、加算は何の役にも立たぬのである。此處に兵卒と下士以上の者との利害の衝突がある。

上に厚く下に薄い例としてはまた戰時増給を擧げることが出來る。準士官以上は本俸の四割、下士以下は給料の六割だ。當局は斯く下に厚く上に薄くしたと云ふだらうが、之こそ眞に鬼面人を欺くものである。準士官以上の俸給には衣食住一切の費用も含まれて居るのだが、下士以下の給料は夫れ等を控除した本當の小使錢だけなのだ。故に準士官以上の四割は、下士以下の六割に比してお話にならぬ程の割高になる。詳しく云へば、一、二等卒は月に僅か二圓二十錢で、曹長は二十三圓、中尉は四十圓だのに、大佐となれば百六十圓となるのである。加之、準士官以上の給料は、元來食料は自辨すべき豫定の下に計算され居るのに、戰時は下士以下と同樣に給與されるのであるから、上下厚薄の差はそこで又いよ／＼大きいものになる。而して勤務の方はどちらかと云へば下程苦しい。兵卒ほどつまらぬ者はないと感ずるのも無理はないではないか。

それに猶ほ聞く所によれば上級の者になると機密費とか交際費とかいふものも潤澤にあつて、種々私用の事も之で辨ぜらるゝとか。料理屋通ひの費用なども概して此の中から出るといふは妄誕であらうが、兎に角、上の者に對しては可なりの贅澤の出來る丈けに給與の行き屆いて居ること丈けは、事實の明白に證明する所である。

中にも氣の毒なのは、召集された兵卒や除隊延期となつた兵卒である。彼等は既に二年の服役を終つたのである。本來家郷に在つて生業にいそしむを得べきのに、半年も一年も特別の勤務に服せしめらるゝ。そして毎月一樣に五圓や六圓の小使を貰

ふ丈けでは堪つたものではない。兵卒の中には又た隨分家の貧しい者もある。出征の爲にどれ丈け多くの悲劇が此州に起されて居るかは、蓋し想像の外であらうと思ふ。

○

之は今度の事に限つたことではない、昔から言ひ古された事ではあるが、勳章幷に之に伴ふ年金賜金の制度も不公平なものと思ふ。普通兵卒の貰ふ金鵄勳章功七級の年金は、たつた百圓であるが。佐官級の貰ふのになると五百圓から七百圓位になり、將官連のは千圓乃至千五百圓に上る。而かも兵卒の方は、功七級すらが容易に貰へぬのに、高級軍人になると、司令部のうちに安坐して樂に之が貰へるのである。此の外旭日章や瑞寳章などに附く一時賜金にしても、兵卒のは精々百圓を出づることなく、將校は五百圓乃至七百圓、上級將校は千五百圓乃至二千圓に上る。同じ樣に働いても、こんな亂暴な差があり、其上本當に多分の苦勞をした者のみが貰ふと限らぬのだから、下々の者に不平のあるのも無理はないではないか。

一體私共の考では、勳章などは無用の長物だと考へる。斯んなものが無くとも、働く丈の事は十分に働けるものである。強て與へるなら、感狀と從軍徽章位で澤山だ。特別に立派な働きをした者には感狀を與へ、餘り目立つて、卑怯な者には從軍徽章を與へぬとすればよい。信賞必罰は必要かも知れぬが、餘り多くの階級に　み過ぐると、却て弊害がある樣に思ふ。獨り勳章や賜金の制度ばかりではない。戰時手當の增給にしても、從軍年加算の制にしても、之等は齊しく昔の戰爭に掠奪を許したり、分捕品の分配を約束したり、降つては勇敢なる武士に知行の加增を保障したりするのと同一の心理的動機に基くものにして、徒らに好戰氣分を奬勵するの外何の効もないものだ。軍人自身は必しも自己の名譽のために又は其利益の爲に戰爭の繼續を好むのだとは云ふまい。又事實さう意識して居ないのかも知れぬ。併し榮利の伴ふ所から自然少しでも長く駐屯して居たいと云ふ氣分になることは、前にも述べた通りである。之と趣を異にして同じ動機に出づるものに斯んなのがある。某高級將官は嘗て、今度の出兵には成るべく全國の師團をまんべんなく出征させて平均に恩典に與らせたいと云つたさうだ。餘程公平な積りで得意らしかつたといふが、考へて見ると、丸で戰爭を商賣視して居るものと謂ふべきだ。斯かる流義で萬事をやられては國家が堪らない。斯んな事に徒費する金があるなら、私共は戰爭の爲に死歿した者や不具廢疾となつた者等に對する給與をもつと〳〵增して貰ひたいと思ふ。現在の制度は此點に於て甚だ薄い。と謂ふよりも、寧ろ全然顧みないと云つてもいゝ位なので

ある。

○

遺族扶助料なども、今の儘に放任して置いては、所謂戰場の勇者をして後顧の憂なからしむることは到底出來ない。扶助料の額は病死と戰死とで違ふ。前者は後者の三分の二である。戰死の方は、年額にして上等兵が百三十二圓、一等卒が百二十圓、二等卒が百八圓、月に割れば僅々十圓見當である。加之給與年限を遺兒の廿歳に至るまでと制限したこと、扶助料を受くべき資格を單に寡婦遺兒父母祖父母に制限し、廿歳未滿又は廢疾不具にして產業を營む能はざる兄弟姉妹には、一時金を給與することにしたなども、適當とは云へない。孰れにしても、こんな少額の金と家の大黑柱との交換では、畢竟死ぬ丈損だといふことにならざるを得ない。斯くても猶國家の爲に身命を擲てと求むるのは無理では無からうか。況んや下々の待遇を斯の如くにして、而かも上級者の待遇は、比較的至れり盡せるものあるに於てをや。

傷者に對しても同じ事がいへる。給與額は遺族扶助料と同額なるを原則とし、一肢以上の用を失つた者には、傷疾の大小に依て六級に分ち、夫れ〳〵增加恩給が貰へるのである。そこで中どころの所謂一肢を失ひ或は二肢の用を失へる者には何れ丈の增加額があるかと云ふに、上等兵が百二十圓、一等卒が百八圓、二等卒が九十八圓である。故に兩方合しても月額やつと二十圓見當にしかならない。

要するに死傷者に對する手當は餘りに手薄である。否、餘りに殘酷である。此頃の流行語を用うるなら、之れこそ本當の人道問題だ。之は今度の出征に關しての問題ではないけれども、現に私の部下の間にも大に之を氣にする者があつたから、殊に此機會を利用して述べて置くのである。

第五信

○

戰勝に伴ふ物質上の利益のことは暫く度外におく――私自身は結局何等得る所のないものだと云ふ論者だが――精神上の利益はと云へば、之も積極的には何もない、否、却て弊害を伴ふものだとさへ考へてゐる。けれども消極的にはいろ〳〵皮肉な教訓を與へて、我々を大に反省せしむるものがあるやうだ。斯う云ふ意味で、少しく西伯利出征の齎した利益といふものを數へて見やう。

○

私の識つてゐる或る大隊長は、内地で初年兵教育に從事して

居る部下の一將校に書き送つた手紙の中に、斯う云ふ事を云つてやつた『此方へ來てから、實際の役に立つ樣に步哨や斥候を一と通り敎へ直すに數ケ月を要した。今度の初年兵は充分注意して大に實戰的に敎育して貰ひたい』と。

一體軍隊の敎育は、何事によらず、總て皆戰爭を基準とするものであるから、特に實戰的敎育など稱すべきものがあらう道理はない。其の之れあるは、平時の敎育が徒に形式に流れて、實戰に役立たぬことを意味するものである。而して斯かる間違の起つた因は何かといへば、私は檢閱制度であると考へるのである。

人或は云ふ。是れ制度そのものの惡きに非ず、檢閱官の不明なるの罪なりと。併し私の考では、今日の檢閱制度は、餘程俐悧な者が巧に善用して吳れなければ、どうしても弊害を生ぜざるを得ざる樣に出來てゐるものと思ふ。夫れに今日の軍隊は、上になればなる程人間が馬鹿になる樣に出來て居る。だから理論上の必要はともかくとして、現在の行き詰りを疏通する手段としては、しばらく檢閱制度を全廢した方がよくあるまいかとさへ考へらるる。

何故檢閱制度がわるいかと云ふに、之れあるが爲に、今日軍隊の敎育は、戰爭を目標として行はれず、檢閱を目途として行はれるからである。而して檢閱官の頭は飛んでもない時代錯誤と來て居るから、之に迎合する軍隊が、徒らに形式の完美を競ふは怪むに足らない。之に慨して八釜しく意見を述ぶる樣の部下は、前にも述べた如く、黜けらるるに決つて居る。故に人は皆口を緘して思ふ所を述べないのである。夫れが一朝戰爭となると、何の役にも立たないので、そこで始めて實戰的敎育など云ふ滑稽な言葉も生じて來るのである。前記の大隊長が屬して居た聯隊は、已に第三期も終らうと云ふ頃の兵隊であつた。三年兵二年兵は無論のこと、初年兵と雖も、步哨や斥候の敎育は殆んど終了を告げて居た筈だ。夫にも拘らず、戰場に臨んでから、更に數ケ月の訓練を與へねば、實戰に役立たぬとあつては內地での敎育は何の爲の骨折りであるか。議會で軍事當局は、兵卒訓育の困難を說いて在營期間の短縮に反對して居るが、今の樣な敎育では、何年やつたつて砂上に石を積むと同じ事である。

今から思へば相手が馬賊やパルチザンだからよかつた樣なものゝ、若しあれが立派な正規の軍隊であつたら、我が軍は開戰の初期に於て回復す可らざる痛撃を蒙つて居たかも知れない。實に寒心の至りである。現に第十二師團や第三師團の戰事行動の跡を見るがいゝ。到る處で可なり見苦しい失敗を重ねて居る

ではないか。擁護する者は曰ふ。敵が不正規軍で其の戰鬪方法が全く變則であつた爲めやり損つたのだと。敵の行動が豫想外であつたといふのは、我の平素の訓育が極端に型に捉へられ過ぎて居たことを意味する。實戰を型通りにする馬鹿が何處にある。我々は這般の失敗に鑑みて大に反省する所なければならぬではないか。

併し之をたゞ出征部隊の指揮官の不明にのみ歸してはいけない。我々の先輩が日露戰役の戰勝に誇り、あの時の經驗を金科玉條として爾後の世界の軍事上の進歩を研究せず、剩へ有爲なる青年將校の自由討究をさへ壓迫して、徒らに形式の完備に趁つた當然の結果が斯の如くなるは怪むに足らないのだ。而してかゝる弊風を助長したもの、否、之を牢乎として拔く可らざるものたらしめたものは、實に檢閲制度なのである。

この檢閲制度の非を悟らしめ、併せて之に附隨する幾多の改革に若干眼を開かしめた點に於て、西伯利出征は多少の功果をあげて居るといへる。

○

今度の出征は、軍隊の軍紀問題について亦痛切に考ふる所あらしめた。派遣軍の軍紀の決して立派なものでないことは公知の事實だ。軍紀破壞の行爲が既に外形に現れた所もある。そこで人は改めて其原因の如何を探究することになるが、多くの人は、例によつて例の如く、之を過激思想の影響と說く。併し軍紀の荒廢は、派遣軍そのものよりも、留守師團部内の方に却て甚しいといふ事實に打つ突かるに及んで、彼等は嫌でも應でも其原因を他に求めざるを得なくなつた。玆に於て心ある者は、少くとも從來軍紀維持の方法として執り來つたものが正しかつた否かを反省する樣になつて來た。軍隊に於ける新しい思想の動きは、斯んなところからも起つて來る。

軍紀維持の手段として從來執り來つた唯一の方法は云ふまでもなく強制であつた。而して自我に目覺めた近代人に取つて、この強制程苦しいものはない。從つて今日の樣な世の中となつては、強制力の使用は、軍紀維持の絕對必要の場合に限るべく、又其の範圍内に在つても最少限度に留めなければならぬ筈だ。然るに從來は、何でも彼でも嚴肅に見へるのが軍紀だと誤解した結果、強制力の使用をも有らゆる方面に擴張した。兵卒の生活の全局面を強制的に統制せんとした。其處に禍の根の潛むのは蓋し想像するに難くない。斯くして平時に於ては、立派に軍紀の保たれて居る外觀を呈するだらう。が、それは只麩が靜な池の上に浮いてゐる樣なもので、少し波が立つと直ぐに壞れる運命に在るものである。現に平時に於てすらすでに軍紀壞頽の

事實はチラホラあつたではないか。派遣軍や其留守隊に於て、其の崩壊の機會が俄然として與へらるゝことに何の不思議があらう。

強制一點張で維持せんとしたのが間違なのだから、今日之が壊れたつて構はない様なものゝ、平素強制で押し通して居ただけ、一度破綻が生ずると、正當な限度では中々留まらぬといふ心配もある。夫れ丈け所謂軍紀弛緩の問題は憂ふべき所なしとは云へぬ。が、兎に角病弊のもとは分つた。少しく注意して觀る者には、平時からも明に分つて居つた事とは思ふが、西伯利出征を機として、軍紀問題が何人の目にもマザマザと展開せられたので、今や我々は嫌が應でも軍紀なる根本觀念につき徹底的に省察する必要に迫られて來た。併しそれでも上の連中が本當に此點に覺醒して居るか、又覺醒しても果して改革を斷行するの誠と勇とありやは、聊か疑しい。

○

以上述べた様なことは、元來平時に於てだつて分つて居るべき筋のことだ。夫れが分らずに居つたのは、畢竟軍隊内に於て言論の自由がないからである。言論の自由のない所に跋扈するものは、上司の獨斷と、化石的頑迷とである。其結果進歩は停止し、苟安姑息と迎合阿諛とが流行するのは言を待たない。

明治三十八年十二月陸達第五十五號といふのに、次の様な定めがある。

第一條　本規則ニ於テ著作ト稱スルハ、著作物ヲ出版シ、又ハ雜誌新聞紙ニ意見ヲ掲載スルヲ謂フ。

第二條　著作ヲ爲サムトスルトキハ、學術技藝ニ屬スルモノ、外、所屬長官ノ認可ヲ受クベシ。

第三條　學術ニ屬スル著作ト雖モ、現行ノ制度規則ニ對シ評論ヲ加フルトキハ、所屬長官ノ認可ヲ受クベシ。

第四條　軍事上ノ妨害ト爲リ其ノ他軍紀ニ害アル著作ヲ爲スベカラズ。

第五條　軍事其ノ他官廳ノ秘密ニ關シ、公ニセサル事項ノ記述ニ關シテハ、一般ノ規定ニ依ル。

第六條　前諸條ニ規定スルモノ、他、著作ニ關シテハ所屬長官ノ監督ヲ受クルモノトス。

かゝる規則の存する限り、軍人が絶對に意見公表の自由を得し得ざるは極めて明白であらう。所屬長官の認可を得ればいゝとあるけれども、實際上かゝる認可は與へらるゝかといへば斷じて與へられない。何となれば彼は認可を與ふることに依て自分が首になる恐れが大にあるからである。さうでなくとも、上長官の頭があらゆる改革に對して極度の嫌忌を催す様に出來上

つて居ることも考へねばならぬ。故に所屬長官の認可を受くるの條件なるものは、つまりは絶對に許可せぬといふ趣旨を婉曲に書いたものに過ぎないのである。

該規則の發布せられたのは日露戰爭のすぐあとであるが、同時に公示された陸軍大臣の訓示にも明なる如く、當時軍人中には、日露戰役の經驗に徴し、改革意見を發表せんとするもの非常に多かつた。そは戰勝の榮譽を荷うて完全無缺の如く謳はれた軍隊も、内部から見れば隨分醜い缺陷が多かつたのみならず、平時に在つて氣附かれなかつた諸規則などの意外な無能が、戰場に於て見苦しくも立證されたが爲であつた。とにかく嚴正犯すべからざる事實の審判に敎へられて、當時有爲の青年將校は大に覺醒した。そして獨立の研究と工夫とを積むべく大に發奮したのであつた。是れ眞に喜ぶべき現象であつたのに、頑迷なる當局者は、彼等の言議往々制度規則の無遠慮な批判に亘るものあるを忌みて、遂に意見發表の自由を抑へることにしたのである。其結果は、彼等の作戰の期待した通り、我が軍隊を再び處女の如く活氣なきものにして仕舞つた。かくして我が軍隊は、日露戰爭後だん／＼と老衰期に這入つていつたのである。而して之れ實に上長當局連中の總ての希望に副ふものに外ならぬ。今度の西伯利出征に於て、其の當然の結果たる軍紀弛廢等の事實が現れたからとて俄に狼狽し、しかも其責めを他に嫁して恥ぢざらんとするのは、甚だ笑止の至である。

我が軍隊をもう一度生氣あるものに復らしむる爲には、何よりも先きに前記の鉗口令を撤廢せなければならぬ。殊に今日の樣な、出征の當然の結果として青年將校間に批評的精神の大に鬱勃たる時に於て、最も其の必要がある。然るに當局の態度が依然として日露戰爭當時の舊套を脱せざるは何事ぞや。某將校が『西伯利亞より國民に告ぐ』の一文を公表せんとして、違令の罪に問はれて陸軍刑法第百三條（政治ニ關シ上書建白其ノ他請願ヲ爲シ又ハ演說若ハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス）に擬せられたのは餘りに非道いが、水野海軍大佐の筆禍事件の如きも、局外から見たら如何に馬鹿々々しい事と映ずるだらう。斯う考へると、我が軍隊革新の前途も轉た日暮れ途遠しの感なきを得ないのである。

政治家の勞働問題觀

○

知名の某政治家と勞働問題のことを話し合つた。此人は特に

斯う云ふ方面の問題に通曉して居ると云ふ譯ではないが、其の社會的地位、其の政界に於ける名望、其の經歷、其の教養等に於て、今日の政治家中の最も眞面目なる部類の代表的な人と謂つてい丶。從つて彼れの勞働問題觀は、現代政客間の或る意味に於ての代表的典型と見ても妨げあるまいと思ふ。

○

彼れは今日の勞働者階級（其の代辨者たる一部の有識階級をも含めていふ）が政治に對して强烈な反感を抱いて居るの事實を認め、之を怪んで次の樣な質問を發した。『自分達は政治家として隨分社會政策などにも骨折り、いろ〳〵勞働者階級の爲に其の利便を講じて居るのに、何であんなに我々の爲す所を罵倒するのだらうか。勞働者階級は、我々の誠意ある奉仕と努力とを丸で認めないのだらうか』と。

之に對して僕は、だつて碌な事をして居ないではないかと云へば、『一時には出來ぬが段々にはやる、現に碌なものではないか知らぬがやつても居るではないかと彼は答へた。少しでもやつたのはやつたのだから之を相當に感謝してもい丶筈だと云ふのが彼れの本音らしい。

之に續いて色々の問答を重ねたが、結局彼れと僕達との間にはもつと根本の問題について丸で違つた考をもつて居る事が發見された。之は現代の社會問題を說くもの丶間には分り切つた事なのだけれども、政治家などの頭には十分に這入つて居ないものと見へる。どうせ政治家なんど云ふ者は譯の分らぬ者だから放つておけと云ふなら格別、分るか分らぬか一應は話して見る、若し分つたら一所に事をやつてもい丶といふ立場を取る限り、イロハからやり直すのは面倒な話だけれども、這の根本の點をも一度繰り返すは强ち無用の業ではないと考へる。

その根本の點とは何ぞやといへば、現在の社會組織に對する批判のことである。即ち政治家達は、現に在るが儘の社會組織就中、資本家階級と勞働者階級との關係を、無批判に肯定して掛る。之を前提として社會政策をやるのだから、謂はゞ金持どもが出さずともい丶金を出し合つて他人の爲に餘分の慈善事業をやる位に心得て居る。故に十分の事を急いで爲なくとも責められる譯はなく、碌な事でなくとも又どんな僅ばかりの事にしろ、やつた事には一々感謝の情を寄せらるべき權利ありと考へて居るのだ。然るに我々の立場は、現在の社會組織そのものが惡るい、正義の要求に合しない、之が凡ゆる弊害の源だから之を改造しやう、假令改造を急激にやらないまでも、正しからさる社會組織に依て過當の保護を受けて居る者に對して、其有てる物をどん〳〵吐き出さしめ、之を種々の公共的設備に捧げし

なるは當然の要求であるとする。此の要求に應ずる彼等の貢獻は、慈善事業ではなく、謂はゞ公共的義務の遂行である。義務――而かも多年懈られて居つた義務――の遂行なるが故に、其の全部の急速なる遂行を要求するに相當の理由があり、其の不徹底なる部分的遂行を難ずるに何の遠慮も要らない譯なのだ。この點がどうも今の政治家達には十分に吞み込めないやうに思はれる。

今日の勞働階級の右の樣な社會觀を、其の儘成る程と承認すべきか否かは別問題だが、相當の理由を擧げて堂々と之を論駁し來るのなら、我々は喜んで其の挑戰にも應ずるし、又謹んで其の論述に傾聽もする。少くとも現代に活くる政治家としては、今日の社會問題の根柢を爲す這般の思想をば、之を認むると否とに拘らず、相當に了解して置くことは必要であらう。然るを無反省に又無批判に、現社會組織を肯定して掛るといふのは、餘りに時勢に盲なるの致方ではなからうか。若し夫れ政府當局の二三者の如く、現社會組織の道義的根柢を爭ふ者を一概に危險思想と觀るに至つては、固より沙汰の限りである。

○

僕は續いて曰つた。今日の勞働階級が政治家に愛想をつかしたのは、其の所謂社會政策なるものが成つて居ないばかりでなく、一般に國事を議するに就て眞摯を缺くが爲でもある。勞働者階級の政治に對する反感の漸を以て高まり行くは、最近の政界が益々不仕鱈を強めて行くのと相應するものであると。之に對して彼れは流石に、多數會集して不仕鱈をやるのは勞働者仲間だつて同じ事ではないかなどゝ、見苦しき非紳士的逆襲はしなかつた。斯かる逆襲は、偶々之を云ふ者の低い見識を暴露する者ではあるが、併し實は斯う來られると、僕には一言も辯解もなかつたのであつた。勞働者が今日の政治家に代つて天下を取るのは良いかわるいか、之は別問題として置いて、今日の勞働者階級が、新時代に於ける文化發展の積極的原動力たるには、餘りに教養を缺いて居ると云ふことも、爭ふ可らざる事實だからである。

庶莫、彼れは僕の言ふ所に對して嗟嘆之を久うするものがあつた。彼れは困つたものだ〱と數回繰り返した。併し彼は徒に悲觀はしなかつた。而して彼は、政界の内部に於て大に革新の新運動を起すべき決心を語つた。政界の狀態を今日の儘に放任して――選擧其他の制度に何等の改正を加ふることなくして――果して能く革新の實を擧ぐるを得べきやに就ても議論を鬪はしたが、之は略する。總て彼は、政治家の革新運動に必ず伴はねばならぬ要件として、國民一般の自覺といふことを説き出した。

國民の自覺なんど云ふ言葉は、高橋首相の樣な人の口から聞けばこそ滑稽にも響け、かういふ眞面目な政治家の唇頭に上ると、中々深い含蓄を云ひ現すものである。

僕は云つた。國民を政治的に自覺せしむるには、何よりも先に政權を與ふることが必要だ。選擧權を極度に制限して居つて、國民の自覺を云々するのは、要するに女學校で育兒法の練習をする樣なものだ。夫れも近き將來に結婚する望のあるのなら、大に興味を感ずるといふこともあり得やうが、當分自分達に選擧權の與へらるゝ見込が無いと決つて居つては、貧乏人が三井岩崎の財產處分の問題を課せられたと同樣、寧ろ之を馬鹿にするのが當然ではないか。選擧權を極度に擴張するのがいゝかわるいかは、別の問題として更に種々の方面から愼重に研究するを必要とするが、たゞ之れなくして國民の政治的自覺を語るの全く無意義なることと丈けは明白であると信ずる。

どうも今の政治家は、この前提を無視してたゞ一筋に國民の自覺を求めて居る樣だ。甚しきは何の意味とも思ひ定めずして上つ調子に自覺々々と叫び廻る者もある。本當に自覺して欲しいのなら、も一歩踏み進めて考へて貰ひたい。

○

斯くして彼れと僕との議論は、遂に普通選擧論にまで這入つて往つた。普通選擧に關する僕の立場は、既にいろ〳〵の機會に於て之を說いたから玆には繰り返さぬ（拙著「普通選擧論」參照）。彼れも一應は僕の說く理に服した。が結局普通選擧斷行の決心は彼れにつかぬ。遂に彼れは本音を吐いて曰ふ。勞働者が政權を得て多數の勢力を議會に有するに至れば、何をやり出すか分らぬと。

之に對して僕は、或る階級が頗る有力なる共同の勁敵に對して戰ふ間は、小異を無視して協力一致するものだけれども、一旦目的を達すると、必ずそれが分裂抗爭するに至るものだと云ふ事實、殊に我國の如く敎養乏しく人格的信認の美風を缺く處に在ては、此習風なか〳〵強く、現に今日すでに隨分內輪喧嘩の烈しさを見るの事實、從つて普通選擧實施の曉、幸にして勞働代表議員が多數を占めても、其が一致してマヂョリチーを制するに至るは想像し得られないと云ふ事實などを指摘して其反省を求めた。就中多數を擁して橫暴を振ふのは、今日の政黨側にこそ流行すれ、勞働者階級間には必しも此要なかるべきの說には彼れも相當に傾聽した樣であつた。多數を恃んで橫恣專擅を振舞ふと云ふ事に對する侮蔑と反感とは、實は今日勞働者階級の方から政黨者流に向けて居るのだから滑稽ではないか。

多數を擁すると何をやるか分らぬといふは特に勞働者に對す

る言葉としては正しくないが、勞働者たると政治家たるとを問はず、一般に「人」としての共同の弱點だといふ議論なら、一應は之を吟味するの價値はある。併し孰れにしても、普通選擧斷行の反對理由にならないことは言ふまでもない。若し強て之を理由として普通選擧に反對するといふなら、別に、勞働者の多數横暴はわるく、政黨者流の多數横暴はいゝと云ふことを證明しなくてはならぬ。併し之等のことは今玆にくど／＼しく述べまい。僕の此問題に關する考の結論を簡單に述ぶるなら、凡そ「人」は、力を得たからとて、必ず惡るい事をやるとも限らねば、又やらぬとも限るのではない。やるとやらぬとは一つには教養の問題であり、一つには制度の問題であると。而して選擧權の制限ば、この種の弊害を扶育し助長する最も顯著なる惡制度であることは、僕のいろ／＼の機會に於て既に屢々述べた所である。

彼れは多數を擁せる勞働者階級の横暴の例として、俗人多くやる樣に、ボルセヴイキを擧げた。ボルセヴイキをかゝる例の一つとして擧ぐるの正しいかどうかにも、異議を唱ふる人は尠からずあらうが、姑くこの立場を承認してかゝらう。一體ボルセヴイキは何故に起つたかといふに、是れ政治家が多年勞働者階級の要求を壓迫し、普通尋常の方法では其目的を達するを得ずと諦めしめたからではないか。故に若し斯かる狀態の出現を豫め避けんと欲せば、勞働者に希望を抱かしめなければならぬ。否、進んで彼等をして政治に興味を感ぜしめなければならぬ。而して之は普通選擧の施行に因る外に道はないのである。

勞働者の多數横暴を苦とするなら、普通選擧を斷行せよ。然るに普通選擧になると勞働者階級は何をやるか分らぬと危む。焉んぞ知らん。かく危ぶんで決する所なくば、遂に彼等は過激兇暴の手段に訴ふるを躊躇せざるに至ることを。つまり、問題はやるかもぎ取らるゝかの點に歸する。而して取らるゝものは、必しも我がものと決つて居るのでないことは、吳々も注意せねばならぬ。

此頃だん／＼勞働者階級の間には過激思想が這入つて往く。夫れ丈け、政治家の畏怖心は益々強くなり、選擧權の擴張にも一層躊躇する樣だが、當の勞働者階級が亦普通選擧制の實行を極力阻止せんとして居るのは、一見甚だ奇妙な現象と謂はねばならぬ。併しよく考へて見ると之には何の不思議もない。即ち一派の勞働運動家は、政治家階級の頑迷度し難きに呆れ、斯うなつては寧ろ直接行動に依るの外なしと爲し、つとめて勞働者側の激昂を圖つて居るのに（過般の過激社會運動取締法案の通過を此派の私かに希望したのも、此の心理的動機に基くもの

である）、若し普通選擧になれば、爲に勞働者は自然政治に興味を感ずる樣になり、折角養つた狂熱的激昂狀態より漸次醒むべきを以てである。之を譬へて曰ふに、主人は雇人の不穩い形勢を見、腹が出來たら愈々何かやるだらうとて飯を食はすまいとする。雇人の方では、どうしても飯は食はされぬぞといふ點に仲間の憤激を導いて、一擧に主人の權力を顚覆すべき機會を覗つて居る。其處へいゝ加減に飯を食はしたらどうだと云ふ者があると、主人は暴動の勃發を恐れて之に應ぜず、雇人はまた仲間の氣勢の寛和を恐れて亦之を拒まうとする。何時の世でも政治家の目先の利かぬにホト／＼困らされるのは中間の自由主義者だが、斯くして政治家の不明は、遂に社會を不可救の窮地におとすのである。

敢て問ふ我國の今日に果して斯の憂なしとするか。僕は敢てこの中間的地位に甘んじて、廣く國民の誠意に愼重なる省量を求めんと欲する者である。

政界革新論

○

議院政治の不評判に刺戟されてか、昨今政界革新の要求がチラホラと聞へる。議會墮落の叫びは近年珍らしいことではないが、其醜態暴狀の著しき、今次の議會の如きはない。政友會が多數を擁して飽くまで無理を通さうとする橫暴、憲政會が少數爲す無きに自暴自棄して強て反對の爲に反對せんとするの狀態、誰か之に顰蹙せざるを得る者ぞ。革新論の唱へらるゝも怪むに足らない。

併し深く意をとめて觀て居ると、革新論にもいろ／＼の種類がある。最も蟲のいゝのは、憲政會あたりから起つたかと推せらるる政局轉換論であらう。つまり政友會內閣を殪せといふに外ならぬ。易々と取つて代れるものなら早く政友會を黜けたいと希望するものは、官僚畑の野心家の間にもあらうが、前記の一派は、所謂憲政常道論を眞向に振翳して、後繼內閣の當然に憲政會に落ち來るべきを說くのである。政友會內閣が倒れたとして、さて實際の形勢は如何なる後繼內閣を現出し來るべきやは、容易に逆睹し難い問題だが、其が一部の人々の希望するが如く、憲政會に歸着したとて、果して政界革新の目的が之に由て達せられるだらうか。それは甚だ覺束ない話だと思ふ。成る程天下の人心は今や明白に政友會內閣を去つた。吾々とてもこの內閣の犯す幾多の罪惡に最早堪へられない。從つて一日も早く其

の更迭を望むものである。が、しかし、憲政會が代つて内閣に立つた場合、彼が這般の同じ過誤を繰り返さぬとは、果して誰が能く之を保證し得やうぞ。吾々は今更事々しく大隈内閣時代の失政を擧げまい。唯彼等の徳義と見識と手腕とに今なほ特別の信頼を置き得ざることだけは、敢て斷言するに憚らざる所である。要するに政友會を前門の虎とせば憲政會は正に後門の狼にして、彼を退け此を迎ふる事に由り、政局の轉換は出來やうが政界の革新は斷じて出來るものではないと思ふ。

第二の種類の革新論は、政友憲政二大黨以外の政客から唱へらるる。前記二大黨は政界腐敗の渦中に奮鬪する當事者だから革新を語つても効がない。若かず、之に屬せざる者を糾合して正論を唱へ、更に天下に呼號して輿論の同情を集め、漸を以て拔く可らざるの勢力を政界に樹立するを期せんにはと。斯う云ふ思想の具體化したものが夫の革新俱樂部であらう。が、吾々は不幸にして之にも革新の幾分の實現をも期待することは出來ぬ。人に依ては、同俱樂部を目して在野黨大合同の目論見の出來損ひだと誣ゐる。現に下院に多數を擁する政友會を無理に押し退けんとの魂膽より、玉石同架有らゆる非政友代議士を網羅せんとの策士の當て込みが見事に外れて、結局姑息無力な革新俱樂部が生れたのだといふ者もあるが、其眞相は吾々には分らない。果して然うなら、之に全然革新の望を繫くる能はざるは云ふまでもないが、吾々は暫く善意に之を解して、革新の熱情に燃ゆる少數政客の眞面目な企てだとして置かう。夫れにしても、彼等は只之れ丈けで革新の實を擧ぐるを得べしと主張するなら、それは餘りに政界今日の弊根を等閑視して居ると謂はなければならぬ。今日の政界があの様に墮落して居るに付ては、實は深い且複雜な原因がある。此事は別に說く所あるべしとして、兎に角這般の原因に手を附けずしては他の如何な方法を執つたとて容易に革新の實は擧るものではない。故に少數の心ある者が、少數ながら堅い結束をなして一致の行動を取るといふことは、國民に對する教育的効果の少らざるものあるは之を認めるが、夫れだけで直に革新の途に踏み進んだものとは謂ふことは出來ぬ。殺伐な國際競爭の激甚な時代に於ける弱小國の正義公道論と同様に、無力者の悲鳴として僅に道學者流の憐愍を買ふに止り、夫れ以上目覺しい何等の具體的影響を實際政界に及し得ぬと云ふのが、彼等の不幸な運命なのである。

もう一つの變つた革新論を、今日吾々は政黨の内部から起つて居るのを見る。政友憲政の兩黨を通じて、幹部組織の改革を要求するの聲は昨今可なり盛な様だ。一部分は既に容れられても居る。之も多少政界の弊竇に觸れぬことは無いが、要するに

今日の不完全な政治組織を其儘にしておいて只々黨勢伸張を圖るといふのが彼等の主眼であつて、政界の革新そのものを直接の眼目とするものではない。彼等の企圖する所は、或は政黨革新とは云へやう。政界革新といふは聊僭越の嫌なきを得ないやうだ。

若し夫れ政客以外よりする革新論に至つては種々雜多なものがある。孰れにしても、政界の現狀に滿足せず、何とか之を改めずには置けないと云ふ點は總ての一致する所である。不滿足の極、遂に政治否認論にはしるものもあるが、其處まで到らざるものでも、現在の政客に烈しい不信の鋒先を向けるといふ點は、多數國民の略一致する所と觀てよからう。とにかく斯う云つた樣な感じの一般に行き渡つて居ることは、どうしても看逃すことは出來ぬ。政界の榮達は從來人々の多く望む所であつたのに、政客の國民侮蔑の的となる今日の如く烈しきに至れるは、甚だ奇妙な現象と謂はねばならぬ。

○

この論文は最初可なり長く書く積りであつたが、締切期も迫り僕自身にも稿を續けることの出來ぬ事情が起つたから、大要の筋道だけを個條書にして結論としておくに止める。

(一)前にも述べた僕の所謂政界の根本的病弊とは、各政黨間の多數少數の關係が今日固定するといふ形勢に在ることである。本來政黨の多數少數は＝即ち政爭は＝國民の投票に由てきまり、國民の投票は、取りも直さず其の良心の自由の判斷を表するものである。而してその自由の判斷の基礎となるものは、第一次には各政黨の施設なり政綱なり又其の公共的貢獻なりであるが、第二次には選擧時に於ける對國民の宣傳である。この宣傳は同時に教育を意味する。斯くして國民は教育され開發されて、正直に何れの黨派に投票すべきやを決せしめらるる。其の結果として勝負はきまるのだ。故に政黨にして勝て天下に經綸を行はんと欲せば、善い事を競うて善良なる國民の歡心を買はねばならぬ。善い事を競ふといふが、政爭に於ける唯一の武器であるとすれば、政爭は即ち堂々たる君子の爭であり、政界は墮落する筈はない。然るに我が日本に於ては夫れが逆になつて居るから困るのだ。

夫はどう云ふ事かといふに、政黨は何等かの方法で一旦天下を取る。天下を取ると其地位を利用して所謂地盤なるものを作る。之を作るに利用さるるものは、暴力と賄賂とだ。之を以て國民を欺き、其の良心を蹂躪し、どんな惡い事をしても斥けらるる氣遣はない只怖るるは敵の陰謀によりて倒さるる事と、少しでも敵黨の勢力の伸びることである。從つて政爭は陰謀詭詐に

依て行はるることになる。そうなるとどんなに善い事をしたつて必ず天下を取るとは限らない。從つて政界には道徳地を掃ふるに至るのである。斯くして政黨の多數少數の關係は、各政黨の道義的努力と全然無關係に、いはば先天的に固定する形になる。玆に政界の病根は伏するのだ。互に相對立するものが社會的に固定階級を爲すとき、其間の爭の極端に陰惡になるのは、今日の勞働問題でも明な事ではないか。

(二)元來政界にはかうした固定的階級があつてはならぬのだ。英國に於ける愛蘭の如き、元の獨逸帝國に於ける波蘭の如き、人種を異にし利害を異にし又歷史的に反目せるものを機械的に一所にしたものに在つては、階級的に固定しても致方がない。從つてこの關係が議會に反映してかの國などは隨分苦んだものだ斯うした關係のない限り、政黨といふものは本來主義政見の差に基く君子の爭である外、無意義の爭に無駄骨を折るべきものでない。日本の議會の樣に各政黨が犬猿啻ならざる爭に沒頭する國は、外に決して其例がないと思ふ。

(三)然らば日本の政界に斯かる不都合な現象を起らしめて居る原因は何か。之を考へるには、丁度經濟界に貧富の二階級を固定的に對立せしむるに至つた原因は何かを研究するときと同じ心持になつて見るを要する。つまり制度の罪なのだ。否、最後は「心」の問題だけれども、制度を此儘にして置いては、どうしても釋けぬ性質の問題なのだと思ふ。

(四)然らば何處に制度上の缺陷があるか。政黨の地盤政策を可能ならしむる所、卽是である。如何して之を改むるかの詳細なる研究は、他日に讓るとして、玆には差當り何よりも手短な途は普通選擧制の斷行であることを一言しておく。

(五)普通選擧は此論點からのみ主張さるるものでは無論ない。併し今日の可なり鞏固な政黨の地盤を確實に破り得る何者かがありとすれば、それは普選の斷行の外にはないと思ふ。此點に於て、普選の斷行は政界に於て革命的効果を有するものである。但し普選の斷行は、政界發展の順當なる進行を妨ぐる障碍物を除去する丈のものであつて、其上果して正しき進みを實現するや否はまた別個の問題である。

(六)要するに、政界の革新が果してうまく出來るか否かは日本人に課せられたる一大試驗問題だが、之を論ずる前提として、普選の實行は最先の急務なることは忘れてはならぬ。之を實現するまでの間、各種の革新論は畢竟砂上の樓閣に過ぎぬものである。

無題錄二則

○

勞働運動と普選問題との關係に付ては、本欄の第二論文に於ても述べた。實際普選問題に對する今日の勞働者階級の態度は甚だ煮え切らぬ。この言葉が不適當だといふなら、甚だ統一がつかぬと謂つて置かう。此際に於て勞働總同盟の首領たる鈴木文治君の立候補問題が起つた。新聞紙の傳ふる所に依れば、鄉友は切に同君の起立を促し、君自身にも其の志なきに非ずといふ。而して一方勞働者側には孰れかといへば之を好まぬ者が多かつたさうだ。正面から極力諫止しやうと云ふ者も無論あつたが、然らざるものも、今日を以て其時機に非ずとする考が强かつたらしい。此間に處して鈴木君が如何に其の態度をきめるかは、我國勞働運動の將來に取つて頗る重大な問題であつた。僕等は大に刮目して其の成行を觀て居つたのだが、過般鈴木君は頗る巧妙なる又頗る賢明なる措置に出でて見事に且つ有意義にこの事件を片付けられたのは、敬服に堪へざる所である。同君がかね〳〵議會主義の信者なことは言ふまでもない。そこで君は正直に且無遠慮に此際立候補するの正當なる旨を宣明した。併し勞働運動指導者のタクチクとしては、今日君が餘力を政界にのばすのはどう見ても得策でない。彼此利害得失を計量して、君は惜氣もなくこの好機を棄てて尚ほ姑らくは純勞働運動に殉ずるの覺悟を執ることにした。是れ實にあざやかな進退振りではないか。

僕達は切に望む。君が益々熱心に勞働運動に沒頭して今日立候補を犧牲にした主意を無意義に終らしめざらんことを。又立候補せざる旨の宣言と同時に公表せる議會主義の爲に、勞働者階級の思想の開拓に猶一層の努力を注がれんことを。蓋し君の今次の態度は、實際問題としては、未だ政界に入るの時期に非るの主義を定めたと同時に、理論問題としては、議會主義の徹底的承認の下に最近數年間の低迷を一掃したものと謂はなければならぬのである。

○

四月　旬の新聞は、靜岡縣狩野川沿岸の村民數百隊を爲し、他村の住民を脅迫して政友會に入黨するを無理强ひしたと云ふ怪事件を報じた。此事件のあつたのは、僕のよく保養にゆく畑毛温泉の近所なので、二三當事者に就て聞く所があつた。正直な村民の云ふ所を僞らずに書けば次の樣になる。

狩野川に每年洪水がある。洪水の害は田畑に來るばかりでは

ない、住宅に來るので、其の苦痛は一層甚しい。夫れ丈け沿岸改修工事に對する要求 熱烈である。政府ではうまく之をやつて呉れない。陳情にも何回となく往つた。其中に何處から起つたか、附近全村民擧つて政友會に入黨するなら、最近の機會に其希望を容れてやるといふ話が傳つた。そこで關係村民は皆改めて入黨した。改めてといふは、以前から入黨して居た筈のものでも、新に他の人々と共に屆け出でたのである。然るに直接狩野川の被害を蒙らぬ地方の人、殊に非政友系の地方（此地方には非常に堅い憲政會の地盤たる處がある）の人々は之に應じなかつた。すると誰いふとなく、全部の村民の入黨なくんば願望は聽き容れられぬといふ噂が傳つた。そこで被害村の住民は憤然として起つた。彼等は我々の苦痛を冷然として傍觀する氣かと、さてこそ暴動の姿となつて脅迫に押し寄することゝなつたのである。

僕はあとで脅迫をした側の一人に、隨分亂暴なことをするではないかと問ふたら、亂暴なのは先方だ、只一片の紙に印形を捺しさへすればよいのに、其を拒んで我々の苦痛を平氣で看過しやうとは、非人道も甚しいと答へた。成る程、この人達は、入黨といふことを、只一片の紙に印形を捺す丈けの事だと考へて居る。便りない話だ。

兎に角、かくして獲た結果は、有象無象の形式的の入黨たる滑稽なのは條件附入黨といふのだ。多年憲政會に深い緣故のある名望家達は、本年六月とやらの臨時議會ゝ、問題の狩野川改修工事の費目が通過しなかつたら脫黨するといふ條件で、入黨したといふ。もつとひどいのは、本年六月までを限り入黨するといふのもあるさうだ。

斯くして誰人か知らぬが、此種の入黨屆を集めて政友會に忠勤をぬきんでた人があるのである。亂暴といふよりも、滑稽で思はず哄笑を禁じ得ない次第である。

去るにても、同地方出身には政友會の重鎭小泉策太郎氏が居る筈だ。同氏程の人物が、何故々の鄕黨に斯んな馬鹿々々しい騷動の起るのを默つて居るのだらう。要するに之は大正の昭代を穢す咄々怪事。識らずしてやる村民諸君には何の罪もない。其事に關係あるとなしとに拘はらず、斯の如き現象を出したといふだけで、そは地方先輩の言ひ釋く可らざる一大罪惡であると謂はねばならぬ。



ひとりの部屋

廣津和郎

一

廊下をぱたぱたと駈けて來る足音がして、莊吉の部屋のドアの前から、その下宿の女中のお金が聲をかけた。

『塚本さん、お電話ですよ』

『よし』莊吉はさう返事をして、眼が覺めてからもう殆んど二時間も、起き上る氣がないために、愚圖々々とただ横になつてゐた寢床の中から、起き上つた。

『寢坊ね、もう十一時ですよ。眼が溶けちまつてよ』

彼が部屋から廊下に出るのを待つて、お金は蓮葉らしい調子で、こんな風に噪いだ聲をかけた。未だやつと十七八であらうが、發達がよくて小肥りに肥つてかなり色氣のつき始めた無智な女のはしたなさを、その頬付や身體つきに、露骨に見せてゐる女であつた。

『……』莊吉が返事をせずに、苦り切つた顔をしながら、電話室の方へ行かうとする

と、

『塚本さん　答つて頂戴。――御婦人の方ですよ』とお金は追つかけるやうに彼の後から浴びせかけて、そしておほほと高く笑ひながら、莊吉の行くのとは反對の方の廊下へ、ぱたぱたと小走りに行つてしまつた。

『女？……誰だらう？』と莊吉は眉をひそめながら考へた。妙に胸を衝かれる氣がした。恐らく妻だらう。妻でなければ、今頃自分に電話をかけて來る女などあらう筈がない。だが、妻だつたら、一寸不愉快だと思つた。彼は二三ケ月程前から、妻と別居してゐた。二人の夫婦關係は、到底保てる筈のものではないと彼は思つてゐるのであるが、併しその事を明らさまに妻に語つて、そして解決をつけてしまふと云ふ事は、とても不可能な事に彼には思はれてゐた。靜かに互の心持や生活の方法などを語り合へるやうな女で彼女はなかつた。――若し如何に穩かに切り出したところで、そこには直ぐ喚きが始まつたのだ。がむしやらな、物の根本に立ち入らうとしないで、表面のあらはれを見ただけで、直ぐ涙と叫び聲とを擲げる、女の喚きが。――莊吉はその荒々しさ、デリカシイと云ふものの全然缺如した、さういふ場面の物狂しさを、心の底から恐れてゐた。だから、あらはな、破裂的な喧嘩を避けるために、彼は讀書と仕事とを口實として、ひとり家庭をはなれて、此下宿屋に來てゐるのであつた。

妻の電話はいつでも極つてゐる。……十中の八九は金のことである。それから、時には、彼が彼女や、彼女との間に出來た子供を見舞ふために、少しも家庭に歸つて行かないものだから、それは乾度他に女が出來てゐるために違ひない、と云ふやうな事を云ひ出したりすることもある。『あなた見たやうな薄情な人はありませんよ』――そんな事を云ふ時には、何處かの自働電話の受話機の前で、彼女が口を尖らして怒鳴つてゐる顏が、莊吉にはありありと眼に見えるやうな氣がする……

その日は丁度七月の月末であつた。それだから、その電話が若し妻からかかつたのだとすれば、尙更金の事に極つてゐる。莊吉はその午後受取るべき金があるので、それを妻のところにとどけてやる事に、前から豫定してゐた。――それだけの事を簡單に答へてやらう。そして面倒な不平などを云ひ出されない前に、直ぐに電話を切つてしまはう、さう彼は思つた。

電話室に這入つて、受話器を取つて、

『誰？』と云つた。

『あたし……』と女の聲が答へた。

一寸の間、誰の聲だか解らなかつた。無論妻の聲ではなかつた。その點では、豫想してゐた或壓迫から、ほつと救はれた氣がした。――兎に角、若い女の聲には違ひないが、甲高さのない、沈んだ、おちついた、地味な聲であつた。

『誰だらう？』

『お解りにならなくつて？おほほ』

その途端に、ああ、いつ子だな、と云ふ考が彼の頭に來た。

『ああ、解りましたよ。いつ子さんでせう？』

『ええ、さうですの』それから少し間を置いて――こんな風に、氣の乘らないやうな間を言葉と言葉との間に挾むのが、いつ子の癖であつたが――『どうしていらつしやつて？　御勉强？』

『いや、今は別段何もしてゐません。未だ寢てゐたところです』

『お寢坊ね。……それではお暇ですのね？』

『まあ、そんなもんです』

『お邪魔に上つても好くつて？』

『さあ……』

荘吉は一寸まごまごした。彼女が遊びに來ても、別段差支へたいと云へば差支へないのであるが、併し、自分の下宿に若い女が訪ねて來ると云ふ事などは、まるで例のない事だ。彼の妻が二三度、娘、彼と彼女との間に生れた今年四つになる娘をつれて來た事があつたが、兎に角、獨身者ばかりを相手にしてゐる女中やおかみの、さういふ場合の好奇的な眼付や、同宿の客達の物問ひたげな顔付などは、思つて見ても、荘吉には快いものではなかつた。彼はさういふ場合に、妙に感情に壓迫を受ける質の男である。――いつ子が訪ねて來たら、一層さういふ好奇的な眼付や物問ひたげな顔付に、取り卷かれるだらう。それが堪らなく煩い氣がする。

『折角ですが、これから一寸出て行かなければならないところがありますから……』と彼は答へた。それは決して嘘ではなかつた。妻のところにとどけたり、下宿に拂つたりする金を、午後に取りに行かなければたらないと云ふ事が、丁度好い口實として役立つたのである。――が、併し何處かでいつ子に會つて見ても、滿更惡くないやうな氣もした。

『もつともその用事は直きに濟むのです』と彼は言葉を續けた。『それからは暇になるのですが、何なら一緒に散歩しませんか？』

『ええ……』

『僕の用のあるのは銀座の方なんですが、何處かあの邊で待ち合はせることにしませう。――ウウロンは？』

『ウウロンは何だか這入りにくうござんすわ』

『それでは千疋屋？』

『さうね……千疋屋ならいいわ』

『午後二時……』

『ええ、午後二時……』

そこで、電話が切れた。

二

部屋に歸ると、莊吉は又寢床の中に藻繰り込んだ。今が十一時だとすると、二時までには未だ三時間ある。あはてて起きる事も要らない。――彼が受取る金と云ふのは、或本屋から出版するためにやつてゐる、或フランス作家の小說の飜譯料なのであるが、本屋にそれを持つて出かける前に、もう一度ざつと讀み直して見る必要がある。彼は仰向けになつて、机の上からその原稿を取つて、五六枚ぺエジを繰つて見たりした。が、少しも身が入らなかつた。「併し、不思議に、妙に、接近し始めたものだ！』と彼は、その原稿を直ぐに投げ出してしまつて、こんな事を呟いた。云ふまでもなく、今の電話の相手のことを考へ始めたのである。

いつ子に、彼は今までに三度會つてゐるだけであつた。

最初は彼の學校時分の友人で今若手の小說家として賣り出してゐる日比のところで、偶然に會つたのであつた。日比は性格の明るい、快活な男なので、その小說にもそんなところがある。平凡だけれども、適度の情味のある筆で、よく若い青年男女の戀などを描くものだから、かなりに若い女の讀者を持つてゐた。女學生から手紙が來たり、見知らな

い若い娘がたづねて來たりする事は、日比にはよくあつた。それで莊吉は日比をたづねると、彼の書齋でそれ等の若い女性に會ふ事が度々であつた。

『これは塚本君です。塚本莊吉君です』

日比はそれ等の若い女達に、いつでもかう云つて莊吉を紹介した。莊吉も二三度小說を發表したりした事もあつた。併し自分では氣乘りがしないので、その後は、主として飜譯をして生活を立ててゐた。そんな事があるので、世間知らずの若い文學女生たちは、彼の名をちやんと記憶してゐた。

『まあ、さやうでございましたか』とか、

『あら、塚本先生でいらつしやいましたか』とか、座蒲團を滑り下つたり、ハンケチを弄つたり、襟を直したり、いろいろ樣々な表情としなとで、それ等の女達は、彼に向つて、莫迦丁寧な初對面の挨拶をした。如何にも彼を一廉の文學者として尊敬してゐると云つた風に。——莊吉にはそれが何と云ふ事もなく我慢がならなかつた。それで、ただ、『やあ』と簡單に答へては、如何にも戀愛小說家たる若い日比の部屋にふさはしい、緣側に置いてある形の好い籐椅子のところに行つて、それに腰を下ろしては、ひとりで庭の景色などを眺めてゐるのであつた。小說家と云ふものは何か特種の人種でもあるかのやうに、唯わけもなく憧れてゐると云つた風な調子で物を云つてゐる女達と、それに應待する術をちやんと心得てゐる日比との會話に、耳を傾ける氣など、てんでなかつた。

いつ子と會つた時も、彼は日比の書齋に這入つて來ると、彼女がゐたので、相變らず日比のところにはよく若い女がたづねて來てゐるなと思ひながら、直ぐに例の籐椅子に腰をかけてしまつたが、ふと氣がつくと、いつ子が今までそこで出會つた他の多くの女達とは、大分趣を異にしてゐるやうに思はれて來た。先づ第一に、彼女は、日比が例に依つて、

『塚本君です、塚本莊吉君です』から云つて紹介した時、座蒲團から滑り下りも、ハンケチを弄つたりも、又大概の若い女が大概の若い男に會つた時にする、有らゆる形でのしな、さう云つたやうなものを見せたりもしなかつた。彼女は眞正面から彼の顏を見て、にこにこと平氣で笑ひながら、一寸頭を屈めただけで、莫迦丁寧な形式的な叩頭もしなかつた。

　この女には少し違つたところがある、莊吉はさう思つたので、いつになく、籐椅子の上から時々その女の方を振向いて見る氣になつた。彼女は年は二十一二位だらう、身長の高い、鼻筋のすらりと通つた、顏の輪廓のよく整つてゐる女であつた。近頃流行る、前を七三に割つて、頸の後の方へやどかりの貝殼のやうに尖つた形にくしやくしやと丸めた毛をくつつけた、あの新型の髮をしてゐたが、それが如何にも無雜作で、油もつけてはゐないらしく、何の裝飾も施してなかつた。そしてその無雜作が、よく似合つて彼女の全體の感じを素朴にしてゐた。色は少し淺黑い方であるが、別段それが氣にならないと見えて、白粉もつけてはゐないらしかつた。舊日本式の美人顏ではないが、眼が聰明らしくぱつちりしてゐて、きちんと整つてゐる顏の全體が、兎に角『新時代』の顏、と云ふ感じを抱かせた。――莊吉はその顏の中に或一種の魅力を見出す事が出來た。そして次に彼が氣がついた事は、その服裝の無雜作と云ふ事であつた。丁度それは五月頃で、彼女は銘仙のヌキ飛白の袷と、對の羽織とを着てゐたが、それがかなり古びたもので、多少垢が浮いて見えたりした。あんまり生活の樂な家の娘でない事が明瞭であつた。けれども彼女は、普通の女のやうに、そんな事を念頭に置いてゐるやうな樣子は、少しもなかつた。何處かさうした若い女の虛榮と云ふものから　超然としてゐるところがあつた。

　あんまり日數を利かなかつた。日比がいろいろと小說の話などをするのを、にこにこと頰笑みながら聞いてゐるが、

時々、

『さうね』とか、『あたし未だ讀んで居りませんの』とか、『でも、何だかつまらなかつたわ』とか、短い言葉でおちついて、日比の問に答へてゐた。

若い女の誇張した感心の仕方や、センチメンタルな感激や、それでなければ、歯の浮くやうな生半可な思想論などを此部屋で聞きつけてゐる莊吉には、そのいつ子の無雜作な態度や言葉が愉快であつた。――この女にはいろいろな事が、かなりほんたうに解りさうだと云ふ氣がした。

二度目に會つたのは、日比の發議で催されたピクニックの時であつた。ピクニックと云ふと、少しハイカラに聞え過ぎるが、日比は外國の小説で、何と云ふと若い男女の群が、郊外に野遊びに出かけるのを讀んだりして、思ひついたに違ひなかつた。日比に云はせると、『我々の生活は餘りに色彩がなさ過ぎる。それを少しでも豐富にするため』に是非一つ催さなければならないものであつた。

その場所にはさしづめ多摩川が撰ばれた。

始終日比のところに遊びに來る若い女が五六人と、日比と、それから日比の勸めに莊吉も從つて、總てそれだけの人數で出かけて行つた。

若い女たちは快活な美男の日比を取り卷いて、まるで小學校の女生徒が遠足などで教師に對してするやうな親しみでもつて、『先生、先生』と云ひながら、景色に感心したり、多摩川の水に手を突つ込んで、きやあと大袈裟な聲を出したり、近頃流行るいろいろな歌を歌つたりして、喜んだり噪いだりしてゐた。日比はその間に立つて、滿足さうでもあり、得意さうでもあり、嬉しさうでもあり、始終にこにこしてゐた。けれども、莊吉には少しも面白くなかつた。飛ん

でもない不調和なところに飛び込んで來てしまつたものだと、彼は苦笑しながら、彼等から少し離れた、堤の上の木立の下にしやがんで、煙草を吹かしてゐた。それは五月の末であつたが、日當はかなりに暑かつた。空は霽れてゐるが、河原と水とその向うの河原とその又向うの森との總てが、白ちやけて、大して興味を引く景色でもなかつた。が、彼はそんな景色をぼんやりと眺めてゐる外、所在がなかつた。

そこに、彼の側に一人の女が近づいて來て、彼と並んで草の上に腰を下ろした。見ると、いつ子であつた。

『此處は涼しうござんすわねえ』と彼女はおちついた、平然とした調子で云つた。

『さう、涼しいですね』と莊吉は答へた。さう答へながら彼は、彼女が今日も相變らず白粉もつけずに、着物も例の垢染みた銘仙の袷を著てゐるのに氣がついた。――他の女達は、思ひ思ひに著飾つてゐるのに。

『あなたは隨分欠伸をなさる方ね。……退屈なんですの?』といつ子は、彼の顏を眞面に見て笑ひ出した、此女の顏の全體は、おちつき過ぎてゐて、妙に淋しい影があるが、併し笑ふとその眼が生々して來て、顏全體が明るく賑かになるのに、莊吉は氣がついた。

『さうですね、さう云へば大分欠伸をするやうですね』さう云つて、彼も笑ひ出した。

『こなひだ川比さんのところで、初めてお眼にかかつた時、あなたが緣側であんまり欠伸ばかりなさつてゐるので、あたし吃驚しましたわ』

『さうでしたかね、そんなに欠伸をしましたかね』

『途中からあたし面白くなつたから數へてゐたのよ。さうしたら籐椅子の上で、何でも八度か九度欠伸をなさつてよ』

『さうでしたかね』

『それから、今日もよ、澁谷から玉川電車に乘つてからも、何でも十度ぐらゐ欠伸をなさつてよ。――然度退屈で退屈でたまらないのね、あなたは?』

『まあ、さう云へばそんなもんですね』と莊吉は答へたが、なるほど、自分はよく欠伸をする人間だと、今更のやうに考へた。實際今の莊吉に取つては、この世の中が退屈で堪らないのである。――彼は最近の新聞か雜誌かで讀んだのであるが、內閣總理大臣の原敬といふ男は、始終何事にか心が緊張してゐるので、生れてから未だ欠伸と云ふものをしたことがないと云ふ話を思ひ出した。さうしたら、何となくをかしくなつて來た。原敬から較べれば、若い自分は、それこそほんたうに空虛なのだらう。――莊吉はふと思ひ出したその話を、いつ子に喋らうかと思つたが、何だか面倒臭くなつて止めた。

その代りに、彼は相手の心に少し調子を合はせるつもりで、

『あなたもやつぱり創作をおやりになるつもりなんですか?』と訊いて見た。

『いゝえ、あたしはそんな事出來さうもありませんから、やりませんの』

『日比君のところに來られるのは、小說家志願からではないんですか?』

『いゝえ、お友達が初め一緒に行かうと云ひましたから、まゐりましたの。……でも、小說を讀むのは好きですよ』

『日比君のものは大分若い婦人の愛讀者を持つてゐるやうですが、あなたもそのお一人ですか?』

『さうね。……何だか喰ひ足りないわね。……でも、あの方好い方ですね』

そんな調子で、日比を取り卷いてゐる他の連中が、河原の砂の上でわあわあと喋いだり騷いだりしてゐる間、二人は堤の樹陰で、こんな會話をぽつりぽつり交はしてゐた。いつ子の樣子や態度や言葉には、何の泥濁もなかつた。何でも

がはつきりして、明快であつた。普通の若い女のやうな、いろいろな態とらしさや、うねうねしたやうな面倒臭さはなかつた。そして彼女は喋り過ぎは無論しないが、又黙り過ぎもしない、非常に自由なゆとりを對者に感じさせた。

『いよいよこの女は感じの好い女だ!』と莊吉は心の中で呟いた。

三度目に會つた時は、數寄屋橋のそばであつた。……その三度目に彼女に會ふ前に、或日、日比が莊吉をたづねて來て、こんな事を云つた。

『君、あのいつ子と云ふ女ね、君が僕のところや何かで二度ほど會つたことがあるあの女、……覺えてゐるだらう。あの女は大分君に興味を持ち始めたらしいんだよ。あれの友達で始終僕のところにやつて來る女があるんだが、その女を掴まへて、君の事を大分云ふさうだよ。そして何より面白いのは、君が盛んに欠伸をすると云つて、その欠伸から君に興味を持つやうになつたと云ふ事だよ』

『…………』莊吉は苦笑しながら聞いてゐた。

『あれはSと云ふ會社の女事務員なんだがね、それで母親を養つてゐる感心な娘なんだよ。品行もなかなか好いといふので評判ださうだよ。……隨分いろいろなものを讀んでゐる女だよ、外國物をね、無論飜譯で讀むんだが。——そして何でもよく理解してゐるよ。頭は兎に角、隨分好い方だね』

そんな事を日比から聞いてから、莊吉のいつ子に對する好感は、確に增してゐたに違ひなかつた。

そこに、三度目に數寄屋橋の側で、偶然に出會つたのである。

その時彼女は風呂敷包を手に持つて、齒のついた下駄を穿いて、メリンスの小し紫の勝つた袴を穿いてゐた。いかにも女事務員らしい恰好であつた。日比の話を思ひ出して、莊吉は直ぐに、彼女が會社の歸りがけだと云ふ事を推察し

た。

立止つて、二言三言話をした。その時も彼女の態度は、相變らずおちついてゐて、彼の顏を眞面に見ながら、にこにこ笑つてゐた。

『やつぱり始終欠伸をなさつてゐて？』さう云つた。それから、

『その中休みの日にお邪魔に上りますよ。かまひませんか？』そんな事も、如何にも平然とした、普通の調子で云つた。

莊吉は銀座の方へ散歩に行くつもりでゐたので、彼女と別れると、そのまま尾張町の方へ向つて歩き出したが、秀英舍の邊で振返つて見ると、彼女は春日町行きの電車を待つために、數寄屋橋の橋の袂に、ぽつんと立つてゐた。別段莊吉の後を見送つてゐるやうでもなかつた。

莊吉は心の中から頬笑まれるやうな氣がしてゐた。

そしてその次が、今日のこの電話なのである。

三

眞夏の眞晝を歩いたので、心臟のあまり丈夫でない莊吉は、胸がかなり苦しかつた。千疋屋の梯子を上つて行くと、彼は方々のテーブルを一わたり見まはしたが、未だいつ子が來てゐなかつたので、直ぐに一隅のテーブルに腰をかけて、ソーダ水を飲んだ。二時十分ほど前であつた。

いつ子は二時きつかりに來た。梯子を上つたところで、一寸立止つて見まはしたが、直ぐに彼に氣がつくと、にこに

と笑ひながら近づいて來た。

「餘程お待になつて？」

『いえ、僕も今少し前に來たばかりです』

彼女は今年はやりの綿絽の紺飛白に博多の夏帶を締めてゐた。簡單な服裝だが、簡單なりに、物が新しいので、さつぱりしてゐた。これなら、唯散歩してゐるのだと云ふ形で、却つて惡くないと莊吉は思つた。やはり眞夏の眞晝を歩いて來たために、額に小さな汗の粒が浮いて、頰がぽうつと上氣してゐた。

『何か食べますか？』

『いえ、何も……やつぱりソーダ水がよござんすわ』

莊吉はソーダ水を命じた。それが來ると、彼女は一息にコップの半分ほど飲み干したが、ほつとしたと云ふやうな顏をして、扇子で額をあふいでゐた。

「散歩つて、一體何處に出かけませう？」

『どちらでも』と彼女は頰笑んでゐる。

莊吉は途々考へて來た事であるが、此時まで未だ好い考へが浮んでゐなかつたのであつた。――此暑いのに、何處に散歩なんかするところがあるだらう。東京市內にはそんなところはない。と云つて、汽車に乘つて、逗子か鎌倉あたりに出かけて見たところで、大して面白い事もなささうだ。唯むやみに人が混んでゐて、飯を食ふ靜かな宿屋さへないに極まつてゐる。

『兎に角、涼しいところがよござんすね』さう云つて莊吉は一寸考へてゐたが、大森から少し山の方へ這入つたところ

にある、Aと云ふ料理屋を思ひ出した。莊吉は梅の咲く時分に、友人と共に飯を食ひに行つたことがあつた。山に上るに從つて、一棟づつ飛び飛びに獨立して建てゝあるそこの座敷は、割合に感じが好かつた。あすこなら、丘の上であるだけでも風通しが好さゝうだ。『あなたは何處でも構ひませんね』

『ええ、何處でも……』

そこで二人は立上つて、新橋の停車場の方へ歩いて行つた。

莊吉は往來を歩いてゐる間も、省線の電車へ乘つてゐる間も、絕えずいつ子の方に觀察の眼を向けてゐた。彼女は相變らず、いつものやうに平然とおちつき返つてゐる。恥しさうな樣子もなく、といつて、おきやんのところもなく、ちみな愼ましい樣子で、彼と並んで步いたり、又彼と並んで腰をかけたりしてゐる。——さういふ點になると、自分の方がいつもと違つているかも知れない、と云ふ氣が、莊吉はした。彼は心に或緊張を感じてゐた。それで欠伸と云ふものが、自分ながら出なかつた。考へると、それが彼に頰笑まれた。

『この女はどんな事を考へてゐるだらう』と莊吉は腹の中で思つた。『默つてからうして平氣でついて來るが、一體どんな事だと考へてゐるのだらう?』

さう思ふ莊吉自身も、一體この散步がどんな事なのであるか、どんな意味を持つてゐるものであるか、又どんな意味を持つやうになるものであるか、てんで見當がついてはゐなかつたのであつた。さう思ふと、一寸苦笑を感じないではゐられなかつた。——兎に角、或魅力を彼女から彼は感じてゐた。けれども、それだからと云つて、それ以上の事について考へる氣は、彼には今はなかつた。

『俺と同じやうな氣持が、この女もしてゐるのかも知れない』と莊吉は考へた。さう思ふと、一寸面白い氣がした。

莊吉はこんなやうに、若い女とたつた二人で散歩するなどと云ふことは、今までに未だ一度もない經驗であつた。彼は女と云ふものの經驗の一番最初に、今の妻にぶつかた。年上の彼女から彼が學んだものは、不愉快な事ばかりだつた。それがために、女に對する彼の感情は、未だ芽も吹かない中に、既にしぼみかけてゐたやうなものであつた。

ペンの印のついた帽子をかぶつてゐる制服姿の學生が、向う側の腰掛から、ちらりちらりと始終いつ子の方へ視線を投げてゐた。莊吉はそれに依て、いつ子が男の注意を惹くに足る美貌の持主である事を證明されたやうな氣がして、頗る愉快であつた。殊に一層愉快だつたのは、彼女が殆んどまるで、その學生の視線に氣がつかないものらしく、平然として、その方へ眼を向けないことであつた。莊吉は頰笑みたいやうな心持で、その學生の顏を見てゐたが、不圖學生が、彼の方を見つめてゐる莊吉に氣がついたらしく 狼狽したやうに眼を屢叩いたのを見ると、急に氣の毒な事をしたやうた氣がした。

大森驛から人力車で十分ばかりで、A樓の門前に著いた。門を這入ると、だらだら昇りの舖石道がついてゐて、その道の兩側には 枝ぶりの面白い梅の老木が並んでゐる。その舖石道を昇つて行くうちに、もう多少の涼氣が肌に感ぜられて來た。――此處を擇んだのは成功だつたと莊吉は思つた。

玄關口にお辭儀をしながら、出迎へた女中がお辭儀の間にも、眼を光らして、客のなりふりを素早く見てゐるのを莊吉は興味をもつて眺めた。乾度大して好い客でないと云ふことを、ひと眼で見拔いてゐることだらう。殊にいつ子の服裝、下駄、指環、それから洋傘……併しそんな事にはてんで無頓著らしいいつ子が、平氣な顏をして、一二年流行の遲れてゐる粗末な洋傘を、受取らうとして手を出した女中に、無雜作に突き出したのが、寧ろ痛快だつた。

客が混んでゐなかつたためであらうが、座敷はかなり好いところに通された。

物事に餘り感動を表さないいつ子は
『まあ、好いところですわね！』と思はず云つたと云ふやうな聲を出して、嬉しさうに廊下の欄干に走り寄りながら外の景色を眺め始めた。それが、莊吉に滿足を與へた。『まあ、凉しい！』
莊吉も笑ひながら、彼女と並んで欄干にもたれかかつた。見晴しは實際かなり好かつた。大森から蒲田へかけての田圃が、眼の下に青々と擴がつて、その田圃の中を、時々通つて行く汽車や省線の電車が、玩具のやうに小さく見えた。その田圃の向うには、木立やタンクや家々の屋根やが、點々とつづいてゐて、それよりも更に遠くには、平板な白ちやけた感じではあるが、海も見えた。——そして何より好いのは凉しいと云ふことであつた。
女中が謎へを持つて來て、『どうぞお願ひいたします』さういつ子に云つて引き退つてしまつてからは、たうとう二人きりになつた。そこで、ちやぶ臺を間にして、差し向ひに坐つたが、さて、一體どんな話をしたら好いだらう？若い女に對して話題を持たない莊吉は、何より先づ話す事がないのに閉口した。仕方がなしにビールをぐつと一口飲みながら、
『あなたはどうです？』
『あたし頂けませんわ』
そのまま云ふ事がなくなつた。
一體口數の尠いいつ子は、ぢつと口を結んで默つてゐた。莊吉は酒を好まない質であるが、手持無沙汰なので、コップに二杯ほど立てつづけに飲んだ。その醉が直ぐに顔に出て來た。
『赤くなりましたわね』と彼女が頰笑みながら、おちついた調子で云つた。

『…………』笑ひながら、荘吉はほ照る頬を押へて見た。

そこで再び云ふことがなくなつた。

その云ふ事がないのが、苦しいと云ふよりも、寧ろをかしかつた。何ぼ何でも、あまりに不器用過ぎる――それと同じやうな事を、いつ子の方でも考へてゐるに違ひないと荘吉は思つた。この女はこんな風に默つてはゐるが、何事でもちやんとつ解てゐる、敏感な女なのだ、そんな氣が、彼女の默して微笑してゐる樣子を見てゐると、荘吉は益々して來た。この女には、男の友人に對するやうに物を云つても　屹度總て受けいれられるに違ひない。――だが、それだからと云つて、一體どんな話をしたらいいだらう？

日比のやうに、文學の話を持ち出して、此女に對する氣にはなれなかつた。荘吉はいろいろ思案した末、彼女の身の上を訊いて見ようかと考へた。

『あなたは、どうして結婚されないんです？』いきなりから彼は訊いた。

『別にどうしてと云ふ理由はありませんわ。未だ結婚したいと云ふ氣も起りませんから』といつ子は相變らずおちついた微笑を浮べながら、しづかに答へた。

『併し、結婚をなさらない決心をしてゐられる譯ではないんですか？』

『ええ、別にそんな決心もしては居りません。いつかは結婚する時もあるだらうと思つてゐますわ』

再び話の緒が切れかかつた。荘吉は又一杯ビールを飲み干した。

『併し、僕の考へるとこ　に依ると』彼は口ばたについた泡をハンケチで拭きながら、此處で默つてしまつては又無言に逆戻りする事を恐れるもののやうに、重ねてから云つた。『あなたは非常におちついてゐられる　何も彼も呑み込んで

ゐると云ふやうな様子をしてゐられるが、何か餘程の苦勞をなさつたのですか？』

『まあ、あんまりおちついてゐる方でもありませんわ』彼女はかう云つて笑つて、『……父が早く亡くなりましたから、物質の方では豊ではありませんでしたが、でも、そんな事は苦勞と思ふ程のことでもありませんでしたわ』

『それでは、戀か何かで？』と莊吉は思ひ切つて訊いて見た。この一番訊いて見たいと思つてゐる中心點に、自分ながら餘りに容易く入つたので、少しぶしつけ過ぎたかと一寸不安に思つたが、併し別に差支へないと直ぐ後から考へた。

『さうねえ』彼女はやはりおちついた調子で云つて、言葉を切つて、考へるやうな眼付をしたが、『苦勞と云ふやうなものではありませんけれども、戀をしたことはありますわ』

『若し差支へなければ、その話を僕に聞かせて呉れませんか？』

『ええ、別に差支へはありませんけれど』と彼女は再び考へるやうな眼付をしたが、淋しさうに微笑して、『でも、みんな平凡なんですよ』

そしてぽつりぽつりと、おちついた、靜かな調子で、こんな事を喋り出した。——

『一番初めは十五の時なんですよ。わたしの家の直ぐ近所に居りました中學生が好きになりましたの。その時分、父が亡くなりました直ぐ後なので、生活のために、母が鹽煎餅屋を開いて居りましたんですよ。あたしが店番をしてゐますと、毎日その中學生が店の前を通りますの。——その人の顔を見て、あたしが赤い顔をするものですから、その人も赤い顔をしますの。ただそれだけ』かう云つて、いつ子はにこにこ笑つた。『その中に、その人の家が、何でもお父さんが海軍の軍人だつたんですよ、それだものですから、轉任か何かになつて、何處かへ引つ越して行つてしまつて、もうあたしの家の前を通らなくなりましたの。それでをしまひなの』

荘吉も笑ひ出した。

『その次はね、十七の時なんですよ』と彼女は言葉を繼いだ。『美術學校に行つてゐた人なんですよ。初めその人からあたしに手紙を呉れたんですの。……でも初心な人だつたので、二人で會ふと、ただ口が利けないで、泣いてばつかりゐますの、あたしもやつぱり泣いてしまふの。隨分何か云ひたいと思つてゐても、會ふと迚も口が利けなくなつて、唯泣いてゐるばかりですの。――その人もそれでをしまひ』

彼女が笑つたので、荘吉も笑つた。

『そんなに泣いてばかりゐたのに、どうして別れたのです？』

『どうしてですかね。……あたしの方から急に厭になつてしまつたんですよ。ただ泣いてばかりゐるのに、飽き飽きして來たんですね。意氣地のない人、それは好い人なんですけれどもね。臆病な、氣の小さい人なんですよ。……西洋畫だもんですから、西洋畫家で御飯の食べられる人は尠いと云つて、日本畫に移らうかなんて、よく云つてゐましたよ』

『……………』

『その次はね』と彼女は再び言葉を續けた。『でも、どれもこれも平凡で、つまらないでせう？

『いや、そんなことはありません』

『あたしが今のS會社に通ふやうになつてから、間もなくのことでしたから、十九の時なんですよ。あたしが會社に通ふ途中で、毎日顔を會はせる大學生でしたの。……關西の方のお寺の息子さんで　哲學をやつてゐたんですよ。……それは熱心にあたしに云つて來るので、あたしの方ではそんなに好きとも思つてゐなかつたんですけれども、たうとう引込まれて、結婚する約束をしたんですよ。それにあたし、一體が會社員とか銀行員とか云ふものが嫌ひでせう。何か藝

術とか哲學とか、さういふ方面の人に憧れを持つてゐたでせう。……今はただ藝術家とか哲學者とか云ふ名だけでは何とも思ひませんが、その時分には非常にそんな氣がしてゐたもんですからね。そこで、そんな點から、その人の哲學科だと云ふ事が、嬉しかつたわけなんですの。……その人は間もなく、あたしの家の近所に越して來ましたわ。それで、あたしの母も承知して、始終行き來してゐたんですよ。それは眞面目と云へば實に眞面目な人で、よく勉强もするんですけれども、どういふんでせうかね、始終人の心を試して見るやうな事をしますの。嫉妬家と云ふのとは違ふんでせうけれどもね、あたしの愛がどの位だとか、自分の愛と較べると、あたしの愛が足りないとか、そんな事ばかり云つてゐるんですよ。……そんな事ばかり云つてゐる末には、自分でも自分の心持が苦しくなつて來るんでせうね、それは陰氣な顏をして、自分の頭を抑へてゐるんですよ。毎日がそんな風なので、時に依ると、あたし息がつまるやうな氣がしましたわ。そしてさういふ氣持でない日には、あたしに眞劍になつて謝罪るの。……いつでも笑ひ出してしまふんですが、でも心の中ではそれは淋しいの。さういふ性質と云ふものが、あたしに理解も出來ますし、氣の毒にも思へますが、でも、明るさと云ふものがまるでないんですからね。

『ところがね、ほんたうに氣の毒なんですわね。ほら、二三年前に流感が盛んに流行りましたわね。あの時に、その人も流感に罹つたんですよ。そしてあたしに看護のために、會社を休めと云ひますの。ところが、あたしこんな風に物事に驚かない質でせう。その人の病氣の程度がどの位だが、よく解るんですよ。あたしの代りに母を看護につけて置いてあたしが會社に出ようとすると、非常に憤慨するんですの。……それでも、あたしは成るたけなら會社は休みたくないものですから……これもあたしの質なんですよ、止を得ないことでない限りは、つとめは缺かしたくないのが。……たうとう出かけたんですよ。ほんたうに輕かつたんですからね、その人の病氣は。それにその人の心持に、さういふ病氣

に對するあたしの心配の程度で、あたしの心を試さうと云ふ、いつものあの癖が始まつてゐるのが、あたしにはつきり過ぎる程はつきりしてゐるんでせう。あたしはさういふ氣儘な男の氣持を、何處までも許して置くべきものではないと考へたんですよ。多少の反抗も手傳つてゐたわけなんですがね。……さうたしら、すつかり憤慨してしまつてね、あたしが内に歸つたら絶交狀が來てゐましたの、そして何でもあたしの母にも非常に當り散らしたとかで、母も、あんなひどいわけの解らない人はないと、怒つてゐるんですよ。――それで、たうとうそれきりですの』

『それきり、別れたんですか？』と莊吉は眼を瞠つて訊いた。

『ええ、それきり別れましたの。だつて、絶交狀を吳れたものを、こつちから謝罪(あやま)つて行く必要はないと思つたもんですからね』といつ子は一寸淋しい顏をした。『それでも、あたしその人は今でもほんとうに氣の毒な人だと思ひますわ。絶交狀を書いた後で、屹度どんなに苦しんで、どんなに後悔したらうと思ふとね。……あたしよりも、苦しいのはあの人自身なんですからね、これから先も、あゝ云ふ性質でしたら、始終苦しんでゐなければならないだらうと思つて、ほんたうに可哀さうな氣がしますわ。……今思ふと、あたしの心には、あの人が一番殘つてゐますわ』

いつ子は微(かす)かに溜息した。その表情は少し悲しげにさへ見えた。

『それでゐて、あなたはその人ともう一度ほんたうに結婚なさらうと云ふ氣は起らないんですか？』

『それについて、あたしもいろいろ考へては見たんですよ。しかし、氣の毒と思ふことと結婚とは、やつぱり別問題だと思ひましたの。――かうやつて離れてゐるからこそ、氣の毒とも可哀さうとも思へるんですけれども、側にゐると、あたしにはやつぱりあゝ云ふ心持は許せなくなりますからね。……つい腹を立てて、又面白くない結果になることが解つてゐますもの……』

『……』

荘吉はそれ等の話を聞いてゐる中に、何とも云はれない興味を覚えて來た。兎に角、實に頭がはつきりしてゐると思つた。話す事件は平凡で　誰でもが經驗する程度のものではあるが、この女はその事件の何から何までを、はつきり認識してゐる。……荘吉は自分の妻と自分との間を考へた。長い間、うまく行かないと云ふ事が解つてゐながら、何と云ふ自分の不徹底だらう。自分の妻に對する不徹底に引換へて、この年若い女は、その戀人に對して、何とはつきりしてゐる事だらう……

『そしてその外には？』

『その外には、ありませんわ』と彼女は答へた。『あたし今はもうそんな氣持では行くまいと思つてゐるんですよ。若し行くなら、自分から愛するやうな氣持で行きたいと思つてゐますの。何故と云つて、自分から愛して進んだ場合ならば、相手に缺點があつても、それは自業自得であきらめがつきますけれども　受身で行つた場合には、相手の缺點が眼につき出した時、我慢がなりませんからね』

荘吉は默つて彼女の顔を見てゐた。彼女は相變らずおちついた顔をして、喋るだけの事をもうみんな喋つてしまつたと云ふやうに、いかにも自然に口を閉ぢてゐた。――この女はこんなに靜かな、おちついた、淋しい顔をしてゐるが、若し引出したら、ほんたうに胸に情熱を隱してゐる女なのかも知れないと荘吉は考へた。聰明な　しづかな、少しも濁つたところのない、透明な情熱を。世間並の女の持つてゐない、自由な、根本的なものに入つて行く熱情……さう考へると同時に、彼は著しく自分の心持が、彼女の方へ惹かれ始めたのを感じた。

『自分だつて、ほんたうは胸に情熱がひそんでゐる人間なのかも知れない』と彼は腹の中で考へた。『ほんの青春の芽の

吹き際に、不自然な過失と、それに依つての不自然な結婚とのために、そのまま凋れてしまつてゐるが、若し誰かが自分の情熱を引出して呉れたら、案外今まで自分が氣がつきもしなかつた熱が、自分の心に隠れてゐるかも知れない……』

この女ならば……この女ならば、自分の情熱を引出して呉れる力があるかも知れない！――こんな考が突然、彼の心に閃いて來た。彼は再び彼女の顔を見た。彼女はやはりおちつき切つた様子をしてゐた。彼は胸の中が、嘗て覺えたことがない位に、熱して來るのを感じた。そして更に考へ續けた。――

『この女の力に依つて、今のあの不愉快な家庭を破壊しようか。――意氣地のない自分は、今のままでは、あの不愉快な妻から別れることが出來ない。あまりに自分は弱過ぎる。どんな事があつても、うまく行く筈がないと云ふことが、明瞭に解つてゐるあの家庭が、自分の力だけではどうしても破壊出來ない。この女を愛さうか。この女を愛して起る熱情の力に依つて、現在の自分の生活を破壊したら、新しい生活が自分に開けて來るのかも知れない。總てのものに新しい興味が湧いて來るのかも知れない。人生の姿が、まるで違つて映つて來るのかも知れない……』

何ものにも興味を持てない、虚無的な氣持で、日々を平凡に、退屈に欠伸をしながら持扱つてゐる自分の現在の生活のみじめさが、まざまざと彼の眼の前に浮び上つて見えた。――こんな生活にケリがつき、ほんたうの新生活が自分の前に開かれると云ふ事は、どんなに喜ばしい事だらう。

けれども、彼女が自分を愛して呉れるだらうか？――と莊吉は考へた。彼は日比の言葉を思ひ出した。彼女が莊吉に好意を持ち、興味を持つてゐると云ふ日比の言葉は、滿更嘘ではなささうだ。そればかりではない。彼女がかうしてこんなところにまで、彼と一緒に來てゐると云ふ事だけでも、そこに彼が望を持つ理由は十分にあると云ひ得る。

『いや、若しさういふやうに進まうと云ふならば、今此處で、相手の感情を計算してゐる必要などは少しもない――今

卽座に、今卽坐に、自分の情熱を彼女に向つて打つかければ、それでいいのだ!』
彼は心が異常に緊張して來るのを覺えた。思ひ切つて、自分の心を彼女に向つて云ひ出さうか。――が、その時彼は自分の家庭を考へた。その情熱によつて破壞されるところの家庭……彼は心が苦しく重くなつた。どうせ手術に苦痛の伴ふことは、止むを得ない事だと云ふことが解つてゐるけれども、併し手術の場合の痛みを考へると、心が鈍るのを覺えた。
『勇氣、勇氣!』彼は腹の中で呟いた。
いつ子はやつぱり默つてゐた。默つて、何か考へてでもゐるやうに、少し俯向き加減にしてゐるが、どんな事を考へてゐるのだらう? 彼が感じてゐる感情を察してゐるかどうか。彼女の表情は相變らず動かなかつた。――だが、ひよつとすると、彼女は待つてゐるのかも知れない。彼の言葉を待つてゐるのかも知れない……
『勇氣、勇氣!』と彼は再び腹の中で呟いた。彼はからだ中がこはばるやうに胸苦しさを覺えた。
莊吉がこんな風に、どうともつかない、妙に苦しい緊張に、息苦しさを感じてゐる瞬間に、廊下に足音がきこえて來た。彼はほつと救はれた氣がした。
外の廊下で、
『御免下さいまし』と女中が一度聲をかけて、それから襖を開けた。かういふ料理屋などに如何にも似つかはしい、一寸澁皮の剝けた、二十五六の氣さくな女中は、『ほほ』と何と云ふ事もなくお世辭笑ひをして、そして襖を開けただけで、再び廊下を向うに歸つて行つたが、間もなく、赤い刺戟的な裏のついた夜具をかついで、這入つて來た。
『御免下さいまし』再び一寸會釋をして、部屋の中にすうつと這入つて來て、かついでゐる夜具を一隅に下ろして、氣

輕な調子でそれを敷き始めた。」

『違ふ、違ふ！』少し呆氣に取られた氣味で、それまで默つて見てゐた莊吉は、狼狽しながらかう急き込んで云つた。

——東京近郊の料理屋には、こんな風な場所が多いと云ふことを聞いてゐたが、今眼のあたりに、極めて手馴れた様子で、眞つ晝間に夜具をかつぎ込んで來た女中を見ると、莊吉は驚かずにゐられなかつた。

『へえ』と女中は夜具を敷く手を止めて、一寸振返つたが、ほほと氣輕に笑つて、『未だお發ちになりますのにはお暑うございますから、夕方までお寢みになりましては……』

『違ふ、違ふ！』と莊吉は手を振つて、不機嫌な聲を出した。『我々は違ふんだ。片付けて呉れ』

『へえ』と云つて、女中は眼をきよとんとさせながら、莊吉の苦り切つた顏を見たが、急にきまり惡さうに赤い顏をして、『これはどうも濟みませんでした。……お客様はみな様お寢みになるものでございますから……』

そして、敷いたばかりの夜具を手早く疊んで、『濟みませんでした、濟みませんでした』を三四度繰返しながら、それをかついでこそこそ去つてしまつた。

その出來事がいつ子に對して。ひどく氣の毒だつたので、

『こんなところとは思はなかつたものですから』と莊吉は辯解するやうに云つた。

『思ひ違ひをしたのでせう』いつ子は相變らずのおちついた調子で、何でもないことのやうに答へたが、流石に何となく興ざめた顏付で、恥しさうであつた。

か、それきり二人は暫くの間默り込んでしまつた。——莊吉はてれ隠しにビールのコップを口に持つて行つたが、心の中は妙に腹立たしかつた。最初女中の足音が廊下に聞えた時には。丁度その時心を固くしてゐたあの緊張から救はれ

る氣がして、ほつとしたが、併し夜具とは何と云ふぶちこはしだつたらう。自分が嘗て經驗した事がない位に、感情が昇つて行つたあの瞬間に、自分が生涯で最も强く感じたかも知れないやうなロマンテイツクな心持になつて行つたあの瞬間に、露骨極まるあの夜具！……彼はへんてこな苦笑に胸がいつぱいになつた。

『歸りませう』と彼は吐き出すやうに云つた。

『ええ』

二人は俥に乘らずに、大森の停車場まで歩く事にした。途々莊吉は、無殘に破られたあの夢心地を、再び取り返すのは、非常に骨の折れる事だと考へた。こんな風な自然のきつかけは、努力しても來る筈のものではなかつたのだ。それが何と云ふつまらない事から、へんに水をさされたやうな白々しい氣持にされたものだらう。――莊吉は堪らず忌々しかつた。何も知らずに、へえへえとお世辭笑ひをして、赤い夜具をえつちらおつちらかついで來たあの女中の姿が、憎らしかつた。

二人は默々と何か考へ込んでゐて、餘り言を栗交はさなかつた。省線の電車で、互に並んで腰かけながらも、やつぱり二人とも默つてゐた。行きの快活な心持から考へると、歸りは全然興ざめた、へんてこな心持だつた。

新橋で莊吉だけ下りた。ひとりになつて停車場の構外に出ると、彼はぶらぶら銀座通りの方へ歩いて行つた。

『互に引出し合つたら引出し合へるかも知れない情熱の泉』と彼は先刻A樓で感じたあの心持を思ひ出しながら、考へた。『併し結局引出し得なかつたのだ。もとのままなのだ』

彼は千疋屋の前まで來ると、一寸立止つて二階を仰いだ。先刻いつ子とソーダ水を飲んだあのテーブルに行つて、一人でソーダ水を飲まうか。不圖そんな事を考へたが、併しそんな芝居がかつたへんな心持は、直ぐ自分ながら阿呆らし

くなつて來た。彼は苦笑しながらその前を通り過ぎた。

四

それから暫くして、荘吉は麻布の四の橋で電車を下りて、何とか會社の煉瓦の塀に沿うて細い長い坂を、本村町の裏の方へ昇つて行つた。坂の上を更に一丁ばかり行つて、左に細い露路を曲ると、一つの門の内に格子戸の家が幾軒か並んでゐる。毎月月末に一度、此露路に這入つて行く時ほど、彼は重い心持になる事はなかつた。――殊にその日は、いつ子とのあの散歩の後なので、一層へんに此露路が重い氣がした。

格子戸を開けると、その音に妻のおゆみは直ぐ玄關に出て來た。

『まあ、遲かつたんですね。今し方電話をかけたんですよ。さうしたら正午頃お出かけになつたと云ふので、どうなすつたのかと思つてゐたんですよ』

『少し用があつて、他所へ寄つて來たんだ』と荘吉は不愛相に答へて、茶の間に這入つて行つて、長火鉢の側に坐つた。もう電燈がついて、ちやぶ臺がそこに擴げてあつた。

『御飯を召食るでせう？』

『いや、もう食べて來た』

『まあ、折角先刻から待つてゐましたのに、たまには内で御飯を召食つてもいいぢやありませんか。――ほんたうにあなたは薄情者ね』おゆみはそんな事をぶつくさ云ひながら、彼と向ひ合つて坐つたが、併しその樣子は割合に不機嫌ではなかつた。その日髮を結つたと見えて、年に不似合な大きな髷を、油でてかてかさせて、赤い派手なてがらなど掛け

てゐた。——彼がたづねて來る日には、近頃いつでもかうして、ちやんとおゆみの化粧してゐるのが、荘吉には何となく苦笑された。そしてそのおつくりがだんだん派手に若造りになつて、今日などは襟白粉をこつてりつけてゐた。……彼女が自分よりも年が三つも若い良人の心を、きつとどうかして自分に得たいと思つてゐるその心持は、荘吉に露骨過ぎる程解つてゐた。だが、彼女が若造りをすればする程、荘吉には厭味に見えてならなかつた。併し彼は面倒なので、それについて何も云はなかつた。

『さあ、お父さんにおみやをかう云ひなさい。きみちやんは先刻から待つてゐたんぢやないの』とその時まで、母の背中に取りつきながら、鼻白むやうな顔をして、ちらりちらりと父親の顔をぬすみ見てゐた、今年四つになるきみ子に、おゆみは云つた。

『お父ちやん、おみや……』さう云つて、きみ子は荘吉の側に駈け寄つたが、併し何となく遠慮したやうな、恥しいやうな様子であつた。滅多に歸つて來ない、月に一度ぐらゐしか顔を見せない父が、子供心に、何となく親しめない感じがしてゐるのだらう。

荘吉は子供を抱き上げた。が、今日は何もみやげを買つて來てゐなかつた。いつでも家に歸る時には極つて買つて來るのに、今日はつひうつかりしてしまつてゐた。いつ子とのあの散歩のために、心がすつかり占領されて、つひ子供のみやげなどは思ひ出せなかつたのだ。——が、子供に對してはやつぱり濟まない氣がした。

『ああ、すつかり忘れてしまつた。御免よ。お父さんは今日は大變忙がしかつたものだからね』かう云つて、子供の顔に自分の頬を持つて行つたが、子供に對する自分の冷淡さが、まざまざと自分の眼に見せつけられるやうな氣がして、不愉快になつた。『明日お母さんに買つてお貰ひなさい。ね、お父さんからよくお母さんにお賴みして置くからね』

子供は失望したやうに、身體を妙にくねらして、一寸涙を眼に浮べたが、『うん』と素直にうなづいた。

『ひどいお父さんね、ほんたうにひどいお父さまね、きみちやん』とおゆみは態と子供の顔を覗き込むやうにして、『だけど明日お母さんが買つて上げるからね』

『うん』ときみ子はうなづいた。

それだけの光景を見るだけでも、莊吉には顔をそむけたいやうな氣がした。家庭に這入つて來ると、彼の神經は尖り切つてしまふのであつた。——自分の身體や心に附き纏つてゐる。平生は忘れようと勉めてゐるが、どうしても忘れる事の出來ない此世の中の重荷、そんなものがあから樣に、彼の心を威嚇し始めるのであつた。

莊吉は柱から團扇を取つて、胸を擴げてあふぎ始めた。——彼は一刻も早く、金を置いて家を出てしまひたいと思つたが、さうも行かないので、重い心を持ち扱つてゐた。

『お父さんがいらつしやつたら御飯にするつて、きみ子も先刻から待つてゐたんですよ。それだのに外で召食つて來たつて。……ではね、きみちやん、お父さんにお箸で食べさせて頂くんだよ。好いことね、お父さんに食べさせて頂くのは……』

『うん』と子供は云つて、にこにこと笑ひ出して、莊吉の側に坐つて、ちやぶ臺に向つた。

莊吉は子供の箸と茶碗とを取つた。そして子供の口に、飯や菜をはこんでやりながら、さういふ事をさせる妻の心持を考へた。『巧みな攻撃だ！』と彼は腹の中で呟いた。

併し彼はさういふ風に考へて來ると、妻が氣の毒にもなるのであつた。——近頃の妻は昔のやうに、彼に向つていがみかかつて來るやうな事は尠くなつた。彼女は年下の彼は、自分の思ひ通りになるものだといふやうな考を、長い間捨

てなかつた。實際、また初めて男女間の手ほどきを彼にした彼女は、或意味で、暫くの間、彼を支配してゐた事は確だつた。『どんな事をしたつて、あたしからあなたは逃げられやしないんですよ』さう云つた高飛車な態度で、彼女が彼にかかつて來てゐた時、妙に道德的な責任感と云ふものから離れられなかつた莊吉は、今でも彼はそれが卒業出來なくて惱んでゐるのであるが、その時分は全くどんな事をしてでも、一度自分の犯した事は、何處までも自分で引受けようと考へてゐた。――その弱さが彼女のつけ目であつた。

が、別居以來、彼女は彼の心をもう引止めて置けないと云ふ事を知つたらしい。そしてそれからは、彼女は今度は强い態度で彼に對する代りに、『子供』と云ふものを手段に使つて、彼の心の急所を衝かうとし始めたのであつた。

『まあ、きみちやんのお父さんは冷たいお父さんね』『困つたお父さんね、ね、もつと可愛がつて下さいつて、お父さんにお願ひするんだよ』そんな事を子供の顏を窺き込むやうにして云ふ彼女の間接射擊は、實際有効に彼の心を衝かないでは置かなかつた。

『下らない事を子供に云ふものぢやない』と若し彼がいらいらして、我慢がならずに叫ばうものなら、その彼の心の陣形の亂れたところに衝き入つて、彼女は益々彼の弱所を攻擊して來る。――だから、いつでも莊吉は默つてゐた。妻が何を云つても、相手にならず、何も答へようとはしなかつた。

莊吉は飯粒を頰につけたり、茶の汁を口ばたに口附けたりしながら、いそいそとして食べてゐる子供の顏をぢつと見守つてゐる中に、妙に客觀的な氣持で、その場の光景を頭に浮べ始めた。……四疊半の小さな茶の間の、薄暗い五燭の電燈の下のちやぶ臺、表面は不機嫌な顏もせず、にこにことした微笑を浮べながらも、良夫の心持を探らう探らうと、一寸した事にも始終氣をくばつてゐる三十女、それと向き合つて、子供に飯を食べさせながら、心の中ではその妻の注

視からのがれ、妙に暗つぽい肉親の愛の息づまるやうな苦しさを感ずる子供の顏から眼をそらしたいと思つてゐる淋しい一人の青年、そして何も知らずに飯を食べてゐる子供……そしてさうしたものの上に『家庭』と云ふ名稱がひかへてゐるのだ。

隣り近所の近い家なので、時々直ぐ裏の方から、何か大聲で笑つてゐる何處かの一家の聲が聞えた。夏の宵だから、何處の家でも明放しになつてゐるのだらう。それより少し遠い何處かでは、蓄音器の音が先刻から聞えてゐた。日本物の下卑た滑稽物の安レコードが、何の面白味もなくがらがら鳴つてゐた。又何處かで歌〻歌つてゐる聲も聞えた。

莊吉は隣りの家、その又隣りの家、その又隣りの家を考へた。どんな家族が住んでゐるか、彼は顏を合はせた事がないから知らないが、この門内の家はどれもこれも彼の家と同じ様に三間か四間の小さな家だ。その家々には、同じやうに、こんな風に長火鉢があり、良人と妻とが住み、そして一人か二人の子供がゐるのだらう。版に捺したやうに。……そしてみんな『家庭』と云ふ名稱が、その上にをつかぶさつてゐるのだ。

同じやうな間取りの家に、同じやうな長火鉢に、同じやうに良人と呼ぶ一人の男に、妻と呼ぶ一人の女に、それから子供……何といふ退屈なことだらう、と莊吉は考へた。毎日同じやうな生活が、その幾坪にも足りない空間――家――の内で繰返されて行く。その小さなみじめな境涯から一歩も外に出られない。少しぐらい夫婦が愛し合つてゐようと憎み合つてゐようと、結局、退屈なことには變りがなささうだ。……そして蓄音器、三味線、琴、オルガン……

『我慢がならない』と莊吉は腹の中で呟いた。

その途端に、

『お父さん、お湯。……御飯はもうをしまひよ』ときみ子が云つた。

『よし、お湯』と莊吉はぼんやりとした氣持で、子供の言葉をただ鸚鵡返しに繰返しながら、鐵瓶を取つて、子供の茶碗に湯を注いでやつた。

御飯を食べさせて貰つた事に依つて、きみ子の父親に對する遠慮はすつかり消えたらしかつた。彼女はちよこちよこと繪本の箱を何處からか抱へて來た。

『お父ちやん、御本を一緒に見ませうね』

『うん、見よう』

子供は父の側にぴつたりと口附いて坐りながら、繪本のペエジを繰り始めた。

『お父ちやん、ほら、電車よ……』

『ああ、電車だね』

『人も乘つててよ。……ほら、お父ちやん飛行機……』

『ああ、飛行機』

子供は口をぷつと脹らまして、繪本を捨てて立上ると、『ぶうん、ぶうん』と云ひながら、部屋の中を走りまはり出した。無論飛行機の眞似に違ひなかつた。そして部屋の中を駈けまはつて來ては、父親の肩に摑まり、又駈けまはつて來ては、父親の肩に摑まつた。

『暑いよ、きみちやん』と莊吉は持て餘して云つた。

『まあ、冷淡なお父さんね。たまに歸つていらつしやつたので、きみちやんが嬉しがつて燥いでゐるのに、直ぐに煩さがつて。……きみちやん、もつともつと、お父さんを困らせてお上げ！』

ちやぶ臺を臺所にはこんで行つたおゆみがこんな風な事を云つた。
『……』莊吉は苦い顔をしたが、相手にならずに默つてゐた。
子供は暫くの間噪いでゐたが、やがてぺたりと父親の側に坐ると眼をこすり始めた。
『さあ、きみちやんは寢るんだよ』さう云つておゆみが、臺所から手を拭きながら出て來た。そして透かさず、『さあ、今日はお父さんに寢つかせて頂きなさい、いいことね、きみちやん、お父さんに寢つかせて頂いて』
『うん』とうなづきながら、子供は嬉しさうににこにこした。
『益々意地惡く攻擊して來やがる』と莊吉は腹の中で考へた。が、こんなところで、妻の神經を荒立てさすのは不愉快だと思つた。
おゆみは子供の寢床を敷くと、透かさず、又云つた。
『あたしはこれからお湯に行つてまゐりますから、あなた、それまできみ子を寢かせて置いて下さい』
『よし』と莊吉はうなづいた。
妻は間もなく湯の道具を持つて、外へ出て行つた。

五

寢床に這入つてからも、きみ子は未だ多少噪いでゐた。妻の云ふ通り、久々での父親の歸宅が、子供の心を、どんなにか喜ばせてゐるのだらう……子供のせがむままに、莊吉は卽席のお伽話などをして聞かせてゐたが、心は益々重くなつて行くばかりであつた。

『肉親！』彼は子供の顏を見ながら、そんな事をしみじみした氣持で考へてゐた。この小さな、頑是ない、無邪氣な存在は、心の底から、この自分に信頼してゐるのだ。この世界中の何ものよりも、唯ひとり母を除いては、この自分を頼りにしてゐるのだ。

さういふ考は、彼をかなりセンチメンタルにし、そして子供に對する愛情を彼の心に迸らせもしたけれども、暗い、振切る事の出來ないきづなの重さ、さう云つたものが、それよりも先に彼の心を暗くするのであつた。

平生は頭の中から殆んど消えてゐるし、又實際に、彼はさういふものを一切忘れる爲に、妻や子供と別居してゐるのでもあるが、それ程自分を支配してゐるやうにも見えない此子供が、かうして側近く並んでゐると、何と云ふ力で自分の心に喰ひ込んでゐるかが、まざまざと考へさせられて來る。

彼が話して聞かせるお伽話を『うんうん』とうなづきながら聞いてゐる中に、きみ子はいつか眼を閉ぢて、すうすうと靜かな息をしながら眠り始めた。その少し開き加減にした口、ぷつと膨れて、いかにも健かに血の氣が赤く透けて見える頰、莊吉はつくづくそれに見入つてゐた。そしてそつと子供の頰に脣を押しつけた。

『何といふ不思議なことだらう！』と莊吉は考へた。『互に何の愛情もなしに、たゞ氣紛れな身體と身體との接觸から生れた子供、それがさういふ原因とは何の關係もなく、自分に愛らしくなり、又子供の方で自分を慕ふやうにならうとは！』

こんな事は解り切つた事のやうにも思はれるが、又心の動き方で、解らないと思ひ始めると、少しも解らないことに思はれて來るのであつた。

それにしても、たゞ此子供一人が、互にその子供であるといふだけの理由から、切ることが出來ずにゐる夫婦關係と

云ふものが、彼には呪はしかつた。……そしてそれを一方から考へて見ると、さういふ夫婦關係を存續させるところの唯一の原因であるこの子供の存在、それが呪はしいのでもあつた。

莊吉は眠つた子供の側に仰向けに轉がつて、兩手を後腦にかひ、蚊帳の天井を見ながら、昔の事を思ひ出してゐた。

……おゆみとの關係の抑々の初め、きみ子の出生…………

彼は深い溜息をした。それを考へる度にいつでも感ずる暗い後悔の念が、彼の頭を攪亂して來た。

………………………………………

……或夏の夜の事が彼の心から離れなかつた。

今から五年前の事で、彼は故郷からひとり出て來て、牛込の素人屋に下宿して、△△大學に通つてゐた。その時分のおゆみは、それは莊吉が後から知つたのであるが、その少し前まで一緒になつてゐた或會社か何かに出てゐる男と別れて、その叔母の家——莊吉の下宿した素人屋——に厄介になつて來てゐたのであつた。何處から見ても美貌などとは云へない彼女は、併し熟し切つたあんまり品の好くはない何かの果實のやうに妙に肉的な魅力は持つてゐた。彼女は或私立の裁縫女學校に通つてゐた。

……世間にざらにある、有り來りの徑路が、二人の間に取られたのだ。莊吉は無垢な若い青年によくあるやうに、心は何か譯の解らない憧憬に充されてゐた。實際の事を云ふと、彼は學校の往復に遭ふ或少女に心を惹かれてゐた。彼はよくその少女の事を考へた。だが、無論積極的に、その少女に進んで行かうと云ふやうな心を持つてはゐなかつた。

おゆみの部屋は莊吉と同じく、やはり二階にあつた。牛込あたりによくあるが、それは最初から素人下宿風に建てられたもので、格子戸の小さな家ではあるが、二階が階下よりも廣いやうに出來てゐた。——一つの廊下を隔てて彼の部

屋と彼女の部屋とは相對してゐた。

彼は最初から、おゆみについて何事も考へなかつた。併し、心では少しも考へないのに、何か障子越しに聞える息づかひ、衣ずれの音、そんなものが、二十を越えて間もない、彼の物欲しい感覺に觸れて來ないではゐなかつた。——それは決して愉快なものとは云へなかつた。併し、彼の懸念は何かその不愉快な魅力の方へ、だんだん惹きつけられて行かないではゐなかつた。

彼が耳を澄まして、隣室のけはひに氣を配るやうな頃には、おゆみの方がもつと積極的になつて來てゐた。そんな風にして、下宿屋の戀、縁日の戀、——牛込、本郷あたりにざらにある戀——さう云つたものに馴れ切てゐるおゆみは、莊吉の心の亂れて來る汐時、汐時に、油をそそぐ術をよく心得てゐた。——言葉も彼女の方からかけた。莊吉が文科だと云ふので、彼に小說本を貸して呉れと云ひ初めたのも彼女であつた。……そしてたうとう或夏の晩、彼女は夜更けてから、彼の部屋に忍んで來たのだ。

……その時の事を思ひ出す度に、莊吉は自分の頭を搔きむしりたい氣がした。……

直ぐ後悔と懊惱に似た胸苦しい思ひが込み上げて來て、默り込んでしまつてゐる莊吉の顏を覗き込むやうにして、彼女はにつと笑ひながら、

『構はないわね、誰にも知れなければね……』かう囁いた。——彼女はそれまでさうした事件で度々叔母を手こずらせてゐた。それで、叔母にさへ知れなければ、……さういふ意味の事を云はうとしてゐるのであつた。

莊吉は眠れなかつた。彼は一切の美しいものが自分から滅びてしまつたやうな氣がしてゐた。學校の往復に遭ふあの少女が、いつもよりも強く彼の頭に浮んで來た。

『オブロオモフ、オブロオモフ。』さう思つて、彼は自嘲しながら頭を振つた。あの怠惰で、何も彼も知つてゐながら、たうとう下宿の後家と一緒になつて行くオブロオモフを、彼は思ひ出したのである。

……………………………………

だが、その時よりも尚彼に忘れられないのは、おゆみが妊娠した時のことであつた。

『ほんたうに困つちまつたわね』彼女は初めて彼にその事を打明けた時、流石に日頃の大膽な、何も彼も知りつくしてゐると云ふ態度にも似合はず、青い顔をしてゐた。

『…………』荘吉は最初は嘘だと思つた。女が自分を騙すために、そんな事を云つたのだと思つた。だが、それがほんたうだと知ると狼狽しないではゐなかつた。

『もう知らないことよ。――あなたが逃げようたつて、逃がしはしないことよ』彼女は慌てて思案に暮れてゐる荘吉の顔を、ちつと見つめながら、意地の悪い調子で云つた。――彼女も眞劍には違ひなかつた。その青い顔に、疑ひ深さうな、妙に底光のするやうな眼付をしてゐるのを見ると、荘吉はぞつとした。

荘吉には總てが餘りに夢のやうだつた。……彼は今更のやうに、自分の彼女に對する心持を反省して見たが、そこには實際愛情と云ふものは少しもなかつた。妙に慾念を引く一種の感覺の魅力はあつたが、併しそれは今思へば、却つて吐きつぽいやうな、顔を反けたいやうな、反撥を感ずるばかりであつた。

『どうして下さるの？……――す、何か好い考が浮ばなくつて？』默り込んでゐる荘吉の部屋に、夜になると彼女はやつて來て、かう詰るやうに云つた。

『…………』

『もうその中叔母に氣づかれてよ。叔母はあれで、五人も子供を生んだことがあるんですもの……』

『…………』

荘吉はその時分には、その出來事にすつかり壓倒されてしまつて、何の考も、何の興味も、他の總ての人生のことについて浮んで來なかつた。彼は敎室で敎師の講義を聞いてゐる中にも、不圖その事を思ひ出すと、もう自分が何を聞いてゐるのだか解らなくなつて來た。敎師も生徒も、餘念なく講義し、餘念なくそれに聞き入つてゐる。誰も自分のやうな心配を心に持つて惱んでゐるものは一人もない。……さう思ふ間にも、自分の意志に反して、此世に生れ出て來るべき一人の人間が、自分の愛しもしない女の肚の中に育つて行きつつある。……それはまるで彼につきまとふ亡靈のやうに、どんな事をしてゐる時でも、起きてゐる時でも、寢てゐる時でも、彼の頭を惱まし彼の心を嚙んでゐた。

『ね、何故默つてゐるの？あなたが御自分で知つてることぢやないの？』益々神經的になつて來た彼女は、或晩喰つてでもかかるやうな調子でかう云つた。『今更知らないなんて云つたつて、知らないで濟ませるものか。――女親一人で生む子はないんですからね』

『何と云ふ下等な物の云ひ方をする女だ！』と荘吉は腹の中で思つた。――彼の心は彼女に對する嫌惡でいつぱいになつた。

そんな時、二人は階下に氣兼しながらも、神經的になつて、いがみ合つた。

『併し冷靜に考へて見よう。……僕等二人の抑々の初めを考へて見よう。僕等は互にほんたうの愛はなかつたんだからね』と荘吉は淺猿しさが胸に込み上げながら云つた。

『そんな事を云つて、逃げようつたつて逃がしはしないことよ。――薄情者！』

『いや、僕は決して責任を負はないと云ひはしない。自分のした事の責任は何處までも負ふよ。……併しそれだけの事ははつきり考へて置いても、僕等が互に愛がなかつたと云ふ事ははつきり考へて置いてもいいと思ふんだ』

だが、結局そんな事は、幾ら爭つて見たところで、同じであつた。二人は神經的になるばかりで、解決はつかなかつた。

『いつそ、結婚しようか？』と荘吉は幾度も考へて見た。けれどもこの女と一緒になつて、長い間、どんな生活が自分に來るのかと思ふと、とても我慢がならなかつた。

或晩もそんな風にいがみ合ひ爭ひ合つた末に、二人は殆んど同時に或恐ろしい事について口を開き始めた。それは長い間二人の心にあつたが、互に云ひ出さなかつたのであつた。が、荘吉がやつとの思ひでそれを云ひ出した時、拒絶するかと思ひの外、彼女は、

『ええ、好いことよ』と直ぐに承諾した。『あたしもさう考へてゐたのよ。でも、一體どうしたらそれが手に入るでせう？』

『…………』

そこに來ると、荘吉はそれを手に入れるのに何のめあてもなかつた。彼の同郷出の醫者や、同年配の醫學生などに相談しようと思つても、それは到底口に出せる事ではなかつた。そして思案に思案を重ねた末、彼はたうとうこんな事を考へ出した。……[illegible]今になつて考へると、その[illegible]の、さういふ方面について實際に無智だつた自分が、どうしてそんな[illegible]の人[illegible]に話すことは出來ない。話[illegible]たところで、結局無駄になるだら[illegible]それより[illegible]、[illegible]たが、[illegible]分それについての知識を持つてゐるだらう……

その頃日本橋の△△町に、さういふ女の群のゐる事を、荘吉は聞いて知つてゐた。彼はそれとなく、さういふ方面の事を知つてゐる友人に頼んで、そこに案内して貰つた。

そこに三四度通ふ中に、荘吉はお仙と云ふ一人の女に眼をつけた。それは年は荘吉と同じ位だつたらう。もう二年間かさういふ職業に從事してゐると云ふのに、何處かに素人臭い初々しさが脱け切らない女であつた。無口で、美人と云ふ程ではないが、厭味のない、感じの好い顔をしてゐた。荘吉はひと眼見た瞬間から、その女が好きになつた。――若し彼がその時におゆみの事で苦んでゐなかつたならば、ほんたうにその女を愛するやうになつてゐたかと、今思ふと荘吉はそんな氣のすることがある。――

荘吉はその女の心をどうかして自分に囚へようと努力した。が、それは思つたよりも容易かつた。――荘吉の心にそんな風な謀みがあらうとは知らない女は、荘吉の擦れない、學生らしい初々しさに、直ぐ好意を持つて來た。五六度會ふ間に、女の荘吉に對する態度に單なる客として接してゐる以上のもののある事を、彼は感ずることが出來た。

それで或晩、荘吉はたうとう思ひ切つてお仙に切り出した。

『僕は君にお願ひがあるんだよ』そんな風に何でもなく口を切り始めたが、彼は胸が躍つて顔を眞赤にしないではゐられなかつた。

彼はどういふやうにその話をしていいか解らなかつた。それで、自分の親友の或男が、或女を姙娠させて困り抜いてゐる。その二人は到底結婚は出來ない。それだから、若し出來る事だつたら、その男を救つてやりたい。……それについて若し手に入り得るなら、女の肚の始末を人知れずする藥が欲しい。それは普通では手に入らない。だから、お仙ち

やんの力を頼りようと思ふのだ。……そんな事を、吃りながら、彼は一生懸命になつて說明した。

けれども彼の一生懸命に粧つてゐる表面の平靜は、彼の心の中のみだれを隱し了せはしなかつた。――お仙はぢつと彼の言葉を聞きながら、彼の顏を見つめてゐたが、

『噓仰被い！』といきなり云つた。『お友達の事だなんて眞赤な噓でせう。あなたの事でせう！』

『…………』

『まあ、あなたと云ふ人は恐ろしい方なのね。見かけに依らない！』とお仙は吐き出すやうに云つた。荘吉はお仙の眼が、その瞬間、見る間に、憎惡に燃えて來た事を今でも覺えてゐる。――彼は自分の秘密を相手に打明けてしまつた今、自分がもう何も取るに足らない、みじめな、たよりない人間であると感じた。彼ははらはらしながら、お仙の様子を見守つてゐた。

お仙は何か考へるやうに暫く無言になつて、天井を見つめるやうな恰好をしてゐた。荘吉もやはり仰向けに寢ながら、天井を見て、お仙が何を云ひ出すかと思つて、おどおどしながら待つてゐた。

暫くして、お仙は云つた。

『あたし、あなたには少しも同情しないことよ。苦しんで、好い氣味だと思つてよ』けれども、その時には、先刻瞬間的に表れたあの憎惡は、彼女の言葉には感じられなかつた。――荘吉はほつとした。此女が急に此世の中で、一番頼りになる人間のやうに思はれ出して來た。

『けれども、氣の毒なのは、その女の方よ。……あなたは何故結婚して上げないの？』

『それは僕のほんたうの間違ひからだつたんだよ。――ほんたうに愛してはゐなかつたんだよ』

『ほんたうに愛してゐないつて、それなら何故初めそんな風になつたの？……男つて、みんなさうよ。みんなそんな風に女を玩弄犬と思つてゐるのね……』

『……………』

お仙は深い溜息をひとつした。

『あたしはあなたには同情しないけれども、あなたのやうな男にかかつたその女の方が可哀さうだから、それはあなたのお頼みのものは持つて来て上げてよ。……あたしは此處から歸りには、いつでもお醫者に寄つて行くんですからね。あたし達なら、どんな事を云つたつて大丈夫ですからね。……自分の事にして、しやうばいに差支へると云へば、十分理由になりますからね。……でも、その女の方は得心なの？』

『ああ……』

『まあ、折角出來た子供を……』お仙は又深い溜息をした。『それをそんな風にするなんて、餘つ程の決心よ。……あなたなんかにはさういふ女の苦しみは、とつても解りはしないことよ』

『そんな女ぢやないんだよ……』と莊吉はおゆみの顔を思ひ出しながら云つた。

『直ぐそんな風に男の人と云ふものは、女を輕蔑するのよ。……だけれど、そんな風に考へてゐるから間違ひが起るんですよ。』そしてお仙はぐるりと彼の方へ向き直つて、『もう今度二度とそんな事はないとお誓ひなさい』

『……………』莊吉は伏眼になつて、うなづいた。

お仙は優しい顔をして、まるで弟にでも對するやうに、伏眼になつてゐる莊吉の額のあたりを靜かに撫で始めた。

『でも、可哀さうね、あなたも』と彼女は云つた。『もうそんな事をくよくよ思ふんぢやありませんよ。――ね、そして

勉强するんですよ』

それが荘吉には妙に擽つたかつた。と同時に、又不思議なことに、何か柔かな絹の布で心をこすられるやうな氣がして、彼の眼にはほろりほろりと涙が流れて來た。

『まあ、泣いて』彼女はかう云つて、笑ひ出したが、急に今度は自分もしくりしくりと泣き出した。荘吉は呆氣に取られて、彼女を見守つた。

お仙は默つて、啜り泣いてゐたが、やがて堪らなさうに、顔を枕に埋めて、身體を震しながら泣き始めた。——彼女はかなり長い間泣いてゐた。が、顔を上げると、額にかかつた髪の毛を掻き上げながら、

『あたしそれは淋しく悲しくなつて來たのよ。あなたの事や、その女の方の事を考へてゐる中に、自分の昔を思ひ出したの。……あたしこんな風なしやうばいを始めてからは、誰にも話した事がないのよ。ほんとうに誰れにも話さうにも、そんな事をしんみになつて聞く人つてないんですものね。……あなた聞いて下さつて？』

『…………』荘吉はうなづいた。

お仙はふところをごそごそ云はせて探してゐたが、やがて丁寧に紙に包んだ一枚の寫眞を取り出して見せた。荘吉はそれを手に取つて見ると、二人の制服を著た大學生の寫眞であつた。

『もう四年ヶ前の事よ』とお仙はその話をし始めた。

『荘吉は今になると、お仙のその話を詳しくは記憶してゐない。けれども、その大學生の家の隣りにお仙の兄の家があつたらしい。お仙はその大學生の家の二階が、その大學生の居間になつてゐて、彼女は兄の家の屋根の物干臺に昇つて行つては、そこで手紙のやり取りをし始めた時の事から、二人がたうとう駈落するまでの事を、ところどころ啜り泣いたり

溜息したりしながら話した。――それも世間にざらにある戀のいきさつ以外に一歩も出てゐないものではあつたけれども、莊吉には、自分とおゆみとの關係から較べれば、比較にならない程、お仙とその大學生との間が、美しく考へられた。

『その人の家はその邊での大家だつたんですよ。ところが、隣りでも、あたしの兄の家は、小さい菓子屋だものですからね。――どうしても先方の家で、ゆるして呉れませんのよ。その人は表面勘當と云ふ事になつてしまつて、それであたしと一緒に戸塚の源兵衛村……御存じでせう。あすこに家を持つてゐたんですよ。その人のお父さんは非常に立腹してゐるのに、お母さんが割合に解つた方で、お父さんに内密でお金を送つて呉れたり、品物を送つてくれたりしますの。ええ、時々は御自分でもお父さんに内密で、そつと訪ねていらつしやつて、あたしにもそれはそれは優しい言葉をかけて下さるんですよ。時期を待つて呉れつて……あたしいつでも嬉し泣きに泣いたものよ。……その人はやはり學校に通つてゐましたの。神田の△大學なんですよ。――そして學校さへ卒業してしまへば、自分の思ひ通りになるし、若し父がどうしても勘當をゆるさなかつたら、家に歸らないで、自分で働くだけの事だつて云ふので、あたしほんたうにどんなに樂しみだつたでせう』とお仙は溜息した。『その時分はほんたうに幸福でしたわ。……近邊の人達にもそれは羨まれた位よ』

『…………』

『ところがね』とお仙は急に聲を落したかと思ふと、急にわつと泣き出した。『卒業前になつて急に病氣になつて亡くなつてしまつたんですよ。前には身體は丈夫だつたんですけれども、丈夫だけ尚いけなかつたんですつて。年頃も、丁度惡い年頃なんですつて。肺病ですの。』

『だけれどね、あたしあの時位、口惜しい思をした事はないわ。葬式はあたしだけで、ほんとに自分の心だけで濟ま

し、源兵衛村のその小さな家から出したいと思つてゐたのに、お家の方から人が來て、無理やりに死體を持つてつてしまつたんですもの。――あたし口惜しくつて、棺に獅嚙みついたんですよ。それがお父さんの命令なんですつて。――直ぐお母さんがいらつしやつて、あたしをいろいろ慰めて下さつたので、やつと承知しましたけれど、お父さんと云ふ人は何と云ふ殘酷な人でせう。……それにお父さんの命令では、あたしが葬式に行く事はならないつて云ふんですつて。「家名が大切だ」つて云ふんですつて。……でも、これだけはお母さんが取りなして下さいしましたけれどもね。でも親族席には入れずに、町の人達と一緒に、ただの他人が會葬する中に交らされたんですよ。家名が大切だと云つたつて、町の人で、あたしとの仲を知らない人はないんぢやありませんか。みんながあたしに同情して、あたしのために泣いて吳れましたよ。……あたし途々泣き通したんですよ。神田から谷中まで。……見つともないなんていふ考はなかつたわ。そして燒香する時には、たうとうに泣き倒れてしまつたのよ」

お仙は又暫く枕に突伏して、身體を震しながら泣いてゐた。お仙がその邊の話をする時には、もう夜が明けかかつて來てゐた。彼女は一睡もしないで、話しつづけてゐたのだつた。莊吉はすつかりセンチメンタルになつてゐた。そこから四五町と離れてゐないところに隅田川が流れてゐた。船の汽笛の音がぼう、ぼうつと聞えるのを、莊吉は身に染みて聞いたのを覺えてゐる。

それから彼女は、どうしてかういふやうなところに來るやうになつたかと云ふ事について、細かい事を語つたが、莊吉は今はよく覺えてゐない。戀人に死なれると、再び兄の家に引取られて行つたが、死んだ戀人の家が直ぐ隣りだといふ事が、彼女に始終いろいろの苦しさを感じさせたらしかつた。それも一つの原因には違ひなかつた。それから、兄の口から勸められた緣談が煩さかつた事も、又もう一つの原因には違ひなかつた。……彼女はさうしてゐる内に、兄の家

を飛び出した。それからどんな風になつて行つたか、それは今莊吉には思ひ出せなかつた。

『ですから、女の心と云ふものは、ほんたうに大切にしてやらなければ可哀さうですよ』最後にお仙がかうしみじみと云つた事を、莊吉ははつきり覺えてゐる。――『それもあたし逹のやうに、こんな風に身を持ち崩してしまつて、こんなしやうばいをしてゐる女は別ですが、堅氣な素人の人の心は、ほんたうに大切にしてやらなければなりませんよ』

午前八時になると、彼女はその家から歸つて行かなければならないのが、規定だつた。

『たうとう一睡もしなかつたわね。――ではあなたはもう少し寢てゐて頂戴。――一度歸つて、十時頃に又まゐりますからね。お醫者からあれを貰つてね』さう云ひながら彼女は起き上つて、大學生の寫眞をふところにしまひながら歸つて行つたが、約束通りに、十時頃になると、莊吉が望んだものを持つて來て呉れた。

莊吉の胸は何かの感動にいつぱいだつた。彼の心には、お仙の云つた『女の心と云ふものは大切にしてやらなければならない』と云ふ言葉が、刻み込まれてゐた。彼は女に別れて、その家を出ると、眩しい日光の照つてゐる町を、とぼとぼ歩いて行つた。彼は胸に溢れてゐる感激のために、電車に乘る事も忘れて、日本橋の通まで、ぶらぶら歩いてしまつた。

彼には自分の醜さが堪へられなくなつて來た。お仙に對して自分の心持が恥ぢられて來た。――さうだ、女の心持と云ふものは大切にしてやらなければならない。

『俺はおゆみと結婚しよう。いや、どうしても結婚しなければならないのだ。』さういふ考が、彼の心に迸つて來た。『自分の犯した罪だ！　自分で穫り取らなければならない』

おゆみの顏が彼の眼の前に浮んで來た。併し彼はたとへおゆみがどんなであらうとも、受けべきものは自分が受けな

ければならない、さう決心した。――そしてお仙に貰つたあの紙包を、彼は日本橋の橋の上から、川の中に投げ捨ててしまつたのだ。……

…………………………………

その時の光景が、今莊吉の眼の前にありありと浮んで來た。

彼は眼をつむりながら、その全體の意味を考へ始めたが、何よりも一番先に浮んで來るのは、苦笑であつた。

彼はあれきり二度とお仙と云ふ女に會はなかつた。彼は禮にさへも行かなかつた……が、あの時に自分の感じたあの感激は？　そしてその感激から決心したその後の自分の結婚生活は？

さう考へて來ると、莊吉には何も彼もが解らない、頭がぐらぐらするやうな氣がするのであつた。お仙の物語、と云ふよりも、お仙と云ふ女の純な感情から受けた感激そのものには、嘘もいつはりもない。そしてお仙が純な感情の持主である事、ああ云ふ境涯に身を置きながら、少しも汚れない心を持ちつづけてゐると云ふ事が、自分を感動させたと云ふ事には何の無理もない。……併しその感動が自分に生んだ結果は、一體どんなものだつたか？

莊吉は嫌惡と嘔きつぽいやうな心持とを以て、自分の結婚生活の狀態を顧みた。

『感激が、若しそれだけで、物に解決を與へる力があるならば……』と莊吉は考へた。『ところが、實際の生活に入つて來ると、それはほんの一ケ月も、いや、一日も、いや、一分間もつづきはしなかつたのだ。いやいや、最初から一秒間も實際の上に當てはめて見て續くものではないと云ふ事が解つてゐたのだ。……それだのに、つづくものと思つてゐたのだ。あの感激の美しさに、つづかなくなつてゐる事を心の何處かではちやんと知り拔いてしまつてゐる時にも、尙つづいてゐるやうに思つてゐたのだ。さう思はなければ、自分が醜く見え過ぎたのだ……』

再び苦笑が彼の頬を歪めさせた。

『併し若しあの時、日本橋の橋の上からあれを捨てなかつたら？』と荘吉はそれを思つた。彼の魂がひやつとした。彼は自分の側にすやすやと眠つてゐるきみ子の寝顔を見守つた。『若しあれがあのままおゆみの口に入つたら、此小さな存在が今ゐないのか』

何だか夢のやうな氣がした。實際にそんな事があり得るのだらうか。此小さな、今何も知らないで眠つてゐる子供が、此世に生れなかつたと云ふ事が。――荘吉は再ひやつとした。そんな風に考へて來ると、此小さな存在がゐないと云ふ事は、彼には堪らない氣がする。――たつたあの時の心持ひとつで、さう思ふと、日本橋の橋の上から紙包を投げた時のあの感激に、やつぱり感謝したいやうな氣がする。

けれども、彼の心持の中には、それとは又反對の考も浮んで來た。

『一體この子が生れなかつたら、その時はどうなる？』――若し生れなければ、自分は此子に對する今の愛情――きづなは感じなかつたらう。自分の生活全體が變つてゐたらう。おゆみとの結婚生活はなかつたらう。

『このきみ子自身に取ても、生れたのが好かつたのか悪かつたのかは、實際のところは解りはしなかつたのだから――』

何も彼も投げ出したいやうな彼の或氣持が、こんな事までも呟いた。――今は未だ子供だから解らないだらうが、もう少し物心地がつき始めたら、父と母との不和が、このきみ子の心に感じられて來るだらう。それから長ずるにつけ、人生のいろいろな事が、後から後から彼女を試驗するだらう。……そして一體何を感じて行くか？

荘吉は自分の眼に見える人生を考へた。退屈と苦痛との外何もない。……時々ちらちらと光らしいものが見えるかと思ふと、いつもそれは空しい幻影に過ぎないのだ。

荘吉は仰向けになつてゐる頭を、枕に擦りつけるやうにして振つた。後腦の奥がじいんと鳴てゐるやうな氣がした。

『併し又、一方から考へると、子供は子供で新しく此人生を感じて行くかも知れない』と荘吉は悲しい心持になつて考へた。『或はこれからの子供は自分などよりももつと聰明かも知れない。父や母の陷つたやうな人生の過誤には、陷らないかも知れない。自分たちの苦痛と思つてゐることは、次の時代の人間には苦痛でも何でもないかも知れない……』

が、それにしても、せめて子供に、家庭の佗しさを感じさせないのは、親の義務ではないか？

『それならばと云つて、どうしたらいい？――さう思つたからとて、今の生活がいきなりうまく行くものではないではないか？』

荘吉の頭の中は千々に亂れて來た。動きの取れない渦卷の中にあるやうな氣がした。何か子供がいとほしくて堪らなくなるかと思ふと、それと反對に總てのものが呪はしくなつた。――『墮胎が何で罪惡だ？』こんな考へさへも浮んで來た。『ほんたうの苦痛と云ふものに較べれば、何事が罪惡の名に値するか？』――が、それから先は何か頭が疲れたやうな氣がして、もう考へる事が出來なかつた。

澁い顏をして、彼は蚊帳の天井を見つめてゐた。

六

おゆみの足音が聞えると、荘吉は起き上つて、長火鉢の側に坐り直した。――彼女は湯で上氣した頰に、こつてり白粉をつけて這入つて來た。

『きみ子は寢てゐますか？』さう云ひながら、『今氷をさう云つて來ましたから……』

『………』莊吉は少し歸りそびれたやうな氣がしながら、默つてゐた。彼は默つてふところから金入を出して、その内からその月の生活費を取り出して、長火鉢の猫板の上に置いた。

おゆみは襟をはだけて、ばたばたと大袈裟に胸に團扇の風を送つてゐたが、横眼でちろりとその金を見ながら、

『あなた、あたし思ひ切つて仕立物を取らうかと思ふのよ。――あなたも大變だらうと思つて』

莊吉はその言葉の裏の意味が直ぐ解つたが、知らない顏をしてゐた。無性者で、季節間近になつて、慌ててその支度をするやうなおゆみに、そんな甲斐々々しい事が出來るものでない事が、莊吉にはよく解つてゐた。

『きみ子の着物も買つてやらなければなりませんし、あたしも欲しいものがあるし』と一寸言葉を切つて『それからあなたの着ていらつしやる夏羽織だつて、肩がそんなに色が變つてゐるぢやありませんか』

『俺の夏羽織なんか要らないよ』と彼はぶつきら棒に答へた。

『だつて……』

莊吉が苦り切つた顏をしてゐるのを見ると、おゆみは今度は何と云ふ事もなく、おほほと笑ひ出した。そして、『ね』と少し甘えるやうな聲を出して、『あなたがいらつしやらないと、それや淋しいのよ。――あのう、今夜は泊つていらつしやるでせう?』

莊吉はおゆみが、妙にしなを造つて、首を傾けてゐる樣子を、その方を見ないでも身體に感じた。彼女の眼が肉慾の光を帶びながら、彼の顏をぢつと見守つてゐるのを感じた。――莊吉は胸の底から、むらむらと嫌惡の情が込み上げて來た。

『俺は歸る』さう云つて、いきなり彼は立上つた。

『まあ』とおゆみも立上つて、手で彼を押止めるやうにした。

『忙がしいのだ』と彼はぶつきら棒に云つた。

往來に出ると、莊吉は救はれたやうな氣がした。――夜の風が肌にひやひやと快かつた。

彼は一切のものから脫れたいと云ふやうな感情に駈られてゐた。何も彼もが、彼には刺戟が強過ぎる氣がした。何も欲しくない。ただ一人になりたい。――その一日の出來事だけでも、彼の心は堪らなく疲れる氣がした。

いつ子の事が心に浮んだ。併し彼には戀愛も今は重過ぎるやうに思はれた。――彼は唯ひたすらに下宿のあの部屋、自分ひとりの部屋がなつかしかつた。そしてそこでゆつくり休息したかつた。(十一年三月)



或る一族のこと

相馬泰三

一

おかみさんは先のおかみさんの實の子、それから、おひでさん——あの娘さんは養女で、先のおかみさんの弟の子だから、あの二人は姉妹とは云ふものの、本當はいとこ同志なんです。しかし、また、おひでさんがあのおかみさんの相續人になつてゐるんだから、實際は親子のやうな關係でもあるんです。

たしか、おかみさんの二十歳の時でしたか、一度養子を迎へたんですが、運惡く、その人は滿一年としないで、病氣で亡くなつてしまつたんです。肺がいけなかつたんだとかいひますが、やつぱり、その人の病氣が傳染つたんでせうかね、おかみさんは、その後、兎角身體の具合がよくなくつて、長いことぶら／＼してゐましたが、それつきり、そんな談も持上らず、可哀さうに、とうとうずうつと後家で通してしまつたんです。それに大體がああいふところの人に似合はず堅い、へりくだつた、つましい性質で、仕やうと思へばどんな事でも出來る身分でありながら、いい物を着るぢやな

じ、うまい物を食べるぢやなし、物見遊山に出かけるぢやなし、一年ぢう、ああやつて朝からばんまで、奉公人たちと一しよになつて家の中を彼方へ此方へでんてこ舞ひをしてゐるなんて、他人様のことながら、あれぢや、全く何のための生涯だつて云ひたくなりますね。しかし、人間は誰でもめいめいに授かつただけのことしか出來ないんだとも云ひますから、何も約束ごとと思へば、まあ、それまでのものではありますが。

大きな聲ぢや云はれませんがね、あの人は、先のおかみさんと甲子樓（作者註、貸座敷や人の名前は勿論のこと、それから土地や町も、譯があつて、あつちこつち取りちがへたりしてあります。）の主人のあいだに出來た不義の子なんです。でも、感心なものぢやありませんか、どんな按梅にどう運びをつけたものか、とにかく表向き誰にも知らせずに片をつけてしまつたんだつて云ひますから。さういふことつて、どうして／＼並大抵な苦心ではうまく遣りおはせられるものぢやありませんよ。

そんな譯で、あの人は甲子樓の方の子として屆出され、そのまゝずーつと十歳になるまで目黒の百姓家へ里子にやられてゐたものなんです。ところで、さすがに豐川樓の主人――先のおかみさんのつれあひ――だけはその一部始終を知つてゐたらしいんです。そりや、さうでせうつてさ。魔法でも使はない限り、いくら何でも、さうでないつて答はありませんからね。それで、何もかも知つてゐて知らん顔をして、隱さうとしてゐるものに默つて隱させて置いたんですね。そして、今のおかみさんが目黒の百姓家から戾つて來た時、不憫に思つて、自分たちの間に子供のなかつたのをいいことに、自分から申し出て養女に貰つてやつたものなんですね。さうして置いて、どうです、自分が死ぬ時に（豐川の主人は早死で、今のおかみさんの十五歳とかの時だつて云ひますから、たしか、四十三歳だつたでせうよ）先のおかみさんと今のおかみさんを枕もとへ呼び寄せて、「お前たちも女二人つきりで、何にかにつけて賴りないことだらうから、

私からも呉れ〴〵も頼んであるが、これから先きは、甲子の主人を私と思つて心置きなく面倒を見て貰ふがいい。」つてね、さう云つて息を引取つたんですつて。まあ、なんて思ひやりのある、すゐな人だつたんでせう！　そりや、當節の開けた人達の眼からは何と見えるか知れませんが……なるほど、當節は何でも議論々々つて議論が先きですからねえ、え、え、さぞ、やかましい議論のあることでせうつて。しかし、私たちのやうな舊弊な考のものには、それだけのことを聞かされただけで、もう、何ともいへず有難くつて、蔭で拜んであげたいやうな心持ちがしますよ。そして、何よりも先きに涙がこぼれて來ます。

二

豐川の主人は奥村篤二郎つて云ひましたが、生れは三州ですつて。乾物やさんとか、漬物やさんとかつて云ひましたつけ、何でも商人の家に生れたんだが、商人になるのが嫌さに、十七歳の時とかに江戸へ出て來たんださうです。はじめは御家人の株を買つてお屋敷奉公をする考だつたんだ相ですが、どう心變りがしたものか、今度はまるで似てもつかない、吉原へ行つて、いきなりお女郎屋の仲どんに住みこんだものなんですね。それが、それ、あの豐川の奥の離れに長いこと厄介になつてゐてつゐ三四年前に失くなつた吉岡のおばあさんつて云つた人の嫁入り先きだつたんですつて——さやうさ、御維新の少し前だつていひますから、今からざつと六十年ばかりも前のことになりますかね。

因縁つてをかしなものぢやありませんか、あのおばあさんは甲子の主人の實の妹でせう、それに、甲子の主人もその頃はまだ矢崎伊之助の名で吉原の名主をしてゐたんですからね、豐川の主人と甲子の主人とはその時から、もう知り合ひだつたに相違ないんです。

吉岡の家は代々の質屋で、もとは相當裕福に暮してゐたんだ相ですがね、あのおばあさんのつれ合ひといふのが仲々の道樂者で、あげくの果てに、とうとう代々の家業をやめて吉原で貸座敷をはじめることになつたんです。ところで、どうでせう、主人自身が巧く嫖客に化けて登りこみ、藝者だ幇間だつて馬鹿つ騒ぎをやらかし、さうして置いて、翌る朝になつて、「わからなかつたのかい。俺だよ。はゝゝゝ」といふ始末なんですつて。それがしよつちゆうだつたんだつて云ひますから、所詮、長續きのしやう筈がありませんや。何でも、はじめてから二年とか三年とかしないうちにすつからかんになつてしまつたんですつて。——こんなお話しをしたつて、あなたがたには本當にお思へになれないか知れませんが、むかしは、よくさうした馬鹿な眞似をする人があつたものなんですよ。もつとも、考へてみりや、親の躾け方からして、當節とはまるつきり違つてゐますからね。その人の父親さんなんかも隨分變つてゐた相で、自分の子供を稚丁奉公に出して置きながら、店のしまひ時分になると、毎晩のやうに出かけて行つちやそうつと自分の子供を呼び出し、お腹をへらしてゐるだらうつてんでお壽司とかおそばとか何かしらさうしたものを食べさしてやらないと、氣がかりで寢付かれなかつたんだ相です。そして、また、朋輩たちから少しでも自分の子供を大事にして貰ひたいばつかりに、主人に内緒でその人達に使ひものをしたり、かはるがはる御馳走をしてやつたりしたものなんですつて。……しまひに、それが主人に知れて、「さういふ子供は家に置くわけにゆかない。」つて、とうとう御拂箱になつてしまつたんだとかいふことです。……さう、さう、その吉岡のだんなが丁稚奉公にやられた家が、あの講談や落語になつてゐる「ちぎり伊勢屋」なんだつていふことですよ。へえ、あの「ちぎり伊勢屋」のはなしをご存知ない？　さうですか。私は、また、いつだつたか、芝居にまで出たことがありますよ。伊勢屋つて淺草の方の大きな質屋なんですがね、そこの悴が、或る日、ぶら〳〵歩いてゐると、大道に店を張つてゐる占ひ者がゐたんで、冗談半分で觀て貰うと、何でも、その占ひ者が

「ああ、お可哀想に、あなたの寿命は今晩つきりだ、明日の朝までとは保たない。さういふ相が、あなたの顔にありありと現はれてゐます。」こんなやうなことを云ふんです。そんなことを云はれて、誰しもいい気持ちのするものはありません、その倅さん、すつかりしよげてしまふんです。そして、吾妻橋かどこかで身投げをしやうとしてゐる娘さんに出つくはして、その人に自分の持つてゐただけの金子を全部やつてしまふんです。(何でも、その時、何かの譯があつて、どこかへ届けなければならない金子を、かなりどつさり懐中してゐたんですよ。)しかし、そんなことでは心が安まらず、それから、吉原へ行つてやけ糞のどんちやん騒ぎをするんです。そして、翌朝、眼が覚めてみると、自分が死んでゐないんで、倅さんはほつと安心すると同時に、「さては、一ぱい喰はされたか!」と、ひどく口惜しがり、ぷん〳〵怒りながら昨日の占ひ者のところへ行つてみると、今度は「ああ、不思議なことがあればあるものだ! 昨日とは打つて變つて、あなたには非常に目出度い福祿長壽の相があらはれてゐます。これはあなたが昨日人の生命を助けたので、その酬ゐで誰かあなたの身代になつたものがあるに相違ありません。」こんなふうに云はれるんです。それで、何かして昨日の娘さんの住み家を探し出し、どうとやらで、二人が夫婦となる、……何ですか 私も、ところ〳〵忘れてしまひましたが、たしかそんなやうな筋でしたよ。……だが、まあ、とんだところへ話しが外れてしまひましたね。

吉岡の家が吉原に居られなくなつて、夜逃げ同様にして品川へ引移つて來た時、どういふ譯だつたか、豊川の主人もやつぱり一しよに随いて來たんです。さういへば、あの吉原の名主だつた矢崎伊之助さんがこつちへ――甲子樓へ養子として乗り込んで來たのも、たしか、ちやうどそれと一しよ時分のことだつたでせうよ。

え? その矢崎つて人が、なぜ、また、甲子樓の養子になんかなつたのかつておつしやるんですか。さあ、それは私もよくは知りませんが、何でも、淺草の方の質屋で甲子の遠い親類にあたる家が一軒あるんです、それが同業のよしみ

で吉岡の家と若干かの交際があつたものとして、多分、その邊からそんな談が持上つたんでせうよ。ちやうど御維新で名主がお廢しになる。財産はない、それに、あの人は親も何もない、ほんの獨り身だつたつて云ひますから。何にしても、その時分、品川の甲子樓といつたら、そりや大した勢ひのもんでしたからね、あの人も、さぞ、みんなから羨ましがられたものだつたんでせうよ。

それに引きかへ、豊川の主人の方は、吉岡の家を離れて後も、ほかに何を初めやうといふこともないので、やつぱり、よそのうちで廊下を周つてゐたんだ相です。しかし、二三年もさうやつて辛棒してゐるうちに、いくらか金子もたまつたし、それに、いつまでもそんな詰らないことを續けてゐるでもないつて云ふんで、甲子の主人の助力などもあつて、小さいながら、新規に貸座敷を一軒開くことになつたんだ相です、豊川つて名ですか、あれは、何でも、あの人が郷里にゐた時分、豊川樣を信仰してゐたんで、それにちなんで付けたんだとかつてことですよ。その時、世帶をもつにつけて女房がなくつちやといふんで、これも甲子の主人の世話でもと甲子の抱だつた藝者で府中へ稼ぎに行つてゐたのを急に連れて來て一しよにさせたのが、それ、あの先のおかみさんなんです。

豊川の主人が二十六歳、先のおかみさんが二十二歳、それから、甲子の主人が四十歳、……こう年を繰つてみると、さやうさ、その翌々年に今のおかみさんが生れたことになつてゐますね。ぢや、甲子の主人と先のおかみさんとの關係は、一體、いつ頃からだつておつしやるんでせう？　さあ、困りましたね、さういふことつて、本人同志のほか、はつきりしたことは云へるもんぢやありませんよ。しかし、先のおかみさんが甲子の抱へだつた時分に初まつたことに相違ありませんよ。そのために家の中がごたごた揉めて、多分、それで、府中へなんか行くことになつたんでせう。そして、今度、久しぶりで會つたので、道ならぬこととながら、またよりが戻つたとでもいふところだつたんでせうね。

三

豐川の主人の三週忌がすんだあとで甲子の主人は、またもとの矢崎伊之助の名に歸つて、ひよつこり豐川樓へ入つて來たんです。どうお思ひになりますか？　え？「それでは先のおかみさんとの關係が、あれ以來ずうつと續いてゐたんだらう。」つて、まあ、滅相な！　そんな箆棒なことがあつてたまるものですか。それぢや、あんまり可哀相です、私にいはせれば、今のおかみさんの生れた時のことは、あれは、ほんの一時の迷ひ、――よく、魔がさすといふことを云ひませう、あれだつたんだと考へてやるのが一番いいんですよ。それにまた、六十歳にもなつて、（たしか、あの時は、ちやうど六十歳だつたとおぼえてゐますが）つれあひとの間に二十五歳をかしらに五人もの子供のある一家の主人が、何で色戀でよその家へ入婿が出來ませう。私には、はつきりと口に出しては云へませんが、甲子の主人のあの時の心持つてものは、ちやうど、死んでゆく時の豐川の主人の心持ちとそつくりだつたんではないかなんてね、よくさう思ひ思ひするんですよ。だつてね、まあ、お聞きなさいよ、あの時分は、豐川樓には借金が山ほどもあつたんだし、（豐川の主人は失くなる五六年前に、大變な元氣で、素晴しく立派な普請をしたんです。そして、それが出來上ると間もなく火事で燒けてしまつたんです。）人手が足りないところへ持つて來て、吉岡のおばあさんが末娘をつれて轉げこんで來てゐたり、また、先のおかみさんの身内の方で物入りなことがあつたりして、ひどく困窮してゐる最中だつたんです。……だが甲子の主人も感心な心がけの人ぢやありませんか、甲子からは錢一文、着換一枚持ち出しては來なかつたんだ相です。それこそ、裸一貫、腕一本でつぶれかかつた家を立てなほし、途方に暮れてゐる人たちを救つてやらうつて云ふんですからね。

私があの家へ初めてやりてで雇ひ入れられたのは、ちやうどその時分のことなんです。忘れもしません、四十二歳の六月、いろんな馬鹿をし盡した揚句のこと、上州から出て來て、私は吉原へでも住み込まうと思つて（やりての鑑札はもう、ずうつと前から持つてゐましたからね）。淺草の方の安はたごに泊つてゐたんです。そして、まあ、自棄糞ぢやありませんか、一文無しになるまでつて云ふんで奉公口を探すかはりに、毎日のやうに江川の玉乘りを見に行つたり、芝居を立見したり、方々食べ歩いたりしてゐたものなんですね。すると、一週間ばかりして、二三日續けて、宿のものが私に、「あなたのお出かけのあとで、今日も昨日と同じお客樣がお訪ねでございますよ」つて云ふものだから、四日目だつたかに終日そとへ出ないでゐると、そのお客つて云ふのがお午ちよつと過ぎ位にやつて來て、品川のこれこれの樓で至急に一人欲しいつて云つてゐるんだが、一つ行つてやつては呉れませんかつて、それは口入屋さんだつたんです。「いつから？」つて私が訊ねると、その人は、「あなたさへよければ、直ぐ今、これから！」つて云ふんでせう、それで私も、「なあに氣に入らなかつたら、出て來るまでのことだ。」つていふんで、詳しい話も何もなしに、そのまま、人力車をさう云つて貰つて出かけたやうな譯だつたんです。ところで、先方へ着いてみると、まあ驚いたぢやありませんか、帳場に、お浦さん——先のおかみさんと矢崎のだんな——甲子の主人がちやんと坐つてゐるんですものね。お互ひに、「まあ！」「まあ！」とばかりで、暫くは挨拶も碌々出來ないといつた始末なんでせう。……いきなりこんなふうに云つたんぢや、何の事かさつぱりおわかりにならないでせうがね、私は、矢崎のだんなには子供の時分吉原で、それから、先のおかみさんには十七八歳の頃島原——今の新富町でお目にかかつて知つてゐたんです。それどころか、先のおかみさんとは同じ家で一年あまりも一つ釜の飯を食べてゐた間柄だつたんですもの。そんなわけで、目見えも、へちまもあつたものでなく、ちやうど嫖客がたてこんでゐたところだつたので、碌すつぽお茶も頂かずに、いきなり二階へ上つ

てしまつて、そして、そのままずうつと十五年の間、一日の代りも入れずに、あすこの家で勤めてしまつたんです。

私の身の上ばなしですつて？　さあ、さうですね、序だから、一つ聞いて頂きますかね。私のお父つあんといふ人は、お本丸へ上つてゐたお坊主だつたんです。家は講武所のわきで、あの梅干で名高い小田原屋（今も盛んにやつてゐますね）の隣だつたんです。自分からさう申しちや何ですが、お坊主なんてものは、そりや贅澤な暮しをしてゐたものなんですよ。おかげ樣で、私なども、お父つあんの生きてゐる間は、華族がたのお姫樣つたつてないやうな育てられ方をしたものなんです。私は、今でも忘れませんがね、夏になると、普段に絽の着物に絽の帶をしめさせられたものです。住ひでも庭でも、そりや數奇をこらしたもので、講武所で何かあつて將軍樣がおでましになると、いつも私の家へ立寄つてお小休みをしていらしつたものなんですよ。私どもにはよくは解りませんが、お坊主つて餘程變つてゐるお役だと見えて、方々から、年中おつかひ物が絶えないんです。おつかひ物で思ひ出しましたが、加賀樣のお雪獻上（毎年、土用になると、加賀樣から將軍家へ雪を上げるのがならはしになつてゐたんです）の時などには、そのお裾分けをして貰はうといふ運動なんでせうかね、家の門口へ諸大名からのお使者が入れかはり立ちかはりやつて來たものなんです。……だが、それもこれも、私にとつちやほんの束の間の夢だつたんです。七歳の秋にお父つあんが失くなる、その翌年の春、いわるな兄さんのために吉原へ禿に賣られてしまつたんですもの。それから半年ばかりして、叔父さんがそれを聞きこんで私を迎へに來てくれましたが、人でなしの兄さんは、直ぐにまた、今度は洲崎へ私を連れて行つたんです。それがもとで、私はとうとう一生涯（さうです、まあ、一生涯つて云つてもいいんでせうね）廓といふものから足を洗ひきることが出來なかつたんです。そりや、私に意氣地がなかつたからだと云つてしまへば、それつきりのことぢやありますがね、私は、時々、自分の身ぢめた身の成り果てを考へるたんびに、それにしても兄さんの仕打ちがあんまりだつ

たと、いつも〳〵怨めしくなるんですよ。ほんとに。

十七歳の時、島原の藝者屋へ女中奉公をすると、そこの家にお浦さんがゐたんです。私より一つ年下の十六歳で、一本になつたばつかりのところでしたが、さあ、あんまり賣れつ兒といふ方ではありませんでしたね。その後間もなく島原が引拂ひになり、それと一しよにお浦さんは品川へ、私は吉原へ二人は別れ〳〵になつてたんですが、それから二十年あまりしてひよつこりめぐり會つて見れば、一方は痩せても枯れても貸座敷のおかみさん、一方は着たつきり文無しのやりてばばあつて云ふんですからね。さまあありませんやね。

え？　その二十何年の間を、私がどこでどんなことをしてゐたかつておつしやるんですね。詳しいお話しは出來ません。後生だから、根堀り葉堀り訊ねないで下さいな。なぜつて、私は、あの時分のことを考へると、それだけで、もう、人樣に顔向けもならないやうな氣がしてゐるんですから。情けなくつて！　耻しくつて！

え、一度、亭主を持つたことがあります。しかし、その人とは、間もなく別れてしまひました。人の妾になつたこともあります。情人とかけ落ちみたいな眞似をしたこともあれば、また、一度なんか、ならずものに引つかかつて、その男の爲めにお女郎に賣られたこともあります。と思ふと、身受けされる、捨てられる、やりてになる。田舍へ落ちて酌婦になる、……これだけ聞かしてあげただけで、大抵な人は呆れ返つて顔をそむけてしまひます。そのかはり、堅氣の女の思ひも寄らないやうな贅澤な眞似もしてみましたよ、さうさう、その贅澤な眞似で思ひ出しましたがね、ある人のお妾をしてゐた時のこと、五月の初め頃でしたか、何でもまだ袷を着てゐた時分でしたよ、或る日、呉服店から私の夏の仕度だと云つて簞笥に一棹ほどの衛物がとどいたんです。その中に眞白な絽の蚊張が混つてゐたので、私が面白がつてそれを釣つてみたものなんです、そしてその中へ入つてみて、何氣なく、「こうやつて、この中で、水貝かなんかで一杯

やつたらどんなにいい氣持ちでせう！」と云ふと、それをそばで聞いてゐた旦那が、「それぢや、さう思ふそのこころの消えないうちに、さうやつてみたらよからう」つて云ふんでね、それから、女中を魚屋へ走らせて趣向を整へ、お注文通りにちびり／＼やり初めたものです。ところが、つい飲み過ごして、いつとはなしに、いい氣持ちでそこへ醉ひつぶれてしまつたんです。そして、夕方になつて眼をさましてみると、それもやつぱりその日に出來て來た物に入つてゐたのだつたでせう、仕立おろしの、眼のさめるやうな美い柄の八たんの小がひまきが、私の身體の上へ、ふわりと着せかけてあつたんです。……

だが、その時分の私には、人の情けとか、それから、物の有難い、勿體ないといふことが少しもわからなかつたんですからね。よく冥利がつきるつてことを云ひますが、その通りです。一旦向いて來た好運でも仕合せでも、さういふ人には長く付いちやゐません。いつとはなし、また、先方からどんどん逃げて行つてしまふんです。そればかりか、ああ！ 酬ゐといふものほど恐ろしいものはありません。私が、この年齢になつて身寄つちやなし、定つた死場所さへもなくこうやつて今だに他人様のご厄介になつてゐるのも、みんな、いろんな男を騙したりした（そりや、男からも騙されましたが、また、こつちからも隨分ひどい眼にあはしてやりました）あの時分の深い／＼罪業のためなんです。まつたく！

豐川樓にゐる間に、よそから娘を貰つて育てたんです。そして、それに婿をとつて烟草の小賣店を出させ、自分は隱居で納まつてみたんですがね、間の惡い時には仕方のないものです、その婿が二年と經たないうちに肺病で死ぬ、その翌年、娘が引續いて失くなつてしまふ、私は忽ちにして、またもとのすつからかんになり、もとの獨りぼつちになつてしまひました。それで、仕方なく泣く、また、方々轉々して歩きました。しかし、今度は以前とちがつて、すつかり年

をとつてしまつてゐますからね、奉公口といつても、ひとの食ひ殘しといつたやうなやくざなことのほか何がありませう。それこそ、ほんとに、その日その日のご飯が頂けて來たつていふだけのことなんです。……

四

矢崎のだんなが家出をしたあとの甲子樓ですか、……それは、あの新甲子樓の主人が長男ではあるんだし、それに、當時もう二十五歳にもなつてゐたんですから、當然、あの人が直ぐにも相續するのが順序だつたんです。そして、實際さうさせやうとして大分はたの者が盡力してみたんですが、それがさう出來なかつたといふ譯は、新甲子の主人がちやうどその時分、自分の家に勤めてゐたお針女のおますさんといふのに孕ませてゐたので、(生み落した子は彌太郎さんつて、ほら、獨身で、年ぢゆう三崎の方へ行つてゐる、あの人なんです)家へ歸へればその人と一しよにさせられるに定つてゐると思つて、それが厭さに家出をしたつきり誰が何と云つても、どうしても家へは寄り付かうともしなかつたんだ相です。

一體が一風變つてる人で、料理屋遊びなんかをあんまりやらない代りに、十六七歳の頃から、方々の娘さんやら未亡人さんやらおかみさんやらを、片つぱしから手をつけちや止め、手をつけちや止めして歩き廻つたんで、そのことでは品川ぢゆうでの嫌はれ者だつたんです。ところが、とうとう、おしまひに、やつぱりさうしたことが原因で土地に居られないやうな騒動が持ち上り、それで、甲子樓の方でも默つてゐるわけにゆかなくなり、表向き勘當といふことになつてしまつたんです。

それから、新甲子の主人は横濱へ行つて、西洋人の未亡人さんとかラシヤメンとかの男妾をして、大層贅澤なくらし

をしてゐたとか。と思ふと、その後、競馬の乗手になつたり、玉突やのボーイとやらになつたり、そんなことをして、すつかりいい道楽者になつてゐたらしいんですね。そして、三十歳の時、黄金のメタル（きつと、競馬の乗手をしてゐた時に手に入れたものなんでせう。）を四ツ五ツと、それから、ダイヤモンドやらルビイやらで一ぱい飾り立てた懐中時計を一ツ（これは男妾をしてゐた時に、その相手の人から貰つたものに相違ありません。）と、そのほかには、小田原在のお百姓の娘さんだとかいふ幅格のいい、眼の見當の少しちがつた二十五六歳の女を一人連れて、（それが、あの新甲子のおかみさんです。）荷物といつたら風呂敷包み一つ持たずに、ひよつこり品川へ舞ひ戻つて来たんです。初めのうちは、そんなふうだから妙に氣味悪がつて誰一人として相手になるものもなかつたんですが、それを矢崎のだんなと豊川の先のおかみさんとが可憐相に思つて、（この二人は、これから後も、甲子の方の子供たちのためには、蔭になり日向になりして、始終面倒を見てやつてゐたんです。）いろいろ奔走して、どうにかこうにかああやつて新しく店を出させるやうな運びにしてやつたんです。

俊一郎さん――新甲子の主人のすぐ下がお秋さん、この人も自分の家には居つかず、二十歳の時でしたか、きりやう自慢、藝自慢で（地は踊なんですが、何をやらしても、腕は確かにあつたんだつて云ひますね）。藝者になり、吉原の巴といふお茶屋からそこの暖簾名を貰つて華々しくおひろめをしたんです。何しろ、甲子楼の娘さんだといふところで、何かといふと品川ちゆの貸座敷が惣がかりで後ろおしをしてくれるものだから、（そんなこんなも、みんな、矢崎のだんなと豊川の先のおかみさんの骨折りのおかげなんです。）大層な評判でね、一時は随分鳴らしたものなんです。

さうやつてゐるうちに、吉原の香取楼の主人に見そめられ、先方からの强つてののぞみで、そこの後妻に入りこんだんです。

香取樓の主人つてのは、水戸の方で齋藤さんつて云つたら知らない者のない豪家で、郷里には先祖代々の家屋敷があつて、そつちでも立派にやつてゐるんだが、やつぱり、その人の道樂からそんなやうなことを初めたものなんですね。二人が一しよになつた時、お秋さんは二十三歳、それだのに主人の方はそのざつと倍もの年齢だつたので、先妻との間に出來た子供や、妾たちの子供（妾が三人あつて、どれにも、子供が三四人づゝあつたんだ相です。）の中にはお秋さんと同じくらゐな年格恰なのがゐて、その人たちからみんな「おつ母さん、〳〵」と云はれるんで、そのたんびに何だかきまりが惡くつて赤い顏をし、し、したつつてね、よく自身で云つてゐましたつけ。香取樓の主人とあの人との間にも、子供が三四人あつたんださうですが、可哀さうに、末つ子の貴美ちやんのほかはみんな弱くつて、お誕生になるかならないくらゐまでしか育たないでは失くなり〳〵したんですつて。

貴美ちやんの三歳の年に、香取樓の主人は七十二歳かで失くなりました。――貴美ちやんですか？ たしか、今度、十七歳になつたんでせう。――その時、親類相談の上で、貴美ちやんの後見人（香取樓の相續人は、貴美ちやんに定められてあつたんです。）には、先妻の悴で別に旭樓といふのをやつてゐた人がなることになり、それから、兩方一しよにやつてゆかれないといふところから、旭樓を他人に讓り、二軒のしやうばいを合併してしまつたんです。そして、お秋さん母子は、貴美ちやんが成人するまでといふんで、それから吉原を出て龍泉寺町の寮にゐたり、興津の別莊へ行つてゐたり、溫泉まはりをしたり、五年ばかりの間といふものは、そりや、隨分呑氣な安樂な月日を送つてゐたんでしたがね。ところで、旭樓の主人といふのが相場に手を出して失敗をし、よくある奴でそれを取返さうとして前のに輪をかけた失敗を重ね、さういふことを二度も三度も繰返してゐるうちに、いつか自分のものは愚か後見としてやつてゐた香取樓の財産まで全部すりつぶしてしまつたんですね。といつて、義理のある間柄で裁判沙汰にもならず、そのまんま、お

秋さんたちはまるで夢に夢を見たやうな心持ちで、急に今までとは打つて變つて、切りつめた淋しい暮しをしなければならなくなつたんです。

旭樓の主人ですか、その後、郷里へ引上げてしまひましたが、さすがにそつちの方まではつぶしてなかつたので、それで、お秋さんたちへも、そつちから月々二百圓くらゐづつのものは送られて來ることになつてゐるんださうです。つまり、三十萬圓の借金が、(香取樓の座敷まはりの立派なこと、諸道具類の結構なことは、吉原ちうでも二と下らないだらうつて云はれた程だし、それに、寮だの別莊だのつて數へあげると、どうしてもそれ以下つてことはないつて、專ら世間での評判だつたんです。)そんなやうなことで、まあ、なしくづしにでもされやうといふ譯ですかね。

お秋さん母子は、先だつてまでは大森の方にゐたんですが、今度、こつちへ——品川へ、あの東海寺へ曲る横丁とかへ引越して來たつてことですよ。やつぱり、自分の生れた場所がなつかしいんだと見えますね。

お秋さんの下に、貞次郎、惣三郎といふ二人の弟があるんですが、どつちにしても怨みつこがあるといけないといふんで、甲子樓のあとは、一番末のお粂さんといふのに婿養子をして繼がせることになつたんです。ところで、それが、とんでもないお婿さんで、何しろ、來てから僅か三年と經たないうちに、あれだけの甲子樓をあらかたがた〳〵にしてしまつたんですからね。もと〳〵他人のものだからつてんで、無闇に費ひちらして歩いたんだとも云ふし、また、人によると、なあに、うまい拔け穴が出來てゐて、ないしよでそこから外へ運び出してゐたに相違ないなんて云ふんです。

實は、要どんといつて、あすこの家に奉公してゐた男なんで、それを婿にするしないぢや親類の間でいろ〳〵異論もあつたんだ相ですが、(豊川の先のおかみさんなんかは、第一番に反對だつたんです。)何といつてもそれよりも先きに二人の間が尋常な關係でなくなつてゐたんだつて云ふから仕方がありませんや。もつとも、それがあの男のでなんだと見

えて、あとで知れたんですか、これまでにもそれと同じやり方でほかへも婿養子に入りこみ、三四軒の家を破産してゐるんだつてことです。まあ、ひどい奴があればあつたものぢやありませんか。

そして、七年前、火事で丸燒けになると、それつきり、妻子を捨てて（お粂さんとの間に娘が一人あるんです。もうかれこれ十歳になつてゐる筈ですが）、どこへか姿をくらましてしまつたんです。……

貞二郎さんですか、この人は子供の時から銀座の洋品店かに奉公にやられてゐましたが、その後、そこの店へよく來たことのある亞米利加人とかに連れられて向ふへ行つたつきり、今ぢや、死んでゐることやら生きてゐることやら、皆目どこへも便りつてものがないんださうです、それから、惣三郎さんですが、これは、麹町の方の或る羅紗屋へ貰はれて行つてゐるうち、兵隊にとられて、日露の戰爭で名譽の戰死をしてしまひました。

五

今豐川の奥のはなれに、吉岡のおばあさんのあとへ、今度はおぢいさんで耳の遠い、ひどく愛嬌のない、いつも怒つてゐるやうな顔をした人が入つてゐますが、あれは、先のおかみさんの直ぐの弟なんですつて。甲州で水晶の細工物をしてゐたんだ相ですが、五六年前に何とやらいふ病氣をして以來、手が利かなくなつたんだとかつてね。それに、最近につれあひに先だれて、三度の食べ物の面倒の見てくれてもないと云つたやうな譯で、それで急に家をたたんで出て來たらしいんですが、まあ、何にしてもお氣の毒みたいな人さね。

いいえ、ちがひます、おひでさんのお父つあんはその次の弟で、もう十年もあとに失くなつてしまひましたが、芝浦で小料理やをやつてゐました。これは、兄さんとちがつて仲々切れた、働きのあつた人でしたが、それだけにまた借

金も殘して行つて、あとで、いろんな人が集つてめいめい貸してあつたものを勘定したりしたら、何でも、差引きとんとんだつたとかつてね。子供は六人かあつて、倅さんは幽さんつて、今、あの活動寫眞館の少し先きで菓子屋を出してゐます。そして、あとは、たしか、みんな女の子で、そのうち二人が藝者になつてゐて、どつちも相當によくやつてゐるつてことですよ。

南番場にある豊川樓の家作の差配みたいなことをしてゐるあの瀧澤幸太郎つて人をご存じでせう。あの人を、あなたはどんなふうにお考へです？　豊川の今のおかみさんと從兄妹同志だと云つたら本當になさらないか知れませんが、あれは、吉岡のおばあさんの惣領なんですよ。え、え、あのお種さんのきやうだいですとも。めうじが異つてゐるつておつしやるんですか、あれは、兵隊のがれに、いい加減な家のあとを續いたんだ相です。(むかしは、戸主は兵隊に出ないでもいいつて云つたやうな、何でも、そんなふうな變なきまりがあつたんですよ。)

あの人、今頃ちや口髯をはやしたり、洋服を着こんだりしてすましこんでゐますが、あれで若い時ときたら、それこそお話しにも何もならないやうな馬鹿げたことばかりして來たんですよ。ずうつと以前お父つあんが質屋をやつてゐた時の流れ物やなんかが幾らか殘つてゐたのを資本に、淺草の方で大道古着屋を初めたのを振り出しに、吉原でしかけやをしたり、それから、こつちで小間物店を出したり、あつちで迷子札を賣つたり、と思ふと、いきなり、車力になつてみたり、電線工夫になつたり、それから、また、ある時は、寮の留守番みたいなことをしてゐたり、それから、品川で奉加帳を持ち廻つておでんやを初めたり、そして、とうとう、しまひには、日比谷の山かん横丁とかにある(そんな所がほんとにあるんですかね。)何とやらいふ山かん會社の宿直人にまでなつたことがあるつていふんですからね。……そんなことをみんな聞いてゐて、そして、あの人のとぼけ切つた顔をぢつと見つめてゐると、私は、いつも、思はずつい、ゐ

喧嘩してしまひさうになるんですよ。それがね、不思議なんです、さあ、何と云つたらいいんでせう、……例へば、「なあんのこつた、もとを洗へば、みんなお互ひに他人ぢやないんぢやないか。」こんなふうに云つてやりたいやうな、そして、ちつとも咎められないでも濟むやうな、大變に心易い、いい氣持ちになつて來るんです。さうですね、あの人は、あれでお秋さんと同じ年だつて云ひますから、五十二歳になつたんですかね。

お楠さんですか、あれは配偶者が豐川の番頭をしてゐるものだから、一しよにあすこへ住みこんで、何といふこともなく家のものと同じやうなことをして、おかみさんの手助けをしてゐるんですよ。しかし、考へてみれば妙なものさね、親の代では主從だつたものが、子の代ではちやうどそのあべこべになるなんて、……これも、みんな何かの廻り合せなんですね。

幸さんとお楠さんとの間に、お徳さんといふきやうだいが一人あるんですが、この人は役人のおかみさんになつて、（お亭主は、たしか、裁判所へ勤めてゐるんだとか聞いてゐますが。）今、名古屋の方にゐる相です。

六

豐川の主人の墓は、芝の法昌寺（これは、豐川の先のおかみさんの里方の菩提所です。）にあります。そして、豐川の先のおかみさんも無論、それと一しよに葬られてあります。それから、矢崎のだんなの墓は、矢崎家代々の墓所になつてゐる谷中の長安寺にあります。ただ、甲子のおかみさん——矢崎のだんなに置き去りにされた人が失くなつた時、その墓をどこへたてたものだらうつて、親類の間に大分議論も出たんだ相ですがね、新甲子の主人が、何でも矢崎のだんなと一しよにしないのは嘘だつて云ふんで、長安寺へ持つて行つて、「矢崎伊之助之墓」に並べてそれと同じ形で「阿部こ

う之墓」として立てたんださうです。（阿部は、甲子樓のめうじです。）え、それが本當なんですとも―これだけは、新甲子の主人の一生の大出來として、みんなで讃めてやらなければなりません。（完）

墓を發く

藤村千代

一

村の人々から八丁堤と言慣されて居る、桑畑に沿ふた高い堤の一本路に差掛つた時、若い女教員の吉子は少し尻下りな薄い眉を寄せて遠い行手を見遣るようにし乍ら立留つた。其處から道續きになつて居る杜を越した彼方から、行進喇叭の遠鳴りが聽えて來たからであつた。

それはこの頃村人の誰もから噂されれ待設けられて居た近い師團の機動演習の喇叭に違ひなかつた。この如何しても避ける事の出來ない兵卒等の長い一隊との行交ひを想像した丈けで、吉子は胸中が固ばるような氣がした。狼狽てて、後を振返つたり、兩側を見廻したり足許を見たりした。全で犬の子一匹通らない野中の一本路であり乍ら、格好な隱れ場所をでも探すかのように。

が、何處にも幾百株とも知れない桑の新緑がすい〳〵と伸び、重なつて、土と枝と葉身とが一つの色をなして彼女を圍繞して居て、その足許からは八丁堤がうねつて居

る許りであつた。

　其間に、水底からでも響いて來たようなぼこぼこと籠つた音であつた喇叭が、だん／＼と歴然近づいて來た。水氣を含んだ重い朝の空氣を搖るがして

「ぶ、ぶ、ぶるぶる、る、る、」

と鳴響くと、幾百と言ふ足音がそれに和して、タ、タ、タタ、と規則正しい音律をなしてない交ぜに聽えて來た。見る間に杜の綠陰を透して二つ三つ五つ、と玩具のような帽子、枯葉色の服、それから機械人形のように動く脚の群が現はれて、煙のような砂塵がむく／＼と舞上つた。

　軈て、先頭の喇叭卒が赤い總の附いた喇叭を口に宛てて、兩頰をぶざまに膨ませたり凹ませたり、又直きに他の喇叭卒と交替して、喇叭を握つた儘の右手を下げ、タ、タタ、と足並揃へて居る、その滑稽な痛ましい赭鐵色の顏が、歴然見える程に近づいて來た時は、吉子は路の片側に避けて、じつと釘付けにされたように眞正面に向つて立つて居た。

　毎朝行逢ひ馴れた二三の中學生をさへも出來る丈け――消程の損な迂回をしたり、用もない路傍の荒物屋へ立寄つたりして――避けるか、さうで無ければ、耳の附根まで眞赤にして行過ぎる吉子にとつては、その豫期する事のなかつた兵卒の一隊との行交は、恰ゝ不慮の災に似て居た。彼女は蒼白い、決心を現はした固い顏を、兵卒等の注視の中に曝し乍ら、ぴり／＼と脣を痙攣させた。彼女には彼女の前を行過ぎて居る兵卒の顏が、何れも同じように見えた。然し、何と長い、退屈な一隊であらう、と感じ乍ら立盡して居た。

　時々、騎馬のや、拔劍の將校が、薄羅紗の背中に朝日を浴び乍ら、隊の右側に沿つて行過ぎた。濡れたように黑い脊と銀色に光る拍車とが、馬の腹を敲き乍ら搖れた。

先頭の喇叭の響が、兵卒の心に軍規の厳正を告げるのには遠過ぎる程な隊の後半になつて、刀を暂へた將校の姿が稀になつた。何時の間にか列中を、疲勞と防ぎようのない惰氣が湿つて居た。私語、哄笑、唱歌などの雜音が滿ちて來た。一定の調子をたさない耳ざはりな足音がパタパタパタと續いて行つた。足を引摺つて行遲れた三人五人が、十步位驅けては又ゆつくりと步いた。

この時になつて、吉子の思ひも初めない注視が降つて來た。

「ちよいと、姐さん」

「お伴しませうか」

「お門が違ひませう——だよ」

「お安くないね、よう、よう」

「お早うムいます、はつはは〻〻〻」

此等の不遠慮な罵詈は、無制限に拘束せられた彼等の自由に對する無意識な呪咀であつたが、不幸にも多分の嘲笑や侮辱を直接に現はす事にしか役立たなかつた。此事は、吉子を憤怒で赫くさせた。彼女は今まで堪へて居た深い羞恥から解放せられる間もなしに、この新らしい壓迫に數分間、呼吸をはづませ乍ら足を地面にたたき付けるようにして步いて居た。

が、遂に或光景が吉子の心を静めたのであつた。彼女は、その時一人のはぐれた兵卒が驅けて來るのを見出した。彼は紫色になつたその厚い唇に節くれ立つた二つの握り拳を押當てて居た。口からは異樣な汚物を混じた黃色い液體が、その握り拳、手首、軍服の胸部一體に掛けて、たら〳〵と流れ出て居るのであつた。土のように蒼黑い顏は苦痛を堪へ

兼ねて、深い皺の上には脂汗が溜つてぎら〳〵光つて居た。彼はひた走りに二十歩行つては、又立留つた。そして、一寸身を屈めて両手に粘着した汚物を、路傍の青い草の上に擦りつけた。其彈みに古ぼけた帽子のひさしが左の耳の上へずり寄つたが、彼はそれを直さうともしないで、光つた眼を上げて前の一隊を白眼み乍らひたすら驅けて行つた。全で驅ける事だけが彼の運命ででもあるかのやうに。

吉子は幾度も振返つて、その兵卒の兎もすれば前に突掛りさうな後姿を見つめた。憐愍や何者に對するとも知れない公憤が彼女の胸に芽んで來た。彼女は次第に自分を回復し乍ら、靜かに學校の方へ歩いて行つた。

がらんとした校庭の靜けさが、始業時刻まで可なりの間のある事を示して居た。小使の飼馴らした小犬のチヌが、古びた井戸の蓋の上にのつてうづくまつて居た。滑らかな背のむく毛が日を浴びてしつとり濡れて居た。吉子の下駄の音を聽付けて、一寸、物懶い視線を投げたが、軈てぶるつと體を一振りゆすつて、その小犬は眞直ぐに吉子の方へ驅けて來た。そして、歩く毎にゆら〳〵する吉子の袴の裾にじやれ付き乍ら、玄關口まで從いて來たが、吉子が下駄を脱いで廊下に上つて了ふと、もう從いて上らうとはしなかつた。くん〳〵ともの悲しい諦めを訴へ乍ら、二本の前脚を差伸べ尾を振つて、光る茶色の眼だけで、頻りに吉子の後姿を追はうとした。

職員室にも誰一人來て居る者はなかつた。室の一隅の古びた火鉢に掛けられた鐵瓶が、ちん〳〵と音を立ててたぎつて居た。吉子は末席の彼女の卓子に腰掛けて、暫くじつとして居た。明放たれた窓から、隣合つた村役場のぎら〳〵光る瓦屋根と、風にそよいで居る碧梧桐の高い梢が見えた。

其時、けたたましいチヌの鳴聲が、校庭の遙か向ふから聽えて來た。續いて、二つのお互にわめき合ふ叫聲と、何かを囃し立てる大勢の子供の喧囂とが、異樣な一つの噪音となつて次第に校舍の方へ近づいて來た。吉子は椅子を押して

少し背伸びをし乍ら見上げた。そして、殆んど身を打たれたような小さい叫聲を發して職員室を走り出た。

十人より少くない人だかりが、もうその時は校庭へ雪崩れ込んで居た。

一番先きを跛の久太が走つて來た。直ぐその後を一人の男が何か大聲にわめき乍ら逐ひかけて居るのであつた。久太は雜嚢のひつ切れた紐を片方懸命に握りしめて肩に掛けて走つて居た。中味の重量でだらりと腰までぶら下つて居る雜嚢が、久太の走る度びに、ばつたん、ばつたんと彼の尻をこつ酷く打つのであつたが、彼はそれさへ感じて居ないようであつた。彼の垢染みた單衣の短い裾がまくれ上つて、二本の眞黒い裸の脛が今にも前へのめりさうな速さで飛んで來るのであつた。

吉子はかすれた聲で、久太の姓を呼んだ。そして、何者にも眼をくれないで走つて來た久太の前へいきなり立ちはだかつた。久太は咎めるような白い眼付きで吉子を見上げた。彼はぜい／＼と呼吸をはづませて、雜嚢の紐を握りしめた右手に、尚更力を入れてぶるぶる慄はせた。彼は何事かを吉子に訴へようとして、なめくじのような、涎で濡れた脣を動かさうとしたが、彼には口を利く事が禁じられてあつた。

久太はいら立たしさうに額に青筋を立てて呻つた。

「ああ、あゝゝゝ」

それが彼の意志表示の凡てであつた。喘ぐように口を開いて、白い齒と無氣味な赤さとを持つた口腔の間から、たら／＼と涎を流した。吉子は久太のひきつつた顏面を眞面に見るに堪へないで眼を反らした。そして、

「如何しました？」

と、久太の肩を鷲掴みにして彼を引戻さうとして居る男へ、咎めるような一瞥を向けて云つた。

「先生様！」

男の聲は悲しみと憤りとに慄へて居た。

「久太奴が如何申し聽かせまいても剛情を張りまいて、はい、」

彼は久太の父であつた。吉子は彼を夙うに知つて居た。彼は毎朝、幾つかのたわしを藁繩に連ねて竹切れの先にぶら下げ乍ら肩にかついで、八丁堤を通つて街へ賣りに行つた。吉子は其處で、屢々見知らぬ男としての彼と行逢つて居た。その彼が久太の父であつた。

「久太奴が聽かんのでムいやす。はい、何ぼう行くなと申しまいても、」

彼は同じ事を繰返すたびに、叩頭した。彼の爛れた細い眼には涙が浮んで居た。

「此奴のお蔭で手前はこの四五日仕事にも出られんのでムいやす。學校が初まる時刻になると、此奴がわんわん云やあがつて、如何しても學校へ行くちうて聽かんのでムいやす。部屋へ押込めといても、格子のめどから覗いて見ちやあ、近所の子供衆が學校へお行きるのを見ると、氣が狂ふたようになつてわめくのでムいやす。あげくの果てには、疊をむしつたり障子を破つたりして、先生様、全く手が附けられんのでムいやす。今日もちよいと、それもほんの、手前が草鞋の濡れたのを干さうと思ふて、表の日向へ出やした間に、往還へ驅り出よつたのでムいやす。親に膽を燒かすのも好え加減にしやあがれ、と思ひやすと腹が立つて、腹が立つて、」

ここまで云つて了ふと、彼の聲は、激情に負かされたようにかすれて了つた。裸けた胸毛の邊りまでが、憤怒で火のように赤くなつて居た。未だ言ひ續けようとして、黄色い齒の露出した下顎をがく〱と動かして居たが、頰の筋肉が固ばつて了つたのであつた。

吉子は彼の此話しをのみ込む事が出來なかつた。久太が學校へ行きたがるのを如何して久太の父が拒止しようとするのか解らなかつた。一室へ監禁してまで拘束する必要が何處にあるのか解らないのであつた。

唖の久太と言ふけれども、久太は決して眞實の唖ではなかつた。「ア」と言ふ母音に近い或る極く少數の限られた音だけではあつたけれども、兎に角、發音し得るものを持つて居た。その上に他人の言葉は能く理解した。彼を完全な不具者として、その就學を拒む理由は何處にも發見せられなかつた。久太ひとりしか子供を持たぬ老いた父の希望は容れられて、久平は三年以前に、この村の小學校に學籍を置いた。彼は三年間を透して同一學年に居た。彼の年齢に似合はぬ大きな胴體は、校庭の眞中や教室の隅で、教師生徒の差別なく皆の嬲り物になつた。にも拘らず彼は學校へ出る事を喜んで居た。そして、未だ誰一人登校する者もないような朝早くから、と言ふよりも彼の眼が開いて、彼の前に朝日が昇ると直ぐに、彼は學校へ出たがつた。

そして、廣い校庭を斜めに、或はぐるぐると廻つて、

「あ、ああ、うあ、うう、う」

と呻り乍ら、驅け拔けるのであつた。その時の彼の眼は空に向いて居た。誰にも知る事の出來ない彼一人の喜びが、その面に輝いて居た。軈て始業の鐘が鳴つて、整列した全生徒が各の教室に進む時、彼は、その音高い無數の足の音律を享しむように、少し許り首をかしげて、口を開き、眼を見張つて、皆に從いて進んで行くのであつた。教室に這入つてからの彼も、何等靜粛を破る事は無かつた。何の點から見ても彼は學校そのものの空氣を好んで居るらしかつた。久太のこの様子は、先づ誰よりも、彼の父親を喜ばせたのであつた。勿論學校としても、この大人しい不具者を他の生徒の邪魔者として退ける道理のあらうようもないのであつた。その久太を今、彼の父は學校へ遣るまいとして居るのであつ

た。

「如何して、河井さんを學校へ寄越さないようになさるんですか？」

と、吉子は久太の毬栗頭に手を置き乍ら、靜かに彼の父に聽いた。河井とは久太の姓であつた。

その時、久太は涎液で濡れた彼の胸を吉子の袴に殆んど擂り付ける位、ぴつたりと寄り添つて、彼の汚れた左手で吉子の袴の紐を撫でて居た。その眼は他愛のない眼たゝきをして時々、吉子の顏を見上げて居た。そこに、教師から特に自分ひとりが愛せられて居る事を、信じ切つて居る幼稚な表情があつた。吉子は久太のこの眼を感じて居た。無意識に彼の頭を撫でゝ居る間に、何とも言へない愛撫の情が吉子の心に湧いた。

「河井さんは學校ぢあほんとに大人しくして居ますよ。それに今頃では……」

「先生樣！」

と久太の父は腹立たしさうに、殆んど叫ぶような聲で吉子を遮つた。そして再び、その黄色い齒と共に厚い唇と下顎を突出して、投げ出すように言ふのであつた。

「先生樣！　明日は知事樣の試驗があるのでムいやせう。」

「試驗ですか？」

「はい、校長先生がさうお話しなされまいた。そん時、手前は仕事に出掛けようと思ふて、門先きに出て居りまいたが、校長先生はわざわざ手前の家までお出でんされまいたので……はい、さうしてお話しなされやすのには、今度の試驗は大切な場合じやから、久太奴が粗相な事でも仕出かしよると大事になるで、試驗が濟む迄は學校へ出さんように、とくれぐれもおしやられまいた。久太奴が粗相でも致しまいては、ほんにどえらい事にならうも知れやせんで」

彼は終りを獨言のように呟いた。それに依つて彼の微かな鬱憤を晴すかのように。

吉子は凡てを理解する事が出來た。何者かに打たれたように、この慘めな父子の悲哀を感じた。

この事は二ケ月も前から告知があつた。特に兒童教育の更新を期すると言ふ事に依つて、縣下の各教育當事者を喜ばせるよりも、寧ろ恐怖させたと言ふ、新任縣知事が、縣下の全小學校に一齊に一定の試驗問題を課して、各校生徒の成績を徴し、その結果によつて、各校教師の日頃の訓育振りを調査しようと言ふのであつた。此の種の擧行は、新任知事の或る野心、虚榮心、衒氣を滿足させるに充分であつた。が、彼にとつては單なる思付きであり、殆んど氣紛れに近いものであつたにしても、各小學校長にとつては致命傷を與へるものになるかも知れないのであつた。彼等は死物狂ひになるより外は無かつた。一に彼等自校の成績を擧げたいと言ふ願望は、露骨な醜汚な野望に變じるのが當然であつた。彼等は手段を撰ばなかつた。試驗當日までに凡ゆる術策が廻らされた。斯くてこの兒童教育の更新計畫は、知事から各小學校長に、小學校長から各受持教師に、受持教師から無數の罪のない兒童の頭の上に、得體の知れない壓迫となつて叩き落されるのであつた。この僻村の小學校でも、告知の發せられた日から全二ケ月間と言ふものは、正しい意味の薫陶は盡く破棄せられた。何事も只「當日」の爲めの準備であつた。校長は聲を擧げて部下教員を叱咤した。

老いた小使は、喘ぎ乍ら廣い校庭の隅々を驅けづつては、生繁つた夏草の太い根を鍬で起した。時々彼は腰を伸して鍬の柄に縋つた。暫くして溜息を吐き乍ら又草を掘つた。この老いた小使の酷使は「當日」の爲めになされた。試驗の監督の爲めに各校へ縣から派遣せられる筈の視察官の眼が、此の清潔なる校舍校庭を見るためであつた。

受持教師は試驗に出さうな問題を發見する事に腐心した。そしてそれを叩込むようにして兒童の頭の中に入れようとした。彼等は極端に神經質になり癇癪になつた。彼等のいら立つた眼の前に、泣き出しさうな兒童の無數の顔が列んで

居た。

子供達は遲くまで殘されて、骨のしやぶり滓ほども興味のない同じ教課の連續を口づさまなければならなかつた。子供達は時々、ちらと眼を動かした。そして教室のガラス窓から紅く燒けて居る西の空を見た。溫い飯の匂と小犬の鳴聲とが彼等を待つて居るようであつた。

凡ては何と言ふ悲慘な光景であつたらう。其處には只、叱り飛ばしさうな顏と泣き出しさうな顏としか見出されないのであつた。此等が教育の更新と言ふのだと言ふ事を、誰が眞實と思ふであらうか。

吉子の頭を、この二ケ月來去つた事のない疑惑が掠めて通つた。今、久太の父が言つて居る通りであつたならば、次の事を推斷するのに難くないのであつた。久太の出席と言ふ事は、久太の屬して居る學級の平均成績點數を能ふ限り高めるためには、明らかに邪魔であつた。それにしても、校長自身が態々足を運んで久太の出席を拒止したとは、吉子には想像する事も出來ない無謀としか思はれない事であつた。然し今更久太の父を慰める術は見出されないのであつた。

その時、彼等三人の周圍には子供等の物珍らしさうな眼が次第に增して居た。吉子は兩手を擧げて彼等を追ひ遣るような手附きをし乍ら、嚴しい口調で言つた。

「皆、彼方へ行つていらつしやい！」

が、彼等は直きに蠅のようにたかつて來た。とり捲きの後に居る子供等は、眼をむいたり舌を出したりして久太を玩弄はうとさへした。これらは久太の父を怒らせた。彼は又、小つ酷く久太の肩先きを小突いた。遂に、久太の腰下つた兵兒帶の結目に手を掛けて、力任せにぐいと引いた。久太はよろ〳〵と後によろけたが、見る間にぺたつと坐つて了つた。

「貴樣は何ちう外道じやい、親に好え恥を晒さしやあがつて……」

彼は殆んど泣聲で言ひ乍ら、土の上をづる〳〵と久太を引摺り初めた。そして最う一度凄い濡れた眼を光らせ乍ら、周囲の子供達を睨め廻した。

「何を見てやあがる！」

と、彼が顔を擧げた拍子に、今まで樹蔭をうけて暗かつた彼の顔面の斜半分の太い涙痕が白く浮き上つて見えた。子供達は一度にばら〳〵と散つて行つたが、二十歩許り遠くへ走つてから、雨のような拍手を浴せ掛けた。けたたましい久太の號泣がそれに和した。チヌ迄が何處からか走り出て頻りに吠え立てた。

急に、子供達が鳴りを鎭めた。青い稻田の畔を坂本校長が、深張の黒い洋傘に朝日をうけ乍ら靜かに此方へやつて來るのが見えたからであつた。

「何と言ふ騷々しい事だ！」と彼の眼が言つて居るようであつた。彼は一瞥で、この光景を理解したようであつた。彼は極端に不機嫌な表情をして、罵りわめいて居る久太父子から廻りにたかつて居る生徒の群を見渡し、最後に未だ去り兼ねて其處にぼんやり立つて居た吉子に、詰問するやうな一瞥を與へて通り過ぎた。

吉子は暫く立盡した儘で、校庭の一隅に眼を遣つて居た。其處ははつきりと箒の縞目について綺麗に掃かれて居た。村役場の庭から飛んで來た梧桐の青い葉が二枚、ころがつて居る丈けであつた。麗らかな朝日が校庭一杯に白い光を投げて、地上のキララの細片が、チカチカとその光を跳返して居るのが、吉子のぼんやりした眼頭に映つて來た。また遠くの方から久太の獸の鳴聲に似た號泣がこだまを返して聽えて居た。ひつくりかへしになつた久太の麻緒の下駄が片方轉つて居て、其處から久太の引摺られて行つた跡が、箒目のやうな筋をなして居るのであつた。

二

吉子の前に現はれたその朝の二つの出來事の間には何の關聯もない事であり乍ら、吉子は妙に二つを結び合はして考へさうであつた。そして幾度も、

「不可ない、不可ない」

と心の中で呟いては頭を振つたが、何か不可ないのかはつきりしないのであつた。今も教室の側の廊下を歩き乍ら、教案と教科書を持つた右手で、無意識に袴の脇を叩いてはぼんやりと考へ續けて居た。

その時、一人の女の子が、小犬のような速さで殆んど吉子と衝突しさうな勢で彼女の側を驅拔けたのであつた。吉子はひよいと振返つた。それは尋常二年位の女生徒であつた。吉子が振返ると同時に、その女の子の頭が後に振向いた。その瞬間に女の子の顔が眞赤になり、眼が或る咎めを豫期するようにおど〳〵した。それはほんの一瞬間であつた。女の子は前にも增した速さで、廊下の曲り角に風のように消えて了つた。彼女の痩せた腰の上で激しく搖れた草色の帶が、吉子の眼にはつきり遺つた。吉子は以前にも、その草色の帶の搖れる小さい後姿が驅つて行くのを、矢張りこの廊下で見たような氣がした。

彼女は、又前のように頭を振り乍ら、彼女の教室へ這入らうとした。

教室には、彼女の受持の尋常三年の女生徒が、三十分の體操を濟ませて、これから殘り三十分を唱歌を教はるために、吉子の這入つて來るのを待つて居る筈であつた。然し、子供等は待つて居るのでは無かつた。先生の廊下を遣つて來る姿が、教室のガラス窓越しに見えるようになるほんの一秒前までの其處には、女の子らしい轉るような噪音が湧き上つ

て居たのであつた。先生の姿が見える否や、彼女等は半分し掛けた口喧嘩や、午後の遊びに就いての約束や、誰彼の噂話しの饒舌などを、さらりと捨てて、靜かな生眞面目な、けろつとした顔を列べるのであつた。

吉子はこの教室へ這入りたての空氣を好む事が出來なかつた。未だ九歳にもなり切らない女の子等が、斯うした白々しい技巧を知つて居る事を知るのは、堪へられない不愉快な氣分を誘ふのであつた。その爲めに吉子は何時でも、打解けた微笑を以て授業を始める代りに、氣難しい顔になつて了ふのであつた。そして極めて低い聲で授業するのであつた。彼女のこの暗い氣持は、幼い、敏感な子供等の心へ直ぐに反映しないでは居なかつた。吉子の受持兒童は授業中、殆んど笑ふ事はなく、大きな聲さへ立てなかつた。吉子は自分の瞳が時々、子供達の眼の上に冷水のやうに注がれて居るのを感じては、はつとなつた。この如何する事も出來ない、彼女自身の性格的な冷めたさに、或い、そ寒い淋しさを感じるのであつた。

その時、子供等は唱歌を教はるために待つて居た。子供達はこの二ケ月間と言ふものは彼女等の好きなオルガンの響を聽く事は殆んど無かつた。先生の透通るやうな聲に從れて、四十三人のからみ合つた愛らしいコーラスが、彼女達の耳へものなつかしい響となつても一度戻つて來る、その肉聲の渦卷を、上眼を使ひ乍ら思ひ出さうとした。彼女等は、全く、唱歌に飢えて居た。この二ケ月を通して彼女等の前には、唱歌は勿論修身、體方、綴方、圖畫、凡て來るべき一齊試驗の課目に縁遠いものはすつかり禁じられて了つて居た。讀方と算術だけが數へる事が出來ない位繰返された。彼女等は渇いた咽喉を鳴らすやうにして唱歌を教はり度がつて居た。こんな子供等に對して吉子は、前日、過度な授業を強いた報酬として、今日のこの時間に唱歌を遣る事を約束した。然し、彼女が今朝、何氣なく校長の手から彼女の教案をとつて見ると、彼女が立てた教案の最後の時間は、赤インクの斜線が二本引いてあつた。その末尾に、同じ赤インキ

の小さい字で「唱歌は明日の準備に繰替ふべし。」として、校長の朱印までが捺してあるのであつた。

吉子は心が締めつけられるやうな息苦しさを感じた。「先生でも時々嘘を吐く事がある」と言ふ事は、子供等の頭に、異様な印象となつて浸込むのであつた。彼等は、この事を、恐らく、二十歳になつても憶へて居るに違ひないのであつた。

「先生、唱歌は。」

「唱歌じやあないんですか。」

「私は唱歌帳だけしか持つて來ません。」

これらは、生徒が教師へ向つて言ふべき言葉から脱した野生の聲であり、幾らかの反抗を交へた怨聲であつた。それを抑へ得るものは教師の人格ではなかつた。まして温情や、親愛では決して無く、只巧妙な瞞着だけが、役に立つのであつた。然し、その巧妙な瞞着をさへも、子供等は餘りに能く知つて了ふのであつた。

斯う言ふ場合の吉子は、子供等を瞞着し了して苦々しい氣分を味ふよりも、寧ろ、彼等の上に教師として許された凡ての壓迫を加へて、彼等の口を閉ぢさせる方法を撰ぶのであつた。これは、より以上に子供等の心をいぢけさせる事になるのかも知れない、と思ひ乍らも、吉子はこの騙瞞の空氣の中に居るよりもましだと思ふのが常であつた。

「それは恐ろしい事ではないか。」と何者かが言つて居るやうであつた。

子供達は沈默した。かくて、彼等の小さい胸の中には、強いられた服從に對する聲のない反抗が、蔵せられるのであつた。恐らく彼等自身も心付かず、教師も心付かぬ間に、この反抗は次第に培はれて行くのであつた。

何事にも無關心になり得ない吉子にとつては斯くして始められた授業は益々不愉快になつて行くのであつた。

「人間が人間を教育すると言ふ事は、少くとも自分にとつては恐ろしい事だ。許されない僣越だ。單に何事かを注込み、それを受容れしめる、それ丈けの仕事をするに過ぎない者を教師と言ふならば、教師は一つの機械として存在するだけであらう。其處には何等心靈の關係するところが無い。人格的な感化も德育もない。動き、動かされる心靈は手を束ねて引下り、只機械的な智育だけが遺される。さう言ふ意味の單なる教授は、如何にも容易な事に違いなからう。然し、教師は、到底機械としては許されないのだ。」

　子供達は固い木机に突伏すやうになつて、讀本の漢字の書取を遣つて居た。吉子は彼等の腰掛の間を通り拔け乍ら、毎時もの考へに耽つて居た。

　子供達は時々頭を擧げて、殆んど聽取れない位の溜息を吐いた。それが、彼等に許された凡ての倦怠の表示であつた。彼等のめくり返さうとする讀本の頁は、幾度も繰返された指の摩擦のために、汚れて所々切れて居た。雪と言ふ文字の次に雲と言ふ字が拔出されて居り、次に吹くと言ふ字、降ると言ふ字、次が何、何と言ふ事まで、彼等がすつかり暗んじて了ふ位繰り返された書取であつた。彼等は、この書取を、囚人に課せられた麻絲つなぎの仕事のやうに、嫌惡し、倦々した。教師の眼の屆かない處では、讀本の下に隱してあつた「幼女畫報」が少し引出してあつた。彼等のノートに書いてある漢字の綺麗な行列の次の頁には、彼等の自由畫の「りぼんを結んだお孃さんの頭」が描かれてあつた。彼等の胸を叩いたなら言ふであらうと思はれた。

「私はもうすつかり覺え込んで了つたもの」と。

　今朝、始業前に坂本校長は部下教員を一堂に集めて訓示した。「今日こそは諸君にとつては最後の五分間である。」と、而して、吉子の今臨んで居る時間は、最後の一瞬間であるかも知れないのであつたが、それは、小さい欠伸によつて報

ひられやうとして居るのであつた。

此處に、教育界全般を通じての鐵則である劃一教授が露骨にその弱點を示して居た。或者は、その教課の單純無趣味に倦々した。何も彼も喰ひ足りないもの許りであつた。にも拘らず、より劣等な子供達のお相伴に、ずるずると落ちて行かなければならぬ境涯が情なくなつた。又或者は、その教課の過當、難解にその乏しい腦漿を絞り上げられ、より優秀な子供達のお相伴に、耳朶を引張り上げられ、及ばない爪立ちをさせられなければならぬ境涯を涙ぐましく考へて居た。お互ひに全く違つた意味で、堪へ難い倦怠に襲はれた。斯くして教室の中には、如何する事も出來ない惰氣が漲ぎるのであつた。この惰氣が吉子の最後の一瞬間を覆ふて了つた。子供達が耳を欹てて待つて居た終業の鐘がカンカンと鳴つた。

「さよなら！」

「先生さよなら！」

「さよなら！」

それは何と言ふ活々した聲であつたらうか。彼等は雪崩れるように校門を目掛けて走つた。赤い袴、青い裾廻し、黄色い帶が跳ね返り揺れ上つた。それは何と言ふ潑剌たる光景であつたらうか。

「心臓の關係する事のない、單なる機械であり得たなら、」と吉子は又考へた。この愛すべき子供等の後姿を見送つて、苦々しい悔を感じる事はなかつたであらうと。

今日一日の恐ろしい仕事は終つたが、明日は凡ての教師と子供の上に大きな鐵槌が振翳されるのであつた。吉子は何とも言へない肉體的な戰慄を感じたのであつた。

三

吉子が校門を出たのは日がとつぷり暮れてからであつた。彼女は校庭の木柵にカチカチと洋傘の柄の先を當て乍ら、無意識に歩いて居た。彼女は非常に疲れて居た。町にある彼女の家に歸るためには、一里餘りの單調な道程をとらなければならない事は、彼女に何とも言へない憂欝を感じさせた。その上に彼女の家庭の重苦しい空氣が尚更、吉子の歩調をにぶくするのであつた。

彼女の足は知らず知らず、小さい流れに沿ふた小道を歩いて居た。その小道を少し行けば、彼女の父方の緣になる伯母がささやかなひとり暮しをして居たからであつた。

伯母に似た人影が、小川の緣にしやがんで頻りに青い菜葉を洗つて居た。小さい頭を包んだ手拭がほんのりと夕闇の中に浮いて居た。吉子は立留つて聲をかけた。

「伯母さん！」

「まあ、吉やんかいの、お寄りんか、一寸お寄りんか、今日も餘程遲いのう。」

「明日の支度でね。」

「大概の骨折じやあないのう。どうぞまあ好え鹽梅に遣つてお吳れると好えが……」

「何だかもう、くさくさしちまつてねえ、子供の方でもそうそう、一から十まで憶へられるものでもないでせう。それは、あれ位同じ事を毎日遣らされるんじや誰だつて可厭んなると云ふもんですわ」

「それもさうじや。まあ、一寸お這入りんか。好えもんがある、素麵が茹でてあるんぞい。」

「え、有難う、でも餘り遅いから、」

「遅いからお這入りいちうんじや、何にこれは直き濟むからのう、」

さう言つて老いた伯母は又せつせと菜を洗つては籠へ打上げて居た。伯母の手が動く毎に、青菜の先が忙しげに翻つて小流れの波をはね返しては白い水玉をあげて居た。

「御精が出やすのう、」

誰か通りがけの農夫が伯母へ挨拶をした。

「はい、貴方も御心棒で……ありやまあ惣さんではありやせんか、この度はえらい御愁傷な事でムいやしたのう。わしもたつた今朝聽いて吃驚しやしたいのう。常さんのあの若盛りで、さぞお傷しうお思ひされやせうのう。」

「はい、お有難うムいやす。何ぼう愚痴を溢しても生きて戻りやせんのでムいやすが、村の衆が何の彼のと言ふて呉れんされる毎に、つい情けなうなりやいて……」

夕闇に紛れて朴訥な農夫の眼に浮んだ涙は、吉子等の眼には留らなかつたが、甘藷を容れたほぼろ（藁を編んで拵へた野菜物の容器）の緒を握つて居る彼の左手が、小刻みに慄へて居た。

農夫の後姿が小道の彼方の無花果の葉の中に見えなくなつた頃に、伯母は洗ひ終つた青菜をよいとしよと言ひ乍ら抱上げて腰を伸した。そして、吉子と列ぶと子供の背丈位しかない丸いゆがんだ背中を屈めて、直ぐ後の茅葺の家の方へ歩き出した。青菜の籠からぽた〱と雫が落ちて居た。

「吉やんもお這りい、――じやが、惣さんも氣の毒な、あれはのう、網師へ行つとつた息子が殺されたんじやげな、」

「殺された？」

と、吉子は一寸立留つた。見知らぬ農夫の身上に起つた出來事ではあつたが、殺されたと言ふ言葉は、吉子の多分な好奇心と微かな兵隊の心とを喚び起したのであつた。

「うん、殺されたんにやげな。――まあまあ、ちよいと外へ出とる間に家の中は眞暗じや、お躓づきなよ、其處の障子のねきには未だ解かん荷が積んであるぞい。」

伯母は手さぐりでマッチを擦つた。ガラスの嵌つた名計りの戸棚に小さい光りが搖れ乍ら映つて、中の筆選、インキなどの雜品が幻燈繪のようにぼんやりした形を見せた。軈て、七分心の石油ランプに火が點ぜられた。其處に、老いた伯母のたつきの料になるべきささやかな文房具店の商品が、ずらつと見渡された。それは少し大きな玩具箱に似て居た。二宮金次郎や乃木大將の繪の附いた表紙の雜記帳や、折疊みの出來る石版や、十五錢位の安萬年筆や、十二色の繪具箱までがあつた。伯母はこれらの商品を生きたもののやうに思つて居た。それらが子供の手に賣渡される時は、彼女はノートの表紙を撫でて見たり、鉛筆の先きを二三度振つて見たりした。それは商品に對する無意識な彼女の「お別れ」であつた。町の吉野屋から新らしい商品が屆いた時（彼女は大抵それを彼女の大きな木綿の風呂敷の中に包んで、曲つた背中に載せて歸つて來るのが常であつたが）荷を解くと、殆んど十五分位も一處に立つた儘でじつと見詰めて居た。そして更にも一度、この朱塗の框に嵌つたガラス棚の中にこれらの商品を列べて、尚ほ十五分もじつと見詰めて居た。彼女がひとりの冷い床の中に這入つた時も、眼を閉ぢて何時までも彼女の店の光景を思ひ浮べて居た。そして、あくる朝になつたら、戸棚の隅の賣殘りの色チョークを、眼に付易い所へ列べ替へなければならない、事などを考へて居た。斯くて彼女の夢までが安らかであつた。彼女はこんなにして愛する商品と暮して居た。

「吉やん、わしは今朝夜の明け明けに町へ行つて來たのじや、これ、綺麗な裁縫箱じやらうがの、のう、綺麗じやあな

いかいのう、」

伯母は片隅に重ねてあつた鐵板製の針箱の一つを取上げて吉子に見せた。薄い被ひ紙をはがすと、ペンキ繪のような山茶花が畫いてあつて、小さい赤い玉の針差しや、絎臺まで折疊みの利くようにしてあるのであつた。

「山口先生がお世話をしてお呉れんされてのう、今度はわしの店がこの裁縫箱を一手に賣る事になつたのじや。ほんにあのお方がようお世話をしてお呉れんされるからのう――吉やん、此方へお出でんか、腹が減つたらうがのう。さあ、素麵が好う冷えとるぞい。」

伯母はランプの鍵を外して持ち乍ら、奥の四疊半へ吉子を呼んだ。軈てささやかな夕餉が用意せられた。吉子は先刻から心に懸つて居る問題の方へ話しを轉じた。

「おゝ、さうじやつたのう、何んの殺されたちうても只の人殺しではないのじや、ほれ、何とやら言ふ朝鮮人の惡い奴が大騒動を起いたと言ふじやあないかの、矢張しそれで廸さんの息子は殺されたんじやが……」

その農夫の息子は十九歳の未だほんの子供であつた。今年の正月に彼は老いた兩親を遺して朝鮮へ渡つた。彼は田舍の若者が故鄕を立つ時に普通に持つ考へで、てつとり早い成功を夢みて居た。無一物で渡鮮して、大きな牧場や鑛山や農場を經營して居る、所謂立志傳中の人々を夢みて居た。彼のこの心持の底には老先短い兩親があつた。彼は鄕國を立つて行つた。そして京城を志す代りに、郡部の未だ内地人の影の極めて薄い地方を目指して、其處で彼は郵便局の遞送人となつたのであつた。彼は衣食住にあらゆる不自由を忍んで贏ち得た幾何かの給料の殘額を、田舍の兩親へ送つた。斯うして彼は孝子の名をなし、彼の兩親は村人の羨望の的になつた。が、それはほんの束の間であつた。悲報が飛んだ。彼は不逞鮮人に殺された犠牲者の一人となり終つたのであつた。

日鮮合併後、鮮人は重税（鮮人はさう感じて居た）に苦しんで居た。徴發さるべき理由に就いては何の得心をも與へられない納税は、それを課せられた彼等鮮人の胸に、深い、響の無い怨嗟となつて醸せられた。郡部の僻地になる程、その傾向が甚だしかつた。彼等の無智は、租税の送達の機關に使はれて居たに過ぎない各面の小さい郵便局を、彼等の財嚢を絞り上げるものだと解して、仇敵の如くに呪詛するに到つたのであつた。斯くて遞送人の運ぶ赤行嚢に彼等の鋭い數千の眼光が集つて居た。

暗い夜であつた。若い遞送人であつた彼の農夫の息子は、赤行嚢の遞送車を曳ひてとある谷あひに差掛つたのであつた。其處には、竹鎗の先を削つて數人の鮮人が待つて居た。其處で彼は竹鎗の血祭に揚げられた。それは全く言語に絶した光景であつた。

「何の恨があつて常さんを殺しやあがつたやら言ふてのう、村の衆がお言ひるのじや。これが日清日露の戰爭でもあらうもんなら、金鵄勳章をお貰ひるやら、招魂場でお祭をしてお貰ひるやらするんじやろうが、竹鎗に刺されたちう話をすると、學校子供なんぞは笑ふたりするがのう。惣さんも慰藉料とやらを何ぼかお貰ひたげなが、そいだけじやあ、諦められんわいのう。常さんが竹鎗に刺されて血が脇腹からたら〳〵出るのが、眼の先きにちら〳〵するちうて婆さんがお泣きるげな——あら、あら、もちつとお喰べんかい。吉やん！」

吉子は膳の縁に箸を掛けて、じつと一隅を見詰めて居た。彼女は喰べ續ける事が出來ないのであつた。あの若者の肉體を離れた靈魂は、又遺族達の哀れな心は、何處に彼等の仇敵を求めるのであらうか、彼は何者の犧牲に供せられたと思ふであらうか、吉子は彼等の上に得體の知れない何者かが居る事を感じた。その何者かが、鮮人をして、斯かる慘虐を敢てせしめる迄の狂暴に驅り立て、唆し掛けたのであつた。その何者かが、あの若者を殺させ、遺族を泣かせたので

あつた。

吉子はその時、この話しと正反對な或シーンを思浮べずには居られなかつた。それは、或新任教師の歡迎會の席上で、可成り醉の廻つた若い男教師に依つて語られたものであつた。彼は妙な手附をしておどけた口調で話し初めた。

彼の學生時代の修學旅行の一つが程近い小都會へ企てられた時の事であつた。例に依つて少し薄暗くなる頃から、學生達は三人五人と連れ立つて、黑マントを頭から冠つてこつそりと色街を漁るために町へ出たのであつた。とある大通りであつた。片側の柳並木の蔭に、遠くからは提灯のやうに見える灯が、殆んど二十位續いて、霧の深い暗の中に濡れて居た。彼等が酷く好奇心に驅られ乍ら近づいて見ると、それは、ほんの一坪もあるまいと思はれる位の箱のようなほつたて小屋が立並んで居るのであつた。その一つ一つの小屋の中から明り障子を透して、豆のやうな電燈の光が洩れて居るのであつた。障子には、一寸一杯、一品料理、にしめなどと肉太な文字が記されてあつて、どの障子からも醉拂つた男のだみ聲に混つて、かすれた女の博多節や磯節が洩れて居た。

「あれなんだよ。」

と彼は連れを振返つて說明した。人の噂では一寸一杯と言ふのは表向で如何はしい宿の代りをもすると言ふ事は近在へも聽えた話しであつた。何時の時代の遺物とも知れない妙な建物であつた。その建列んだ小屋の殆んど終りの邊で、何か騷ぎが持上つたと見えて、暗い中で大勢の人聲ががや〳〵と騷いで居た。近寄つて見ると、一人のぬつとした大男が、喰逃げでもしかけたのか、皆からせきとめられて居るやうでもあり、それとも樣子が違つて居るやうでもあつた。巡査が二人、提灯を提げて來て居たが、如何も手が附けられないと言ふ風な顏をして、

「おい、早く拂つて了つたら如何だ！」

とその大男をそつと小突き乍ら、語調の亂暴なのに引替へて慰めるやうな言ひ方で、幾度も繰返して居た。大男は大分醉つて居るらしく呂律の廻らない上に、顏附が飴でも賣つて歩く朝鮮人に違いないと思はれた。ぎら〱する眼で廻りを睨め廻し乍ら彼は怒鳴つて居た。

「俺は金持つて居る。金惜しくない。このお內儀さん人を馬鹿にした。言葉が解らん思つて人を馬鹿にした。」

と彼は頻りに怒鳴つた。それにつれて野次馬が囃し立つた。彼はこの小屋の一つで酒德利を二本あけたのであつた。彼はそれ以上飲めなかつた。その時女が言つた。

「もう一本飲んだら、×××させる」

彼は女がさう言つたとわめいた。群衆は喜んで手を叩いた。それで、その男は女の言ふ通りになつて吞めない三本目を吞んで了つた。が、三本目の德利が空になつた時、女はけろつとした顏附で三本の酒代として壹圓なにがしを請求した。朝鮮人は半分憤りながら、女の口約束を履行させようしたが、女の平手で横顏を强かのめされたのがその報ひであつた。彼は女に愚弄せられた事を知つて、獸の樣になつてわめいた。果ては往來に走り出て聽くに忍びないやうな事を口走つた。直きにどの小屋の中からも出て來た肥つた女達や巡査などの手で、その朝鮮人は何處かへ引摺られて行つた。後には白粉のはげた四十女がかまびすしい笑聲を立てて居た。

若い男教師の話しは了つた。この話は少許り醉の廻つた校長をまで、上機嫌にさせた。下卑た哄笑が湧き上つた。只吉子にだけは、この朝鮮人のわめく聲が耳許に響いて來るやうな氣がした。何處ででも、愚弄と嘲笑を甘んじて受けなければならない運命に、得體の知れない何者かが鮮人全體を追ひ遣つたものとすれば、何かの破綻が來るのは當然と思はなければならない、と吉子は考へた。同じ檻の中に閉ち込められた到底融合する事のない二つの民族の最後は何に依

つて報ひられるのであらうか。あの若い運送人の死も正しく天然の災と觀るより外はない、と吉子は考へ續けた。

吉子達がお膳を片附けて、端近い六疊の間で蚊遣りに咽せ乍らとりとめもない話しに耽つて居る時に、表の格子の開く音がして、同じ學校の體操敎師の山口がのつそり這入つて來た。

「いよう、河村さんもか、」

と、彼は一寸帽子に手を掛けたが、

「少し伯母さんに話しがあつてな、」

と、言譯がましく言つて、上り端に腰を掛けた。朝から酒の氣を絶たないと言ふのが自慢の彼は、五十を越したと言ふのに、脂切つた顏面やじく／＼肥つた短い體軀、そばへ寄るとむつとする腐つた酒のような臭氣などが、はちきれる位體中に力を滿して居た。

伯母は身輕に立上つた。

「山口先生かいの、あんまりお見えなされんので、つい先刻、隣の若衆を頼うでヽ宅へ一走り行つて貰ひやしたがのう」

「又、何事で、」

「何のほんの一口お酒を差上げ度いと思ふてのう、貴方、」

「やあそりや度々お氣の毒を掛けますなあ、ぢあ歸つて早速頂戴しませうかい、河村さん、何ゆつくり、」

「やれやれ先生のお早いことと、まあちよいとお上んなされて、」

「いや歸つて呑むのも樂しみじや」

彼は歸つて行つた。小ランプを提げて送り出した伯母が戻つて來ると、吉子はいら／＼し乍ら聽いた。

「山口先生は始終見えるの、又呑みに來たんでせう。ほんとに好い加減にしないと伯母さんはすつかりしやぶり取られて了ふじやありませんか、」

「わしもつくづく閉口しとるのじやが……お酒を呑ませる許りじやあないのでのう、今度もあの裁縫箱を引受けたのに就いてもなみひと通りの心配事ではないのじや」

「お金でも持つてつて遣るんですか！」

「餘り大きな聲じや言はれんがわしも時々泣きとうなる事があるいのう、この商賣ではほんにほそぼそと暮しを立てるのさへかつかつだのに、」

「私が居ると工合が惡いと思つてこそこそと歸つたんだわね、今度から知らない振りをしてれば好いじやありませんか、利の薄いものをその上はねられちや遣り切れないじやありませんか。」

吉子は憐れむように伯母を見て言つた。あの豚のような山口の喰物になつて居るのかと思ふと、情けなくなつて來るのであつた。

「さうは言ふても駄目じや、ちつとでも禮のしやうが足らんと、けんもほろろな爲打ちをなされるけえのう。あゝまで掌を返すようにせられるものかと思ふと恐ろしい氣がするいのう。」

伯母はそれからお定まりの愚痴を聽かせるのであつた。

子供のない彼女は夫の死後、この學校の近くにささやかな文房具店をひらいたのであつた。その頃は競爭者に脅かされると言ふやうな事は夢にもなくて、彼女の生活は細い乍らも安らかであつた。が、直きに月日が立つて、若い働盛りの男が商賣敵として彼女の前に立つて居た。彼女はその時から、勢力のある教員に附け届けをしてでも、彼女の商品

を賣らなければならないと言ふ事を悟らない譯に行かなかつた。倘さうしても、彼女の生活は脅かされ勝ちであつた。彼女は毎夜遲くまで暗い七分心の下で、老眼鏡を尖らせ乍ら針の穴を探したりしなければならなかつた。然し彼女の針仕事は倘更たど〳〵しいものであつた。彼女はおど〳〵として邊りを見廻した。一握の藁にでもとり縋りたいやうな老いた女の頼りなさであつた。斯うして、一個十五錢の裁縫箱は十錢が二本に殆んど三錢五厘が山口などの酒代に、僅か一錢五厘が彼女の掌に殘されるだけであつた。

山口と言ふのは殆んど三十年もこの村の小學校へ勤めて居る男で、彼は村人の間にも、又學校の各教師の間にも、如何する事も出來ない奇妙な人氣を持つて居た。彼はその壘の中に籠つて彼一流の貫禄を廻らして居た。彼は全く朝から酒の氣を切らした事がないのであつた。それで居て教育家であつた。

體操がほんの申譯だけ濟むと、彼はいつも彼の廻りにがや〳〵言ふ子供達を寄集めて、極めて如何はしい話しを始めるのであつた。春期發動期にある少年達の性的興味を唆るやうな言葉許りが、彼の口から出るのであつた。

「何ぼ威張つても貴様達のお母あなんぞは俺にはてんで頭が上らんぞ！　これで三十年も昔には色々な面倒を掛けられたもんさ、ちよいと油斷するともう子供をこさへとる、さうしちやあこの俺に後始末をさせたんだよ。何あに、その頃はこの後の川なんざあ毎日毎日、孤似みの赤ん坊が三つも四つもぽつかんぽつかん浮いちやあ流れて居たものさ、それで今時分になつて濟ました顔をして『先生樣、子供達がお世話になりやす』なんどと言つたつて、いやあお前！お竹さあじやないかちうて了へばそれ切りじや」

早熟な子供達は面白がつて手を叩くのであつた。すると彼も一緒になつて

「うふふ……」

と下卑た笑を立てて、肥つた體を揺り上げるのであつた。

吉子は始めて彼を見た時から、彼の體臭が現はして居る所の、彼の頹落を裝つた汚濁な趣味を卑しんで居た。彼女の哀れな伯母がこの山口の餌になつて居るのは、腹立たしいもどかしさであつた。

「裁縫箱が來たから田中屋へ買ひに行け、ちうて山口先生が一言お言ひんされると、子供達は飛んで買ひに來るのじやのう、」

「馬鹿々々しいじやありませんか、山口先生に飲ませる丈け値段を安くして御覽なさい、だまつてたつて子供は買ひに來ますよ、」

「ところが、さう行かないんじや、さう行けば何事もないのじやが、何ぼう安うても何にも知らん子供達は、先生が買ひに行けとお言ひんされた方が立派な品物じやと思ひ込うどるからのう、全く山口先生に見離されたら、最う早やお了ひじやがのう。」

吉子は伯母と床を列べて横になつてからも容易に寢付かれないやうな氣がした。こんな僻村に於てさへも小さい「敎科書事件」があつた。未だ未だ誰の眼にも屆かない所に、口を開いた魔物が巣くつて居るやうな氣が、頻りにするのであつた。

伯母も寢苦しいと見えて、時々、細いしはぶきをして居た。やせた腕を胸の上に組合せてじつと眼を閉ぢて居た。二人の枕許で、豆らんぷがじじと鳴つて居た。

四

暴風雨のやうな一日が過ぎて行つた。

兒童の試驗答案は嚴重に封印を施されて、監督官のトランクの中に閉ぢ込められた。午後四時頃、監督官の白リンネルの後姿が、校庭の高い楡の木の蔭に消えて行くのを見送つて、坂本校長を始め各教師は、職員室に集つて居た。室中を異樣な沈默が漲つて、ぎら／＼と血走つた眼がお互同志で探り合ひを始めて居た。各自は直覺的に各自受持兒童の成績を感じて居た。彼等のがむしやらな注ぎ込み教授は明らかに的を外れて居た。何處へも持つて行き所のない焦燥が無言の内に各自の胸の中を引掻き廻して居た。かつと顏中を赫くほてらせ乍ら、それで居て奇妙な氣拔けの狀態にあつた。

「皆さんどうも御苦勞でした。お疲れでせうから勝手にお引取り下さい。」

暫くして坂本校長は斯う短い一言を殘して、出て行つた。直ぐその後を追ひ縋るようにして、彼の腹心だと言はれて居る次席訓導の三谷が、ちらと忙しい一瞥を皆に呉れ乍ら、急いで出て行つた。

「又例の自暴飲みだあ。」

と、山口は忌々しさうに二人の後姿を見送り乍ら嘲笑して言つた。奇妙な低い笑聲が、皆の唇から洩れた。

吉子は暗い氣分に壓潰されて、一人で校門を出て行つた。そして彼女が校舍の裏圍ひの黑板塀に沿ふて歩いて居ると、老いた小使の妻が頻りにその黑板塀をこすつて居るのに出くはしたのであつた。小さい孫と二人で、べた／＼に水を含ませた雜巾で拭ひとらうとして居るのであつたが、黑い板の上に白いチョークで書かれた變な落書は仲々とれないのであつた。

「先生様、この通りだからのう、ほんに子供にどすばしつこい者はムいやせんで、わし等なんぞが夢にも知らん事をも

う感附きよつてのう。」

「三谷先生はほんとうにそんなのか知ら、それにしても子供らしくない事を遣るもんだわねえ。」

「餘り遣り口がおほつぴらでムいやすて、ほれ、あの尋常二學年の菅野の娘にのう、授業時間中でも文の使をおさせんされるちうぢやもの、今朝も貴方、あの娘が堀端で大勢の子供に蹴られたり撲られたりしとりやしたがのう、可哀さうに、」

さう言つて彼女は一寸腰を伸した。

「三谷先生もあれで校長樣の御氣に入りでなかつつりや、一日でも學校に居られるものじやムいやすまい、」

吉子は、何時か授業中に鼠の樣に廊下を驅拔けた女の子の草色の帶を思ひ出した。おど〳〵としたその眼を思ひ出した。そしてこの女の子の受持教師であり、三谷の戀の相手であると言ふ女教師のべた〳〵した長い袴や濃い脂粉の顔や、今、職員室でこそ〳〵と校長の後に從つて出て行つた三谷の厚い濡れたやうな脣や栗鼠のような狡猾な細い眼やを思ひ浮べて、彼等の何の神秘も羞恥もない俗悪な戀に、ぺつと唾液でも吐出し度いやうな不快を感じた。

「何から何まで汚穢だらけなのだ。」

と彼女は歩き乍ら考へた。心が尚更重く暗く閉ざされて來た。

吉子はそれから遠い道を歩いて、彼女の街にある家へ歸らなければならなかつた。彼女のその家には、温かい夕べの團欒の代りに底冷のした重い空氣が彼女を待つて居た。その冷たい空氣は彼女自身が造つたものかも知ないのであつた。

それは、或日曜日の朝であつた。母のお稔は風邪で寢て居た。その枕許には弟の澄夫ががら〳〵を轉がし乍ら遊んで

居た。吉子は友達の家へ早くから出掛けたのであつたが、途中から何かを思ひ出して家に引返して來た。家の中には奇妙な沈默が滿ちて居て、母の寢て居る部屋から細々と何か口說いて居るやうな聲が續いてはとぎれて居た。吉子は全く無意識であつた、彼女の心に本能的な或ものが働いて、彼女は足音を忍ばせ乍ら唐紙に摺寄つたのであつた。母の聲が呟くように澄夫に言つて居た。

「……よく氣を附けてね、姉さんは大變優しいんだけどもほんとうの姉さんじやあないんだから、さあつて言ふ時には澄ちやんは獨りぼつちになつちまはなくちやあならないのよ。」

吉子の胸に裏切られた者の哀感が湧いた。これは永久に消えない印象であつた。此時から吉子は、愛され得ない娘としての悲しい自覺を持つて居た。そして「哀れな呪はるべき運命の繼母」を殘して、彼女の心は永久に母の許から去つて行つたのであつた。

それ迄にもなく、吉子はこの母が實母でない事を感じて居た。が、ひ弱な弟と優しい母を如何憎みようもないのであつた。何處か、誤つて繫ぎ合された肉身同志と言ふ樣な感じはあつたが、心から母と弟とを愛して居ることが出來た。又彼女自身も愛されて居る事を信じて居たのであつた。

然し、この恐ろしい日から吉子の心は暗く閉されて了つた。澄夫は吉子の姿を見ると、こそこそと隱れるやうに感じられた。母の凡ての親切や愛情は、吉子を底の知れない疑惑に捲込む許りであつた。ちぐはぐな行違ひが其處に處に起つた。母と弟とは、吉子の鋭い眼をおびえるようになつた。彼等のこのおど〳〵した眼が、吉子を尙更いら立たしい焦燥に驅り立てた。斯うした空氣の檻の中でお互に探り合ふ眼附を交し乍ら住まなければならない三人の運命を、吉子は呪ひ乍ら不安な日を送つて居たのであつた、

五

吉子はその翌朝、出勤時間より殆んど一時間も早く學校へ出た。廊下で、校長の洋傘と靴を持つて小走りに遣つて來た小使に摺れ違つた時、彼がおどけた手附で彼の短い拇指を出して見せ乍ら笑つたので、吉子は坂本校長がこんなに早くからもう出勤して居る事を知つた。妙な擽つたさが彼女の胸に込み上げて來た。校長のこんなに早い出勤には彼一流の極つた原因があつたからであつた。

「河村さん！」

吉子は職員室の閾も跨ぎ切らない間に、いきなり呼び掛けられた。彼女は出勤簿の置いてある卓の方へ近寄り乍ら、彼の顏を見上げた。

彼の顏は醜く憔悴して居た。小皺でたるんだ眼瞼の奥に落込んで居る眼が、今朝は一層くぼんで居た。勉めて氣難かしく裝はうとした不自然な表情が、全く別な陰險さを帶びて居た。斯うした態度を彼がとるのは、彼が前夜を敎育家にあるまじき耽溺に過した時に、決つて見受けられるものであつた。

「河村さん、貴女の受持兒童の出席平均は餘まり思はしくありませんね。近頃は督促訪問も遣つてないやうだが。」

さう言ひ乍ら、彼は卓の上の薄い和綴ぢの帳簿を繰擴げて居た。彼の前の卓には、各敎師の机や書棚から引出した書類が堆く重ねてあつた。それらの書類は、敎授上訓練上の効果を期するためにと言ふより寧ろ、彼の上に立つ視學官に見せるために彼自身が案出した、種々の設備に關する調書や記錄であつた。彼の斯うした朝は、彼自身の氣分轉換のために凡ての書類の大整理が行はれて、部下敎師の誰でもが彼の不滿の對象になり、手嚴しく鎗玉に揚げられるのであつ

た。

吉子はこの彼の心理を要まで見透かして居た。その上に彼の人格に對する底深い不信任をもつて居た。就中彼の言ふ兒童の出席の件に就いての注意は、彼自身の見苦しい破綻を暴露したものであつた。縣の一齊試驗の終る迄は、劣等兒童の缺席を、彼は寧ろ希望して居たのではなかつたか。にも拘らず、斯うまで白々しく空とぼける事の出來る彼の或る、太々しさを、吉子は心から憎惡し、輕蔑した。

吉子は微かな反抗心が頭を擡げて來るのを感じた。然し彼女は一言も言葉を返す事なしに、

「午後からでも家庭訪問に出掛けて見ませう、」

と短く答へて、彼の前を去つた。

その日の午後、子供達をすつかり歸して了まつてから、吉子は缺席兒童の家庭訪問に出掛けた。

出席率の惡いのは極つて劣等兒であつた。その劣等兒は殆んど貧しい家の子供であつたか、でなければ特殊部落の子供であつた。この子供達の肉親は彼等特有のねつとりした頑固な考へ方をもつて居た。彼等の心は殼の中に籠つて居る蝸牛に似て居た。彼等は彼等の殼をすつかり脫捨てて了ふ事は決してなかつた。何かの機會で彼等の心が和やかにさせられた時でさへも、彼等の疑ひ深い心は、その體半分をひそかに殼の中に引込ませて居た。いざと言へばすぐに殼の中にすつかり引込んで、自己を隱して了はうと用意して居るかのやうであつた。金輪際、殼の中からすつかり出て了ふと言ふ事はないのであつた。彼等の眼は蝸牛の觸角の代りをでもするやうに、常にぎら／＼と異樣な光を帶びて、疑深く外界を見詰めて居た。如何しても馴染んで行きやうのない冷たい空氣が、彼等の身邊を包んで居た。彼等は學校に對してさへも一種の敵愾心を持つて居た。金持の娘や、村長か議員の息子を特待生にする事しか考へないやうに見える教師

に、彼等の子供を預けると言ふ事は、彼等にとつては愛兒を俘虜として驅り出された時のやうな不安があつた。彼等が子供を學校へ寄越し度がらない尙一層根本的な理由は、彼等の貧しさであつた。その子供にまどろつこい「教育」を施すよりも、てつとり早く金になり彼等の稼ぎを助けさせる仕事に追立てねばならぬ程に、切迫して居る貧しさのためであつた。彼等の子供は凡ゆる仕事に驅り立てられた。

斯うした狀態にある肉親の間から、子供を學校へ連れ出す事は、非常に困難であつた。吉子は殆んど二ケ年にもなる彼女の教師生活の間に、彼女の眞意から出た家庭訪問が彼等に依つて如何に報ひられたかを、苦々しく思ひ浮べずには居られなかつた。殆んど大抵の場合が、單なる罵詈と嘲笑に依つて迎へられた。より惡い結果しか招く事が出來ない事も度々であつた。

吉子が今訪問しやうとして居るのは渡邊はつと言ふ女の子の家であつた。路が遠いのと小さい弟妹の守をしなければならないのとでこの女の子はよく學校を休んだ。出て居る時よりも休んで居る方が多い位であつた。吉子の督促訪問もそれだけ骨が折れた。如何かすると一ケ月に四回位行つて見なければならない事もあつた。そうして居る間に、吉子の心の中にだんだんと何とも言へない親みしが、この渡邊親子に對して湧いて來るのであつた。

渡邊の家は村里から遠く離れて、ぽつんと一軒だけ建つて居た。家の前はずつと青い畑や稻田が見渡す限り開けて居て、後は直ぐ海に沿ふた防波堤が遶つて居た。その朽ちた椽側に腰を掛けて居ると潮の鳴る音と、稻の上を渡つて來る風の音とが同時に聽かれた。あの發育の不完全なよく／＼した子供が、こんな遠い淋しい所からとぼ／＼と學校へ通ふのかと思ふと、吉子はいぢらしい氣がした。その子供の赤くたゞれたトラホームの眼が、絕えず眼たゝき許りして居るのが、吉子の頭の底にこびり附いて居るやうであつた。

吉子が渡邊の家に着いた時には、家の中には誰も居ないのか幾度呼んで見ても何の答へもないのであつた。骨許りになつた障子の隙間から、むしりとられて了つたやうな家の中の慘めな有様がすつかり見透かされた。床の上には荒莚のような疊が申譯けだけ敷いてあつて、一隅によれ〳〵になつた蚊帳が、一方だけ吊手を外さない儘でどろんと下つて居た。未だその中には蚊が五六匹、ぶん〳〵鳴つて居るやうな感じのする程、薄汚いものであつた。吉子は、裸の芋が土まみれになつて轉つて居る土間に暫く立つて居たが、誰か一人位留守居をして居さうなものだ、と思ひ乍ら家の入口に附いて居る汚い廁の方を見返つたりした。不意に彼女の足許から、

「にやあ、にやあ」

と猫の鳴く聲がして、未だ生れて間もない子猫がぞろ〳〵と六匹許り這ひ出たのであつた。何時からか織つたこともないやうにすつかり煤けて了つて、梭や丸い棒に絲切れや綿屑がぼや〳〵と引掛つて居る機の陰から這ひ出して來たやうであつたが、六匹が六匹ともぺつちやりとした胛眼をして居て痩せた肋骨の邊りが、呼吸をする毎にひく〳〵と波打つて居るのであつた。見るからに痩せて痛々しい子猫があはれ氣な聲で頻りに鳴いて居るのを見ると、吉子は奇妙な哀感をそゝられるやうな氣がした。

敷居をまたいで誰も居ない家を出やうとすると、今まで氣附かずに居た一種の臭氣がむつと鼻を襲ふて來た。それは極端に貧しい家に特有な異様な臭氣であつた。柱や茅葺の屋根や荒莚にまでしんから浸み込んで拔けない一種の臭氣であつた。この臭氣は家族の衣服や履物や體そのものにまで浸み込んで居た。

朝干したなりで畑へでも出掛けたのか、西日の屆かない軒の竿に腐つたやうな蒲團が一枚干してあつた。所々、表皮が破れて眞黑い綿がはみ出て居た。

吉子は何故か自分でも無意識で、この臭氣の滿ちた家から二十歩程遠ざかつた時、思ひ切り胸を擴げて深い呼吸をした。そしてすた〳〵ともと來た方へ引返さうとすると、遠くで意味のない、それでも誰かを呼んで居るやうな微かな聲が聽えた。吉子は何氣なく振返つた。そして、其處か ずつと離れた畑で、夫婦とその子供らの四五人の農夫の影が、西日に手をかざして此方を見て居るのを認めたのであつた。それは渡邊の親子が畑から吉子を呼んで居るらしかつた。手拭を冠つた女房は氣輕に走り出して來て吉子を迎へやうとしたり、亭主も鍬を捨てて畑の間の小さい流れで手を濯いだりして居た。吉子の受持の女の子も彼女の小さい兄弟を背中に縛り付けて、畑の隅に坐つて居たが、トラホームで赤くなつた小さい眼をしよぼ〳〵させて眩しさうに吉子の方を見て居た。

「やれ〳〵、御苦勞樣でムいやしたのう、このお暑いのにまあ、」

「皆さん御精が出ますねえ。」

「はい、先生樣まあ御覽じませい、この通り情けない事になつて了ふてのう、」

と亭主は一寸體を曲げてぐるりの彼の持畑を指さした。其處には大根人參、葱などの青い菜が如何した事か、何かで故意に踏みにぢりでもしたやうになつて黑い土にまみれて居た。其處だけではなくて、見渡す限りの畑の青いものが根こそぎに薙ぎ倒されて居た。一夜のうちに怪偉な羽を擴げて地獄の巨鳥でも過ぎて行つたかのやうになつて居た。

「先達つての演習のお蔭でこの通りになつて了ひやした。二三日前から家内總掛りで片附けて居りやすやうな始末で、はつ奴も當分學校を休ませて貰ひやすとよつぽど助かるのでムいやすが……」

「演習つて言ふと、此處で戰爭のやうな事でもしたんでせうか。この畑の中で……」

「畑の中じやろうが田の中じやろうが、そねえな事を氣に掛けちやあ、戰爭の眞似も出來るもんじやあムいやすまい。

じやが、この大根はもう二十日もすれやあ濟物時で、街へ出す積りでムいやしたが、もうこうなつちやあいびつになつて了ふてのう」

「だけど、何か手當てのやうなものが下るんじやありませんかしら」

「お手當もありやすが、わつしらの手には廻つて來やせんちゆう事じや、地主様がお貰ひんされる分でもわつしらのやうな小作人にまでは如何でムいせうかいのう。何處かへ廣い野良でもこさへて置いて、さあ演習ちゆう時には其處で遣るちう事になれや、百姓共は助かりやすが、そいじやあ、眞物の戰爭にはなるまいかの……」

女房は、急に眼を醒して泣き出した子供を背中から下して、乳房を含ませ乍ら、言ひ出した。その兩頰に血が集つて來て、妙に興奮して居るやうであつた。

「のう先生樣、一ぱし働き盛りの大けな男が、赤いしやつぽを冠つたり、喇叭を吹いたりまるで子供の遊び事みたよな事を遣つてのう、丁度夜でムいやしたが、鐵砲の音がどん〳〵して、子供らは喜んでぎやあ〳〵言ふて騷ぎやしたが、わつしらは畑の事が氣にかかりやいてのう」

夫婦の者は交る交る、演習のために彼等の蒙つた損害を吉子に訴へて、その上に子供が學校を休むのまで口喧しく言はれては親子の口が干上つて了ふ、と言ふのであつた。

吉子は彼等の言ふ事を聽いて居る間に、妙に頭の中が重くなつて來るのを感じた。世の中の何處何處までも長い尾を引いて居る或る不公正に對して、考へないでは居られなかつた。彼女は極端に氣難しくなつて來た。未だ愚かしくぺちやくちや喋つて居る女房の顏までが堪らない程、腹立しさを誘ふのであつた。その内に女房は吉子の不機嫌を悟つて、急に言葉の調子を下げて吉子の意を迎へようとするのであつた。

「先生様、小さい餓鬼を背負ふてでも宜かつつら、明日の朝からでもはつ奴は學校へ遣りやすで……そいから、里芋の子をちつと許り、お持ち歸りなされて……」

と、女房が手籠に入れた芋の子を吉子に持たさうとするを振拂ふやうにして、吉子は彼等に別れを告げた。吉子は歩き乍ら、時々後を振返つて見た。永い間吉子を見送つて居た彼等の姿が、黒い點のやうに小さくなつた。そしてしやがんだり伸びたりして、彼等は蟻のやうに黒い土の上で蠢いて居た。

六

校庭の明るさが廣い廊下を通して、吉子の教室の床に微かに照り返して居たが、兒童用の机腰掛の邊りは一帶にかけて夕闇が忍び込まうとしかけて居た。その微光の中に、どつしりとした西洋封筒の白い色が浮いて居た。吉子は怪しみ乍ら、その小高い教師用の卓の方へ近附いて行つた。それは彼女が一寸外出した間に、小使でもが持つて來て置いたものらしかつた。封筒には切手が幾枚も貼つてあつて、掌にとつて見ても可成りの重さが感じられるのであつた。彼女の短い生涯中に於いてこんなに重い書簡を受けた事は無かつた。更に受けるべき事があらうとは思はれなかつた。宛名は確かに彼女に違ひなかつたが、手跡は勿論差出人の名前はてんで想像も附かないものであつた。然し、

「何をこんなに長々と書いたものだらう。」と言ふ、その部厚つた中味に對する彼女の好奇心は、何の躊躇もなしにその封を切らせて了つた。

「安部岡吉」

吉子は封を切り乍ら、その下手なペン字の男名前を呟いて見たが、頭の中には何にも浮んで來なかつた。

——書簡は、全く異常な熱心か誠實に依つて書かれたものに相違なかつた。罫の細かい用紙の表裏に、細々認めたものが、殆んど三十枚もあらうかと思はれた。

吉子は暗いので廊下へ出て、手摺りに胸を凭せ掛けて少し前屈みになり乍ら、暮殘りの微光の中でその文字を拾ひ始めた。

「私は貴女の兄です。」

冒頭の一行はかう書出してあつた。吉子はそれを信じる事が出來なかつた。彼女の盲目にでもなつたやうに何事をも認める事の出來ない眼が、殆んど十行許りを走り讀みした。然し何が書いてあるのか見る事が出來なかつた。彼女のぼんやりした眼先きを、ちら〳〵とペンの字が踊つて居る許りであつた。吉子は無意識に三枚四枚と讀み續けて行く內に、彼女は紙の上から何事かを感じて居た。そして時々、そつと溜息を洩らした。

それは、彼女と同じ母から生れたと言ふ見知らぬ男から差出されたものであつた。彼女はこの手紙に依つて、彼女が今迄夢にも思ひ及ばなかつた多くの事を知つたのであつた。

彼女の實母は曾つて、近在の漁村の酒屋へ嫁して居たことがあつた。其處で一人の娘と一人の男の子とを生んだのであつたが、如何した事情でか夫と二人の子供とを遺して去つて了つたのであつた。その遺された一人の男の子が安部國吉であつた。國吉は父に背負はれて幾度か里歸りした母を迎へに暗い山を越えて行つた。が、間もなく淺黄の油單の掛けられた母の嫁入道具は、赤い馬に附けられて里の方へ送り戻された。それは國吉が三つの春であつたが、幼い子供の頭には若い母親の白い顏が何時までも殘つて居た。彼はその時から永久に母を見る事はなかつた。彼は二つ違ひの姉と二人で濱へ出ては母を戀しがつた。島通ひの船が着いても、村の衆の土産物を母と一緒になつて喜ぶやうた事に最早や

なくなつて了つた。淋しい日が姉と小さい岡吉との上に續いた。少し自暴氣味になつた父親は稼業が身に染まなくなつて、店先の古い暖簾だけが濱風に淋しく揺れて居る許りであつた。斯うした彼が九つの暮になつて、他所から若い女が來て彼等はその女を母と呼ばなければならなかつた。彼は氣の弱い男の子であつたが、姉は勝氣で神經質な女であつたために屢々後から來た母と爭ひをした。人の好い父親の顏がだん〳〵暗くなつて行つた。その間に少さい弟や妹が次から次へと生れて來た。狹い座敷を鼠の子のやうに子供達は驅け廻つたが、父と母と姉と彼とは部屋の隅にうづくまつて互に暗い爭を續けなければならなかつた。家は極端に貧しくなつて行つた。何かの破綻が見出されるのが當然な狀態にあつた。この時彼のたつた一人の姉が氣が狂つたのであつた。姉は氣が狂つた儘で島の伯母の家に預けられた。伯母の家は靜かなお寺であつた。姉は殆んど三年の間、其處で靜養して今ではすつかり元通りになつて居るが、そのためか廿六と云ふのに未だ嫁がないで居るのであつた。

岡吉は彼の家を去つた母が二度目に遠い所へ嫁いで行つた事も、又其處で彼の妹である吉子を生んだ事も、父親から聽かされて能く知つて居た。彼は吉子の事を考へる毎に、お伽噺の國に住んで居る者を偲ぶやうな懷かしさを以つて吉子を描いて居た。彼と姉とは見ぬ妹の事を幾度話し合つたか解らなかつた。姉は編針を動かしては、吉子へ贈るべき巾着を幾つとなく拵へた。然し、父の死んだ後で彼等が漸く吉子の居所をつき留めた時には、吉子の家族は疾うにその街を引拂つて居た。それからは斷ち切られたフイルムと同じように見知らぬ妹の消息は、ぷつつりと解らなくなつて了つたのであつた。

その間岡吉は貧しい暮しを助けるために、その漁村の小さい停車場の驛夫をして居たが、廿一の徵兵適齡の時に採ら

れて看護卒として今日まで二ケ年半の間、軍隊生活を續けた。その軍隊生活の或日、偶然が彼に嬉しい報知を齎らして呉れたのであつた。それはほんの二十日程前、酒保の腰掛で思ひがけない出來事に突掛つたからであつた。見知らぬ新兵が腰を掛けて餡麪包を喰べて居た處へ國吉が通り掛つて他愛のない世間話しを始めた。ふとした噂話から運命の糸が手繰り出されて、吉子と同じ街に住むと言ふその新兵の口から、吉子の委しい消息が洩らされた。

「私はその時、その新兵が平氣で餡麪包を喰べ乍ら、この不思議な話しを聽かせて呉れるのを、暫く呆れて見て居ました。」

國吉のたど〳〵しい口語文が、さう書き續けて居た。

それから國吉は固い木製の桶のやうなベットの中に寢乍ら、毎夜、此の手紙を如何書くべきかと思ひ耽つてまんぢりともしなかつた。突然國吉にとつて喜ばしい事が重ねて起つた。最近に催される筈の機動演習が、吉子の住んで居る街を通過する豫定だと言ふ事であつた。苦しかるべき行軍が彼には待切れないものになつた。村々を過ぎる毎に彼の足が浮いてゐた。とうとう彼は見知らぬ妹の住んで居る街の附近まで來た。彼は彼女をその家庭に訪問する事は避けなければならない、と言ふ事を考へて居たので、唯一の望みを、吉子の勤めて居ると言ふ隣村の小學校へつないで居た。それは殆んど眞近い時刻であつた。ほんの三十分の自由を與へられた彼は校庭の柵を幾度もめぐつた。男の彼が女の吉子を訪ねて行くと言ふ事が、臆病な彼を恐れさせたので、彼は思ひ切つて表門をくぐる事が出來なかつた。誰か出た　聽いて見やうと思つて居た。退け時を二時間も過ぎた校庭は靜かであつた。遊動圓木の側で、十二三の子守が背中の赤坊を揺すり上げては泣かして居た。その外には小犬の影も見えないのであつた。それでも國吉は去り兼ねて幾度も同じ所を往つたり來たりした。暫くすると二階の教室から、微かなオルガンの音が洩れて來た。彼はその彈奏者を男か女か知ら

なかつたけれども妙に心が惹かれた。直きにぱつたりとその音は、杜絶へて了つた。こんなにして彼の與へられた時間が過ぎて行つた。彼は何者かに逐ひ立てられるやうな氣がして其處を去つた。次の日には其處から四里もある村へ行軍をしなければならなかつた。彼の脱殼になつた心は何事をも樂しむ事が出來なかつた。がん／＼と腦天の眞中を燒かれるやうな炎日が燃えて居た。彼はとある辻を行軍中に苴の上に倒れて了つたのであつた。

「私は今、忠海の衞じゆ病院に寢て居ます。」

任期の三ケ年の滿ちるのを眼前に見乍ら、退屈な病院で日を送つてゐるのは餘り好いものではない、彼はさう書いて居た。

「日射病だなどと言へばどんなに酷いのだらうと思はれるかも知れませんが、大した事はありません。萬一、これで除隊にでもなれば、何を置いても貴女にお目にかゝる積りで、それを樂しみにして居ます。」

長い手紙はさう結ばれてあつた。

吉子は讀み了つてほつとした。そしてばらばらと無意識に用紙を繰つて見た。それはたど／＼しい幼稚な文章であつたが、一體の調子や、ちつとも粧の類してないまづい文字などがもの懷しい氣を起させたのであつた。

夕闇は疾うに吉子の手許まで迫つて居た。暗い中で視力を凝らしたために、暫く眼瞼がちく／＼と刺すやうに痛んだ。眼を閉ぢると何時かの朝、八丁堤で行逢つた一隊が幻燈の繪のやうに浮び上つて來た。その時の一行に遲れて吐瀉し乍ら走つて居たあの兵卒の姿がはつきりと見えて來た。一瞬間、左の耳にずり寄つた帽子のひさしと、紫色になつた厚い唇とが眼の中を過ぎて行つた。

「あれが私の知らない兄かも知れない。」吉子は低い聲でさう呟いたが、それは何處となくそぐはないやうな氣がした。

と同時に、今まで彼女の遠くで蠢いて居たと思つた黒い魔者が、牙を研いで彼女の身邊に迫つて來た事を感じたのであつた。彼女の兄はその魔者の犠牲に供せられて、病院で呻吟して居るのであつた。

「兄は直き死ぬかも知れない、」

吉子はその黒い魔者の鋭い眼をじつと見据えるやうな反抗的な心で、冷めたい顔をしてさう呟いた。胸の中を氷塊のやうなものが過ぎて行つた。

七

或る午後、吉子は職員室を出やうとして小使から呼び止められた。そして一通の電報を手渡されたのであつた。

「クニキチキトク、スグシマヘコイ」

吉子は先日の長い手紙を思ひ出して居た。その手紙では國吉は衛戍病院に寝て居る筈であつた。この短い電文はからりと局面を轉廻させて居た。殆んど一週間にも足りない間の經過が斯うまで甚だしく變らうとは信じられないのであつた。

吉子は呆然として立竦して居た。彼女の乾き上つた眼には涙も浮ばなかつた。しみ〴〵泣くのには餘りに突然な出來事であつた。

吉子は午後の授業を他の教員にたのんで、殆んど體一つで停車場へ驅付けた。

海沿ひの軌道を二時間餘り揺られて、吉子はと或る小さい驛に着いた。漁場特有の臭氣が其處此處に漲つて居た。驛の裏土手に投げ出された積荷の箱にも雑魚の鱗がへばり付いてきららのように光つて居た。頭髪の上に魚を入れた大笊を

載せて、「えい、えい」と奇妙な掛聲を掛け乍ら、幾人もの魚賣女が裸足を揃へて沿道を歸つて來た。濱の砂の上に干された網が藻を手繰り寄せた儘で、砂の中に喰ひ込んで居た。吉子は其處から小さい渡し舟に乘せられて、直ぐ眼の前に見える青い島へ渡つた。

それは海の表面に盛り上つて居る小山のような島であつた。麓は大根や芋の葉の青いだんだら畑に圍まれて居て、少し上の方には處々、椎の木がまばらに聳えて居た。見渡す限り民家らしいものはなくて、頂上にあるたつた一つの古寺の屋根が、西日を受けて反射して居た。その屋根の尖頭に烏が一羽止つて居るのまでがよく見うけられた。

その古寺が、國吉の寢て居る所に違ひなかつた。吉子は道に迷ふ恐れはちつとも無かつた。時々顏を擧げて光る寺の屋根を見上げては進んで行きさへすれば好かつた。が、畑の畔の狹い路であつたから、野茨やあざみの刺に如何かすると袴の裾がとられさうであつた。吉子は汗を拭き乍ら登つて行つた。時々、立留つて、彼女が今何處へ何をしに行くのか考へようとした。何も彼も夢のやうであつた。椎の茂みから、かさ〳〵と小鳥が飛び立つて行つた。やがて、古風な石段が見えて、それを幾曲りか行詰めると、廢屋のやうな寺の門があつた。崩れ掛つた土塀にはぺんぺん草や青苔が生えて居た。

軈て、こと〳〵と足音がして、寺男らしい者が鐘樓へ上らうとしかけて居たが、吉子の姿を見ると、急いで本堂の方へ引返して行つた。殆んどそれと入れ違ひになる位に、脊高い女の叫聲が聽えて、一人の女が轉がるやうに飛んで來た。それが吉子の初めて見た姉であつた。

「お、おゝゝゝ」

と姉は泣くやうな呻聲を發して吉子の袖をとつたなりで、本堂の床の上に坐つて了つた。彼女の蒼白いこけた頬を涙が

瀧のやうに流れた。姉はそれを拭はうともしないで、顔を擧げて貪るやうに吉子の顔を見詰めた。何か言はうとして唇を痙攣的に振はせて居たが、如何かすると顔全體が今にも泣き出しさうな皺を刻まうとするのであつた。

吉子の胸に何か塊のやうな固いものがこみ上げて來た。涙が留度もなく流れた。何とも言へない快い哀感が吉子の體中を震はせた。それは姉であつた。貧と酷使とにふみにじられて、傷ましく憔悴した姉であつた。

「あんた、早う國吉を見て遣つてお呉れんされ！」

それが、初めて口を開いた姉の言葉であつた。一言も聽かないでも、お互の心は凡てを感じて居た。この感じこそ、吉子の求めて居た肉身の愛であつた。

吉子は姉に導びかれて、暗い本堂の廊下を辿つた。夏とも思へない冷たい山氣が、何處からともなく忍び寄つて居た。何時からか焚きしめた線香のしめやかな香が、ゆら〳〵と室の中に漂つて居た。

その室は、高い窓が一つある限りで薄暗く陰氣であつた。國吉の枕許には、古ぼけた枕屛風が立つてあつて、黒塗の盆の上には、生肴のそいだ身が皿にこびり附いた儘でのせてあつた。

國吉は胸に薄い搔卷を掛けて、その上に痩せた兩腕を組合せて眼を閉ぢて居た。吉子達が這入つて來た時にもその落窪んだ眼瞼はみひらかれなかつた。蒼い蒼い顔色であつた。國吉は死んで居るのだ、と聽かされても吉子は信じたかも知れなかつた。それ程彼は、動かないで、死人のやうな蒼白さで横はつて居た。

姉は病人の上にのしかかるやうにして、其耳許に手を遣つて言つた。

「國吉、國吉、街から逢ひにお出でたぞ、吉やんがお出でたぞい、」

○

その夕方、姉のお絹は國吉を伯母に賴んで、風呂を焚いて吉子の疲れを休めよう、と言つて裏へ出て行つた。吉子はその後を從いて行つて姉に話し掛けた。

「兄さんは仲々眼を醒しませんねえ、」

「今朝からちつとも喰べもせいで、眼を明けんのじやもの、あのまゝ、ころつと死んで了ふのかも知れんのう、」

「そんな馬鹿な事があるもんですか。兄さんは大變疲れていらつしやるんですよ、姉さんの處へ歸つて來たと思つて、すつかり氣が拔けて了つたんですよ、」

「ほんにさうじやろ、氣が拔けてあのまゝ馬鹿になつて了ひよると好い。」

吉子はお絹の言葉を解し兼ねて、ちらと彼女の顏を見た。今、藁束から枯枝に燃移つた風呂竈の火が、石で固つた焼けた炊口から、めらめらと炎を吹出して居た。姉の顏にその炎が眞赫に反射して[illegible]樣な物凄さを示して居た。そそれ立つた髮の毛が血のやうに透いて見えた。

「どうせお上の仕事じや、碌な事のあるもんでない。」

とお絹は呟くやうに言ひ乍ら、又一束の枝を火の中に投入れた。二人の直ぐ後まで、魔物のやうな暗闇が迫つて居たが、炎の照り返しが、さびれた寺の庭の地面の上を微かに這つて居た。

「國吉が驛へ出とる頃はほんに樂しみじやつたがのう。」

姉は一寸、遠い闇の中に眼を遣つて述懷めいた口調で話し初めた。

「あれは女のやうに優しい子で、わしにも大變やさしうして呉れやした。彼れが驛へ出たのも、その儲けた錢を貯めてわしと二人で細い家を借りて暮らさうと言ふ考へじやつたがのう。わしもうちに居るのが、如何も氣に染まんので國吉と二人で暮せたらと思ふてのう。村の衆の針仕事まで引受けて、それ許かしを樂しみに辿つて居りやした。わしは其の頃、未だ病氣揚句じやつたが……」

丁度その時、徴兵の召集に依つて、お絹の手からその弟は奪ひとられた。後に遺された彼女に對しては生活上に何の保障も與へられる事なしに、得體の知れない權力が、彼女の手から弟を奪ひ取つて行つたのであつた。入營祝賀の宴が張られて、漁場の若衆や娘が唄を唱つたり酒を呑んだりして、國吉を囃し立てた。彼女はそれを見て居るに忍びなかつた。お絹は、其夜醉ひ痴れた男女に凡ゆる罵詈を浴せ掛けた。が、國吉はとう／＼、自分の勤めて居たその小さい驛から出發しなければならなかつた。赤い帽子を冠つた驛長が國吉の手を握つて「萬歳」を叫んだ。彼女は氣狂ひのやうになつて、

「畜生！」

と怒鳴つた。村人はお絹の體を抱き上げて、その冷めたい家の中へ連れ込んだ。彼女は誰も居ないがらんとした家の中へで、子供のやうに足をばた／＼させて大聲を擧げて泣いた。それから今日迄二年半の間、呪はれた日が、お絹の上に續いた。その長い間苦痛を堪え得た事に對する報酬は何であつたか。彼女が待つて居た國吉に殆んど死んで居るではないか。昨日の午後、擔架で運び込まれた限り、口も利く事が出來ないで、今朝から眠り通しではないか。恐らく永久にその眼は見開かれないか、或は炎日に見舞はれた彼の腕は、生き乍ら死んで居るかも知れないのだ。

「如何して、もう二日でも三日でも早う、國吉が未だしつかりしとる時に、此方へ戻して呉れなんだのぢややら、吉や

ん、わしは斯う思ふがのう、ちよつとでも體がようなつつら、國吉は到底も戻しちやあ貰へなんだんじやろうのう。ほんに可哀さうに、國吉は死にさうにならいではわつしらの處へは戻れなんだのじやもの、ぢやが、いよ〳〵駄目じやと解つてから、死んだも同じような體だけを戻して、一體如何せいと言ふ氣ぢやろう。」

お絹は、少し病的な調子外れた聲で、無氣味な微笑を浮べ乍ら言つた。この時、吉子は其に向けられた儘、動かないでゐる姉の白い眼を見た。そして何事かを感じて、恐ろしげに姉を呼んだ。

「姉さん、姉さん、そんな恐ろしい事をおつしやつては不可ませせん。兄さんは直きに快くなりますよ。直ぐなほりますよ。姉さん、兄さんが快くなつたら、三人でお母さんのお墓まゐりも出來るじやあありませんか?」

姉を慰める積りで何氣なく言ひ掛けた吉子の此一言は、お絹に異常な感動を與へたのであつた。一瞬間、炎の映つた眞赫なお絹の眼が、ぎろつと吉子を見返した。

「わしはあのお母さんのお墓へ參らうと思ふた事は夢にもない。」

それは靜かな透通るやうな聲であつた。眞暗い杜の中から聽えて來たやうな冷い聲であつた。吉子は、一度狂つた事のあると言ふ姉に、自分の不用意な言葉が齎らして興奮を思つて、恐ろしげに身慄ひした。が、お絹は落附いた低い聲で言つた。

「わし等の長い間の苦しみは皆あのお母さんのお蔭じやと思ふと、恨みはあつてこれん許りの恩もないと思ふのじやがのう。」

と、お絹はなが〳〵と彼女の去つて行つた母に就いて語り始めた。だん〳〵と上づつた聲が熱をもつて、奇妙な興奮に驅り立てられて行くやうであつた。

彼女の母が去つた時にお絹は五つであつた。それは眞夜中であつた。國吉とお絹と枕を並べて添寢をして居た母が、そつと起上つた。お絹は非常にませた女の子であつた。母が起上つた時彼女はぱつちり眼を見開いて暗いらんぷの光の中に母の姿を見詰めて居た。母は部屋から廊下へ出て、雨戸を繰らうとしてそつと片手を戸に掛けた。お絹はその時、何事か本能的な恐ろしさを感じて、母を逐ひ掛けて椽側へ走り出た。そして椽側の柱に片手を掛け、母の腰にさがつた帶に片手を掛けて、大聲で泣き叫び乍ら母を呼んだ。然し、か細いお絹の腕は直きに母の帶から振解かれて居た。母の姿は暗の中に消えた。お絹は冷たい椽側に坐つた儘で朝までしく／＼とないて居た。斯うして彼女が泣いて居る間に、お絹の幼い心に母に對する根深い憎惡が培はれたのであつた。彼女は母か居なくなつた事を告げるために家人を起したりは決してしなかつた。彼女は一度として母の里を訪れたり、母の心を動かさうと勉めたりした事はなかつた。彼女には母の去つた理由や、その時の母の心事を知る必要は少しもなかつた。幼い子供の腸をゑぐるやうな泣聲を聽き捨てて、心強く去り得た母の心を知るだけで充分であつた。二人の愛兒を敵の中に賫つて、彼女自身の悦樂を買つた憎むべき女としての母の心が、永久にお絹の胸に殘つた。愛兒のために唯つたこれだけの犧牲をも拒んだ母のお陰で、お絹と國吉は今日まで血の出るやうな生活を續けなければならなかつた。その上に善良な父の心を暗くし、彼の一生を葬つて了つた。何處に母の愛として信ずべきものがあらうか。

「子供の折から國吉は能く言ひよつたもんじや、早う大きうなつてお母さんのお墓參りをし度いちゆうて言ひよつたが、わしはその度びに大きな聲で叱りとばしてやりやした。わしは小さい子供の時分から、夜寢てから毎晩さう思ふたのう誰にも見付けられる氣遣ひのないような暗い晩に、あのお母さんのお墓へこつそりと行つて、土をほぢくり返してその墓を發いて遣りたい、墓の中から白い骨を掘り出して、その頭蓋骨やら脊骨やらを、腹の蟲の癒える程足蹴にして、思

ふさま、この恨を知らせて遣りたい、と子供心に思詰めたものじやが、今じやとても、この考へは變らぬぞいの、」

吉子は呆然として姉の顔を見詰めた。

何時の間にか篝の火は、燃えさしだけがぶすぶすと燻つて居た。この世の者とも思はれぬ程蒼白い姉の片頰に、涙が一滴かかつて居た。吉子は傷いた姉の心を抱締めたいやうな涙ぐましさを感じ乍ら、心の中で呟いた。

「墓を發く、墓を發く、」

突然、吉子の頭の中に彼女自身の暗い家庭が浮んで來た。何事も知らないで死んで行つた母の罪は、其處にまで尾を引いて居るのではないか、と言ふ疑惑が吉子の胸を突いた。

その時、本堂から微かな讀經の聲が聽えて來て、國吉の寢て居る部屋の高い窓に、細い灯の蔭が搖れて居た。（完）

――一九二一、十一、二三、――

中央公論

「中央公論」本年度「夏季增刊號」は

「世界平和と人類愛」號

と題し、目下各方面の材料蒐集中なり

中央公論大賣捌所

同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區本石町 至誠堂
同 本郷區春木町 盛春堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大誠社
名古屋市 富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾四錢
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂 萬年社 告天社 正路喜社
豊國通信社 弘盛社 三誠社
金蘭社 大興社

一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年四月三十日印刷納本
大正十一年五月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木西三

發行所 東京市本郷區本郷三丁目六番地 中央公論社
電話小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.